The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 繰り返しにおけるコミュニケーション効果 |
| Author(s) | Kanjamapornkul, Sathida |
| Citation | 大阪大学, 2021, 博士論文 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/82273 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 博 士 論 文

題目：

繰り返しにおけるコミュニケーション効果

大阪大学言語文化研究科
日本語・日本文化専攻

KANJAMAPORNKUL SATHIDA

# 要旨

## 繰り返しにおけるコミュニケーション効果

カンジャマーポンクン　サティダー

「繰り返し（Repetition）」とは、書きことばにおいても話しことばにおいても、ある文脈に既に現れた語や文などを何度か再現することである。従来の言語行為の繰り返しは、単に文の冗長度を上げるに過ぎないものであり、非創造的なものであるため、避けられるべきものとして、否定的に見なされてきた。しかし、我々の日常会話では、相手の直前の発話を繰り返すことは普通に見られ、頻繁に出てくるものである。むしろ、繰り返しを一切使用しないままで発話すると不自然になってしまう可能性もある。つまり、繰り返しは、会話においては欠かせない必要な表現の一つと言える。

従来の研究では、繰り返しは相手の発話には不明な部分があり、十分に理解できないため、相手の発話を繰り返し相手に確かめるという「確認要求」ないし「説明要求」、談話の展開や発話の進行の助けをする「あいづち」、驚き・不満を表す「感情の表出」などという様々な機能を持つことが示されてきた。しかし、繰り返しをさらに明らかにするのはイントネーションのみならず、発話者の態度、声色、場面、文脈、話し手と聞き手の関係性なども注目すべきであるが、従来の研究でこれらの要素を考慮に入れたものは管見の限り少ない。

本研究では、日本語とタイ語の実際の会話例を考察した結果、会話の種類によって、繰り返しの機能と使用傾向が異なることが明らかになった。テレビドラマやアニメ、漫画や小説、映画および歌劇などで現れる会話は、あらかじめ設定されている会話であり、発話者は脚本またはシナリオに沿って会話を進めるという会話の種類である。本研究では、このような会話を「フィクション会話」と呼ぶ。一方、本研究における「自然会話」とはフィクション会話と異なり、「「何を話すか」や「どう話すか」が発話者に委ねられている、操作されていない会話」を指すこととする。そのため、あらかじめ出演者の間で口裏を合わせていると考えられるトーク番組などについても、話の流れによって発話当事者に発話内容の決定が任される場合があるため、本研究ではトーク番組やインタビュー番組、バラエティ番組およびラジオ番組は自然会話に準ずるものとする。日本語とタイ語のフィクション会話においても自然会話においても、繰り返しは「時間稼ぎ」、「相手の発話の促進」、「説明要求／確認要求」、「感情の表出」という機能が観察され、両種類の会話で共通していることがわかった。一方、相違点としては、自然会話では繰り返しは「あいづち」、「応答」、「からかい」の機能も確認されたが、

フィクション会話ではこれらの機能が見当たらないことがわかった。また、両種類の会話とも「感情の表出」の機能が最も際立って用いられることが明らかとなったが、実際は会話の種類によって「感情の表出」の使用目的は完全に異なる。フィクション会話では、繰り返しが持つ最も重要なコミュニケーション効果は、発話者の感情を明示的に表出させる役割であり、発話者の態度形成を促す感情効果であると考えられる。それに対して、自然会話では、繰り返しが持つ最も重要なコミュニケーション効果は、発話当事者同士の一体感や共有感を醸成させ、コミュニケーションを円滑に進めながら、良好な人間関係を築かせる効果であると考えられる。

本研究における繰り返しの機能の調査結果から、フィクション会話と自然会話の相違点について新たな発見があった。フィクション会話と自然会話では、場面設定、状況、会話の目的、発話当事者の間の会話量、会話の進行の仕方という両種類の会話の性質が完全に異なることが明らかになった。フィクション会話は、視聴者または観客に向けて、発話者が演じるある人物の情報や感情などを視聴者へ伝達するのが目的である。それに対して、自然会話は会話の相手とお互いに何らかの情報を交換したり、相手との良好な人間関係を築いたりすることが目的である。このことによって、フィクション会話においては、会話がスムーズに進行されるように、また視聴者に出演者の発話および感情や態度などを明確に伝達するために、発音や意味内容に曖昧さのあるあいづち詞、感動詞、フィラー、言い間違い、言い直し、発話の重複（オーバーラップ）の使用を避けるのではないかと推測される。一方、自然会話の場合は、相手との円滑なコミュニケーションで良好な関係を築くために、会話に積極的に参加していることを示すというあいづち詞や感動詞が多用されるのではないかと考えられる。加えて、自然会話はフィクション会話とは異なり、発話者が喋ることはあらかじめ作られたものではなく、発話者はその時点で思っていることを即興で話す。そのため、言い間違い、言い直し、発話の重複は頻繁に現れるのは当然であると言える。

加えて、日本語とタイ語のフィクション会話と自然会話における「感情の表出」としての繰り返しは、発話者が相手の発話のある部分に対して「意外感」を感じたことを表明するものであると考えられる。すなわち、繰り返し発話に「相手がこのような発言をするとは思わなかった」という意味合いが含まれるのである。さらに、両言語のフィクション会話と自然会話で用いられる「感情の表出」は、ポジティブな態度、ネガティブな態度、中立的態度という大きく 3 種類の態度が分類できる。しかし、会話の種類によって、繰り返しにおける「感情の表出」の使用目的と使用傾向が異なっていくことが明らかになった。フィクション会話では、ネガティブ態度が用いられる傾向が強いのに対し、自然会話ではポジティブな態度が用いられる傾向が強いことが確認された。

さらに、繰り返しの表現形式は両言語ともに、相手の発話をそのまま繰り返すという「直接的繰り返し」、および繰り返し発話に他形式が付加されるという「間接的繰り返し」の大きく 2 種類に分けられる。「間接的繰り返し」には多種多様な形式があることが確認されたが、会話の種類によって、使用される形式の種類および使用傾向が異なることが明らかになった。また、両言語の両種類の会話においては、「間接的繰り返し」が用いられるとはいえ、「直接的繰り返し」と比較すると、圧倒的に少ないことがわかった。さらに、「直接的繰り返し」が、「感情の表出」の機能を果たす際に最も多く使用されることがわかった。このことから、繰り返しはどちらか言えば、感情表現を指向するものではないかと推測される。

また、発話者は感情を表出するには繰り返しのほか、感動詞も使用するが、実際は両者の働きや性質は異なることがわかった。感動詞と繰り返しの共通点としては、両者とも発話者の感情を表す役割を担っている点である。一方、両者の相違点は、感動詞は反射的に出てくる音声または自然発生的な反応である。繰り返しは発話者の認識過程を通して出てくる記号化されたものであり、感動詞による音声および意味内容は曖昧であるが、繰り返しの場合は音声も意味内容も明示的である。加えて、感動詞では発話者は相手の発話のどの部分に興味を持つのか、あるいは問題を感じるのかについて明示的に特定できない。それに対して、繰り返しは、発話者は相手の発話のどの部分を指すのかが明示的に特定できる。このように、繰り返しは視聴者が存在するフィクション会話に向いているのではないかと考えられる。一方、台本またはシナリオに束縛されず、その時点の考えを自由に表出する自然会話においては、反射的に出てくる音声あるいは自然発生的な反応である感動詞が多く出現するのは、当然の帰結となる。

他にも、本研究における繰り返しの調査結果から、独り言という言語現象についても新たな発見を見出すことができた。独り言は「典型的独り言」と「擬似的独り言」の大きく 2 種類に分類できると考えられる。「擬似的独り言」とは、テレビドラマ、アニメ、映画、歌劇などのようなフィクション会話に出現するものであり、発話時には、周辺に誰もいないまたは相手が存在しないが、実際は視聴者が存在しているというものである。つまり、この場合の独り言は、発話者は誰かのために情報を伝達しているのであり、通常の会話と同様なものと言えよう。一方、自然会話に現れる「典型的独り言」はいわば、自然発生的なものまたは反射的な反応に過ぎないと考えられる。

# ABSTRACT

## Communication Effects of Repetition in Conversation

**SATHIDA KANJAMAPORNKUL**

"Repetition" is to repeat words or sentences that have already appeared in a context several times both in written language and spoken language. The speech act "Repetition" has been claimed that it is an expression which is merely raising the redundancy of sentences. Therefore, repetition has been negatively regarded as the expression that should be avoided. However, an immediate repetition of the conversation partner's utterance is normally be seen and frequently appears in our daily conversation. On the other hand, without repetition, it may lead to a high possibility that the utterance would become unnatural.

According to an analysis of previous studies, repetition can be utilized as "Confirmation Request" and "Explanation Request", when some parts of the conversation partner's utterance are unclear and incomprehensible. Therefore, the speaker repeats the partner's utterance to request for a confirmation or an explanation about the particular utterance. Besides, repetition is also utilized as "Back-channel (Aizuchi)" which plays an important role in the expansion of discourse and the progression of utterance. Moreover, repetition has been shown to have an "Emotive Function" for example, express surprise or dissatisfaction towards the partner's utterance. In order to clarify the functions of repetition, not only the intonation but also the attitude and the tone of voices of the speaker, the context and the relation between the speaker and the hearer should be taken into consideration. However, these factors can hardly be found in the previous studies. Thus, it is conceivable that the reconsideration of the functions of repetition is absolutely necessary.

As a result of data gathering from Japanese and Thai TV series, animations, talk shows and radio programs, it is revealed that the functions and the usage tendency of repetition is different depending on the type of conversation. Conversations that appear in TV series, animations, movies, novels and musical performances refer to the type of conversation that have been scripted or directed in advance. In this research this type of conversation is called "Fictional Conversation". On the other hand, "Natural Conversation" in this research refers to an unscripted conversation in which the speaker makes his or her own decision on "what to say" and "how to say it". Moreover, the result indicates that the common functions of repetition in both Japanese and Thai fictional conversation and natural conversation are "Time-gaining", "Motivation of the partner's utterance", "Explanation/Confirmation

Request" and "Emotional Expression". In contrast, repetition as "Back-channel(Aizuchi)", "Response" and "Teasing" are also observed in natural conversation while these three functions were not found in fictional conversation. In addition, this research shows that repetition as "Emotional Expression" is the most prominently used function in both types of conversation. Nevertheless, the purpose of usage of repetition as "Emotional Expression" is different depending on the type of conversation. In conclusion, the most important communication effect of repetition in fictional conversation is that it plays an important role in expressing the desired emotion explicitly and facilitating the attitude formation of the speaker. On the contrary, in natural conversation, repetition plays a key role in fostering a sense of unity and also establishing and maintaining good relationship among the speakers.

Additionally, the results of the study also identify the differences between fictional conversation and natural conversation. To sum up, the purpose of fictional conversation is to transmit information and emotion of a certain character played by an actor or actress to the audience or the viewer. On the other hand, the purpose of natural conversation is to exchange information and establish positive relationships with others. Consequently, it can be assumed that the usage of ambiguous expressions, such as back-channel(Aizuchi), interjections, fillers, speech errors or overlaps, are avoided in fictional conversation in order to facilitate the flow of conversation and to clearly convey the actor's (the speaker) utterances, feelings and attitudes to the audience or the viewer. Contrastingly, back-channel(Aizuchi) and interjections are frequently used in natural conversation in order to build a good relationship with others and to demonstrate active participation in the conversation.

Moreover, the research indicates that repetition as "Emotional Expression" in both Japanese and Thai fictional conversation and natural conversation is described as an "unexpectedness". Besides, "Emotional Expression" can be classified into three major types of attitudes : positive attitude, negative attitude and neutral attitude. However, the purpose and tendency of using "Emotional Expression" are different depending on the type of conversation. The results show that negative attitude tends to be used more in fictional conversation, whereas positive attitude tends to be used more in natural conversation.

In addition, the expression form of repetition can be classified into two main categories : "Direct Repetition" in which the speaker echoes back the partner's utterance, and "Indirect Repetition" in which other forms of expression is added into the repeated utterance. Nonetheless, the results of the study indicate that the tendency of usage of "Indirect Repetition" is overwhelmingly less than "Direct Repetition". Besides, "Direct Repetition" is most often used to fulfill the function of "Emotional Expression". Therefore, it is inferred that repetition is rather used as "Emotional Expression" than other functions.

According to the results of the study, besides repetition, the speaker also uses interjections in order to express his or her emotion towards the partner's utterance. Thus, it is presumed that what repetition and interjections have in common is that both of them play a role in expressing the speaker's emotions. In contrast, the difference between repetition and interjections is that interjections are a spontaneous utterance or reaction, whereas repetition is an utterance which emerges through the speaker's cognitive process. Furthermore, the speech sound and the meaning of words that emerged from interjections are ambiguous, while the speech sound and the meaning of words that emerged from repetition are considered to be more explicit. In addition, interjections are not able to explicitly identify which particular part of the partner's utterance that the speaker is interested in or feel like there is something wrong with that particular word or phrase. On the contrary, repetition is able to explicitly identify which particular part of the partner's utterance that the speaker is interested in.

Based on the survey of repetition, this research has further examined "Monologue" and discovered a new linguistics phenomenon of "Monologue" in both Japanese and Thai. As a result, it is suggested that monologue can be broadly classified into two types : "Typical Monologue" and "Pseudo Monologue". "Pseudo Monologue" is a type of monologue that appears in fictional conversation in which a large number of viewing audience are watching. Hence, it can be assumed that "Pseudo Monologue" is used to transmit information to someone which is similar to a normal conversation. However, "Typical Monologue" is considered to be nothing more than a spontaneous utterance or reaction.

# 目次

**第 1 章　はじめに**. . . . . 1

1.1. 研究背景 1

1.2. 研究目的 3

1.3. 本論文の構成 4

**第 2 章　先行研究と問題点**. . . . . 5

2.1. 繰り返しに関する先行研究 5

2.1.1.「繰り返し」の定義 5

2.1.2. 先行研究における繰り返しの機能 6

2.1.2.1. 日本語における繰り返しの機能 6

2.1.2.2. 外国語における繰り返しの機能と使用傾向 13

2.2.「問い返し疑問文」に関する先行研究 20

2.2.1.「問い返し」の定義 20

2.2.2. 先行研究における「問い返し疑問文」の機能 21

2.3.「聞き返し」に関する先行研究 27

2.3.1.「聞き返し」の定義 27

2.3.2. 先行研究における「聞き返し」の機能 27

2.4.「疑問文」に関する先行研究 32

2.5. 先行研究のまとめと問題の所在 34

**第 3 章　研究方法**. . . . . 37

3.1. 本研究における繰り返しの定義 37

3.2. 本研究における繰り返しの対象範囲 38

3.3. データ収集方法 41

3.4. 用例の表記方法 41

**第 4 章　日本語における繰り返しの機能に関する考察 . . . . . 44**

4.1. 日本語のフィクション会話における繰り返しの機能と使用傾向 ..... 46

4.1.1.「時間稼ぎ」 ..... 47

4.1.2.「相手の発話の促進」 ..... 48

4.1.3.「説明要求／確認要求」 ..... 49

4.1.4.「感情の表出」 ..... 52

4.2. 日本語の自然会話における繰り返しの機能と使用傾向 ..... 53

4.2.1.「時間稼ぎ」 ..... 54

4.2.2.「相手の発話の促進」 ..... 56

4.2.3.「説明要求／確認要求」 ..... 57

4.2.4.「感情の表出」 ..... 59

4.2.5.「あいづち」 ..... 60

4.2.6.「応答」 ..... 63

4.2.7.「からかい」 ..... 64

4.3. 日本語のフィクション会話と自然会話における繰り返しの共通点と相違点 ..... 66

**第 5 章　日・タイ語における繰り返しの機能の比較対照 . . . . . 68**

5.1. タイ語のフィクション会話における繰り返しの機能と使用傾向 ..... 69

5.1.1.「時間稼ぎ」 ..... 71

5.1.2.「相手の発話の促進」 ..... 72

5.1.3.「説明要求／確認要求」 ..... 74

5.1.4.「感情の表出」 ..... 75

5.2. タイ語の自然会話における繰り返しの機能と使用傾向 ..... 77

5.2.1.「時間稼ぎ」 ..... 78

5.2.2.「相手の発話の促進」 ..... 79

5.2.3.「説明要求／確認要求」 ..... 81

5.2.4.「感情の表出」 ..... 82

5.2.5.「あいづち」 ..... 83

5.2.6.「応答」 ..... 85

5.2.7.「からかい」 ..... 86

5.3. 日本語とタイ語のフィクション会話と自然会話における繰り返しの総合まとめ.....88

**第 6 章　繰り返しにおける「感情の表出」と発話者の態度.....94**

6.1. 繰り返しにおける「感情の表出」と意外感について.....95

6.2.「感情の表出」によるポジティブな態度.....98

6.3.「感情の表出」によるネガティブな態度.....98

6.4.「感情の表出」による中立的態度.....99

6.5. フィクション会話と自然会話における「感情の表出」の相違点.....100

6.5.1. フィクション会話における「感情の表出」による発話者の態度.....100

6.5.2. 自然会話における「感情の表出」による発話者の態度.....107

**第 7 章　繰り返しの表現形式の種類.....116**

7.1. 日本語のフィクション会話における繰り返しの表現形式.....116

7.1.1. 引用表現に関する研究の概観と展望.....118

7.1.1.1. 引用表現の定義と基本的概念.....118

7.1.1.2. 引用形式「と」の意味機能.....120

7.1.1.3. 引用形式「って」の機能とその展開.....121

7.1.2. 繰り返しに後続する引用形式「と」の働きと使用傾向.....125

7.1.3. 繰り返しに後続する引用形式「って」の性質と使用傾向.....129

7.2. 日本語の自然会話における繰り返しの表現形式.....136

7.2.1. 繰り返しに後続する終助詞「ね」.....138

7.2.2. 繰り返しに後続する「です」.....139

7.3. タイ語のフィクション会話における繰り返しの表現形式.....142

7.3.1. 繰り返しと共起する「àray（なに）」.....143

7.3.2. 繰り返しと共起する「rǔu（疑問文文末助詞）」.....150

7.4. タイ語の自然会話における繰り返しの表現形式.....159

7.4.1. 自然会話における繰り返しと共起する「rǔu（疑問文文末助詞）」.....161

7.4.2. 繰り返しに後続する「khráp/khà.（男性丁寧語／女性丁寧語）」.....163

7.4.3. 自然会話における繰り返しと共起する「àray（なに）」.....164

7.4.4. 繰り返しに後続する「mǎay-khwaam-wâa（どういう意味）」.....165

**第 8 章　繰り返しと感動詞の性質**. . . . . 169

8.1. 感動詞に関する研究の概観と展望.....170

8.2. フィクション会話における感動詞の使用傾向.....173

8.3. 自然会話における感動詞の使用傾向.....176

8.4. 繰り返しと感動詞の性質および両者の共通点と相違点.....181

**第 9 章　フィクション会話と自然会話の観点から見た独り言**. . . . . 184

9.1. 独り言に関する研究の概観.....185

9.2. フィクション会話と自然会話の観点から見た独り言の働きと特徴.....189

**第 10 章　おわりに**. . . . . 195

10.1. 本研究のまとめ.....195

10.2. 今後の課題と展望.....199

**参考文献**. . . . . 200

**謝辞**. . . . . 208

**＜図表目次＞**

図（1）　尾崎（1993）による「聞き返し」の発話意図.....28

図（2）　仁田（1991）による「疑問文」の分類.....33

図（3）　繰り返しにおける「感情の表出」による発話者の態度の種類.....97

図（4）　砂川（1987）による「場の二重性」について.....119

図（5）　鈴木（2007）による引用形式「って」の機能の変化.....122

図（6）　日本語のフィクション会話における繰り返しの表現形式の種類と使用傾向.....135

図（7）　田窪・金水（1997）による感動詞類・応答詞類の位置付け.....171

図（8）　典型的独り言と擬似的独り言についての特徴と相違点.....192

表（1）　岡部（2003）による会話における繰り返しの機能.....7

表（2）　中田（1992）による日本語の繰り返しの機能.....9

表（3）　福富（2010）による日本語母語話者における繰り返しの機能.....10
表（4）　先行研究による日本語の繰り返しの機能のまとめ.....12
表（5）　稲木（1993）による英語における繰り返しの形式と機能.....14
表（6）　先行研究による外国語と日本語における繰り返しの機能のまとめ.....18
表（7）　尾崎（2001）による「聞き返し」の表現形式の分類.....29
表（8）　林（2009）による「聞き返し」の機能と使用目的.....30
表（9）　福富（堀内）（2012）による「聞き返し」の表現形式.....31
表（10）　日本語のフィクション会話における繰り返しの機能と使用傾向.....46
表（11）　日本語の自然会話における繰り返しの機能と使用傾向.....54
表（12）　日本語のフィクション会話と自然会話における繰り返しの機能と使用傾向.....66
表（13）　日本語とタイ語のフィクション会話における繰り返しの機能と使用傾向.....70
表（14）　日本語とタイ語の自然会話における繰り返しの機能と使用傾向.....77
表（15）　日本語とタイ語のフィクション会話と自然会話における繰り返しの機能と
使用傾向.....88
表（16）　日本語とタイ語のフィクション会話における「感情の表出」による態度の
種類の使用傾向.....105
表（17）　日本語とタイ語の自然会話における「感情の表出」による態度の種類の
使用傾向.....114
表（18）　日本語のフィクション会話における繰り返しの表現形式の種類と使用傾向.....117
表（19）　繰り返しに後続する引用形式「と」の種類と使用傾向.....125
表（20）　繰り返しに後続する引用形式「って」の種類と使用傾向.....130
表（21）　日本語のフィクション会話における繰り返しの機能と表現形式の使用傾向.....136
表（22）　日本語の自然会話における繰り返しの表現形式の種類と使用傾向.....137
表（23）　日本語の自然会話における繰り返しの機能と表現形式の使用傾向.....141
表（24）　タイ語のフィクション会話における繰り返しの表現形式の種類と使用傾向.....142
表（25）　繰り返しに付加される「àray（なに）」の形式と使用傾向.....143
表（26）　繰り返しに付加される「rǔu（疑問文文末助詞）」の形式と使用傾向.....150
表（27）　タイ語のフィクション会話における繰り返しの機能と表現形式の使用傾向.....157
表（28）　タイ語の自然会話における繰り返しの表現形式の種類と使用傾向.....160

表（29） 自然会話における繰り返しに付加される「rǔu（疑問文文末助詞）」の形式と使用傾向.....161
表（30） タイ語の自然会話における繰り返しの機能と表現形式の使用傾向.....167
表（31） 日本語とタイ語のフィクション会話における感動詞の使用傾向.....175
表（32） 日本語とタイ語の自然会話における感動詞の使用傾向.....180
表（33） 日本語とタイ語のフィクション会話と自然会話における感動詞の使用傾向のまとめ.....181
表（34） 感動詞と繰り返しの共通点と相違点のまとめ.....183,198
表（35） 南（2014）によるひとり言尺度.....188
表（36） フィクション会話における独り言の使用傾向.....191
表（37） フィクション会話と自然会話における繰り返しの機能の共通点と相違点のまとめ.....195
表（38） フィクション会話と自然会話の相違点のまとめ.....196

# 第１章　はじめに

## 1.1. 研究背景

「繰り返し（Repetition）」とは、同じことを何度もすることまたは反復するということを表す行為である。また、「繰り返し」という行為は言語学の面のみならず、我々の日常生活でも当たり前のように行われる行為である。例えば、毎日起きて朝ごはんを食べ、そして仕事に行き、昼ご飯を食べたあと仕事を続け、家に帰ってきたら晩ご飯を食べ、そして寝るというような生活習慣が繰り返しの一例である。もちろん、人それぞれ個人差はあるだろうが、たいてい身に付けた様々な生活習慣を毎日繰り返しているのである（牧野 1980：3）。

言語学における「繰り返し」という言語表現は、ある文脈に既に現れた語や文などを何度か再現することである（中田 1992）。成句やあいさつことばを含め、いわゆる広義の繰り返しは日常の普通の話しことばであれ、書きことばであれ、すぐ前のことばを繰り返したものであったり、以前のことばを繰り返したものである。つまり、言語行為においては、繰り返しはまさに日常的なものであり、おそらくすべての言語行為には潜在的に繰り返しの要素があると言っても過言ではないだろう。そのような中で、繰り返しの機能については従来より多面的に研究されてきており、それらは主に小説や詩、あるいはことば遊びなどというような一方向的コミュニケーションおよび書きことばや会話という双方向的コミュニケーションの両側面において見られる。

従来の言語行為の繰り返しは、単に同じことを繰り返すだけで、何の意味もなく、文の冗長度を上げるに過ぎないものであり、非創造的なものであるため、避けられるべきものとして否定的に見なされてきた（稲木 1993）。しかし、実際は繰り返しという行為は、従来の研究が主張したように何の意味もなく、単に文または発話の冗長性を高めるに過ぎないものであるだろうか。以下の例（1）と例（2）を考えてみよう。例（1）は自分の発話を繰り返すのに対し、例（2）は相手の発話を繰り返すことを示している。

例（1）（選挙運動を行っている。）

女性「暖かいご声援ありがとうございます。

藤原啓二、藤原啓二が、最後のお願いにやって参りました。

藤原啓二、藤原啓二をどうかお願いいたします。」　　（クレヨンしんちゃん）

例（2）（社長はいつでも厳しい人であることを社員たちは知っている。）

**堀**「ジムで会う時は社長どんな感じなんですか？」

**柴山**「う～ん・・・割とおちゃめなとこあるかなあ。」

**堀**「〈驚いて大きな声で〉**おちゃめ**！？ *あの社長が*！？ *え～想像できない*。」[1]

（世界一難しい恋 第3話）

例（1）では、「藤原啓二」という選挙候補者が選挙運動を行っており、後援会の女性が宣伝を行っている。この場合は、女性が何度も「藤原啓二」を繰り返しているのは、その場にいる人々に「「藤原啓二」に投票してください」や「選挙候補者の藤原啓二がここにいるよ」などの情報を強調して伝達するためである。それに対して、もし女性が「藤原啓二」ということばを繰り返さずに、一度しか言わなかったら、その情報を聞き逃す人がいるかもしれない。結局、女性が伝えたかった「藤原啓二」という重要な情報が伝わらないということもあり得る。つまり、この場合の繰り返しは、単に発話の冗長度を上げるための、全く意味のないものではないと言える。また、例（2）の対話場面では、堀の表情、態度や声色および前後の文脈を考慮すると、堀が「おちゃめ」という柴山の発話を繰り返しているのも単に発話の冗長度を上げるのではないと考えられる。むしろ、柴山の発話に対して「あの社長がおちゃめなところがあるなんてあり得ない」という意味合いを含意し、わざと同じことばを繰り返し、不信感を表しながら否定しようとしていると考えられる。

以上の実際の用例からわかるように、我々の日常会話では、相手の直前の発話を繰り返すことは普通に見られ、頻繁に出てくるものである。むしろ、繰り返しを一切使用しないままで発話すると不自然になってしまう可能性もある。よって、従来の研究で述べているように、繰り返しは文の冗長度を上げるために避けられるべきものである場合もあれば、状況によっては繰り返しは、会話において欠かせない必要な表現の一つである場合もあると言えるだろう。

また、上記の例（1）と例（2）の実際の会話における繰り返しからわかるように、繰り返しは相手の発話が聞き取れなかったり、聞き取れたものの、その発話の意味がわからなかったりという場合でのみ使用されるわけではない。しかし、日本語の教科書では繰り返しについては「説明要求」あるい

[1] 以降、「網掛けした文字」の波線の下線と網かけした文字は、発話者が繰り返した相手の先行発話を指す。「**赤 太 字**」の下線と赤太字は、発話者が相手の発話、つまり「網掛けした文字」を繰り返した箇所を指す。加えて、繰り返した発話は「直接的繰り返し」あるいは「間接的繰り返し」である（詳細はp.37参照）。また、「*斜体文字*」の一点鎖線と斜体文字は、発話者が繰り返した発話に主な関係がある要素を指す。そして、「**青太字**」の囲み線と青太字は繰り返しの前後に付加された要素または他形式であり、繰り返しと同時に用いられるものを指す。（表記の詳細については、第3章 pp.41-43参照）

は「確認要求」以外はほとんど説明されていないため、日本語学習者の間で誤解が生じてしまう恐れがある。例えば、広く使われている日本語の教科書『みんなの日本語 初級II』では以下の例（3）のような「～はどういう意味ですか」という文型を用い、相手からことばの説明を求めることであるとしか説明されていない。

例（3）**ワット**：すみません。わたしの車にこんな紙がはってあったんですが、
この漢字は何と読むんですか。
**大学職員**：「ちゅうしゃいはん」です。
**ワット**：ちゅうしゃいはん・・・・・、*どういう意味ですか*。
（『みんなの日本語　初級II 第33課』）

加えて、従来の研究によれば、繰り返しという言語現象は日本語のみならず、他言語においても頻繁に出現すると言われている（稲木1993、藤村2012、牧野1980、Kobayashi・Hirose1995、Machi2012）。しかし、これらの研究は日本語と英語における繰り返しについての研究がほとんどであり、英語以外の言語についての研究はまだ豊富とは言えない。そのため、繰り返しの普遍性をより詳細に解明するために、本研究では日本語とタイ語における繰り返しの対照研究も行う。

## 1.2. 研究目的

前節で述べたように、実際の会話における繰り返しは、単に相手からことばの意味などの説明を要求することにとどまらず、場面や文脈などによって多種多様な機能を果たしている。そのため、相手の繰り返し発話を異なる解釈で捉えてしまうと、コミュニケーション上の問題を起こす可能性もあると考えられる。よって、繰り返しによるコミュニケーション問題を避けるためには、繰り返しの基本的概念および機能について再検討を行い、整理して提示する必要があると考える。

本研究では、発話者の観点から実際の会話における繰り返しのコミュニケーション機能を再考察し、それぞれの機能の定義および特徴について明らかにすることを目的とする。また、日本語とタイ語で用いられる繰り返しの機能および使用傾向を比較対照しながら、両言語の会話に関する共通点と相違点について明らかにしていく。

## 1.3. 本論文の構成

本論文は、全10章より構成される。研究背景と研究目的を述べた本章に続き、第2章では、繰り返しの定義とこれまでの繰り返しに関する研究およびその関連研究を概観した上で、先行研究の問題点について取り上げる。

次に、第3章では本研究で扱う繰り返しの定義と問題にする研究対象を指定する。また、調査で扱われるデータ資料やデータの収集方法について述べる。そして、本論文で使用する会話記号について説明する。

続いて、第4章では先行研究による分類を参考に、日本語会話の場面や前後の文脈および発話者の態度に注目しながら、繰り返しの機能と特徴に関して考察を行っていく。その後、考察結果について詳しく説明していく。

第5章においては、タイ語会話における繰り返しの機能について分析する。そして、分析から得られた結果を日本語と比較対照し、両言語における繰り返しの共通点と相違点について明らかにする。

続く第6章では、第4章と第5章で繰り返しの機能の分類によって得られた結果を踏まえながら、発話者が繰り返しを用いる際に、どのような態度を示すのかについて詳細に述べる。

そして、第7章では日本語とタイ語の会話に出現する繰り返しの表現形式に注目し、それぞれの言語においての繰り返しはどのような形式を持つのかについて分析を行っていく。

続く第8章では、繰り返しと類似した性質を持つと想定される「感動詞」に関する従来の研究を概観した上で、繰り返しとの共通点と相違点について探っていく。

第9章においては、独り言の場面で用いられる繰り返しに重点を置き、これまでの独り言に関する見解を説明する。そして、繰り返しの観点から独り言に関して若干触れる。

最後に、第10章では本研究の全体、特に重要な点をまとめて記述し、本研究で残されている課題について述べる。

# 第 2 章　先行研究と問題点

繰り返しは、従来の研究において多面的に研究されてきており、非常に多岐にわたる広がりを見せている。また、それぞれの分野で扱われている用語も異なっている。会話分析の分野においては、「繰り返し」（英語では “Repetition”）という用語が用いられている。一方、語用論や文法論の分野では「問い返し疑問文」、「エコー疑問文」、「エコー発話」、「エコー表現」や、英語の場合では “Echo Utterance” または “Echo Questions”という用語が使用されている。本研究では、語用論や文法論上で問題にする場合には便宜上、これらの用語を「問い返し疑問文」と呼ぶことにする。加えて、第二言語習得の研究分野においては、「聞き返し」という用語が使われている。本章では、本研究で扱う繰り返しに関連する先行研究をまとめる。具体的には、2.1.で従来の研究で扱われてきた繰り返しの定義と機能、2.2.と 2.3.で「問い返し疑問文」と「聞き返し」に関する定義や意味機能の詳細について述べる。そして、2.4 では繰り返しに関連する「疑問文」の先行研究を取り上げる。最後に、2.5.において先行研究の問題点をすべて取り上げ詳細にまとめる。

## 2.1. 繰り返しに関する先行研究

本節では、繰り返しに関する先行研究を取り上げ、「繰り返し」自体の定義と先行研究における「繰り返し」の定義との相違点について述べる。そして、従来繰り返しはどのような機能を持つとされているのかについて詳しく説明していく。

### 2.1.1. 「繰り返し」の定義

「繰り返し」または「繰り返す」ということばは奈良時代から用いられており、『日本国語大辞典（第四巻：1064）』によれば、「繰り返す」は奈良時代に成立した『万葉集』や平安時代に書かれた『伊勢物語』などの文学作品でも使用されており、「一度繰った糸などをまた繰る」や「本などのページをめくる」あるいは「同じ本を何度も読む」と定義されている。また、「同じことを何度も行う」あるいは「反復する」ということもあり、現代では後者の「同じことを何度も行う」または「反復する」という意味で用いられることがほとんどである。つまり、「繰り返し」自体のそもそもの定義では「何らかの同じ行為を二度かそれ以上行うこと」というような行為を指しているのである。

一方、先行研究においての「繰り返し」は本来の「繰り返し」の意味と多少異なっている。中田（1992）によれば、「繰り返し」は「書きことばにおいても話しことばにおいても、それまでの文脈に既に現れた語や文などを再び、あるいはそれ以上に重ねて述べること」と定義されている。また、

牧野（1980）は「繰り返し」を「同じ行為が二度かそれ以上なされること」と定義している。しかし、「同じ」とは言え、物理的に完全に同じもの、同じ事柄はあり得ないにもかかわらず、日常では「同じ」ということばを用いているが、これは不用意に用いているのではない。「同じ」と言うためには、物理的に完全に同じものではなく、その主要な形式と機能と判断されるものが同じであれば十分なのであると牧野が述べている。例えば、毎朝トーストと卵を食べる人は、たとえトーストがバター付きであろうと、ジャム付きであろうと、また卵が目玉焼きであろうと、いり卵であろうと、ゆで卵であろうと、毎朝同じものを食べていると言えるわけである。多少実質が異なっても「トーストと卵」という主要形式・機能があれば十分「同じ」と言えるのである。つまり、牧野（1980）による「繰り返し」または「反復」とは、発話者の語気や声色などという実質的要素は異なっていても、繰り返したそのことばの形式・機能と先行発話が同一であれば、同じ発話を反復していると言えるであろう。しかし、実際発話者が相手のことばを繰り返した際、繰り返したそのことばの形式が同一であっても、語気・声色や態度などという実質的要素が異なっていたら、発話者が繰り返した発話は相手が発した先行発話の機能とは完全に異なり、同一の機能を持っているとは言いがたい。

### 2.1.2. 先行研究における繰り返しの機能

繰り返しは文章においても会話においても古くから現在に至るまで多くの研究があり、繰り返しに関する資料は数多く見られる。本研究に関連する主な繰り返しの先行研究は、稲木（1993）、岡部（2003）、黒川（2007）、高橋他（2012）、田中（1997）、中田（1992）、福富（2010）、藤村（2012）、堀口（1997）、Dumitrescu（2008）, Hsieh（2009）, Kobayashi・Hirose（1995）、Machi（2012）、Tannen（2007）、Wutthichamnong（2015）がある。それぞれの先行研究においては、日本語会話における繰り返し、外国語における繰り返し、または日本人と外国人における繰り返しの使用について、説明されている。以下の2.1.2.1.で日本語における繰り返し、2.1.2.2.で外国語における繰り返し、および日本人と外国人における繰り返しの使用に関する先行研究を取り上げる。

#### 2.1.2.1. 日本語における繰り返しの機能

日本語の繰り返しに関する先行研究は、岡部（2003）、黒川（2007）、田中（1997）、中田（1992）、福富（2010）、堀口（1997）がある。岡部（2003）によれば、会話における繰り返しの機能は、下記の表（1）が示すように、「思考の共有」、「感情の共有」、「情報の共有」という大きな3つのカテゴリーに分けられると述べている。また、それぞれのカテゴリーでは、さらに下位カテゴリーに分類することができる。

表（1）　岡部（2003）による会話における繰り返しの機能

| 繰り返しの機能 | 下位機能 | 定義と説明 |
|---|---|---|
| ①「思考の共有」 | ①-1.「意思決定の共有」<br>①-2.「判断理由の共有」 | 発話者の意思や意見を述べた発話が繰り返されているものであり、相手の発話に対して同意を表明したり、相手の発話を確認したりする。 |
| ②「感情の共有」 | ②-1.「喜びの共有」<br>②-2.「不満の共有」<br>②-3.「驚きの共有」 | 「評価」や「感想」などと言った発話者の心理状態が表現される。 |
| ③「情報の共有」 | ③-1.「状況の共有」<br>③-2.「信頼度の共有」 | 発話者が見たり聞いたりした人間の「外側」の世界の状態を、そのまま描写している。 |

（出所：筆者作成）

岡部によると、「思考の共有」と「感情の共有」は、発話者が頭や心の中で考えたり感じたりした、いわば人間の「内側」でとらえた認識であるが、「情報の共有」の場合は「思考の共有」と「感情の共有」と異なり、発話者が「内側」の認識の判断材料として、「外側」の情報を把握するために行っているものではないかと述べている。加えて、岡部は、日本人高校生同士の会話と日本人高校生と留学生の会話を対象に、課題解決場面における繰り返しの使用について分析した。岡部の調査結果から、留学生と日本人との繰り返しの頻度に非常に大きな差があり、留学生による繰り返しの使用回数は日本人と比べると、圧倒的に少ないことが明らかになった。

黒川（2007）は、日本語母語話者 24 名（12 ペア）による会話の録音データを「自分の発話の繰り返し」と「相手の発話の繰り返し」という 2 種類の発話のタイプに分類し、日本語日常会話における繰り返しにどのような機能が働いているかの調査を行った。黒川によれば、会話における繰り返しの頻度の高さとともに、コミュニケーションを円滑に進めるための様々な機能が確認されたと主張している。同じターンの中での繰り返し（本研究では「自分の発話の繰り返し」と呼ぶ）は「強調」、「言い換え」のストラテジーや発話をスムーズに行うための「フィラー」としての使用が見られたと述べている。それに対して、「相手の発話の繰り返し」は「あいづち」としての機能の他に、肯定や同意の意志を表す際に「ええ」や「はい」に代えて相手の発話を繰り返す待遇的使用があると説明している。加えて、情報の要求などのスピーチアクトや意味の交渉など、相互に会話を築き上げ発展させる上での機能も確認されたと述べている。

田中（1997）は、テレビのインタビュー番組やトーク番組、料理や家具の作り方を解説する番組などを文字化したものを資料として、繰り返しの機能を分析した。田中は、繰り返しの機能は「基本的機能」、「相手の発話への感想を表現する機能」、「思考・感情の共有を表現する機能」、「相手の発話を肯定する機能」、「からかい・遊びの機能」という 5 種類の機能が見られると述べている。田中による「基本的機能」は、いわゆる「あいづち」および「確認要求」という機能に該当するものである。また、「相手の発話への感想を表現する機能」と「思考・感情の共有を表現する機能」については、相手の発話に対して感情や一体感または共感を表明する機能である。「相手の発話を肯定する機能」は、「はい」あるいは「そうです」などという応答詞の代用として、相手の質問に対する肯定的な答えを与える機能である。そして、「からかい・遊びの機能」は相手をからかったり皮肉ったりすることを目的として、口真似をしているのである。しかし、田中による「からかい・遊びの機能」については、調査結果では実際の例文が見られなかった。そのため、繰り返しに「からかい・遊びの機能」があることの詳細は不明である。

中田（1992）は、録音した日本語の会話文と日本のテレビ番組を資料とし、繰り返しの意味機能、会話の方策や談話の展開、また発話の進行などを考察した。中田によれば、「発話の繰り返し」すなわち「既に発話されたことを再び発話すること」は現象として実に大きな広がりを持っており、広い意味では、大部分の発話は繰り返しの所産であると述べている。例えば、挨拶ことばや諺、成句の類なども繰り返しとして挙げられる。また、「明日学校二行キマスカ」に対して「行キマス」と答える、あるいは英語で主語の人称代名詞が繰り返されることなども繰り返しとして扱われる。さらに、言いよどみ（フィラー）や言い直し、あるいは「イワユル・・・」のような言いまわしなども繰り返しとして扱われており、非常に広い意味を持つ。また、中田は、会話における繰り返しについて「自分の発話の繰り返し」と「他者の発話の繰り返し」の両者を考察するとともに、繰り返しの機能と出現タイミングと形状（繰り返し発話の形式）の 3 つの要素を同時に考察し、それぞれの関係や表現効果の違いについて説明している。中田は、繰り返しの事例から抽出された働きを分類するための枠組みとして、「関説的機能（Referential）」、「心情的機能（Emotive）」、「動能的機能（Conative）」、「交話的機能（Phatic）」、「詩的機能（Poetic）」、「メタ言語的機能（Metalinguistic）」、「談話構成的機能（Discourse-Structuring）」という 7 つのカテゴリーを設定した。中田による繰り返しの機能を簡潔にまとめると、次の表（2）のとおりとなる。

**表（2）　中田（1992）による日本語の繰り返しの機能**

| 言語的コミュニケーションの機能 | 繰り返しの機能 |
|---|---|
| 「関説的機能（Referential）」 | 「ポイント強調」、「受信応答」、「確認」 |
| 「心情的機能（Emotive）」 | 「話者の心情の表出」、「話の内容に対する話者の姿勢・態度の表出」、「相手に対する話者の姿勢・態度の表出」、「相手との共感・一体感の表出」 |
| 「動能的機能（Conative）」 | 「働きかけ」、「反論」 |
| 「交話的機能（Phatic）」 | 「コンタクトの修復、保持、再開」、「会話への参加」、「時間稼ぎ、間つなぎ」 |
| 「詩的機能（Poetic）」 | 「ことばのリズム、テンポ」、「ことば遊び」 |
| 「メタ言語的機能（Metalinguistic）」 | 「ことばの意味の確認」、「説明要求」 |
| 「談話構成的機能（Discourse-Structuring）」 | 「結束の表示」、「談話におけるまとまりの収束の表示」、「話題を呼び戻す、話の筋を修正する」 |

（出所：筆者作成）

最初の 6 種（「関説的機能」～「メタ言語的機能」）については、Jakobson（1960）[2] による言語の 6 機能の概念に多少の修正を施したものであり、これらの機能は言語的コミュニケーションを成立させる 6 つの要因（コンテクスト、送り手、受け手、コンタクト、メッセージ、コード）に基づいているとしている。しかし、発話者と相手との話の流れに沿った観点、談話の運営・構成についての観点を加えることも必要であると中田は主張し、「談話構成的機能」を補充し、合計 7 つのカテゴリーを立てた。また、表（2）からわかるように、それぞれのカテゴリーにおいて、繰り返しは様々な異なる機能を果たしている。加えて、中田によれば、繰り返しとしての形状は、「再現型（ほぼ同じ形で繰り返す）」、「一部変更型（多少の変更を加えての繰り返し）」、「補足型（繰り返す際に何かを付け足す）」、「言い換え型（意味を保持してことばを言い換える）」、「要約型（内容をまとめた形で繰り返す）」、「対句型」という 6 種類に分類できると述べている。さらに、田中は繰り返しの出現タイミングについて「元の発話にすぐ続くもの」、「多少離れて出現するもの」、「どちらでも言えない」の 3 つのタイプに分けられると指摘しており、出現タイミングと繰り返しのタイプと機能との関係について考察を行った。しかし、中田が収集した例文はどのような場面・状況の会話であるのか、発話者は発話時にどのような態度で発話しているのかなどというような重要な要素の言及がないため、分析された繰り返しの機能には曖昧な点があると言える。そのため、繰り返しの機能が曖昧なままで、繰り返しの機能とタイミングと形状の 3 つの考察を同時に行っていることによって、分析に問題が生じている可能性が高い。

[2] Jakobson, Roman（1960）"Linguistics and Poetics", *Language in Literature*, 62-94.

福富（2010）によると、日本語母語話者同士の会話を分析した結果、繰り返しの機能は「強調」、「受信応答」、「説明要求」、「確認要求」、「感情表出」、「共感・一体感表出」、「反論のやわらげ」、「間つなぎ・時間稼ぎ」、「ことばのリズム・テンポ」、「談話構成」の 10 機能が見られる。下記の表（3）は、それぞれの機能についての詳細説明をまとめたものである。

**表（3）　福富（2010）による日本語母語話者における繰り返しの機能**

| 繰り返しの機能 | 機能の詳細説明 |
|---|---|
| 「強調」 | 発話の中で特に自分が伝えたい、強調したいことを示し、繰り返すことによって相手に強く印象づけようとする。 |
| 「受信応答」 | 相手の発話に対して「聞いている」「理解している」という合図を送るあいづち的な機能であり、あいづち詞の代わりに相手の発話（全部あるいは一部）を繰り返すことであいづちの役割果たす。 |
| 「説明要求」 | 相手の発話を言語表現としては理解できる（聞き取れている）が、内容に関して不明な部分があり、説明を求める機能である。 |
| 「確認要求」 | 相手の発話の内容が確かであるのかを相手に確認する、または聞き取りが正しかったかどうか確認を相手に求める機能である。 |
| 「感情表出」 | 繰り返しを行った話者が相手の発話に対して感じた驚きや納得・不満・おかしさなど感情を表現する機能であり、感情だけでなく話の内容に対する話者の姿勢や態度（否定的／肯定的態度や相手への敬意など）を表す場合も含める。 |
| 「共感・一体感表出」 | 相手への同意や共感を示したり、互いの連帯感を強めたり、あるいは興味を持っていると示そうとする機能である。 |
| 「反論の和らげ」 | 相手の発話（内容）に対する反論・訂正を行うとき、相手の感情を考慮し、会話を円滑に進めるストラテジーである。 |
| 「間つなぎ・時間稼ぎ」 | 相手に何か情報を要求された場合や、自分の発話の内容を整理したりまとめたりするのに必要な時間を稼ぐ機能である。 |
| 「ことばのリズム・テンポ」 | ことばのリズムやテンポを良くしたり、ユーモアを込めたりすることば遊び的な機能である |
| 「談話構成」 | 一旦別の方向に流れた話題を呼び戻したり、話の筋を修正したりする、話の展開を操作する機能である |

（出所：筆者作成）

表（3）からわかるように、福富による繰り返しの機能は、中田（1992）が主張している繰り返しの機能と極めて類似していることが明らかである。加えて、福富は、日本語母語話者と日本語学習者が用いる繰り返しはどのような差異があるのか、そして日本語学習者の中で中級学習者と初級学習者

ではどのような相違が見られるのかについても考察した。結果として、繰り返し発話数については、初級学習者は中級学習者と比較すると使用回数がやや少ないものの、中級学習者と日本語母語話者と比べたら大きな差は見られないが、機能別に見ると、かなり違いがあると述べている。また、母語話者と学習者との違いが顕著なのが「共感・一体感表出」、「反論のやわらげ」および「談話構成」であり、学習者は繰り返し発話にこのような機能があることを認識していない可能性があると説明している。それに対して、「説明要求」は、学習者の使用が母語話者より多くなっているため、繰り返すことによって相手に説明を求めるストラテジーは学習初期の段階からかなり多用されていると主張している。加えて、同じ学習者でも初級と中級で使用状況に異なりが見られ、特に「間つなぎ・時間稼ぎ」としての繰り返しに関しては、中級では頻繁に使用され、母語話者の使用数に近づいているが、初級ではほとんど使われていないと述べている。

堀口（1997）は、黒川（2007）、田中（1997）、中田（1992）、福富（2010）と異なり、繰り返しは聞き手の一つの役割である「あいづち」の一つの表現形式として扱っている。田中、中田、福富は、繰り返しは「あいづち」としては扱わず、「受信応答」という別の単独の表現として扱っている。堀口は、会話を促すための聞き手の役割として「あいづち」、「反復要求」、「説明要求」、「確認要求」、「先取り」の 5 種類に分類し、主に「あいづち」について注目している。堀口によれば、「あいづち」は「話し手が発話権を行使している間に、聞き手が話し手から送られた情報を共有したことを伝える表現」と定義され、「あいづち」の機能は「聞いているという信号」、「理解しているという信号」、「同意の信号」、「否定の信号」、「感情表出」という 5 種類に分類することができると述べている。また、「あいづち」の表現形式には「あいづち詞」、「繰り返し」、「言い換え」、「その他（先取りや非言語行動など）」が見られるとして、繰り返しは以下の例（4）と例（5）のように「あいづち」の一項目として扱われると述べている。しかし、堀口が挙げた例を「あいづち」として扱うのは無理があるのではないかと考えられる。

例（4）**山下**：鈴木さん、井上医院の電話、わかりますか？

**鈴木**：ええと、たしか・・・・52 の 3181 だよ。

**山下**：**52 の 3818**。

**鈴木**：*いや、3181*。　　（『Situational Functional Japanese 第 7 課』）

例（5）**鈴木**：せっかく旅行に行くのに、滝なんかつまらないよ。箱根がいいな、箱根が。

**田中**：箱根ですかあ。　　（『Situational Functional Japanese 第 24 課』）

例（4）は明らかに、発話者が相手の発話を確かめるために、その発話を繰り返すという「確認要求」であると考えられる。また、例（5）は続きの文脈もなく、田中の発話時の態度も明示されていないため、田中が伝達したいことについて判断するのは非常に困難である。この場合、田中は、鈴木が提案した「箱根」に対して興味を示したという肯定的態度を表明しているという解釈も不可能ではない。もっとも、田中は箱根には興味がないあるいは箱根に行きたくないために、直接否定せず、「箱根」ということばを繰り返すことで間接的に否定を表しているという解釈もありうるだろう。よって、もし例（4）と例（5）がすべて「あいづち」として扱われるとすれば、相手に対する応答などのほとんどの発話は「あいづち」だということになり、適切ではないと思われる。

以上が日本語の繰り返しについての主な先行研究であり、日本語における繰り返しの機能は、下記の表（4）のとおりにまとめることができる。

**表（4）　先行研究による日本語の繰り返しの機能のまとめ**

| 繰り返しの機能 | 先行研究 | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | 岡部（2003） | 黒川（2007） | 田中（1997） | 中田（1992） | 福富（2010） | 堀口（1997） |
| 「強調」 | | ● | | ● | ● | |
| 「言い換え」 | | ● | | ● | | |
| 「フィラー」 | | ● | | | | |
| 「あいづち」 | | ● | ● | ● | ● | ● |
| 「確認要求」 | ● | | ● | ● | ● | |
| 「説明要求」 | | | | ● | ● | |
| 「応答」 | | | ● | ● | | |
| 「共感・一体感の表出」 | | | ● | ● | ● | |
| 「感情の表出」 | ● | | ● | ● | ● | |
| 「態度の表出」 | | | ● | ● | | |

| 繰り返しの機能 | 先行研究 | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | 岡部（2003） | 黒川（2007） | 田中（1997） | 中田（1992） | 福富（2010） | 堀口（1997） |
| 「興味の提示」 | | | ● | | | |
| 「働きかけ」 | | | | ● | | |
| 「反論・訂正」 | | | | ● | ● | |
| 「コンタクトの修復、保持、再開」 | | | | ● | ● | |
| 「会話への参加」 | | | | ● | | |
| 「時間稼ぎ・間つなぎ」 | | | | ● | ● | |
| 「ことば遊び」 | | | | ● | ● | |
| 「結束の表示」 | | | | ● | | |
| 「話題を呼び戻す」 | | | | ● | ● | |
| 「同意表明」 | ● | | | | | |

（出所：筆者作成）

上記の表（4）からわかるように、繰り返しは実際の日本語会話において様々な役割を果たしているということが観察された。また、これらの機能の中では、「あいづち」が最も際立って見え、取り上げた先行研究のほとんどで共通して言及があることもわかった。他にも、「共感・一体感表出」、「感情の表出」、「確認要求」、「強調」の機能も顕著に見られる。このことから、日本語会話における繰り返しの機能は、主に相手の発話に対して関心があったり、相手との一体感や親近感などを生み出したりして、会話の進行を促す傾向があることには疑いの余地はないだろう。

### 2.1.2.2. 外国語における繰り返しの機能と使用傾向

本研究では繰り返しの普遍性についても探っていきたいため、日本語以外の言語における繰り返しの機能についても多少触れていきたい。英語における繰り返しに関する主な先行研究は稲木（1993）と Tannen（2007）、スペイン語における繰り返しは Dumitrescu（2008）、中国語における繰り返しは Hsieh（2009）、そしてタイ語における繰り返しに関しては Wutthichamnong（2015）を挙げる。

稲木（1993）は、英語の会話文を資料とし、主に繰り返しの形式に重点を置き、それぞれの形式によってどのような機能を果たしているかについて考察した。稲木によれば、繰り返しの表現形式は元の発話を一言一句違えずに、そのまま繰り返すという「無付加型」、発話者が繰り返し発話に疑問符「？」を付ける「エコー疑問文」、発話者が繰り返し発話に感嘆符「！」を付ける「エコー感嘆文」、そして発話者が繰り返し発話に極性一致の付加疑問を付ける「極性一致の付加疑問文[3]」という 4 つの表現形式に分類している。それぞれは形式によって、繰り返しが果たす機能が異なる。下記の表（5）は、稲木による繰り返しの形式および機能について示している。

**表（5）　稲木（1993）による英語における繰り返しの形式と機能**

| 繰り返しの形式 | 形式の説明 | 繰り返しの機能 |
|---|---|---|
| 「無付加型」 | 元の発話を一言一句違えずに、そのまま繰り返す | ・基本的には、会話への参加の意志表示になる。<br>・相手の発話を受け取り、これを了解したことを伝える。<br>・相手の内容に自分も共感することを伝える。<br>・情報を加算しつつ、会話を展開させる<br>・話の一貫性を生み出す。<br>・強調の効果をもたらす。 |
| 「エコー疑問文」 | 繰り返し発話に疑問符「？」を付ける | 単なる発話内容の確認作業のために使われることは稀であり、むしろ内容に懐疑を示したり、ことばそのものを問題にすることが多い。 |
| 「エコー感嘆文」 | 繰り返し発話に感嘆符「！」を付ける | 発話に対する自分の感情を伝える。 |
| 「極性一致の付加疑問文」 | 繰り返し発話に極性一致の付加疑問を付ける | 基本的に相手の言った内容を確認する時に使用され、その先行節に対する話し手の感情、例えば、反論、疑問などを表す表現である。 |

（出所：筆者作成）

稲木は、表現形式や感嘆符などの要素から繰り返しの機能を判断しているが、そもそも実際の会話では感嘆符や疑問符が付くか付かないかの明確な判断基準がなく、発話者または筆者によって表記方

[3] 稲木（1990）によれば、「極性一致の付加疑問文（Constant Polarity Tag Questions）」とは付加疑問文の一種であり、先行する平叙文と後続する付加疑問文との極性が「肯定—肯定」であり、極性が一致する付加疑問文である。一方、平叙文と後続する付加疑問文との「肯定—否定」の極性が逆の場合は「極性不一致の付加疑問文（Reversed Polarity Tag Questions）」と呼ぶ。

法は異なる。したがって、表現形式のみでは繰り返しの機能について正確に判断するのは非常に困難であるため、次の例（6）のように形式のみならず、前後の文脈や発話者の声色および表情などを考慮に入れなければならないことは言うまでもない。

例（6）（ある女性が急にミチコが働いている店に入ってきて、主任の黒沢に話してかけているのを見ながら、ポチとタマと静かに話している。）

**ミチコ**「あの人って・・・」

**ポチ**「彼女。」

**タマ**「黒沢さんがここの2階に住むまで同棲してたんです。」

**ミチコ**「〈大きな声で〉同棲！？・・・〈嫌そうな顔をしながら〉*やらしい*～」

（ダメな私に恋をしてください 第1話）

例（6）では、稲木の分類で判断すると、「エコー疑問文」と「エコー感嘆文」の両方ともあり得るため、繰り返しの機能の判別はつかないであろう。しかし、発話者であるミチコの声色や表情および繰り返しに後続する文脈からすると、相手の発話に対して驚きながら、嫌がるまたは不快感を表明していることが明らかである。このように、疑問符「？」および感嘆符「！」が付加されるかされないかは、繰り返しの機能を判断するのに特に有効な手段ではないことがわかる。

Tannen（2007：58-61）はアメリカ英語における親しい友人同士の会話に現れる繰り返しについて考察を行い、繰り返しの機能とバリエーションを詳述した。Tannen によれば、会話に現れる繰り返しは単なる冗長になる要素ではなく、相互の理解を促し対話における関わり合いを築き上げるというコミュニケーション機能があると指摘している。また、繰り返しの機能に関しては「産出（Production）」、「理解（Comprehension）」、「関係性（Connection）」、「相互行為（Interaction）」という大きく4つの機能に分類できると説明している。「産出（Production）」は、新しいことばを作り出さなくても、先行発話または相手のことばを繰り返すだけで、効率よくエネルギーを使わずに伝達を可能にする機能である。また、「理解（Comprehension）」は、同じことばを繰り返すことによって新情報を少なくし、会話参加者にとって理解が困難である部分を減らすことによって、会話で「理解を助ける」機能として果たしている。「関係性（Connection）」は、どのように新発話が先のディスコースと結びついているか、ディスコースの中で表現されている考えがどのようにお互い関連しているか、また、文連続に意味的まとまりを与え、どのようにディスコースの意味に寄与しているかという話し

手の態度を示す機能である。最後に、「相互行為（Interaction）」は、ディスコースを繋ぐだけでなく、会話参加者間の関係を結び付ける機能である。

また、Dumitrescu（2008）は「相手の発話の繰り返し」の観点からメキシコスペイン語の会話における繰り返しの機能について分析を行った。Dumitrescu によれば、メキシコスペイン語における繰り返しは「時間稼ぎ」、「説明要求」、「確認要求」、「驚きの表示」、「同意表明」、「不同意表明」という様々な機能を持つと述べている。しかし、Dumitrescu が取り上げた会話例文は繰り返しの前後の文脈が少なく、繰り返しの機能を判断するのに非常に重要な要素である発話者の態度や声色などに関してもほとんど見られなかった。そのため、Dumitrescu による繰り返しの機能については少なからず疑問点が残る。さらに、Hsieh（2009）は中国語（マンダリン）の会話における繰り返しについて、「自分の発話の繰り返し」と「相手の発話の繰り返し」の 2 種類の観点から繰り返しの機能を考察した。Hsieh によれば、「自分の発話の繰り返し」は、主に発話者は自分の発話の中で特に強めたい、または最も伝達したいことを示したり、発話者の意見を強く主張したりするという「強調」の機能を持つと述べている。一方、「相手の発話の繰り返し」によって果たす機能は、「説明要求」、「確認要求」、「同意表明」、「あいさつ」であると主張している。しかし、Hsieh が取り上げた会話例は Dumitrescu と同様に発話時に話者がどういう風に発話するか、またはどのような表情や態度で発話するかという非言語行動について全く説明されていないため、判断が不可能な例文がほとんどである。

Wutthichamnong（2015）は、タイ語母語話者である同年の女性による「タスクベースの会話（Task-Based Conversation）」と「日常会話（Daily Conversation）」を資料とし、タイ語の会話における繰り返しの形式と機能について明らかにした。Wutthichamnong の調査結果によれば、タイ語の繰り返しの形式は、相手の発話を一切追加および変更せずに、そのまま繰り返す「全体的繰り返し」と相手の発話を一部のみを繰り返す「部分的繰り返し」の 2 種類に分けられるとしている。また、タイ語の繰り返しの機能については「あいづち」、「同意表明」、「不同意表明」、「訂正」、「発話の進行の促進」、「説明要求」、「確認要求」、「驚きの表示」、「共感・一体感表出」、「時間稼ぎ」、「応答」、「皮肉」という様々な機能が見られ、12 種類の機能に分類できると述べている。Wutthichamnong によれば、これらの 12 種類の機能はすべて「タスクベースの会話」と「日常会話」に現れ、最も多用される機能は「あいづち」、「同意表明」および「発話の進行の促進」であるのに対し、最も少なく用いられる機能は「皮肉」であると述べている。加えて、「タスクベースの会話」と「日常会話」における繰り返しは同じ機能を果たしているとは言え、「タスクベースの会話」より「日常会話」の方が繰り返しがより多く

使用されると主張している。会話場面の違いによって、繰り返しの使用頻度および使用傾向が異なるという指摘は興味深い点である。

さらに、日本人と外国人における繰り返しの使用傾向についての対照研究は藤村（2012）、Kobayashi・Hirose（1995）、Machi（2012）がある。藤村（2012）は英語母語話者同士の会話と日本語母語話者同士の会話における繰り返しの使用傾向の相違点を考察し、両言語の母語話者の年齢層の違いによって繰り返しの使用回数に影響を及ぼすかどうかについて明らかにした。藤村は、英語母語話者は「相手の発話の繰り返し」で「時間稼ぎ」および「躊躇の表明」を表し、「自分の発話の繰り返し」で「訂正」を表す傾向が強いと述べている。それに対して、日本語母語話者は英語母語話者と異なり、「相手の発話の繰り返し」で「共感・一体感表出」を表し、「自分の発話の繰り返し」で「強調」を表す傾向が高いと主張している。さらに、両言語とも中年層の発話者より若年層の発話者の方が繰り返しの使用回数が圧倒的に多いことが観察され、英語母語話者の若年層話者は主に「自己主張」を表すのに対し、日本語母語話者の若年層話者は主に「感情の表出」を表す傾向が強いと説明している。加えて、Kobayashi・Hirose（1995）は日本人英語学習者の会話における繰り返しの頻度と英語力との間の関係、および繰り返しの機能について調査を行った。Kobayashi・Hirose によれば、繰り返しは「産出（Production）」、「修復（Repair）」と「相互行為（Interaction）」という大きな 3 つの機能を持つと述べており、日本人英語学習者は一般的に「産出」の過程での繰り返しが多く、「修復」のための繰り返しはそれより少なく、「相互行為」のための繰り返しは最も少なく使用すると説明している。また、日本人英語学習者の英語力が高くなるにつれて繰り返しの使用回数が減り、英語力の高い発話者は「相互行為」のための繰り返しを英語力の低い発話者よりも多用しているのに対し、「産出」および「修復」のための繰り返しには英語力の違いによる頻度の違いには有意差が見られなかった。なお、Kobayashi・Hirose は、繰り返しは円滑な会話の相互行為のためだけでなく、産出を容易にするためにも、第二言語習得ストラテジーとして使われるということを示した。

さらに、Machi（2012）は、日本語母語話者同士の会話とアメリカ英語母語話者同士の会話を対照し、両言語における繰り返しの使用頻度・対象および機能について考察を行った。Machi の調査結果によれば、日本語会話では 1 分間に約 4.08 回の繰り返しが出現するのに対し、アメリカ英語会話では 1 分間に約 1.43 回の繰り返しが出現するということで、日本語会話における繰り返しの頻度はアメリカ英語会話より 3 倍ほど多く見られた。また、Machi は繰り返しの対象、つまり発話者はどのようなことばや内容の種類を繰り返すかについて「客観的事実（Objective facts）」、「人物・場所・時間

（Names of people, places and times）」、「話題および話題開始者（Topics and the initiator's）」、「経験（Experiences）」、「評価（Assessments）」、「感情（Feeling）」という 6 つのカテゴリーに分類した。日本語会話では、主に「評価」と「感情」が最も多く繰り返されるのに対し、アメリカ英語会話では「人物・場所・時間」のような内容が最も多く繰り返される。加えて、Machi によれば、両言語の会話における繰り返しの機能は「同意表明（Agreement）」、「共感・一体感表出（Sympathy）」、「決意表明（Adoption）」、「説明要求（Questioning）」、「応答（Answering）」、「確認要求（Confirmation）」、「時間稼ぎ（Filling of Space）」、「喜びの表出（Enjoyment）」の 8 つの機能を果たすと述べている。日本語会話においては、「共感・一体感表出」および「同意表明」としての繰り返しが最も多く用いられ、繰り返しによって発話当時者の間の一体感が生み出される。一方、アメリカ英語会話では主に「説明要求」、「応答」、「確認要求」という 3 つの機能によって会話参加者がお互いのストーリーや情報を正確に引き出し、理解することができる。Machi は、日本語会話とアメリカ英語会話で使われている繰り返しの機能が異なるとは言え、繰り返しの実際の使用目的は会話参加者間の話題の一貫性を維持することが、両言語で共通していると主張している。

以上が外国語における繰り返しについての主な先行研究である。外国語と日本語における繰り返しの機能を簡潔にまとめると、以下の表（6）のとおりとなる。

**表（6）　先行研究による外国語と日本語における繰り返しの機能のまとめ**

| 繰り返しの機能 | 言語 | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| | 日本語 | 英語 | スペイン語 | タイ語 | 中国語 |
| 「説明要求」 | ● | ● | ● | ● | ● |
| 「確認要求」 | ● | ● | ● | ● | ● |
| 「同意表明」 | ● | ● | ● | ● | ● |
| 「不同意表明」 | | ● | ● | ● | |
| 「驚きの表示」 | ● | ● | ● | ● | |
| 「時間稼ぎ・間つなぎ」 | ● | ● | ● | ● | |
| 「応答」 | ● | ● | | ● | |
| 「共感・一体感の表出」 | ● | ● | | ● | |
| 強調 | ● | | | | ● |

| 繰り返しの機能 | 言語 | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| | 日本語 | 英語 | スペイン語 | タイ語 | 中国語 |
| 「あいづち」 | ● | | | ● | |
| 「コンタクトの修復、保持、再開」 | ● | ● | | | |
| 「反論・訂正」 | ● | | | ● | |
| 「喜びの表明」 | ● | ● | | | |
| 「フィラー」 | ● | | | | |
| 「あいさつ」 | | | | | ● |
| 「発話の進行の促進」 | | | | ● | |
| 「皮肉」 | | | | ● | |
| 「産出」 | | ● | | | |
| 「関係性」 | | ● | | | |
| 「理解」 | | ● | | | |
| 「相互行為」 | | ● | | | |
| 「働きかけ」 | ● | | | | |
| 「興味の提示」 | ● | | | | |
| 「会話への参加」 | ● | | | | |
| 「ことば遊び」 | ● | | | | |
| 「結束の表示」 | ● | | | | |
| 「話題を呼び戻す」 | ● | | | | |
| 「言い換え」 | ● | | | | |

（出所：筆者作成）

表（6）からわかるように、日本語以外の言語でも繰り返しが多用されることが見られ、日本語の繰り返しと類似した機能を果たしていることがわかった。各言語において共通に有している繰り返しの機能は、「説明要求」、「確認要求」、「同意表明」であることも観察された。他にも、「驚きの表示」、「時間稼ぎ・間つなぎ」、「共感・一体感の表出」、「応答」、「不同意表明」の機能も際立って見える。しかし、各言語における繰り返しの機能がほとんど同様であるとは言え、それぞれの言語によっ

て繰り返しの使用目的、使用頻度および使用傾向が比較的異なるということがわかった。また、会話場面や状況の違いによっても、繰り返しが果たす機能または繰り返しの使用傾向が異なるのではないかと考えられる。

最後に、データ工学と情報マネジメントの面では高橋他（2012）の研究があり、高橋他はマイクロブログサービス[4]の一種である「Twitter（ツイッター）」で使用される繰り返しを抽出し、繰り返しと投稿者の感情の関係について分析した。高橋他によれば、文語は口語のように話し手が強い声や高い声、音節を長く伸ばすことなどによって重要なことばを強調する手法がないため、イタリック体や太字、アンダーラインなどの文字のスタイルによって強調を表現することができると述べている。しかし、Twitter のようなプレーンテキスト形式の場合は文字のスタイルの変更およびアンダーラインなどという機能がないため、文字の繰り返しが頻繁に観察され、繰り返しは音律的な強調と同じような意味を持ち、書き手の感情を表現すると主張している。繰り返しには感情的機能が存在するという指摘は、実際の会話にも当てはまるのではないかと思われ、大変興味深い。

以上が繰り返しについての先行研究である。日本語会話と外国語の会話における繰り返しは多種多様な機能を持ち、特に会話相手との一体感を生み出したり、会話の進行を促したり、円滑なコミュニケーションを築く働きを持つものとして多用されているということがわかった。

## 2.2.「問い返し疑問文」に関する先行研究

本節では、「問い返し疑問文」に関する先行研究を取り上げ、「問い返し」自体の定義と先行研究における「問い返し」の定義との相違点について述べる。そして、先行研究では「問い返し疑問文」はどのような機能を持つと述べられているかについて詳細に説明していく。

### 2.2.1.「問い返し」の定義

「問い返し」または「問い返す」自体の定義に関しては『日本国語大辞典（第九巻：882）』によれば、「問い返し」とは「一度たずねたことをまた繰り返してたずねる」あるいは「相手の問いに対して、反対にこちらから質問する。反問する」と定義されている。それに対して、先行研究で扱われる「問い返し」は本来の「問い返し」の意味と多少異なっている。仁田（1991）は、「問い返し」を「相手の発話には不明な部分があり、言語表現として相手の発話は了解しているが、その真意、意味

[4] 高橋他（2012）によれば、マイクロブログサービスとは「比較的短い文章を投稿し、閲覧することができるウェブサービス」であり、投稿内容が短いため、更新頻度が高く、チャットのようなリアルタイムコミュニケーションをとることが可能であると述べている。

する所や指示する所の把握ができなかった相手の文および文の一部を繰り返すこと」と定義している。また、南（1985）は「問い返し」を「確定も把握も不十分であると受け手（問い返し文の質問者）が意識して、それを再行動により送り手（相手）に確かめるものであること」と定義付けている。さらに、森山（1989b）は「問い返し」を「相手の発話のある部分が聞き取れなかったこと、あるいはそれに対して否定的であったりして聞き取れないかのように装うこと、などの表示として、聞き返しをすること」と定義している。このように、「問い返し」に関しては発話者が相手の発話を把握できないため、もう一度相手に確かめるというような定義が多かった。しかし、実際発話者が相手の発話に対して把握が不十分である場合、他の表現を利用することも可能であり、必ずしもわざわざ相手の発話を繰り返す必要はない。発話者がわざわざ相手の発話を繰り返すのは単に相手に何らかのことについて確かめるのではなく、むしろ森山（1989b）が主張したように相手の発話に対して否定的な意見や感情を持った場合に、それを聞き取れないかのように装いながら、相手の発話をわざと繰り返すこともあるではないかと考えられる。

### 2.2.2. 先行研究における「問い返し疑問文」の機能

本研究で扱う「問い返し疑問文」の主な先行研究は、安達（1989）、近藤（2001）、南（1985）、森山（2009）、NOH（1995）と Wilson, D. & Sperber D.（1992）である。

安達（1989）は、「問い返し疑問文」を「問い返しの種類」と「問い返しに関わる要素」という 2 つの観点から考察した。「問い返しの種類」は、「直前発話のコトガラ的意味内容を問題にする」と「直前発話の意味に踏み込むことなく、そこで用いられた表現を問題にする」という 2 種類に分類できると述べている。また、どのレベルを問題にするかは「発話者の意図」によるものである。その上、「問い返しに関わる要素」は「問い返し疑問とダイクシスの形式」、「問い返し疑問の主題制約」、「助詞の省略」の 3 通りに分けられるとしている。さらに、安達は、どのような時にどのように問い返しするのかという「問い返しの種類」と「問い返しに関わる要素」との関係性について指摘しており、以下のようにまとめることができる。

1)「問い返し疑問とダイクシスの形式」

1.1)「直前発話の意味に踏み込むことなく、そこで用いられた表現を問題にする」

例（7）**話者 A**「お前、この仕事、手伝ってくれる？」

**話者 B**「{お前？ / ＊わたし？} *そんな言い方はないだろう*。」（安達 1989）

1.2）「直前発話のコトガラ的意味内容を問題にする」

例（8）**ひかる**「一枝が何言ってきたのよ」

**俊行**「（貞九郎に）お前にくれって言ってる・・・」

**貞九郎**「おれに？ / ＊お前に？」（安達 1989）

2）「問い返し疑問の主題制約」

2.1）「直前発話のコトガラ的意味内容を問題にする」

例（9）**話者 A**「その自動販売機は故障していますよ」

**話者 B**「この自動販売機｛??は / が｝故障している？」（安達 1989）

3）「助詞の省略」

3.1）「直前発話のコトガラ的意味内容を問題にする」

例（10）**話者 A**「太郎φケガφしたらしいよ」

**話者 B**「{??太郎φどうしたって？ / 太郎がどうしたって？}（安達 1989）

安達は、上記の例（8）～例（10）のように発話者が相手の「直前発話のコトガラ的意味内容を問題にする」場合は、ダイクシスの形式や助詞などを変更しなければならないと説明している。それに対して、例（7）のように相手の「直前の発話の意味に踏み込むことなく、そこで用いられた表現のみを問題にする」場合は、ダイクシスの形式や助詞などを変更する必要はなく、先行発話のまま繰り返すことができると指摘している。本研究で収集した実際の会話例文は安達が指摘しているような制約が多少見られ、ほとんどは「問い返し疑問とダイクシスの形式」の形として出現していた。

南（1985）は「問い返しの条件」と「問い返しの形式」について述べている。南によれば、「問い返しの条件」は「問題の表現の前に、相手の何らかの発話があること」と「話し手（質問者）は、相手のそのことばをそのままか、それに近い形で繰り返すことによって、相手にそのことばについて確かめるものであること」という 2 点があると指摘している。また、「問い返しの形式」に関して相手の言っていることをそのまま繰り返す「直接問い返し文」、質問者が何らかの点でそれを質問者自身のことばにして尋ねる「間接問い返し文（パラフレイズ）」、全体としては問い返し文の条件を満たすが部分的に通常疑問文（特に補充質問）の要素を含む「部分的問い返し文（ハイブリッド）」という 3 種類の形式に分けて説明している。さらに、「直接問い返し文」の場合は、相手の発話を全部繰り

返す「完全直接問い返し文」と相手の発話の一部のみを繰り返す「不完全直接問い返し文」の 2 つに下位分類している。以下の例（11）～例（15）は南による「問い返しの形式」を示している。

1）「直接問い返し文」

1.1）完全直接問い返し文」

例（11）（もう練習をやめて帰りたいんですけど・・・）

「もう練習をやめて帰りたいんですけど？」（どうしてだ？）　（南 1985）

1.2）「不完全直接問い返し文」

例（12）（もう練習をやめて帰りたいんですけど・・・）

「帰りたいんですけど？」（どうしてだ？）　（南 1985）

2）「間接問い返し文（パラフレイズ）」

例（13）（もう練習をやめて帰りたいんですけど・・・）

「練習をやめて帰りたい？」　（南 1985）

例（14）（あんたが代表になるそうだよ。）

「えっ、俺が代表？」　（南 1985）

3）「部分的問い返し文（ハイブリッド）」

例（15）（・・・[5] を忘れました。）

「何を忘れました？」/「何を忘れましたって？」　（南 1985）

しかし、上述の例（11）～例（13）を考えると、実際発話者が相手が帰りたい理由を知りたければ、「どうしたの？」などのような表現を用いたほうがより自然であるとも考えられ、わざわざ相手の発話を繰り返したのは単に相手に「どうしてだ？」と聞きたいだけではないだろう。発話者が相手の発話を繰り返したのは相手が帰りたい理由を知りたいと思っているのではなく、逆に相手の発話に対して「何言っているの？」や「練習が始まったばかりなのに、「練習をやめて帰りたい」はないだ

[5] 南（1985）によれば、「・・・」は発話者が相手の発話を「聞き取れなかった部分」であると述べている。

ろう」などいうようなニュアンスの方が強く伝達しているのではないかと考えられる。

また、「問い返し疑問文」という用語のほか、「エコー発話」、「エコー表現」、「エコー疑問文」や、英語の場合では "Echo Utterance" または "Echo Questions"という用語を用いる研究もあるが、すべては「問い返し疑問文」と同様のものである。Wilson, D. & Sperber, D.（1992）の「関連性理論」によれば、「エコー発話（Echo Utterance）」とは「聞き手は話し手の発話に対してある態度を抱いているという事実を相手に知らせる」ことであると説明している。加えて、「エコー発話」は「アイロニー（Verbal Irony）」として用いる場合も見られ、引用内容に対する発話の態度を伝える機能を持ち、エコーされた元の思考に対して発話者は乖離的な態度を表すものであると指摘されている。なお、NOH（1995）によれば、"Echo Questions" は、発話者が相手の発話が把握できないというよりはむしろその発話に対して発話者の態度を表すことであると述べている。特に、発話者が相手の発話に対して「不信感」と「否定」を表すことがほとんどであると主張している。

他に、近藤（2001）によれば、発話者が「問い返し疑問文」を用いた原因は、発話者の先行予想とある事態とが対立しているためであると述べ、この場合は「意外である」状況を表している。近藤によれば、「意外である」とは、「ある事態と想定とを照会して、双方の間に「対立」があるとき生じる感覚」であると説明している。また、近藤は発話者の先行予想と対立する事態は、（「相手」が眼前にいようがいまいが、その「相手」が誰であろうと）他者によって言語化されているその発話と話し手の想定が対立する「発話時に他者により言語化されている事態」と、発話時において話し手が認識したその事態が疑問表現の形をとって差し出されているものである「発話時に話し手により言語化される事態」の2通りのあり方が存在するとしている。加えて、近藤は「問い返し疑問文」は発話者が相手に向かって問いかける場合のみというわけではなく、以下の例（16）～（19）のように相手に向いていないあるいは相手の存在がない場合にも見られると述べている。以下の例（16）と例（17）は近藤による「発話時に他者により言語化されている事態」を、例（18）と例（19）は「発話時に話し手により言語化される事態」を示している。

1）「発話時に他者により言語化されている事態」

例（16）（車で「三郷」を目指して走っているときに、信号待ちで見た標識に「松伏」とあった。そのときに、）

「松伏？」（近藤 2001）

例（17）（本を読みながら、「これが日本に稲作をもたらした原因である」という箇所を読んで、）

「これが原因だと？」（近藤 2001）

2）「発話時に話し手により言語化される事態」

例（18）（沢を深く遡って、そこには誰もいないと思って、釣り糸をたらしていたとき、誰かがいる気配を感じた。そのとき、）

「人がいる？」（近藤 2001）

例（19）（最近ずっと通行止だった箇所にさしかかって、そこが通行可能な状態であるのを発見したとき、）

「通れるようになった？」（近藤 2001）

以上が近藤が挙げた例文であるが、例（16）と例（17）の場合は発話者が相手（聞き手）の発話ではなく、標識、看板や本などに書いてある情報を繰り返しているという点では、「問い返し疑問文」（本研究の「繰り返し」）として扱えないこともない。しかし、例（18）と例（19）の場合は繰り返しをする先行発話が全くなく、いわば「独り言」のような言語表現であるため、本研究における繰り返しとして扱うのは適切ではない。よって、まずは繰り返しの機能の基本についてよりわかりやすくするために、本研究では近藤が述べたような相手が発する先行発話ではない場合を除き、発話者が「相手が発する先行発話」を繰り返す場合のみを考察の対象とする。

さらに、森山（2009）は、エコー表現の後に付け加える終助詞「ね」に注目し、「ね」の音調の違いによってエコー表現のニュアンスにどのような影響を及ぼすかについて考察を行った。森山によれば、エコー表現の後に付加される終助詞「ね」は短く高い「ね」と長く後を下げる「ねえ」の 2 種類があると述べており、前者は「復唱的確認」、後者は「コメント準備型エコー表現」と名付けている。短く高い「ね」による「復唱的確認」は下記の例（20）が示すとおり、相手の発話内容を繰り返す点で、確実な確認がなされたことを表示するという機能があり、後続して「わかった」などの表現を付加できるとしている。

例（20）（教室でプリントを配布したところ不足分があった。）

**生徒**「プリント、あと二枚下さい。」

**先生**「二枚ね。」（森山 2009）

そして、森山によれば、長く後を下げる「ねえ」による「コメント準備型エコー表現」は、以下の例（21）のように相手の発話を受け取りつつ、その情報に関する自分なりのコメントを準備していることを示すものである。「ねえ」によって引き延ばされることによって一種の中断が生じ、関連情報の検索、計算などの処理をしていることを表すことになっている。また、例（22）のように長く後を下げる「ねえ」によってマイナス評価的ないし否定的な態度効果を表す場合もあると説明している。

例（21）（この辺りにコンビニはありませんか、という問いに答えて）

**初老の通行人**「コンビニねえ・・・*この辺りには無いねえ*。」（森山 2009）

例（22）（久しぶりに海辺のリゾートへ出かけた夫婦）

**夫**「昼食はハンバーガーにしよう。」

**妻**「ハンバーガーねえ。・・・」（森山 2009）

しかし、以下の例（21’）と例（22’）のように繰り返しの部分の後に終助詞「ね」が付加されなくても、発話者の語調や態度および表情による繰り返しのみでも、森山による関連情報の検索、計算などの処理をしていることを表す機能、および否定的な態度効果を表す機能が果たせると思われる。そのため、実際はそれらの機能は終助詞「ね」によって生じるものではなく、むしろ「ね」の前の要素である繰り返しによって生じるのではないかと考えられる。

例（21’）（この辺りにコンビニはありませんか、という問いに答えて）

**初老の通行人**「コンビニ・・・*この辺りには無いねえ*。」（筆者作例）

例（22’）（久しぶりに海辺のリゾートへ出かけた夫婦）

**夫**「昼食はハンバーガーにしよう。」

**妻**「〈嫌そうな顔をしながら〉ハンバーガー・・・」（筆者作例）

以上が「問い返し疑問文」についての先行研究である。「問い返し疑問文」については2.1.節の繰り返しと異なり、主に文法的な観点に焦点を当てた研究がほとんどであることがわかった。また、「問い返し疑問文」の機能は相手の発話について確かめるという「確認要求」および、発話者が相手の発話に対して態度を表すという大きな2つの観点があることが明らかになった。しかし、前述したように発話者が相手の発話について確認したい場合は、必ずしも相手の発話を繰り返す必要はない。それにもかかわらず、わざわざ相手のことばを繰り返すのは、単に相手からの確認を要求しているだけではないだろう。

## 2.3. 「聞き返し」に関する先行研究

本節では、「聞き返し」に関する先行研究を取り上げ、「聞き返す」自体の定義と先行研究における「聞き返す」の定義との相違点について考察する。そして、従来、聞き返しはどのような機能を持つとされているのか、および繰り返しとどのような関連性があるのかについて詳しく説明していく。

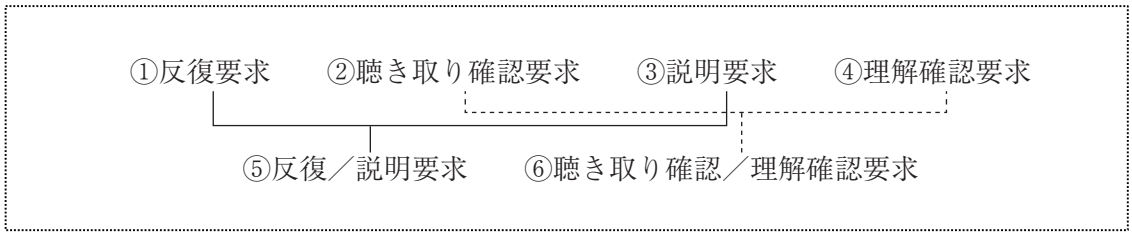
### 2.3.1. 「聞き返し」の定義

「聞き返し」または「聞き返す」自体の定義に関しては『日本国語大辞典（第四巻：17)』によれば、「聞き返す」とは「一度質問したことを繰り返し聞く。聞き直す」あるいは「相手から聞かれたのに対して、かえってこちらから聞く。問い返す。反問する」ないし「相手の言ったことに対して、その疑問点や知りたいことなどを聞く」と定義されている。一方、先行研究においての「聞き返し」は本来の「聞き返し」の意味と多少異なっている。「聞き返し」の代表的先行研究である尾崎（1992, 1993）によれば、「聞き返し」とは「相手の話が聞き取れない、わからないという問題に直面し、それを解消するために相手に働きかける方策」であるとしている。このように、本来の「聞き返し」と先行研究における「聞き返し」の定義から見ると、明らかに前節の「問い返し疑問文」と非常に近い定義を持ち、「相手の発話に対して不明または不確かな部分が存在し、それについて相手に尋ねる」という共通点があり、両者は区別できないと言っても過言ではない。

### 2.3.2. 先行研究における「聞き返し」の機能

本研究で扱う「聞き返し」の主な先行研究は、梅木（2011)、尾崎（1992, 1993, 2001)、林（2007, 2009)、福富（堀内）(2012)、堀内（2011）である。尾崎（1993）は、日本語母語話者と日本語学習

者における会話を資料とし、コミュニケーション・ストラテジー[6]の一種である「聞き返し」の発話意図を分析した。そして、それらの分類に基づき、日本語母語話者の応答を分析すると、どのような「聞き返し」が日本語母語話者から適切な応答を引き出せるのか、どのような「聞き返し」が新たな「聞き返し」につながるのかについて考察した。尾崎は、以下の図（1）のとおり、「聞き返し」の発話意図を相手の発話が聞き取れなかったときに出される「①反復要求」、聞き取りに自信が持てないときに相手に確認を求める「②聞き取り確認要求」、相手の発話は聞き取れたが意味がよくわからないときに出される「③説明要求」、自分の理解が正しいかどうかを確認してくれるように求める「④理解確認要求」、反復を求めているのか説明を求めているのか特定できない「⑤反復／説明要求」、そして聞き取り確認をしたいのか説明を要求しているのか特定できない「⑥聞き取り確認／説明要求」という 6 つのタイプに分類している。




**図（1）　尾崎（1993）による「聞き返し」の発話意図**　　（出所：尾崎（1993））

また、尾崎によれば「聞き返し」の表現形式は、「動詞型」、「名詞丁寧型」、「名詞普通型」、「不完全型」と「間投詞型」の 5 つに分けられると述べており、相手の発話（の一部）をそのままオウム返しにするものを「エコー型」と呼ぶとしている。尾崎の分析結果によると、「②聞き取り確認要求」と「④理解確認要求」が最も効果的な「聞き返し」であるのに対し、「①反復要求」または「③説明要求」が曖昧な「聞き返し」であり、日本語母語話者から反復による応答を引き出す場合では問題を解決することができず、聞き返し連鎖になる場合が多いことを指摘している。さらに、尾崎（1992）は「聞き返し」の表現形式に焦点を当て、初級と上級の学習者の間で「聞き返し」の表現形式に違いがあるのかについて調査を行った。その結果、「もう一度言ってください」「すみません」などの「動詞型」は初級学習者に特徴的な「聞き返し」であり、上級学習者および日本語母語話者の会話では全く見られないことが観察された。また、初級学習者の会話では「ですか」を付けずに、相手の発話の

[6] 尾崎（1992）によれば、「コミュニケーション・ストラテジー（ComS）」とは「言語能力の不足を補うための方策である」と定義付け、コミュニケーション・ストラテジーは問題処理の方策「訂正ストラテジー」およびコミュニケーションの効果をあげる方策「円滑化のストラテジー」の組み合わせであると述べている。

一部を単に繰り返すという方法が主に使われているのに対し、上級学習者と日本語母語話者の場合は「ですか」を付けた「丁寧型」が多く用いられている。尾崎によれば、学習者の日本語レベルが高ければ高いほど、「聞き返し」の表現形式も日本人に似てくると主張している。加えて、尾崎（2001）は「聞き返し」の表現形式について従来の分類と異なる観点から分析し、次の表（7）に示すとおり、「聞き返し」は「①単純エコー型（エコー・確認型）」、「②複合エコー型（エコー・非確認型）」、「③確認型（非エコー・確認型）」と「④非確認型（非エコー・非確認型）」という 4 つのカテゴリーに分類している。

**表（7）　尾崎（2001）による「聞き返し」の表現形式の分類**

| 「聞き返し」の表現形式 | 表現形式の分類基準 |
|---|---|
| ①「単純エコー型」（エコー・確認型） | 先行する相手の発話の全体または一部を繰り返し、「うん」「ええ」などの表現で応答することが可能であることから確認要求とみなすことができるもの |
| ②「複合エコー型」（エコー・非確認型） | 先行する相手の発話全体または一部を繰り返した後に「わからない」「知らない」などの表現を付け足し、反復、言い換え、説明などの発話調整を求めていると解釈されるもの |
| ③「確認型」（非エコー・確認型） | 先行する相手の発話を繰り返していない表現で「うん」「ええ」などの表現で応答することが可能であることから確認要求とみなすことができるもの |
| ④「非確認型」（非エコー・非確認型） | 先行する相手の発話を繰り返していない表現で、反復、言い換え、説明などの発話調整を求めていると解釈されるもの |

（出所：筆者作成）

林（2007, 2009）は、尾崎（2001）による「聞き返し」の表現形式の分類に基づき、日本語母語話者と日本語非母語話者が参加する接触場面において日本語非母語話者が使用した聞き返しを機能と表現形式で分類し、フォローアップ・インタビューのデータを含めてその成功率を分析した。林（2009）は、日本語非母語話者がどのような目的で「聞き返し」の機能を選択しているのかについて以下の表（8）のようにまとめている。

**表（8）　林（2009）による「聞き返し」の機能と使用目的**

| 調整計画 | 機能 | 目的 |
|---|---|---|
| 反復要求 | 全体反復要求 | 発話の全体を繰り返して欲しい |
| | 一部反復要求 | 発話の一部を繰り返して欲しい |
| 確認要求 | 聞き取り確認要求 | 発話の聞き取りが正しいかどうか教えて欲しい |
| | 解釈理解確認要求 | 発話の解釈が正しいかどうか教えて欲しい |
| | 不足理解確認要求 | 統語的な不足に対する理解が正しいかどうか教えて欲しい |
| | 意図理解確認要求 | 発話意図を正しく理解しているかどうか教えて欲しい |
| | 不足確認要求 | 発話の不足に対する仮説が正しいかどうか教えて欲しい |
| | 仮説確認要求 | 生成に必要な情報に対する仮説が正しいかどうか教えて欲しい |
| | 真偽確認要求 | 発話が真実かどうか教えて欲しい |
| 提示要求 | 言い換え提示要求 | ほかの語彙で言い換えて欲しい |
| | 具体例提示要求 | 具体的な例を教えて欲しい |
| 説明要求 | 語義説明要求 | 語彙の意味を教えて欲しい |
| | 発話内容説明要求 | 発話の内容を教えて欲しい |
| | 意図説明要求 | 発話の意図を教えて欲しい |

（出所：林（2009））

また、林の調査結果とフォローアップ・インタビューから調整計画別の成功率では「確認要求」が最も高く、「反復要求」と「説明要求」の成功率が最も低いという結果が見られた。加えて、林によれば、日本語非母語話者が「聞き返し」をする際に、必ずしも自分の発話意図にあった「聞き返し」の表現形式は選択できておらず、母語話者に対するフォローアップ・インタビューでも非母語話者の「聞き返し」の発話意図が必ずしも表現形式からだけ理解されるのではないと述べている。このように、「聞き返し」の発話意図は表現形式だけではなく、文脈などを振り返ったり、問題を推測したりすることによって理解される場合があることを指摘している。

福富（堀内）（2012）と堀内（2011）は、尾崎（1993, 2001）による「聞き返し」の発話意図と表現形式の分類を基に、日本語母語話者と非母語話者における「聞き返し」の相違点について分析し、尾崎による「聞き返し」の表現形式に関してさらに詳しく分類した。福富（堀内）によれば、「聞き返し」の表現形式は以下の表（9）が示すように「①エコー型」、「②非エコー型」、「③不特定型」の大きく 3 つのカテゴリーに分けられ、それぞれのカテゴリーの中ではさらに下位のカテゴリーに分類できると説明している。

**表（9）　福富（堀内）（2012）による「聞き返し」の表現形式**

| 表現形式 | 下位分類 | 説　　明 |
|---|---|---|
| ①エコー型<br>1 単純エコー<br>2 複合エコー<br>3 不完全エコー | 1 単純エコー | 相手の発話をそのまま反復する |
| | 2a くり返し＋α | 「反復した部分」+「ですか」「って」 等 |
| | 2b くり返し＋疑問詞 | 「反復した部分」＋疑問詞 |
| | 2c 間投詞＋くり返し | 間投詞＋「反復した部分」 |
| | 3 不完全エコー | 相手の発話をくり返しているが、発音や発話の長さなどの問題により完全にくり返すことができていないもの |
| ②非エコー型 | 確認型 | 相手の発話をくり返さないが，相手に確認を求めるもの |
| ③不特定型 | ③-1 音声的不特定 | 「はっ（↑）」「えーと」等　問題箇所を特定しないもの |
| | ③-2 統語的不特定 | 「わかりません」等　問題箇所を特定せず統語的なもの |

（出所：福富（堀内）（2012））

また、福富（堀内）の調査結果から「①エコー型」は日本語母語話者と非母語話者とも会話の中で比較的に多用しているが、「単純エコー」は母語話者よりも非母語話者の方が多用していることが見られた。一方、母語話者は単に相手の発話を繰り返すだけではなく、「複合エコー」という繰り返した部分に「ですか」や「って」などを付け加えて聞き返すことが多く用いられる。「②非エコー型」に関しては、母語話者の方が使用回数も多く、その場合相手の聞き取れなかった発話を聞き返すというよりも、聞き取った発話内容が自分の理解で合っているかという確認で用いていることが多い。それに対して、非母語話者は発話内容理解の確認というより、聞き取れないために言い換えたり、自分の聞き取りが正しいかを相手に確認するものが目立つと述べている。最後に、「③不特定型」については母語話者の使用はかなり少ないが、非母語話者の使用は非常に多く見られた。また、「わかりません」などという「統語的不特定型」については、中上級レベルの非母語話者にはあまり見られず、初級レベルの非母語話者の使用がほとんどであると説明している。福富（堀内）によれば、「わかりません」などのような「統語的不特定型」は大まかすぎるため、効率的な「聞き返し」ではないのに対し、内容がかなりはっきりしている「①エコー型」は最も効率的な「聞き返し」の方法ではないかと主張している。他にも、梅木（2011）は会話における「エコー型聞き返し」の発話末イントネーションを考察した結果、「エコー型聞き返し」は従来の「聞き取れない・字義的意味がわからない表示」のほか、「驚きの表示」、「不審・不満」、「面白がりの表示」、「進行催促の表示」の機能も見られると述べている。

以上が「聞き返し」に関する主な先行研究であり、「聞き返し」は多種多様な表現形式を持ち、その中には繰り返し（エコー）も存在していることがわかった。つまり、繰り返しは「聞き返し」の一

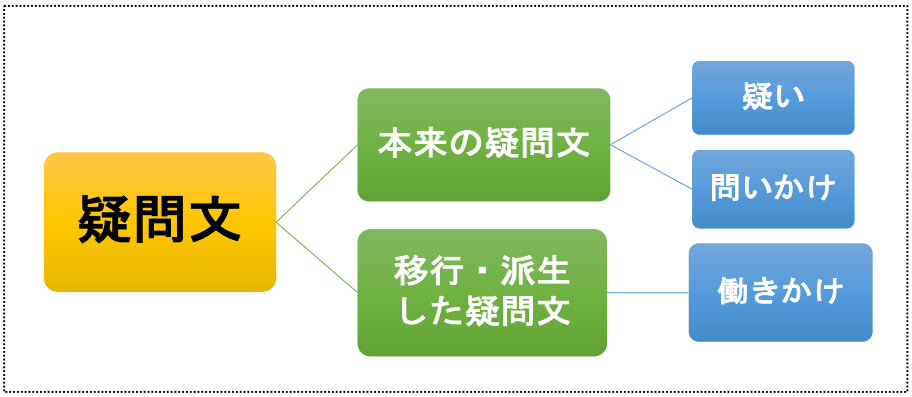
部であることが確認され、「相手の発話に対して不明または不確かな部分が存在し、それについて相手に尋ねる」という「聞き返し」の機能と性質も持っていることがわかった。また、「聞き返し」は前節で述べた「問い返し疑問文」の性質と極めて近いが、従来の研究からわかるように「聞き返し」はほとんどは発話者が自分のわからないことまたは不明な点を解決するために、相手から解説や説明を要求するものである。それに対して、「問い返し疑問文」は、不明点の解決あるいは解説の要求の他、発話者による感情や態度を表出する機能も見られた。さらに、「聞き返し」の形状は「もう一度言ってください」「すみません」などのような決まった表現、「えっ？」や「はっ？」などのような感動詞、および相手の発話を再現するという繰り返しの様々な表現形式が使用されているが、「問い返し疑問文」では、繰り返しが使用されるのが一般的である。しかし、実際の会話では相手から何らかの情報を要求する場合は必ずしも同じ発話を繰り返さなくてもよく、他の形式を使用しても情報を要求できるのに対して、わざわざ同じことを再現するということは、その発話に対して問題を感じている傾向が強いと言える。また、梅木（2011）による「エコー型聞き返し」の機能から考えると、エコー型（繰り返し）以外の「聞き返し」の表現形式は、「驚きの表示」や「不審・不満」などの機能を全く果たさないため、実際には発話の感情は繰り返しと結び付いているのではないかと考えられる。

## 2.4. 「疑問文」に関する先行研究

本研究における繰り返しは「疑問文」とも重要な関わりがあるため、本節では繰り返しに関連する重要な要素である「疑問文」についての先行研究を取り上げ詳細に説明していく。また、本研究で扱う日本語の「疑問文」に関しての主な先行研究は仁田（1991）と南（1985）である。

仁田（1991）は、「疑問文」を「本来の疑問文」と「移行・派生した疑問文」の 2 種類に分類している。「本来の疑問文」は、「疑い」[7] と「問いかけ」[8] という 2 つの要素があり、「判断の問いかけ」と呼ばれている。一方、「移行・派生した疑問文」は「命令」や「勧誘」などの「働きかけ」を指していると述べている。以下の図（2）では、仁田による「疑問文」の分類のまとめである。

[7] 仁田（1991）によれば、「疑い」とは「問いかけ性が欠落・希薄化した文」であると指摘されている。
[8] 仁田（1991）による「問いかけ」とは「文の帯びている伝達・通達的なあり方の一つであり、聞き手に情報提供を求めるといった伝達・通達的なあり方である」ということを述べている。




**図（2）　仁田（1991）による「疑問文」の分類**　　（出所：筆者作成）

また、南（1985）は「疑問文」と「質問文」を区別し、「質問文」の範囲を以下の 3 つの条件を満たすものに限定している。

1）相手がいることを前提とした言語表現であること。

2）その相手に対して、何らかの問題を提示し、それについての情報の供給を要求する言語表現である。

3）要求に応じた相手からの情報の供給に関する何らかの表現が考えられるものであること。

つまり、南による「質問文」というのは発話者が実際に相手からの情報や応答を求めているという純粋な疑問文である。

以上のように、「疑問文」は、発話者が相手からの情報を求めているため疑問文の形式で発話している場合だけではなく、状況および発話者の態度やイントネーションによって「反語疑問」などのように発話者が相手からの情報を求める意図を全く持っていない場合も多く見られる。そのため、本研究に最適だと考えられる仁田（1991）と南（1985）による「疑問文」の分類範囲に従い、純粋な疑問文の場合は南と同様に「質問文」と呼ぶ。

## 2.5. 先行研究のまとめと問題の所在

本節では、2.1.から 2.4.で述べた先行研究について簡単にまとめ、先行研究の問題点について取り上げる。以上で取り上げた先行研究からわかるように、繰り返しは様々な面から研究されており、様々な用語が用いられている。語や文の後ろに疑問助詞「カ」あるいは疑問符「？」が付き、上昇調イントネーションで発話する場合は「問い返し疑問文」、「エコー疑問文」、「エコー型聞き返し」、"Echo Questions" と呼ばれている。談話分析の面では繰り返しの機能はほとんど「会話進行の助け」や「感情表出」、あるいは「相手との一体感・親近感」というコミュニケーション機能として扱われている。また、繰り返しの形式や使用範囲に関して注目している研究も少なくない。繰り返しと関連する他表現および他形式も多く見られ、発話者が単に相手の発話を再現するだけという繰り返しには、様々な大きな広がりを見出すことができる。しかし、先行研究ではいくつかの問題点が見られる。以下では、本研究が取り上げた先行研究の大きな問題点についてまとめる

第一に、前述したように繰り返しは様々な用語で用いられ、語や文の後ろに疑問助詞「カ」あるいは疑問符「？」が付き、上昇調イントネーションで発話する場合は「問い返し疑問文」、「エコー疑問文」、「エコー型聞き返し」、"Echo Questions" と呼ばれており、感嘆符「！」が付く場合は「エコー感嘆文」と呼ばれている。しかし、以下の例（23）のように上昇調イントネーションの中には様々な種類があり、上昇調イントネーションでの発話は必ずしも相手に対して問いかけ性があるわけではない。つまり、純粋な「質問文」ではない。従って、どのような発話が「問い返し疑問文」や「エコー感嘆文」などに入るかの判断は非常に困難であるため、本研究では、便宜上すべて繰り返しと呼ぶことにする。

例（23）（羽生は澄江という女性の弁護士で、古美門は相手の弁護士である。）

**澄江**「先生、裁判も辞さないつもりです。お力をお貸しください。」

**羽生**「わかりました。」

**古美門**「わかりました？ *安請け合いをしてありもしない希望を持たせるのはやめたまえ。君に打てる手などない。*」　（リーガル・ハイ（第 2 期）第 6 話）

例（23）では、古美門は羽生に「わかりました？」と、質問や確認する意図で伝達するのではなく、むしろ羽生が言っている「わかりました」ということばがある種の否定的感情や態度を持ち、それに対して否定しようとしているのである。

第二に、繰り返された発話のみを考察すると、発話者がどのような意味で伝達しているのかを理解するのが非常に困難である。そのため、繰り返しを明らかにするためにはイントネーションのみならず、発話者の態度、語気の強さ・声色・語調、場面、話し手と聞き手の関係性、特に前後の文脈にも注目すべきであるが、従来の研究にはこれらの要素までも考慮したものはほとんどない。

第三に、堀口（1997）では繰り返しは「あいづち」の一項目として扱われている。しかし、堀口が挙げた例を見ると、繰り返しを「あいづち」の一項目として扱うには適切ではないものもあると考えられる。以下の例（24）は、堀口が「あいづち」であるとしているものであるが、例（24）を「あいづち」として扱ってしまうとすべての応答発話は「あいづち」として扱われてしまう。

例（24）**ブルース**：今週中に送っていただきたいんですが・・・

**広田先生**：今週中ですか。*困ったなあ*。（堀口 1997）

例（24）では、ブルースという留学生が広田先生にある物を今週中に送ってもらいたいと頼んでいるが、広田先生にとって今週中は都合が良くないため、「今週中だったら、困る」という意味合いを含意し、ブルースの依頼を否定しようとしている。堀口によれば、あいづちは「話し手が発話権を行使している間に、聞き手が話し手から送られた情報を共有したことを伝える表現」である。つまり、あいづちを打つ者は自分の考えとは全く関係なく、単に相手の発話に対して「聞いている」あるいは「わかった」という受け答えを示すのみであり、そのターンに発話権を持つ者ではないということである。しかし、例（24）では明らかに、広田先生が「今週中ですか」というブルースのことばを繰り返したのはブルースの発話に対して「聞いている」や「わかった」のような受け答えを示しているのではなく、むしろそれに対して断ろうとしているのである。このような、繰り返しの機能については再検討する必要があると言える。

第四に、先行研究における繰り返しの機能の中で、「共感・一体感表示」、「驚きの表示」、「喜びの表示」、「不満表明」などという様々な感情的機能が見られた。また、これらの感情の中では、確かに「驚き」という感情が最も際立って見える。しかし、下記の例（25）のように繰り返しにおける「驚き」とは単にそれを表出するだけに終わってはいないのではないだろうか。

例（25）**A**「ライアンさんは、何才？」

**B**「十九才です。」

**A**「十九才！ *若いねぇ*。」（堀口 1997）

上記の例（25）では、もし発話者が単に「驚き」であるとしたら、「うわ！」や「びっくりした！」などのようなそれ専用の別の表現を用いてもよいわけである。それに対して、わざわざ「十九才！」という相手の発話を繰り返すというのは、単に「驚き」という感情のみを示しているのではなく、むしろ発話者が相手の発話のある部分に対して問題を感じたり、気になったりしていることを表しているのではないかと考えられる。加えて、例（25）では繰り返し発話に後続する文脈「若いねぇ」を考慮すると、「十九才」に対して更なる評価や態度を表していると言える。つまり、発話者がなぜそのことばや句を繰り返したのかに対する説明ではないだろうか。よって、繰り返しの機能の一つとして単に「驚きの表示」のみを表示するものだとひとくくりにするのは適切ではないと考えられる。この点から、繰り返しを持つ感情的機能については詳細な検討の必要が見込まれる。

第五に、2.1.2.2.で取り上げた Wutthichamnong（2015）は、「タスクベースの会話（Task-Based Conversation）」と「日常会話（Daily Conversation）」という異なる会話場面における繰り返しについて考察した。結果として、それぞれの会話場面において、繰り返しの使用頻度が異なることがわかった。このことから、会話の種類の違いは、繰り返しが果たす機能、繰り返しの使用目的または使用頻度に大きな影響を及ぼすのではないかと考えられる。しかし、本研究で取り上げた先行研究の中で、異なる会話の種類における繰り返しについての考察は、Wutthichamnong（2015）以外の先行研究には見当たらなかった。

# 第 3 章　研究方法

第 3 章では、本研究で扱う日本語の繰り返しの研究方法について述べる。具体的には、3.1.で本研究における繰り返しとは何を指すのかを定義し、3.2.で問題にする対象範囲を指定する。そして、3.3.では本研究で扱う例文データの収集方法について述べる。加えて、本研究において用いられる記号などに関して 3.4.で詳しく説明する。

## 3.1. 本研究における繰り返しの定義

第 2 章で述べたように、中田（1992）によれば、繰り返しは、現象としては実に大きな広がりを持っており、広い意味では、大部分の発話は繰り返しの所産である。例えば、挨拶ことばや諺、成句の類なども繰り返しとして挙げられる。また、「明日学校二行キマスカ」に対して「行キマス」と答える、あるいは英語で主語の人称代名詞が繰り返されることなども繰り返しとして扱われる。さらに、言いよどみ（フィラー）や言い直し、あるいは「イワユル・・・」のような言いまわしなども繰り返しとして扱われる研究もある。これまで述べたとおり、広義の繰り返しは非常に広範囲にわたるため、繰り返しの定義と対象範囲を指定する必要がある。

本研究では、南（1985）による「問い返しの形式」の中の「直接問い返し文」と「間接問い返し文」（第 2 章 pp.22-23 参照）に従い、本研究の繰り返しを「相手の発話の直後に相手の発話形式を直接的にまたは間接的に繰り返すこと」と定義する。南（1985）による「問い返し疑問文」は「問題の表現の直前に、相手のなんらかの発話があることを前提とし、かつその相手のことばそのままか、それに近い形をくりかえして、上昇調で相手にたしかめるものである」としている。しかし、第 2 章で述べたように繰り返しは上昇調イントネーションのみならず、下降調イントネーションで出現する場合も見られる。そのため、本研究では上昇調だけではなく、下降調イントネーションの繰り返しも両方考察対象とする。また、本研究における「間接的繰り返し」は、単に部分的繰り返しまたは先行発話に近い形で繰り返すことに限らず、繰り返しの前後に付加される要素を含んだものについても「間接的繰り返し」とする。便宜上、こういった繰り返しの前後に付加される要素は「α」という記号で表し、繰り返しに後続する場合は「繰り返し＋α」、繰り返しの前に付加される場合は「α＋繰り返し」、繰り返しの前後とも付加される場合は「α＋繰り返し＋α」というそれぞれの記号で示す。

## 3.2. 本研究における繰り返しの対象範囲

本研究の繰り返しの研究対象については、下記のとおり対象範囲を指定する。

第一に、複数話者による会話に現れるものに限り、繰り返しのもとになった発話が同じ会話内で特定できる場合だけを対象とする。したがって、以下の例（26）の早口ことば、例（27）の詩、例（28）のようなことば遊びの仕方で情報を加え続けること、例（29）の人称代名詞の反復を表すような繰り返しはすべて対象外とする。

例（26）青巻紙赤巻紙、赤巻紙青巻紙。（牧野 1980：17）

例（27）・・・（前略）・・・
冬よ
ぼくに来い、ぼくに来い
ぼくは冬の力、冬はぼくの餌食だ
・・・（後略）・・・（牧野 1980：13）

例（28）And he knows Spanish,
and he knows French,
and he knows English,
and he knows German,
and HE is a GENtleman.（原文ママ）（Tannen 2007：58）

例（29）I wasn't born in the hospital.
Mama didn't have insurance.
I was born in the bed, at house.
I really do understand.
（後略）（Tannen 2007：174）

また、第 2 章で述べたように、Hsieh（2009）によれば、繰り返しには以下の例（30）のように「あいさつ」の機能も持つと主張している。また、「あいさつ」としての繰り返しは、「あいさつ（hello）＋呼称詞（addressing form）＋あいさつ（greeting）」という決まった繰り返しのパターンがあり、良好

な人間関係を築く機能を持つと述べている。

例（30）**A**：ha1 luo, xiao3tong1, ni3 hao3
hello PN how are you
（＝ Hello, Xiaotong, how are you？）
**B**：hai4, shen3-jie3, ni3 hao3
hi PN-sister how are you
（＝ Hi, Shen-Jie, how are you？）（Hsieh 2009）

しかし、「あいさつ」は単なる基本的生活習慣または日常のマナーであるため、会話では特別大きな展開が起こる可能性は低い。なお、「あいさつ」は一般的に決まり文句があるので、発話者は相手が言ったあいさつことばを繰り返すわけではないとも考えられる。よって、本研究では「あいさつ」は対象としない。

第二に、本研究では「他者の発話の繰り返し」のみを対象とする。第 2 章で取り上げた先行研究からわかるように、繰り返しには「自分の発話の繰り返し」と「他者の発話の繰り返し」という 2 種類があり、例（31）は前者を、例（32）は後者を示している。

例（31）（テストの結果を語る中学生の娘とその母。）

**子**「国語のテスト失敗したと思うから、あしたがんばろうと思って・・・」

**母**「なんだ、やっちゃ失敗、やっちゃ失敗じゃない。（うん。）ひとつ、どんと来いってのはないの？」（中田 1992）

例（32）（クラブ活動についての中学生の会話。）

**K**「（私は）第二希望が茶花道。

**M**「サカドーって？」

**K**「お茶。」（中田 1992）

しかし、本研究では複数話者の会話の状況においては、それぞれの話者が相手の発話に対してどのように繰り返しを用いるのかについて明らかにすることを目的とする。そのため、本研究では例（32）のように「他者の話者の繰り返し」のみを対象とし、発話当事者間の会話の流れにどのような影響を及ぼしているかという点に絞って考察を行うことにする。

第三に、本研究では以下の例（33）のような「言い換え」または「要約」を対象外とする。従来の研究では、「言い換え」や「要約」を繰り返しとして扱う研究も見られた（黒川 2007、中田 1992）。例（33）では、2N7 は相手が言った「チャカチャカ」の代わりに「ダブルクリック」ということばで言い換え、相手に質問あるいは確認している。つまり、相手のことばを一切繰り返さずに、他の表現を用いるのである。そのため、「言い換え」や「要約」は繰り返しに該当すると判断したのは、適切ではないと考えられる。

例（33）（マウスを使ったゲームの操作方法について相談している。）

**1N8**：あ、チャカチャカってやらなきゃ行けないのかな？

**2N7**：ダブルクリック？　（岡部 2003）

第四に、上記の例（32）のように相手が発する先行発話のみを対象とする。第 2 章で述べたように、近藤（2001）は、繰り返しには発話者が看板や本に書いてあるものなどを見て、書いてあるものをそのまま一人で繰り返すこともあると述べている（第 2 章 pp.24-25 参照）。つまり、それは相手の発話による先行発話ではない。本研究では話し手と聞き手の間における繰り返しについて注目するため、近藤が挙げた以下の例（16）のような場合は対象外にし、相手が発する先行発話のみを対象とする。

例（16）（車で「三郷」を目指して走っているときに、信号待ちで見た標識に「松伏」とあった。そのときに、）

「松伏？」　（近藤 2001）

一方、次の例（34）のように相手はもうその場にはいないにもかかわらず、発話者が相手がその場から離れる前に言ったことばを一人で繰り返す場合は、先行発話が相手またはある人物が発した発話であるため、こういった独り言としての繰り返しは本研究の対象範囲とする。

例（34）（真衣と翔が喧嘩しており、結局真衣がその場から走って逃げた。）

**真衣**「翔くん何にもわかってなかったんだね。見損なった。〈大きな声で〉あなたとは絶交よ！」

・・・（真衣は悲しそうに去って行った）・・・

**翔**「《絶交？・・・*青いな*。》」　（民王 第 4 話）

## 3.3. データ収集方法

会話における繰り返しでは、相手の先行発話があることが欠かせない必須要件である。また、繰り返しを明らかにするために、前後の文脈が非常に重要であるため、ある程度の前後文脈がないと正当な判断ができない。

本研究ではできるだけ様々な会話の場面および会話の種類を取り扱うために、登場人物の関係、発話者の態度や表情などが明示的である日本とタイのテレビドラマ、トーク番組、コミュニティラジオ局が放送している映像付きのラジオ番組から繰り返しの例文を収集した。日本のテレビドラマとアニメは、『世界一難しい恋』、『民王』、『ダメな私に恋をしてください』、『花より男子（第2期）』、『半沢直樹』、『リーガル・ハイ（第1期と第2期）』、『クレヨンしんちゃん』の合計7本から繰り返しの例文を収集した。また、タイのテレビドラマは、『Khun Chai Tarathorn』、『Khun Chai Pawornruj』、『Kam Lai Mas』、『Dok Som See Thong』、『Yah Leum Chan』の5本から例文を収集した。取り上げたドラマとアニメについて、両言語ともほとんど同様のジャンルであり、放送時間もほぼ一致している。加えて、ドラマの中の登場人物の関係には上司と部下または先輩と後輩という上下のある関係、友達同士など対等な関係、恋人同士、親と子供という家族同士などの多様な人間関係と場面が見られた。また、トーク番組およびラジオ番組の場合は、日本語では『しゃべくり007』、『うたれんのインディーズチャンネル』、『SHIBUYA MUSIC POWER』を採用し、タイ語では『3Zaaap』、『Woody World』、『Woody FM』を採用して両言語15時間ずつ、合計30時間文字化したものから繰り返しの例文を収集した。また、本研究で取り扱う番組のジャンル、発話当事者の人数や年齢層および性別については日本語もタイ語もほとんど違いがない。加えて、収集した例文の場面や発話者の態度や感情などについて、特に前後の文脈に注目し、繰り返しがどのような機能を持っているかを考察し分類していく。

## 3.4. 用例の表記方法

本節では、本研究で取り上げる会話用例の中で扱われている記号の定義について次のように説明する。例（35）が記号⑴～⑶を、例（36）が記号⑷～⑽を、例（37）が記号⑾～⒂を、例（38）が記号⒃を示している。

⑴「網掛けした文字」で示す波線の下線と網かけした文字は、発話者が繰り返した相手の先行発話を指す。

⑵「赤 太 字」で示す下線と赤太字は、発話者が相手の発話、つまり⑴の「網掛けした文字」の部分を繰り返した箇所を指す。

⑶「*斜体文字*」で示す一点鎖線の下線と斜体文字は、発話者が繰り返した発話、つまり⑵の「赤 太字」と関連がある要素であり、繰り返しの機能を判断するための重要な要素を指す。

例（36）（国の予算の内訳について話している。）

**狩屋**「予算の内訳っているのはもう…1 年がかりの消耗戦で…。」

**翔**「消耗？」

**狩屋**「*もうくったくたになるまでやりあって、考えて考えて、財務省と折衝して*。」

（民王 第 5 話）

⑷「青 太 字」で示す点線の下線と青太字は、会話の中に現れる「感動詞」を指す。

⑸「青太字」で示す囲み線と青太字は、繰り返しの前後に付加された要素または他形式であり、繰り返しと同時に用いられるものを指す。

⑹「！」は、発話者の声量が顕著に大きい箇所を指す。

⑺「？」は、疑問を表す箇所を指す。

⑻「(笑)」は、発話当時者の笑い声を指す。

⑼「(爆笑)」は、発話当時者の笑い声が非常に大きい箇所を指す。

⑽「〈　〉」は、発話者の態度や表情および動作に関する補足説明を指す。

例（36）（堀内が名倉の顔にブラシで擦っている。）

**名倉**「〈大きな声で〉　おい！臭い！！！摩擦で臭い！！！（笑）」

**同一**「(爆笑)」

**上田**「臭いってなんだよ！（笑）*臭さじゃないでしょ*？（笑）」

（しゃべくり 007　2015 年 1 月 19 日）

⑾「…」は、会話中における一瞬のポーズを指す。

⑿「・・・」は、⑾の「…」より少し長いポーズを指す。

⒀「・・・（考える）・・・」は、発話者が発言しようとしていることまたは質問に対する回答がすぐに思い浮かべられず、一旦話が止まった箇所を指す。

⒁「【　】」は、一人の発話者が話している最中に、別の人が話し始め、二人あるいは二人以上の発話の一部または全体が発話の重複（オーバーラップ）した箇所を指す。

⑮「ー」または「～」は、長音符を表す記号である。

例（37）（エミリーはラジオ番組のパーソナリティであり、ゲストの三浦に準備した質問カードを引かせて、その質問を読み上げている。）

エミリー「〈三浦が引いた質問カードを読み上げる〉最近のマイブーム。」

三浦「〈よそを見ながら考える〉最近のマイブーム？・・・（考える）・・・*これはー・・・僕は本当に…たぶん日本人の中で一番と言っていいぐらいチョコが大好きなんですよ*。」

エミリー「【おっ！】」

柳田「【おお～～】」　（SHIBUYA MUSIC POWER　2018 年 12 月 8 日）

⑯「《太 字》」は、「独り言」を指す。

例（38）（つくしは一人でニューヨークに来ており、人混みの真ん中で一人で喋っている。）

つくし「〈大きな声で〉《トム・クルーズ？・・・マドンナ？・・・ブラッド・ピット？・・・エミネム？・・・ビヨンセ？ パリス・ヒルトン？・・・なわけないか・・・つーか・・・みんなスターに見える。〈困っている顔をしている〉まいったなあ。もうどっち行ったらいいんだよ！》」　（花より男子（リターンズ）第 1 話）

# 第 4 章　日本語における繰り返しの機能に関する考察

第 2 章で述べたように、従来の研究では、繰り返しは相手の発話に不明確な部分があり、十分に理解できないこと、または相手の発話のある部分が聞き取れなかったため、相手の発話を繰り返し相手に確かめるという「確認要求」あるいは「説明要求」の機能を持つということが多く説明されている。また、会話分析の分野では、繰り返しは談話の展開や発話の進行を助ける機能、および発話者が相手の発話に対して「関心」または「興味」を表出する機能があると述べている。さらに、繰り返しは発話者が「驚き」や「不満」を表す心情的機能を持つことを主張している先行研究もある。加えて、2.5.節で述べた先行研究の問題点の中で、会話の場面や会話の種類の違いによって、繰り返しが果たす機能、繰り返しの使用目的または使用頻度に大きな影響を及ぼすのではないかと推測された。確かに本調査から得られた以下の例（39）と例（40）の会話例文における繰り返しは、両者とも実際の会話例ではあるが、会話の種類が異なると考えられる。

例（39）（泰山と綾は夫婦で、泰山が綾に貸した 1 億円の返還を求めている。）

**泰山**「綾・・・1 億円返してくれ。」

**綾**「あら。」

**泰山**「どうした？」

**綾**「もう使っちゃった。」

**泰山**「〈大きな声で〉使っちゃった！？ *使っちゃったってお前*・・・。

〈綾を殴ろうとしている〉*い..1 億だぞ*！？ *1 億だぞ*? *どういうことだ*? *それ*。」

（民王 第 8 話）

例 (40)（上田はゲストである及川の子供の頃の写真をみんなに見せながら、及川に質問している。）

**上田**「ちなみに、これな...何の役なんですか？ そう有田が一切信じないんですけども。」

**一同**「(笑)」

**及川**「えーとね、えーとね...魔法の国の・・・

**上田**「【うん】。」

**及川**「【大臣】。」

**一同**「【(爆笑)】」

**上田**「【大臣】？（爆笑）魔法の国の大臣？ *王子様じゃないですね*（笑）。*大臣なんだね*（笑）。」

一同「(笑)」　　（しゃべくり 007　2015 年 3 月 2 日）

例（39）は、テレビドラマにおいてあらかじめ設定されている会話であり、発話当事者はシナリオに沿って会話を進めるという会話の種類である。本研究では、このような会話を「フィクション会話」と呼ぶ。一方、例（40）の場合は、脚本またはシナリオに操作されない会話、いわゆる「自然会話」である。両者の会話における繰り返しからわかるように、例（39）では、発話者の表情、態度や声色および前後の文脈を考慮すると、明らかに相手の発話に対して非難していると考えられる。それに対して、例（40）の場合は発話者の「笑い」を考えると、発話者は相手の発話を繰り返すことによって、面白がりやユーモアを表出していることがわかる。加えて、例（40）の自然会話においては、あいづち、発話の重複（オーバーラップ）、言い直し、言い間違い、笑いが通常に見られるのに対し、例（39）のフィクション会話ではこれらの要素は見られない。

このことから、会話の種類によって、繰り返しの使用傾向も異なることが予想される。しかし、フィクション会話と自然会話との違いによる繰り返しの機能、形式および使用傾向について説明している研究は管見の限り見当たらなかったため、この点についても明らかにしておきたい。そこで、本研究におけるフィクション会話および自然会話については、次のとおりに定義しておきたい。本研究におけるフィクション会話とは、「脚本化された虚構性のある会話」を意味し、テレビドラマやアニメ、漫画や小説、映画および歌劇などで現れる会話のことを指す。それに対して、本研究における自然会話とはフィクション会話と異なり、「「何を話すか」や「どう話すか」が発話者に委ねられている、操作されていない会話」を指すこととする。そのため、あらかじめ出演者の間で口裏を合わせていると考えられるトーク番組などについても、話の流れによって発話当事者に発話内容の決定が任される場合があるため、本研究ではトーク番組やインタビュー番組、バラエティ番組およびラジオ番組は自然会話に準ずるものとする。

以上のように、繰り返しは様々な機能を持つことが示されているが、会話の種類によって繰り返しが果たす機能あるいは繰り返しの使用傾向が異なるため、繰り返しの機能の実態の詳細は明らかになっていないと考えられる。また、繰り返しをさらに明らかにするのはイントネーションのみならず、発話者の態度、声色、、場面、文脈、話し手と聞き手の関係性なども注目すべきであるが、従来の研究でこれらの要素を考慮に入れたものは管見の限り少ない。

本章では、第 2 章で紹介した先行研究による繰り返しの機能の分類を参考に、会話の場面や前後の文脈および発話者の態度に注目しながら、日本語の会話における繰り返しの機能を再検討する。具体的には、4.1.で日本語のフィクション会話においての繰り返しの機能について、4.2.で日本語の自然会

話においての繰り返しの機能およびそれぞれの機能の特徴について詳細に考察する。そして、4.3.では日本語のフィクション会話と自然会話における繰り返しの機能および使用傾向の共通点と相違点に関して説明していく。

## 4.1. 日本語のフィクション会話における繰り返しの機能と使用傾向

日本のテレビドラマおよびテレビアニメに見られた実際の会話における繰り返しの例文（総 679 例）を考察した結果、以下の表（10）に示す通り、フィクション会話における繰り返しの発話機能は、「時間稼ぎ」、「相手の発話の促進」、「説明要求／確認要求」と「感情の表出」という大きな 4 つの機能に分類できることが明らかになった。

**表（10）　日本語のフィクション会話における繰り返しの機能と使用傾向**

| 日本語のフィクション会話における繰り返しの発話機能 | 出現率 |
|---|---|
| 「感情の表出」 | 81%（549 例） |
| 「時間稼ぎ」 | 3%（18 例） |
| 「相手の発話の促進」 | 1%（4 例） |
| 「説明要求／確認要求」 | 16%（108 例） |
| 合計　＝　100%（679 例） | |

（総例文の小数点第 3 位を四捨五入）（出所：筆者作成）

これらの機能は従来の研究でも確かに言及はあるが、実際の使用傾向を見ると表（10）が示すように、「時間稼ぎ」、「相手の発話の促進」と「説明要求／確認要求」の機能の使用率はそれぞれ 3%（18 例）、1%（4 例）と 16%（108 例）であり、「時間稼ぎ」と「相手の発話の促進」は非常に少ない。それに対して、「説明要求／確認要求」は「時間稼ぎ」および「相手の発話の促進」と比べると、やや多く使用されることが観察される。しかし、これら 3 つの機能を合わせても総例文の半分にも満たず、使用率が極めて少ないことがわかった。一方、「感情の表出」としての繰り返しの出現率は 81%（549 例）も見られ、総例文の半分以上を占めていることが明らかになった。

このように、日本語のフィクション会話で使用される繰り返しは、「時間稼ぎ」、「相手の発話の促進」、「説明要求／確認要求」という意図より、むしろ相手の発話に対してある種の感情を表出する意

図という「感情の表出」として繰り返しを用いている傾向が強いと言える。つまり、繰り返しにおける「感情の表出」は発話者の感情と深い関わりを持ち、日本語のフィクション会話において最も重要な機能であると考えられる。

### 4.1.1.「時間稼ぎ」

繰り返しにおける「時間稼ぎ」とは、発話者が質問された際に用いられており、発話者が相手に何らかの情報を要求された時にすぐに返事することができない場合、あるいは自分の言いたいことを思い出すことができない場合、発話者は会話が進行しているという状態を保ちながら沈黙を避けるために、相手の発話の中のあることばや句など、特に質問の主な部分を繰り返し、自分に考える時間を与えながら返事する時間を引き延ばす役割を持つ。

また、「時間稼ぎ」としての繰り返しの特徴は、繰り返された発話の直後に必ずポーズまたは途切れが出現し、ポーズの後に発話者の回答が続くことが多い。加えて、発話者が考える時には相手に目線を向けず、よそを見ながら考えている様子が「時間稼ぎ」の最も重要な特徴である。以下の例（41）と例（42）は、繰り返しにおける「時間稼ぎ」を示している。

例（41）（鮫島社長は研修社員である柴山と仕事について話している。）

**鮫島**「働いてみて何か気になる点はあるか？」

**柴山**「〈よそを見ながら〉気になる点？・・・（考える）・・・そうですねえ。 *あっ、研修で回ったどこのホテルにも牛乳がありませんでした。*」 （世界一難しい恋　第1話）

例（42）（美冴が国産の松茸をもらったため、夫のひろしに電話で知らせている。）

**美冴**「もらっちゃったの、「ま」の付くもの。」

**ひろし**「〈天井を見ながら〉「ま」の付くもの？ *う～ん・・・（考える）・・・ま、まんじゅう？*」

**美冴**「違う。松茸よ、しかも国産！」 （クレヨンしんちゃん）

例（41）では、鮫島社長は柴山という研修社員にホテルで働いてみて、何か気になる点があるかについて尋ねている。急に質問された柴山は質問に驚き、すぐ応答することができなかったが、沈黙を避けるために、質問の要になる「気になる点？」を繰り返し、自分に考える時間を与えるのである。そして、柴山は鮫島の質問に対して返答する。また、例（42）も同様に、美冴は国産松茸をもらったた

め、嬉しそうに夫のひろしに電話で連絡している。しかし、松茸をもらったことを直接教えず、「「ま」の付くもの」というヒントを出し、相手に当てさせようとしている。そして、ひろしは「「ま」の付くもの」と繰り返しながら、答えを考えてから、「ま、まんじゅう」と答えを推測した。

### 4.1.2.「相手の発話の促進」

繰り返しにおける「相手の発話の促進」とは、相手が発話している中で、急に話が止まり進まない状態になった時、あるいは発話者が発話の続きが気になるため、相手の発話を続けさせたい時に、発話者が相手の話が止まる前の最後のことばや句などを繰り返すことで、相手の話が進行するように促すことである。特に接続詞が繰り返されることが非常に多い。

また、「相手の発話の促進」としての繰り返しの特徴は、相手が発話している最中に、突然のポーズまたは途切れが生じることである。加えて、4.1.3.の「説明要求／確認要求」とは異なり、発話者は自分が把握できないことばを繰り返し、相手から説明あるいは確認を求めるのではなく、必ず相手が止まった時の最後のことばや句を繰り返し、相手が話し続けるように促すのである。以下の例（43）と例（44）は、繰り返しにおける「相手の発話の促進」を示している。

例（43）（羽生はみんなに「どんぐりとっちゃ」というどんぐりの神についての説明書を読んでいる。）

**磯貝**「見ることができたらいいことでもあるのかな？」

**羽生**「書いてある。〈資料を読む〉「もし見ることができたら、その人は・・・〈止まる〉」」

**黛**「〈相手に向かって〉その人は？」

**羽生**「「*その年風邪を引きにくいと言われている。*」」　（リーガル・ハイ（第 2 期）第 8 話）

例（43）では、羽生は「どんぐりとっちゃ」というある森の神様についての資料を読んでいたが、「どんぐりとっちゃ」を見た者の利益という点を読んでいる途中、「その人は」まで読んで一旦話が止まった。黛が続きの情報に興味を持ち、羽生に早く続きの内容を読んでほしいため、「その人は？」を繰り返し羽生の話の進行を促している。そして、羽生がそれに続いて読み続けている。

例（44）（最上とミチコは恋人同士であり、交際のことについて話している。）

**最上**「デートしたら・・・大好きになっちゃいました。だから・・・」

**ミチコ**「〈相手に向かって〉だから？」

**最上**「*結婚を前提に僕とお付き合いしてください*！」（ダメな私に恋をしてください 第3話）

また、例（44）では、最上はミチコに告白しようとしているが、緊張しており伝えたい情報をうまく伝えられず、途中で話が止まってしまった。そのため、ミチコは最上の話の続きが気になり、話が進むように「だから？」と繰り返し、最上が話し続けられるように差し向けている。そして、話を促された最上は「結婚を前提に僕とお付き合いしてください！」と話し続ける。

### 4.1.3. 「説明要求／確認要求」

第2章で挙げた先行研究のすべてにおいて「説明要求」と「確認要求」は別の機能として分類されている。繰り返しにおける「説明要求」は、発話者が相手の発話のあることばや句などについての何らかを把握することができないため、相手のことばを繰り返し、相手からの説明を求めるのである。それに対して、「確認要求」は、相手が言っていることばや句などに対して発話者の聞き取りや理解が正しいかどうかそのことばを繰り返して相手に確かめることである。つまり、「説明要求」は「疑問語疑問文（WH疑問文）」であり、「確認要求」は「肯否疑問文（Yes-no疑問文）」である。以下の例（45）の「説明要求」と例（46）の「確認要求」のように両者は明らかに区別することができる。

例（45）（古美門と黛は弁護士であり、依頼人のボニータと裁判のことについて話している。）

**古美門**「ボニータ君、依拠性の証明で押すぞ。」

**ボニータ**「〈古美門と黛に向かって〉依拠性？」

**黛**「*著作権侵害かどうかの争点は類似性と依拠性です。依拠性とは元歌に依拠して作っているという根拠です*。」（リーガル・ハイ（第1期）第2話）

例（46）**エレベーター**「ご利用階数をおしらせくださいませ。」

**客**「3階、お願いします。」

**エレベーター**「3階、*かしこまりました*。」（『Situational Functional Japanese 第10課』）

しかし、実際の会話では例（47）のように発話者が「説明」を要求しているのか、それとも「確認」を要求しているのかが明確に区別できず、「説明」および「確認」どちらにも当てはまる場合も非常に多く見られる。

例（47）（古美門と黛は弁護士であり、坪倉を助けるために、お互いに相談し合っている。）

**古美門**「〈黛が集めた書類を見ながら〉これも、これも。これも、これも。よくも、まあこんなごみばかり集めてきたものだ。さっさとそのポリ袋に戻せ！」

**黛**「じゃ、何をすればいいのかご指示ください！」

**古美門**「1.坪倉の美談を集めろ。」

**黛**「〈相手に向かって〉美談？」

**古美門**「*親孝行でも食べ物を残さないでも何でもいい*。」　（リーガル・ハイ（第1期）第1話）

例（47）のように、黛は古美門の発話を繰り返すことによって「「美談」とはどんなこと？」と相手に説明を求めること、または「なぜ「美談」のことについて言っているのか」と相手に確かめることという2通りの解釈が可能である。また、発話者が相手から「説明」を要求する際には、同時に発話者自身の聞き取りの「確認要求」の過程が自動的に行われることであるため、「説明要求」と「確認要求」はそもそも区別不可能な要素であると言える。つまり、「説明要求」には「確認要求」の意味が既に含意されているのである。そのため、本研究では「説明要求」と「確認要求」を区別せず、両者を同じ分類に配置することにした。

本研究における「説明要求／確認要求」としての繰り返しは、発話者が相手の発話のあることばや句などについての何らかを十分に把握することができない、あるいは発話者の聞き取りや理解が正しいかどうかについて、それぞれのことばや句に対する説明および確認を求めるものである。また、「説明要求／確認要求」としての繰り返しの特徴は、一見形式的には上述の「相手の発話の促進」に類似しているように見えるが、実際は多少異なる点がある。「説明要求／確認要求」は、相手が言ったことが把握できないため、それについての説明を求めるのである。それに対して、「相手の発話の促進」は相手がまだ言っていないことで、これから言おうとしていることを早く言わせるように促すのである。加えて、「説明要求／確認要求」は、「時間稼ぎ」と異なり、発話者はよそを見ずに必ず相手に向かって発話することがわかった。そして、相手に説明や確認を要求した直後に、必ず相手からの解説や回答が後続する傾向がある。

さらに、繰り返しにおける「説明要求／確認要求」は、「ことばの意味」に対する「説明要求／確認要求」と、「ことばの内容」に対する「説明要求／確認要求」の2種類に分類できる。「ことばの意味」に対する「説明要求／確認要求」は、発話者は相手が言っているあることば自体の意味がどういう意味か把握できないため、そのことばを繰り返すことによって、相手からの説明または確認を要求

するのである。一方、「ことばの内容」に対する「説明要求／確認要求」は、発話者は相手が言っていることば自体の意味はわかるが、相手のそのことばがその場では誰を、あるいは何を指しているのか、どのような事情を指しているのか、またはどのような理由を指しているのかを具体的に特定することができない。そのため、相手のそのことばを繰り返し、説明ないし確認を要求するのである。以下の例（48）は前者を、例（49）は後者を示している。

例（48）（ミチコは黒沢が寝ぼけていたことについて話している。）

**ミチコ**「春子って誰ですか？ 寝ぼけて春子って言ってましたよ。」

**黒沢**「聞き間違いだろ。タマゴとかファルコンとか。」

**ミチコ**「〈黒沢に向かって〉ファルコン？」

**黒沢**「*隼。初歩的な英語だよ。*」　（ダメな私に恋をしてください 第 2 話）

例（48）では、ミチコは「ファルコン」という単語の意味が理解できないため、「ファルコン？」と繰り返し黒沢からの解説を求めている。その結果、黒沢はミチコに「隼」という「ファルコン」に対する説明を与えるのである。

例（49）（浅野支店長は最優良店舗として賞をもらったことについて話している。）

**渡真利**「これで浅野さん次の異動で本部に戻って 1 年後には何らかの重役ポストが確定だね。
もちろんその裏にはあの人の後ろ盾があってのことだろうけど。」

**近藤**「〈相手に向かって〉あの人？」

**渡真利**「*決まってんだろ、大和田常務だよ。*」　（半沢直樹 第 1 話）

それに対して、例（49）では渡真利は浅野支店長が賞をもらえるのは大和田常務のおかげであることを近藤はわかっているはずだと思っているため、わざと「大和田常務」と直接言わず、「あの人」ということばを代わりに用いる。しかし、近藤は渡真利の「あの人」が誰を指しているのか特定することができないため、渡真利のことばを繰り返し、具体的な説明を求めているのである。

### 4.1.4. 「感情の表出」

繰り返しにおける「感情の表出」は、上記の「時間稼ぎ」、「相手の発話の促進」、「説明要求／確認要求」という機能のように、相手から何らかの情報を要求したり、自分に考える時間を与えたり、または相手の話を促したりするのではなく、発話者は相手の発話に対してある種の感情を表出するのである。また、「感情の表出」としての繰り返しの特徴は「時間稼ぎ」、「相手の発話の促進」、「説明要求／確認要求」とは明らかに異なり、発話者の感情がより顕著に現れ、発話者の感情や態度、または語調、声色やイントネーションなどが発話に非常に強く関連していることが観察される。以下の例（50）と例（51）は、「感情の表出」を示すものである。

例(50)（半沢がマキノ精機という会社に3千万の融資をしようとするが、江島が反対している。）

**江島**「わかっとらんな。先のことなんてどうだっていいんだよ！期末まであと1週間しかないんだぞ、1週間。本部から言われた目標融資額100億円を達成するにはあと5億足りないんだ。たかが3千万程度のちっぽけな融資じゃ焼け石に水なんだよ！」

**半沢**「〈大きな声で〉ちっぽけ！？*そう考えるのは悪しき銀行の勝手な論理というものでしょう*。」

（半沢直樹　第1話）

例（50）では、半沢の表情や語調および後ろの文脈などから考えると、半沢が大きな声で「ちっぽけ！？」と繰り返すのは単に相手に「ちっぽけですか？」という聞き取りや真偽を確かめるというよりも、明らかに相手が用いる「ちっぽけ」ということば遣いに対して不快感を感じ、「ちっぽけではない」という主張をその繰り返し発話に込めることで、「そう考えるのは悪しき銀行の勝手な論理というものでしょう」と非難しているのである。

例（51）（エリカという女性は蔵本の娘であるが、顔は全く蔵本と似ていなく、名字も異なる。）

**泰山**「その・・・エリカとはどういう関係なんだ？ 愛人か？」

**蔵本**「君の頭には色事しかないのか？ エリカは僕の娘だよ。」

**泰山**「〈びっくりした顔をしながら、大きな声で〉娘！？」

**蔵本**「*エクスワイフとのな。だからラストネームが違うんだ*。」　（民王 第4話）

同様に、例（51）も泰山はエリカという女性が蔵本と一緒にいるのをよく見かけるが、二人の顔かたちや外見が全く似ていないため、蔵本の愛人であると想定していた。しかし、実際はエリカと蔵本

は親子であり、泰山の想定と異なっていたため、非常に驚き、大きな声で「娘！？」と繰り返し、信じがたいという反応を示しながら、「嘘でしょう？」という意味合いを含意している。また、例（50）の「ちっぽけ」と例（51）の「娘」という繰り返し発話は両者とも上昇調イントネーションで発話されているが、発話者の表情や態度、声色および文脈を考えると、明らかに例（48）と例（49）とは異なり、発話者が相手から情報を求めるというより、むしろ相手の発話に対する態度や感情を表すのである。つまり、疑問符「？」が付き、上昇調イントネーションで発話されても、必ずしも通常の質問文とは限らない。さらに、第 2 章で述べたように安達（1989）は「問い返しの種類」を「直前発話のコトガラ的意味内容を問題にする」と「直前発話の意味に踏み込むことなく、そこで用いられた表現を問題にする」という 2 種類に分類している（第 2 章 pp.21-22 参照）。つまり、安達が述べている「問い返しの種類」については本研究の繰り返しにおける「感情の表出」に相当し、「感情の表出」は「相手が使用する表現」（例（50））または「相手の発話の内容」（例（51））に対する感情を表明することができる。

以上のように、日本語のフィクション会話における繰り返しの機能は「時間稼ぎ」、「相手の発話の促進」、「説明要求／確認要求」、「感情の表出」の 4 つの機能が見られた。しかし、本調査からは、「感情の表出」としての繰り返しは他の 3 つの機能より圧倒的に多く用いられ、最も際立つということが示された。要するに、日本語のフィクション会話においての繰り返しは発話者は単に相手から情報を求めるまたは相手に説明を与えるというより、むしろ相手が言ったことに対してある種の感情を表出する傾向が強いことが明らかになった。続いて、日本語の自然会話における繰り返しの機能について分析し、フィクション会話で使用される繰り返しとの共通点と相違点に関して述べる。

## 4. 2. 日本語の自然会話における繰り返しの機能と使用傾向

日本語のインタビュー番組、トーク番組、バラエティ番組、ラジオ番組合計 15 時間から収集した繰り返しの例文（総 379 例）を考察した結果、以下の表（11）が示すように自然会話における繰り返しの発話機能は「時間稼ぎ」、「相手の発話の促進」、「説明要求／確認要求」、「感情の表出」、「あいづち」、「応答」、「からかい」という 7 種類に分類できることが明らかになった。

表（11）　日本語の自然会話における繰り返しの機能と使用傾向

| 日本語の自然会話における繰り返しの発話機能 | 出現率 |
|---|---|
| 「感情の表出」 | 47%（178 例） |
| 「時間稼ぎ」 | 7%（25 例） |
| 「相手の発話の促進」 | 2%（6 例） |
| 「説明要求／確認要求」 | 6%（21 例） |
| 「あいづち」 | 20%（75 例） |
| 「応答」 | 19.3%（73 例） |
| 「からかい」 | 0.3%（1 例） |
| 合計　＝　100%（379 例） | |

（総例文の小数点第 3 位を四捨五入）（出所：筆者作成）

しかし、表（11）からわかるように「感情の表出」としての繰り返しの出現率は 47%（178 例）で、総例文のほぼ半分を占めており、繰り返しの機能の中で最も多く用いられることがわかった。また、「感情の表出」の次に際立って見えるのは「あいづち」と「応答」であり、それぞれの使用率は 20%（75 例）と 19.3%（73 例）であり、両者の使用率はほとんど変わらないことを示している。一方、「時間稼ぎ」、「相手の発話の促進」と「説明要求／確認要求」はそれぞれ 7%（25 例）、2%（6 例）と 6%（21 例）しか見られず、「感情の表出」、「あいづち」および「応答」と比較すると、圧倒的に少ないことがわかった。加えて、繰り返しには「からかい」という機能も見られたが、本調査では 1 例しか見当たらず、繰り返しの機能の中で最も少なかった。

このように、日本語の自然会話における繰り返しは「時間稼ぎ」、「相手の発話の促進」、「説明要求／確認要求」、「からかい」ではなく、発話者は相手の発話に対してある種の感情を表出する意図という「感情の表出」として繰り返しを使用する傾向が強いと言える。他にも、発話者は相手の話に巧みに調子を合わせたり、相手の質問に対して回答したりする際にも繰り返しを用いる傾向がある。

### 4.2.1.「時間稼ぎ」

日本語の自然会話における「時間稼ぎ」は、前章で述べた例（37）と以下の例（52）が示すものである。例（37）では、エミリーは三浦に最近のマイブームについて尋ねているが、三浦はすぐに回答できず、エミリーが言った「最近のマイブーム」という質問の主な部分を繰り返しながら、考える時

間を作るのである。その直後に、三浦が相手に自分の考えていた答えを与える。また、三浦がエミリーの発話を繰り返す際に、相手の顔を見ずによそを見ながら考えるというのは繰り返しにおける「時間稼ぎ」の一般的特徴であると言える。

例（37）（エミリーはラジオ番組のパーソナリティであり、ゲストの三浦に準備した質問カードを引かせて、その質問を読み上げている。）

**エミリー**「〈三浦が引いた質問カードを読み上げる〉最近のマイブーム。」

**三浦**「〈よそを見ながら考える〉最近のマイブーム？・・・（考える）・・・*これはー・・・僕は本当に…たぶん日本人の中で一番と言っていいぐらいチョコが大好きなんですよ*。」

**エミリー**「【おっ！】」

**柳田**「【おお～～】」　（SHIBUYA MUSIC POWER　2018 年 12 月 8 日）

例（52）（ハロウィンについて話している。）

**みゆ**「はい。まあまあまあまあ、季節は 10 月ということで、

**太郎**「【ねーっ】。」

**みゆ**「【あのー】ハロウィンが待ってますけどね。」

**太郎**「【うわ！本当だわ！】」

**星住**「【あーそうなんだ！】」

**みゆ**「どうなんだろうな？ハロウィンの…週は、私たちなのかな？（笑）」

**太郎**「〈天井を見ながら〉ハロウィンの週は・・・（考える）・・・」

**星住**「おー。」

**みゆ**「わかんないけどね。」

**太郎**「*でもそう…かもしんない*。」　（SHIBUYA MUSIC POWER　2019 年 9 月 28 日）

加えて、例（52）では、みゆが太郎と星住にハロウィンの週に自分たちがラジオ局の番組に出演するかについて質問している。しかし、太郎はすぐに答えが出せないため、天井を見ながら「ハロウィンの週は」というみゆの発話を繰り返すことで、沈黙を避け、自分に考える時間を与えるのである。そして、答えを考えついたとたん、相手に知らせるのである。

### 4.2.2.「相手の発話の促進」

日本語の自然会話における、「相手の発話の促進」としての繰り返しは下記の例（53）と例（54）に示すとおりである。例（53）では、柳田は温泉について話しているが、途中で「もっぱら」という部分まで話が止まってしまった。そのため、みゆは柳田が止まった時の最後のことばである「もっぱら」を疑問の形で繰り返し相手の話の進行を促している。そして、柳田は「もっぱら温泉に行く日々ですね」と話し続けている。

例（53）（温泉について話している。）

**柳田**「えーと、温泉に入る時に、

**みゆ**「うん。」

**柳田**「見たのはやっぱり神経...痛緩和とか、やっぱ疲労回復でした

**みゆ**「【うん】。」

**エミリー**「【うん】。」

**柳田**「よね。まあ、それはやっぱりそんな（頷く）」

**みゆ**「あ、【冷え症とかね】。」

**エミリー**「【ふ～ん。】ふ～ん。」

**柳田**「こうー、温泉全般やっぱそうなんだと思うんですけど。

**エミリー**「【へぇ～】」

**柳田**「【そう。】僕はもう最近もっぱら・・・〈止まった〉」

**みゆ**「〈柳田に向かって〉もっぱら？」

**柳田**「*もっぱら温泉に行く日々ですね*。」　（SHIBUYA MUSIC POWER　2018 年 12 月 8 日）

また、次の例（54）では高橋が自分の趣味について語っている最中に、急に会話が途切れしまったため、エミリーは高橋が最後に止まったことばである「けど？」を繰り返し、高橋に話し続けるように促しているのである。そして、高橋は話の続きについて再び語り始めている。

例（54）（高橋は自分の趣味について語っている。）

**高橋**「ウェイトトレーニングやってたんですけど、

**エミリー**「【はいはいはい】。」

**太郎**「【はいはいはい】。」

**高橋**「ギターももちろん並行してやってて、【趣味に。趣味でやって】たんですけどね。」

**太郎**「【あ、そうなんですか】。」

**エミリー**「ああ～【趣味】で〈頷く〉。うん。」

**みゆ**「【うん】。」

**高橋**「趣味でやってたんですけど・・・〈止まった〉」

**エミリー**「〈高橋に向かって〉　けど？」

**高橋**「*まあ、ちょっと引退..いろいろ諸事情あって*・・・」

**エミリー**「ああ～」　（SHIBUYA MUSIC POWER　2019 年 2 月 16 日）

### 4.2.3. 「説明要求／確認要求」

日本語の自然会話における「説明要求／確認要求」は、次の例（55）と例（56）に示している。例（55）では上田の解説から考えてみると、有田は上田が言った「ドライブラッシング」という「ことばの意味」が理解できないことが推測される。そのため、有田は「ドライブラッシング？」と繰り返し、上田からの説明を求めているのである。その直後、上田は「ドライブラッシング」についての資料を読み上げ、有田の質問に対して解説を行なっている。

例（55）（美脚トレーニングについて話している。）

**上田**「じゃ、次ね。美脚の②。「ドライブラッシング」。」

**有田**「〈理解できないような表情をしながら、上田に向かって〉「ドライブラッシング？」」

**上田**「〈頷く〉ほお。〈資料を読み上げる〉「*「ドライブラッシング」とは、乾いたボディーブラシでブラッシングする美脚法で*、

**堀内**「【うん】。」

**上田**「【*モデル*】*のミランダーカーさんがインタビューで『美の秘訣』と答えたことで海外のセレブの間では大流行*」。」

**一同**「ほぉ～」　（しゃべくり 007　2015 年 3 月 2 日）

また、例（56）では、由弥はゴリが言った「瞬発力」ということば自体の意味は理解できるが、「「瞬発力」は何に関して？」、「なぜ「瞬発力」と言っているのか」あるいは「「瞬発力」とは具体的に何を指しているのか」などという「ことばの内容」について十分把握できていないことを表している。そのため、由弥はゴリが言った「瞬発力」を「繰り返し＋α」の形という「瞬発力ですか」と繰り返し、

ゴリからの具体的な説明を求めているのである。その直後、ゴリは「言われたこととかさ、出たものに対して返すことがうまいから」と由弥の質問に対して解説や説明を加えている。

例（56）（ゴリはラジオ番組の司会者であり、ゲストの由弥にインタビューしている。）

**ゴリ**「やあ、でも本当に、あのー、由弥は、まあ瞬発力があるからね。」

**由弥**「〈ゴリに向かって〉　瞬発力ですか？」

**ゴリ**「*言われたこととかさ、*

**由弥**「【はいはいはいはい】。」

**ゴリ**「【*出たものに対して*】、*返すことがうまいから*。

**由弥**「【おお。おお。】」

**ゴリ**「【*やっぱ即興*】*ソングでも、まあーうまいこと、まとめにきますよ*。」

（うたれんのインディーズチャンネル　2019 年 8 月）

加えて、実際の会話では以上の例（56）の「瞬発力ですか？」という繰り返しの部分の代わりに「何ですか」や「うん？」などのような質問表現で代用することができる。しかし、これらの質問表現を用いると発話者は相手の発話のどの部分が把握できないのかについて明示的ではないため、相手側が発話者の質問に対してすぐに回答できず、「何が理解できないのか」ともう一度発話者に聞くという障害が生じる可能性が高いと推測できる。それに対して、単に「瞬発力」という相手の発話を質問の形式（瞬発力？）で繰り返すだけで、発話時の表情や声色などによって「あなたが言った「瞬発力」とは具体的にどういう意味なのか」という意味合いで相手により明示的に伝達することができる。

一方、例（55）のような「ことばの意味」に対する「説明要求／確認要求」は「ドライブラッシング」という繰り返しの部分は、「すみません。もう一度お願いします。」や「え？」などのような「聞き返し」の表現に置き換え可能のように見えるが、実際はこれらの表現と繰り返しのニュアンスが異なる点が見られる。発話者が「すみません。もう一度お願いします。」や「え？」のような「聞き返し」の表現を用いると、相手が言ったことばが聞き取れないというニュアンスで捉えられる可能性が高い。それに対して、発話者が繰り返しを使用すると、ことばの意味の問題を問わず、相手が言ったことばが間違いなく完全に聞き取れていると推測される。なぜなら、発話者が相手の発話が聞き取れなければ、当然その発話を繰り返すことができない。また、もし発話者は相手の発話の一部しか聞き取れなかった場合は、「「ドライ・・・」なに？」というような表現が用いられる可能性もある。このように、繰り返しと従来の研究が述べている「聞き返し」は「相手の話がわからないという問題に直面し、そ

れを解消するために相手に働きかける方策」という点は共通しているが、繰り返しの場合は相手の発話が聞き取れているのに対し、「聞き返し」の場合はどちらかと言えば相手の発話が聞き取れないという相違点がある。また、繰り返しは「聞き返し」より発話者が伝達したい情報を明示的に提示させることができる。

### 4.2.4. 「感情の表出」

日本語の自然会話における「感情の表出」は、本章の始まりのところで述べた例（40）と以下の例（57）が示すものである。例（40）と例（57）は一見、上の「説明要求／確認要求」である例（55）と例（56）と同様な機能であるように見えるが、実際は「説明要求／確認要求」とは異なり、発話者が相手の発話を繰り返すのは単に解説を求めるのではなく、むしろ相手の発話に対してある種の感情を表出しているのである。

例(40)（上田はゲストである及川の子供の頃の写真をみんなに見せながら、及川に質問している。）

**上田**「ちなみに、これな…何の役なんですか？ そう有田が一切信じないんですけども。」

**一同**「(笑)」

**及川**「えーとね、えーとね、魔法の国の…

**上田**「【うん】。」

**及川**「【大臣】。」

**一同**「【(爆笑)】」

**上田**「【大臣】（爆笑） ？ 魔法の国の大臣？ *王子様じゃないですね（笑）。大臣なんだね。*」

**一同**「(笑)」 （しゃべくり 007　2015 年 3 月 2 日）

例（40）では、上田がみんなに見せている及川の子供の頃の写真は王子様のような格好をしているように見えるが、及川はそれを「大臣」だと発言している。上田が及川の発話を繰り返した後の発話「王子様じゃないですね（笑）。大臣なんだね。」および他の会話当時者の笑い声を考慮すると、おそらく上田と他の会話当事者が期待していたのは「大臣」ではなく、「王子様」であると考えられる。よって、及川が言った「大臣」ということばは上田にとって予想外のことであるため、「大臣？」と繰り返し、そして再度「魔法の国の大臣？」と笑いを込めながら及川の発話を繰り返した後に、「王子様じゃないですね（笑）。大臣なんだね。」ということによって、及川が言った「大臣」に対して意外感や面白さを感じたことを表明していると言える。この場合は、上記の例（55）と例（56）とは明

らかに異なり、発話者が相手の発話を繰り返した後に、相手からの説明や確認が後続することなく、笑いなどの顕著的な態度や声色が出現するのが一般的である。

例（57）（星住実花という女性は魚を呼ぶときは、いつも「お」を付けて言う。）

**太郎**「ああーなんかさ、実花さんがこう、お魚さんっていうのがまた可愛い。」

**みゆ**「【そうね。】」

**星住**「【（笑）】」

**みゆ**「「お」、魚に「お」付けちゃうところ（笑）。」

**太郎**「ね！もう絶対みゆさん「サカナがさ」みたいな言うんちゃう？」

**みゆ**「そうなん。「うお、うお」（笑）」

**太郎**「うお！？（笑）」

**星住**「【（笑）確かに。】」

**みゆ**「【うお（笑）】」

**太郎**「*独特！めっちゃくちゃ独特*（笑）」　（SHIBUYA MUSIC POWER　2019 年 9 月 28 日）

また、例（57）では太郎がみゆの発話の「うお」を繰り返すのは単に「うお」に対する説明や確認を要求するのではなく、明らかにみゆの発話に対してある種の感情を表出している。また、例（57）は例（55）と例（56）のように発話者が繰り返した直後に、相手からの説明や回答が後続しないのに対し、発話者が「うお」と繰り返した後に、「独特！めっちゃくちゃ独特」と笑いを込めることで相手が言った「うお」に対して感じた「面白さ」や「おかしさ」を感じたことを表明していると言える。一方、「説明要求／確認要求」である例（55）と例（56）では、発話者は相手に「瞬発力ですか？」と「ドライブラッシング？」と尋ねる際には、例（57）の「感情の表出」のような笑いや特別な語調または表情などは見られなかった。

### 4.2.5. 「あいづち」

繰り返しにおける「あいづち」とは、前述の「時間稼ぎ」、「相手の発話の促進」、「説明要求／確認要求」、「感情の表出」と異なり、相手の発話に対して質問したり、情報あるいは回答を与えたり、感情を表明したりすることではなく、単に相手の発話に対して「聞いている」または「わかった」という短い反応および信号を送り、相手の話に巧みに調子を合わせることである。

また、「あいづち」としての繰り返しの特徴は、繰り返しによって「あいづち」を打つ際に、非言

語行動である「頷き」も同時に行うことがほとんどである。加えて、この場合の繰り返しは「うん」、「はい」、「なるほど」などのようなあいづち詞に置き換えも可能である。以下の例（58）と例（59）は繰り返しにおける「あいづち」を示している。

例（58）（滝藤は自分の今までの人生について語っている。）

**福田**「その時は…まだ結婚してないですよね？」

**滝藤**「結婚…えっとね・・・結婚前です。

**福田**「〈頷く〉結婚前。」

**滝藤**「*で、同棲して初めてこう…家賃が折半とかなって、で、お仕事もこう頂けるようになって…自立したんです。*」　（しゃべくり 007　2018 年 5 月 7 日）

例（58）では、滝藤が自分の昔話を語っている途中、福田がその時の滝藤はまだ結婚していなかったかと確認を求めている。そして、滝藤は「結婚前」と回答し、福田は頷きながら「結婚前」という滝藤の発話を繰り返してあいづちを打った後、滝藤はすぐ話を続けている。

例（59）（カリンはゲストの高橋と小林に先ほど二人が歌った曲について質問している。）

**カリン**「こちらの曲というのは、

**高橋**「【はい】。」

**カリン**「【なんか】例えば、CD の中に入っていたりとか、どこかでこうー、買えたりとか、

**小林**「【はい】。」

**カリン**「【ありますか】。」

**小林**「あのー、「アレクサンドライト」というミニアルバムの中に、

**カリン**「〈頷く〉【ミニアルバム】。」

**小林**「【*入っております*】。」　（SHIBUYA MUSIC POWER　2017 年 9 月 9 日）

また、例（59）も同様に小林が話している最中に、「あいづち」の代わりにカリンが頷きながら「ミニアルバム」という小林の発話の一部を繰り返している。第 2 章で述べたように堀口によると、あいづちを打つ者は自分の考えとは全く関係なく、単に相手の発話に対して「聞いている」あるいは「わかった」という受け答えを示すのみであり、そのターンに発話権を持つ者ではないと述べている（第 2 章 p.11 参照）。例（58）と例（59）のような繰り返しを見てみると、明らかに発話者は相手か

ら何らかの情報を要求するあるいは情報を与えるのではなく、発話者が単に「あ、そうなんだ」または「なるほど」のような意味合いで自分の理解を表しながら、相手の話を聞いているという信号を送っていると考えられる。要するに、繰り返しをする者がそのターンに発話権を持っているわけではないため、この場合の繰り返しは「あいづち」と同様の性質を持っているということがわかる。加えて、例（58）と例（59）においての「結婚前」と「ミニアルバム」というそれぞれの繰り返し発話の代わりに、下記の例（58'）と例（59'）のように、「そうなんだ」や「はい」などのあいづち詞に置き換えも可能である。

例（58'）（滝藤は自分の今までの人生について語っている。）

**福田**「その時は…まだ結婚してないですよね？」

**滝藤**「結婚…えっとね・・・結婚前です。

**福田**「〈頷く〉~~結婚前~~。　→　うん。」

**滝藤**「*で、同棲して初めてこう…家賃が折半とかなって、で、お仕事もこう頂けるようになって…自立したんです*。」

例（59'）（カリンはゲストの高橋と小林に先ほど二人が歌った曲について質問している。）

・・・・・(前略)・・・・・

**小林**「あの一、「アレクサンドライト」というミニアルバムの中に、

**カリン**「〈頷く〉【~~ミニアルバム~~】。　→　【はい】。」

**小林**「【*入っております*】。」

しかし、繰り返しはあいづち詞に入れ替えられるとは言え、両者によって生じるニュアンスは若干異なる。相手の発話を再度繰り返して発言するのは、明らかに「はい」や「うん」などのあいづち詞より発話者の音声や語調などが明確であり、相手の発話のどの部分に対して「あいづち」を打っているのかを明示的に指しているように見える。つまり、繰り返しは一般的なあいづち詞のように単に「聞いている」という信号を送るよりも、相手が語っていることに対して「聞いている。そして、それに対して関心を持っている」というニュアンスがあると考えられる。このように、繰り返しにおける「あいづち」の機能は実際の会話において会話参加者間との相互関係をより良好に築くという役割も果たしていると思われる。

### 4.2.6. 「応答」

繰り返しにおける「応答」とは、上述の「時間稼ぎ」、「相手の発話の促進」、「説明要求／確認要求」、「感情の表出」と異なり、相手に説明や確認を要求したり、自分に考える時間を与えたり、相手の発話に対して感情を表明したりすることではなく、相手の質問に対して「はい」や「ええ」などの応答詞の代わりに繰り返しをもって返答するものである。また、「応答」としての繰り返しの特徴は、一見「あいづち」に類似した性質を持っているように見えるが、「応答」では繰り返し発話の前の文脈は平叙文ではなく、相手からの質問文であり、「あいづち」の場合は繰り返し発話の先行発話は必ず平叙文でなければならないという傾向がある。加えて、「あいづち」と同様に、発話者が返答する際に、非言語行動の「頷き」も同時に行うことも多く観察される。そして、繰り返しの代わりに「はい」、「そう」、「ええ」などのような応答詞に置き換えられるものである。以下の例（60）と例（61）は、繰り返しにおける「応答」を示している。

例（60）（ある歌手グループのメンバーの自己紹介をしている。）

**小林**「はい。えー、なおとさんと同じパフォーマーとリーダーをやらせていただきます小林直己です。」

**上田**「おおー！」

**小林**「よろしくお願いします。」

**上田**「リーダー2人体制？」

**なおと**「〈頷く〉2人体制です。」

**上田**「あ、そうなんだ。おーおー。」　（しゃべくり 007　2015 年 1 月 19 日）

例（61）（酒フェスティバルについて話している。）

**ココ**「今年もですね。酒フェス 2017 ということで、

**バブル**「はい。」

**ココ**「10 月 1 日と 9 月 30 日のこの二日間、なんと日本酒飲み放題！」

**カリン**「【おお～！】」

**バブル**「【おお～！】いろんな種類の？」

**ココ**「〈頷く〉いろんな種類の。」

**バブル**「へぇ～」　（SHIBUYA MUSIC POWER　2017 年 9 月 9 日）

例（60）では、上田は小林となおとに彼らのグループではリーダー2 人体制であるかについて尋ねている。そして、なおとは頷きながら「2 人体制です」という「繰り返し＋α」の形で上田の発話を繰り返し、上田の質問に対する応答を与えるのである。また、例（61）も同様にココは頷きながら「いろんな種類の」というバブルの発話を繰り返すことによって、バブルの質問に対して返答している。この場合は、例（60）の「2 人体制です」と例（61）の「いろんな種類の」という繰り返し発話の代わりに、次の例（60'）と例（61'）のように、「はい」や「そう」などの応答詞に置き換えられる。

例（60'）（ある歌手グループのメンバーの自己紹介をしている。）

・・・・・(前略)・・・・・

**上田**「リーダー2 人体制？」

**なおと**「〈頷く〉~~2 人体制です~~。　→　はい。」

**上田**「あ、そうなんだ。おーおー。」

例（61'）（酒フェスティバルについて話している。）

・・・・・(前略)・・・・・

**ココ**「10 月 1 日と 9 月 30 日のこの二日間、なんと日本酒飲み放題！」

**カリン**「【おお～！】」

**バブル**「【おお～！】いろんな種類の？」

**ココ**「〈頷く〉~~いろんな種類の~~。　→　そう。」

**バブル**「へぇ～」

しかし、「あいづち」の場合と同様に、繰り返しと応答詞は互いに代用できるように見えるが、実際は両者のニュアンスは多少異なる。繰り返しは「はい」、「うん」や「そう」などの応答詞と比べると、発話者の応答がより明示的に相手に伝達できると言える。また、相手の質問を繰り返しての応答は応答詞より「その通りだ。あなたが言っていることやあなたの理解は正しいのだ」というニュアンスが強く、相手の理解が間違っていないという意味合いがより伝達されると考えられる。

### 4.2.7.「からかい」

繰り返しにおける「からかい」は、上記の 4.2.1.～4.2.6.とは完全に異なり、発話者は相手の発話に対して質問したり、情報を要求したり、回答を与えたり、感情を表明したり、聞いているなどの信号

を送ったりすることではない。むしろ、相手の発話をわざと真似して繰り返し、相手をからかったり冗談を言ったりすることである。また、「からかい」としての繰り返しの特徴は他機能と違い、発話者が相手の発話を繰り返すときには、他要素を一切追加せずに元の発話の内容をそのまま繰り返すのである。さらに、先行発話のみならず、相手が発話する際の発音や声色、および態度などをすべてわざと真似して繰り返すことがこの機能の特徴である。次の例（62）は繰り返しにおける「からかい」を示している。

例（62）（ゴリはラジオ番組のパーソナリティであり、ゲストの由弥に自己紹介をさせている。）

**ゴリ**「ゲスト、埼玉から 2 回目の「由弥」！」

**由弥**「〈ピースサインをしながら〉「由弥」でーす。よろしくお願いしまーす。」

**ゴリ**「（笑）〈由弥の真似をする〉〈ピースサインをしながら〉「由弥」でーす。」

**由弥**「〈ピースサインをしながら〉「あはっ～」【みたいなやつ。】」

**ゴリ**「【観光か！（笑）】」　（うたれんのインディーズチャンネル 2019 年 8 月）

例（62）では、ゴリはゲストの由弥がピースサインをしながら、可愛らしい自己紹介をしているのを見た直後、由弥の自己紹介を繰り返して「「由弥」でーす」と真似をした。この場合の繰り返しは、発話者が相手をからかったり、相手の発話について冗談を言ったりする目的として相手の発話を繰り返していると考えられる。また、例（62）のような繰り返しは、一見すると「感情の表出」の機能に見えるが、「からかい」の場合は相手の発話だけではなく、発話時の態度や声色までそのまま再現するという点で「感情の表出」とは異なる。加えて、4.2.4.項で説明したように繰り返しにおける「感情の表出」は、「相手が使用する表現」、または「相手の発話の内容」という 2 通りに対する感情や態度を表出できる。しかし、繰り返しにおける「からかい」の場合は「感情の表出」と異なり、発話者はもっぱら「「相手が使用する表現」を問題にする。また、本調査からは、繰り返しにおける「からかい」の使用数は総例文の 1 例（0.3%）しか見られず、極めて少ないことが観察された。おそらく、このような機能は特定の場面および特定の相手にしか用いることができないためだろうと思われる。

以上が日本語の自然会話における繰り返しの機能である。自然会話における繰り返しは「時間稼ぎ」、「相手の発話の促進」、「説明要求／確認要求」、「感情の表出」、「あいづち」、「応答」および「からかい」という 7 つの機能を持つことがわかった。しかし、本調査からは「感情の表出」は繰り返しの機能の中で最も多く用いられていることがわかった。また、「感情の表出」のほか、「あいづち」と「応

答」としての繰り返しの使用も少なくない。このように、日本語の自然会話における繰り返しは、発話者が単に相手から情報を求めるまたは相手に説明を与えるというより、相手が言ったことに対してある種の感情を表出したり、相手の話に調子を合わせて短い反応や応答を送ったりする傾向が強いと言える。

### 4.3. 日本語のフィクション会話と自然会話における繰り返しの共通点と相違点

以上の繰り返しの機能の考察から、フィクション会話と自然会話では繰り返しの機能および使用傾向が異なることが明らかになった。4.1.と 4.2.節では日本語のフィクション会話と自然会話における繰り返しの機能について分析し、それぞれの機能に関して詳細に説明した。本節では、フィクション会話と自然会話で使用される繰り返しの共通点と相違点について簡潔にまとめておく。

前述したように、日本語のフィクション会話における繰り返しの機能は「時間稼ぎ」、「相手の発話の促進」、「あいづち」、「感情の表出」という 5 種類の機能が見られる。自然会話における繰り返しもフィクション会話と同様に「時間稼ぎ」、「相手の発話の促進」、「あいづち」、「感情の表出」の機能が観察されたが、下記の表（12）に示すとおり、「あいづち」、「応答」、「からかい」としての繰り返しはフィクション会話では全く観察されないことがわかった。

**表（12）　日本語のフィクション会話と自然会話における繰り返しの機能と使用傾向**

| 日本語のフィクション会話 | | 日本語の自然会話 | |
|---|---|---|---|
| 繰り返しの機能 | 出現率 | 繰り返しの機能 | 出現率 |
| 「感情の表出」 | 81%（549 例） | 「感情の表出」 | 47%（178 例） |
| 「時間稼ぎ」 | 3%（18 例） | 「時間稼ぎ」 | 7%（25 例） |
| 「相手の発話の促進」 | 1%（4 例） | 「相手の発話の促進」 | 2%（6 例） |
| 「説明要求／確認要求」 | 16%（108 例） | 「説明要求／確認要求」 | 6%（21 例） |
| | | 「あいづち」 | 20%（75 例） |
| | | 「応答」 | 19.3%（73 例） |
| | | 「からかい」 | 0.3%（1 例） |
| 合計　＝　100%（679 例） | | 合計　＝　100%（379 例） | |

（総例文の小数点第 3 位を四捨五入）（出所：筆者作成）

また、表（12）からわかるように、フィクション会話と自然会話における繰り返しは「感情の表出」が非常に多く用いられ、他の機能と比較しても、圧倒的に多いことが確認された。特に、フィクション会話では「感情の表出」の出現率は全体の半分以上を占めており、日本語のフィクション会話において最も重要な機能となっている。一方、自然会話では繰り返しの機能の中で「感情の表出」の使用が最も多く見られるが、「あいづち」および「応答」の使用も少なくない。このことから、自然会話における繰り返しは、フィクション会話とは異なり、発話者は相手の発話を繰り返すことによって自分の感情や態度を表明することのほか、会話に積極的に参加していることを示したり、相手との一体感を作ったりするという役割も果たしていることが明らかになった。

加えて、自然会話においては、日常会話の中で最も重要な要素の一つであるあいづち詞が合計 15 時間の会話の中で 6,721 回も用いられ、極めて多いことがわかった。それに対して、フィクション会話では繰り返しにおける「あいづち」の機能およびあいづち詞の使用は管見の限り見当たらなかった。ただし、自然会話では繰り返しにおける「あいづち」の機能が見られたとしても、あいづち詞の使用と比較すると、圧倒的に少ない。この点については、フィクション会話と自然会話の場面設定、状況、会話の目的、会話の進行の仕方の違いが関連しているのではないかと考えられる。

テレビドラマやテレビアニメなどというフィクション会話は、発話者ないし登場人物が発することばおよび表出する感情や態度などについてあらかじめ脚本が仕上がっているものであり、発話者が視聴者のためにそのシナリオに沿って演じる。一方、普段の生活における会話または脚本化されない自然会話は、発話者が視聴者のために情報を伝達するのではなく、会話の相手とお互いに何らかの情報を交換したり、他人との良好な人間関係を構築したりすることが目的である。このことから、フィクション会話においては、会話の流れがスムーズに進められるように、また視聴者に出演者の発話および感情や態度などが明確に伝わるように、曖昧さのあるあいづち詞および応答詞を避け、その代わりに発音や意味内容が明示的である繰り返しを使用するのではないかと推測される。それに対して、自然会話の場合は、テレビドラマのように放送時間やシナリオに束縛されないために、発話者が喋りたいことが無制限であり、相手との円滑なコミュニケーションで良好な関係を築くために、繰り返しよりあいづち詞および応答詞の方がより多く使用されているのではないかと考えられる。

# 第５章　日・タイ語における繰り返しの比較対照

前章では、日本語会話における繰り返しの機能について分析し、例文を挙げながらそれぞれの機能に関する定義および特徴を詳細に述べた。また、フィクション会話と自然会話で現れる繰り返しについて比較対照し、会話の種類の違いによって繰り返しが果たす機能と使用傾向が異なることを論じた。本章では、日本語における繰り返しの機能に基づき、タイ語会話で使用される繰り返しの機能について考察し、両言語における繰り返しの共通点と相違点を探っていき、繰り返しの普遍性について明らかにする。実際、本研究で収集したタイ語会話も日本語と同様に、フィクション会話と自然会話で使用される繰り返しは異なった機能を果たしているように見える。以下の例（63）はタイ語のフィクション会話、例（64）は自然会話を示している。

例（63）（家族のみんなはスリヨンに就職祝いとしてパーティーを開催しようとしている。）

ありがとう　とても　終助詞　女性丁寧語　～のために　プレゼント　しかし
スリヨン「〈苦笑しながら〉khɔ̀ɔpkhun　mâak　ná　khá　sǎmrap　khɔ̌ɔŋkhwǎn　tɛ̀ɛwâa
ヌーレック（呼称詞）　否定　可能　働く　そこ　すでに　女性丁寧語　ヌーレック（呼称詞）　される
nǔu-lék　mây　dây　thamŋaan　thîi-nân　lɛ́ɛw　khà　nǔu-lék　doon
クビ　すでに　女性丁寧語
lây-ɔ̀ɔk　lɛ́ɛw　khà」

（＝〈苦笑しながら〉プレゼントありがとうございます。でも、ヌーレック（自分を指す呼称詞）はもうあそこで働けなくなりました。仕事をクビにされてしまいました。）

される　クビ　から　初日
母「〈びっくりした顔をしながら大きな声で〉doon　lây-ɔ̀ɔk！？・・・*tâŋtɛ̀ɛ　wan-rɛ̂ɛk*
関係節　行く　研修　まさか　終助詞　子供（呼称詞）
*thîi　pay　rian-ŋaan.　pen-pay-dây-yaŋ-ŋay　à　lûuk*」

（＝〈びっくりした顔をしながら大きな声で〉　クビにされてしまった！？・・・*初日からクビにされたなんてまさかそんなはずがないよね、ルーク*（子供や目下の人に対する呼称詞）。）

（Yah Leum Chan　第１話）

例（64）（アンは自分が二股をかけた経験について話している。）

アン（名前）　行く　継続　否定　可能　終助詞
アン「ɛɛn　pay　tɔ̀ɔ　mây　dây　à.

（＝ このままだと、前に進めない。）

うん　うん
カラメー「【əə　əə】」

（＝ うんうん。）

私　否定　すっきり　心
ションプー「【raw　mây】sabaay【cay】」

（＝ 心がモヤモヤする。）

しかし　私　　否定　すっきり　　心　私　　接続詞　なければならない　引く　くじ
アン「【tɛ̀ɛ】raw　mây　sabaay　cay.　raw　kɔ̂ɔ　　tɔ̂ŋ　　càp　chalàak（笑）」
（＝ 心がモヤモヤするから、くじ引きしないといけいない（笑）。）

引く　くじ
カラメー「【**càp　chalàak**！？】（爆笑）〈拍手〉」
（＝ くじ引き！？（爆笑）〈拍手〉。）

COPU　私　　引く　　くじ　COPU　私　非現実　選択　　話す　　と　　誰
アン「【wâa　raw・・・】càp　chalàak　wâa　raw　cà　　lɯ̂ak　khuy　kàp　khray
継続　何　このように
tɔ̀ɔ　àray　yàaŋ-ŋía（笑）」
（＝ 誰と付き合い続けたら良いかくじ引きで相手を決めるのだ（笑）。）（3 Zaaap　2020 年 5 月 10 日）

両者の会話における繰り返しからわかるように、例（63）では、発話者の表情、態度や声色および前後の文脈を考慮すると、明らかに相手の発話に対して驚きを表明していると同時に、不快な気持ちを伝達していることがわかる。それに対して、例（64）の場合は発話者の「笑い」や「拍手」を考えると、発話者は相手の発話を繰り返すことによって、面白がりやユーモアを表出していることが示されている。また、例（64）の自然会話においては、あいづち、発話の重複、言い直し、笑いが通常に出現するのに対し、例（63）のフィクション会話ではこれらの要素は見られない。このことから、タイ語も日本語と同様に、会話の種類の違いによって、繰り返しが果たす機能や繰り返しの使用傾向が異なるのではないかと想定される。よって、本研究ではタイ語のフィクション会話と自然会話で用いられる繰り返しをそれぞれ分析し、日本語における繰り返しと比較対照していきたい。

本章では、具体的には、5.1.でタイ語のフィクション会話における繰り返しの機能を、5.2.でタイ語の自然会話における繰り返しの機能およびそれぞれの機能の特徴について詳細に考察し、それぞれの会話の種類における繰り返しを日本語と比べていく。そして、5.3.では日本語とタイ語のフィクション会話と自然会話における繰り返しの機能および使用傾向の共通点と相違点に関して明らかにし、両言語における繰り返しについて総合的にまとめる。

## 5.1. タイ語のフィクション会話における繰り返しの機能と使用傾向

タイのテレビドラマの会話用例合計 593 例文から収集した結果、以下の表（13）に示すとおりにタイ語のフィクション会話における繰り返しの発話機能は日本語と同様に、「時間稼ぎ」、「相手の発話の促進」、「説明要求／確認要求」と「感情の表出」という大きな 4 つの機能に分類できることが明らかになった。

表（13）　日本語とタイ語のフィクション会話における繰り返しの機能と使用傾向

| フィクション会話における繰り返しの機能と出現率 | | | |
|---|---|---|---|
| 日本語 | | タイ語 | |
| 繰り返しの機能 | 出現率 | 繰り返しの機能 | 出現率 |
| 「感情の表出」 | 81%（549 例） | 「感情の表出」 | 72.01%（427 例） |
| 「時間稼ぎ」 | 3%（18 例） | 「時間稼ぎ」 | 5.23%（31 例） |
| 「相手の発話の促進」 | 1%（4 例） | 「相手の発話の促進」 | 2%（11 例） |
| 「説明要求／確認要求」 | 16%（108 例） | 「説明要求／確認要求」 | 21%（124 例） |
| 合計　＝　100%（679 例） | | 合計　＝　100%（593 例） | |

（総例文の小数点第 3 位を四捨五入）（出所：筆者作成）

しかし、表（13）からわかるように日本語においてもタイ語においても「感情の表出」としての繰り返しはそれぞれ 81%（549 例）と 72.01%（427 例）の出現率となり、他機能より圧倒的に多く用いられることがわかった。また、タイ語では「時間稼ぎ」、「相手の発話の促進」、「説明要求／確認要求」の機能の使用率はそれぞれ 5.23%（31 例）、2%（11 例）、21%（124 例）が観察され、日本語と同じように「時間稼ぎ」と「相手の発話の促進」はやや少ないのに対し、「説明要求／確認要求」は「時間稼ぎ」および「相手の発話の促進」と比べると、若干多く使用されることがわかった。タイ語における「時間稼ぎ」、「相手の発話の促進」、「説明要求／確認要求」としての繰り返しは日本語と比べると、やや多く用いられるが、これら 3 つの機能を合わせても総例文の半分にも満たず、使用率が極めて少ないことがわかった。一方、「感情の表出」としての繰り返しの出現率は総例文の半分以上を占めており、繰り返しの発話機能の中で最も使用されることが明らかになった。このように、タイ語のフィクション会話で使用される繰り返しは「時間稼ぎ」、「相手の発話の促進」、「説明要求／確認要求」という意図より、むしろ相手の発話に対してある種の感情を表出する意図という「感情の表出」として繰り返しを用いている傾向が強いと言える。つまり、繰り返しにおける「感情の表出」は、発話者の感情と深い関わりを持ち、タイ語のフィクション会話において最も重要な機能であると考えられる。この点については、日本語と共通していることがわかった。

### 5.1.1.「時間稼ぎ」

タイ語のフィクション会話において、「時間稼ぎ」としての繰り返しは下記の例（65）と例（66）に示すものである。例（65）では、取材者は「もし特別な力を持つとしたら、どんな力が欲しいか」とゲーンロンに質問している。しかし、ゲーンロンはその質問に対してすぐに回答できないため、取材者の質問の主な部分である「特別な力」と繰り返し、自分に考える時間を与える。そして、考える最中に、外に立っている自分の恋人を見たとたん、「人の心が読める力が欲しい」と回答している。

例（65）（ゲーンロンという女性はインタビューに答えている。）

もし　あげる　ゲーンさん　ある　力　特別　可能　一つ　種類　ゲーンさん　ほしい
取材者「thâa　hây　khun-keen　mii　pha-laŋ　phí-sèet　dâay　nùŋ　yàaŋ　khun-keen　yàak
ある　力　何　女性丁寧語
mii　phalaŋ　àray　khá？」

（＝ もし、ゲーンさんが特別な力を持つとしたら、どのような特別な力が欲しいですか？）

力　特別　疑問文文末助詞　女性丁寧語
ゲーンロン「〈よそを見る〉pha-laŋ　phí-sèet　rɔ̌ɔ　khá？・・・（考える）・・・
ほしい　ある　力　特別　関係節　非現実
〈外に立っている自分の恋人を見ながら〉yàak　mii　phalaŋ　phísèet　thii　cà
入る　行く　中　心　所有　人　可能　終助詞　女性丁寧語
khâw　pay　nay　cìt-cay　khɔ̌ɔŋ　khon　dâay　nà　khà・・・（後略）・・・」

（＝〈よそを見る〉特別な力ですか？・・・（考える）・・・〈外に立っている自分の恋人を見ながら〉人の心が読めるという特別な力が欲しいですね。・・・（後略）・・・）

（Yah Leum Chan　第 1 話）

例（66）（グラオマートの曾祖母が認知症になったため、よく思い出せない。）

曾祖母　女性丁寧語　私　クラオマート（名前）　娘　所有　ニンお母さん
グラオマート「thân-thûat　khá.　nǔu　klâawmâat　lûuksǎaw　khɔ̌ɔŋ　mê-nin.
曾祖母ん　覚える　可能　疑問文文末助詞　女性丁寧語
thân-thûat　cam　dâay　mǎy　khá？」

（＝ 私はニンお母さんの娘の「クラオマート」です。ひいおばあちゃん、覚えています？）

クラオマート（名前）
曾祖母「〈よそを見ながら〉klâawmâat？・・・（考える）・・・〈思い出して、嬉しい〉
感動詞　クラオマート（名前）　疑問文文末助詞　曾祖母　思う　曾祖母　この間　見える
ɔ̂ɔ！　klâawmâat　rɔ̌ɔ？（笑）　thûat　wâa　thûat　phə̂ŋ　hěn
マート（名前）　ちっちゃい　これだけ　よく／好き　走る　来る　頂戴　「グリープ・ラムドゥアン」というお菓子
mâat　tualéklék　khɛ̂ɛnii　chɔ̂ɔp　wîŋ　maa　khɔ̌ɔ　khanǒm-klîiplamduan
曾祖母　食べる　継続を表す　終助詞　今　成長　である　お姉さん　すでに
thûat　kin　yùu　ləəy.　dìiawníi　too　pen　sǎaw　lɛ́ɛw」

（＝〈よそを見ながら〉・・・（考える）・・・クラオマート？・・・（思い出して、嬉しい）

あ！ クラオマートなのね。ついこの前会った時は、まだ小さくてよくお菓子をせがみに来ていたのに、もう立派なお姉さんになったのねー。）

（Kam Lai Mas　第 1 話）

また、例（66）ではグラオマートの曾祖母は認知症になったため、「グラオマート」という自分の孫の名前を聞いてもすぐに思い出せない。そのため、曾祖母は「グラオマート」という相手のことばを繰り返しながら、自分が思い出せるまで考えていた。そして、考えついたとたん、嬉しそうにグラオマートのことについて語り始めているのである。例（65）と例（66）からわかるように、繰り返しをした発話者が考える際に、相手と目を合わせず、よそを見ながら考えるのは「時間稼ぎ」の一般的な特徴である。

### 5.1.2.「相手の発話の促進」

タイ語のフィクション会話における「相手の発話の促進」は、例（67）と例（68）が示すものである。例（67）では、コンキアトは自分の父親の 4 番目の奥さんであるカムキャオと仲が良いと言っているが、それを聞いた弟のキャティコーンは否定しようとする気持ちを率直には伝えづらいため、「でも」と言った後に話が止まった。そのため、コンキアトは「tɛ̀ɛ（でも）」という相手が止まった最後のことばを「tɛ̀ɛ àray rɔ̌ɔ tíi-lék（でもなに、ティーレック（弟に対する呼称詞）？）」という「繰り返し＋α」の形で繰り返し、相手に話し続けるように促している。そして、キャティコーンは「tɛ̀ɛ thəə klua phîi-chaay-yày（でも、彼女は兄貴のことを怖がっている）」と再度語り始めているのである。

例（67）（コンキアトとキャティコーンは同父異母兄弟であり、父親の 4 番目の奥さんであるカムキャオという女性について話している。）

コンキアト「・・・（前略）・・・nɔ̂ɔkcàak（以外） aa-máa（母） khɔ̌ɔŋ（所有） tíi-lék（弟） lɛ́（と） aa-ùm（祖母） phîi（兄） cɯŋ（だから） klaay（なる） pen（である） phûan（友達） thîi（関係節） dii（良い） khon（人） nɯŋ（一つ） khɔ̌ɔŋ（所有） kham-kɛ̂ɛw（カムキャオ（名前））」

（＝ティーレック（弟の呼称詞）のお母さんとおばあさん以外にも、俺もカムキャオにとって友人の一人なんだ。）

キャティコーン「tɛ̀ɛ（しかし）・・・（止まった）」

（＝でも・・・（止まった）。）

コンキアト「〈相手に向かって〉tɛ̀ɛ（しかし） àray（何） rɔ̌ɔ（疑問文文末助詞） tíi-lék（弟）？」

（＝〈相手に向かって〉でもなに、ティーレック（弟に対する呼称詞）？。）

キャティコーン「*tɛ̀ɛ（しかし） thəə（彼女） klua（怖い） phîi-chaay-yày（（一番上の）兄） à（終助詞） khráp（男性丁寧語）*・・・（後略）・・・」

（＝*でも、彼女は兄貴のことを怖がっているんですよ。*・・・（後略）・・・。）

（Dok Som See Thong　第 14 話）

また、例（68）ではイムという女性は体がデカイにもかかわらず、どうしても馬に乗りたいと発言している。それを聞いたパコーンはイムに馬に乗ることをやめさせようとしているが、直接伝えられず、急に話が進まない状態になった。そのため、イムは「kreeŋ（不安）」というパコーンの話が止まる前の最後のことばを「繰り返し＋α」の形という「kreeŋ　àray　rɔ̌ɔ　khá（何が不安なのですか）」と繰り返し、相手に話を続けようとしているのである。そして、パコーンは話し続けているが、やはりイムに彼女の体型についてなかなか伝えられないため、再度話が途切れてしまった。パコーンの話を促すために、イムは「lǎŋ　máa　man（馬の背中が）」という相手が止まった前の最後のことばを「lǎŋ máaman　cà　thammay　rɔ̌ɔ　khá（馬の背中がどうなるんですか）」という「繰り返し＋α」の形で繰り返すのである。その結果、ヌーアーイがパコーンが言いたいことを代わりに話し続けている。

例（68）（イムの体がかなり大きいにもかかわらず、馬に乗りたいと言っている。）

僕　思う　しないで　～方がいい　終助詞　男性丁寧語　僕　恐れ/不安
パコーン「phǒm　wâa・・・yàa　diikwàa　ná　khráp.　phǒm　kreeŋ・・・〈止まる〉」
（＝ 僕は・・・やめたほうがいいと思います。ちょっと不安が・・・）

恐れ/不安　何　疑問文文末助詞　女性丁寧語
イム「〈相手に向かって〉kreeŋ　àray　rɔ̌ɔ　khá？」
（＝〈相手に向かって〉何が不安なのですか？）

僕　恐れ/不安　COPU　背中　馬　それ
パコーン「〈躊躇しながら〉phǒm　kreeŋ　wâa・・・lǎŋ　máa　man・・・〈止まる〉」
（＝〈躊躇しながら〉馬の背中がちょっと不安・・・〈止まる〉）

背中　馬　それ　非現実　なぜ　疑問文文末助詞　女性丁寧語
イム「〈相手に向かって〉lǎŋ　máa　man　cà　thammay　rɔ̌ɔ　khá？」
（＝〈相手に向かって〉馬の背中がどうなるんですか？）

折れる　終助詞　終助詞
ヌーアーイ「*hàk　ŋay　là*！」
（＝（馬の）*背骨が折れるんだよ*！）　（Khun Chai Pawornruj　第 6 話）

例（67）と例（68）からわかるように、相手が発話している際に突然なポーズまたは途切れが必ず生じ、発話者は必ず相手が止まった前の最後のことばや句を繰り返さなければならないことが「相手の発話の促進」としての繰り返しの特徴である。

### 5.1.3.「説明要求／確認要求」

タイ語のフィクション会話における「説明要求／確認要求」に関しては、次の例（69）と例（70）に示している。例（69）では、ポーンはタラートーンが落とした地図について気になっており、タラートーンの発話の「phɛ̌ɛnthîi（地図）」を「繰り返し＋α」の形という「phɛ̌ɛnthîi àray rɔ̌ɔ khá（何の地図ですか）」と繰り返し、相手からその地図に関する内容について説明や解説を求めている。そして、タラートーンは「phɛ̌ɛnthîi sáy-ŋaan（キャンプ場のサイトマップ）」という回答を与える。

例（69）（タラートーンはある紙を落とした。）

紙　何　疑問文文末助詞　女性丁寧語　先生
ポーン「krà-dàat àray rɔ̌ɔ khá aacaan-mɔ̀m？」
（＝ 先生、これは何の紙ですか？）

地図　終助詞　男性丁寧語
タラートーン「phɛ̌ɛn-thîi à khráp.」
（＝ 地図です。）

地図　何　疑問文文末助詞　女性丁寧語
ポーン「〈相手に向かって〉phɛ̌ɛn-thîi àray rɔ̌ɔ khá？」
（＝〈相手に向かって〉何の地図ですか？）

地図　サイトマップ　男性丁寧語
タラートーン「*phɛ̌ɛn-thîi sáy-ŋaan khráp.*」
（＝（*キャンプ場の）サイトマップです。*）　（Khun Chai Tarathorn　第 5 話）

また、下記の例（70）では祖母は中華系タイ人であり、ナルディーと話している際に思わず「làw-sík（ラオシック）」という潮州語（中国語の方言の一つ）のことばを使用するものの、ナルディーはそのことばの意味が把握できない。そのため、ナルディーは「làw-sík（ラオシック）」というおばあさんの発話を「làw-sík plɛɛ wâa àray câ（ラオシックってどういう意味ですか）」という「繰り返し＋α」の形で繰り返し、相手からことばの意味についての説明を求めているのである。この場合は、上の例（69）とは異なり、発話者は「ことばの内容」ではなく、明らかにことば自体の意味が理解できないのである。

例（70）（ナルディーは祖母と自分の旦那のことについて相談している。）

坊ちゃん　終助詞　祖母　終助詞　育てる　来る　から　存在する　中　揺りかご　終助詞
祖母「aa-khunchaay nîia aa-ûm à líaŋ maa tâŋtɛ̀ɛ yùu nay plee à.
彼／彼女　である　人　ラオシック（潮州語）　終助詞
ii pen khon làw-sík à.」
（＝ おばあちゃんは坊ちゃんを揺りかごの中から育てきたから、彼は「ラオシック」な人なんだ。）

ラオシック（潮州語）　訳　COPU　何　終助詞

ナルディー「〈相手に向かって〉**làw-sík**　**plɛɛ**　**wâa**　**àray**　**câ**？」

（＝〈相手に向かって〉「ラオシック」ってどういう意味ですか？）

訳　COPU　人　誠実　長男坊ちゃん　否定　する　何　間違い

祖母「*plɛɛ　wâa　"khon　sʉ̂ʉ-sàt". aa-khunchaay-yày　mây　tham　àray　phìt*

終助詞　終助詞

*rɔ̀ɔk　hà*.」

（＝「誠実な人」という意味だよ。長男坊ちゃんは悪いことなんて絶対しない人なはずだよ。）

（Dok Som See Thong　第 13 話）

加えて、例（69）と例（70）の「説明要求／確認要求」と前述した例（67）と例（68）の「相手の発話の促進」と違って、「相手の発話の促進」の場合は繰り返された要素は必ず相手が止まった前の最後のことばや句でなければならないのである。それに対して、「説明要求／確認要求」の場合は繰り返された部分は必ずしも相手が止まった直前の最後のことばや句とは限らず、発話者が把握できない所や相手の発話のすべての部分を繰り返すことが可能である。さらに、「説明要求／確認要求」は「相手の発話の促進」のように相手の発話には突然な途切れなどは生じない。

### 5.1.4. 「感情の表出」

タイ語のフィクション会話において、「感情の表出」としての繰り返しは前述した例（63）と下記の例（71）に示すものである。例（63）では、スリヨンの母の表情や声の大きさおよび文脈を考えると、「doon　lâyɔ̀ɔk（クビにされた）」と繰り返すのは「クビにされたのですか」という単に相手から説明または確認を要求しているというよりも、相手が言ったことに対して「そんなはずがない」という「驚き」および「不信感」を表明していることが明らかである。

例（63）（家族のみんなはスリヨンに就職祝いとしてパーティーを開催しようとしている。）

ありがとう　とても　終助詞　女性丁寧語　～のために　プレゼント　しかし

スリヨン「〈苦笑しながら〉khɔ̀ɔpkhun　mâak　ná　khá　sǎmràp　khɔ̌ɔŋkhwǎn　tɛ̀ɛwâa

ヌーレック（呼称詞）　否定　可能　働く　そこ　すでに　女性丁寧語　ヌーレック（呼称詞）　される

nǔu-lék　mây　dây　thamŋaan　thîi-nân　lɛ́ɛw　khà　nǔu-lék　doon

クビ　すでに　女性丁寧語

lây-ɔ̀ɔk　lɛ́ɛw　khà」

（＝〈苦笑しながら〉　プレゼントありがとうございます。でも、ヌーレック（自分を指す呼称詞）はもうあそこで働けなくなりました。仕事をクビにされてしまいました。）

される　クビ　から　初日

母「〈びっくりした顔をしながら大きな声で〉**doon　lây-ɔ̀ɔk**！？・・・*tâŋtɛ̀ɛ　wan-rɛ̂ɛk*

関係節　行く　研修　まさか　終助詞　子供（呼称詞）

*thîi　pay　rian-ŋaan.　pen-pay-dây-yaŋ-ŋay　à　lûuk*」

（＝〈びっくりした顔をしながら大きな声で〉クビにされてしまった！？・・・初日からクビにされた

なんてまさかそんなはずがないよね、ルーク（子供や目下の人に対する呼称詞）。）

（Yah Leum Chan　第 1 話）

例（71）（エドワードが一人で現場にいるが、コンキアト以外の人はもう宿泊テントに戻った。）

感動詞　他の人　消える　行く　どこ　一緒に　すべて　終助詞

エドワード「hɔ́ɔy！khon-ùun　hǎay　pay　nǎy　kan　mòt　nîa！」

（＝ おい！他の人たちはどこに行ってしまったんだよ！）

フィラー　戻る/帰る　宿泊テント　男性丁寧語

コンキアト「ɔ̀ɔ・・・〈怯えている表情〉klàp　khɛɛm　khráp.」

（＝ えーと・・・〈怯えている表情〉宿泊テントに戻りました。）

戻る/帰る　宿泊テント　感動詞　じゃ　私　無現実

エドワード「〈不満げな顔をしながら、大きな声で〉klàp　khɛ́ɛm！？ *wóo！　lɛ́ɛw　chán　cà*

戻る/帰る　どうやって　終助詞　終助詞

*klàp　yaŋŋay　nîa　há*！」

（＝〈不満げな顔をしながら、大きな声で〉宿泊テントに戻った！？*おい！じゃ、俺にどうやって帰れっていうんだよ*！）

（Khun Chai Tarathorn　第 5 話）

また、例（71）も同様に、エドワードの表情や声色などから考慮すると、エドワードが「klàp khɛɛm（宿泊テントに戻る）」と繰り返すのは単に「宿泊テントに戻りましたか？」という相手からの説明あるいは確認を要求するというよりも、「宿泊テントに戻ったってどういう意味だよ！」という主張をその繰り返し発話に込めるのである。加えて、その繰り返された発話の直後に、「wóo！lɛ́ɛw chán cà klàp yaŋŋay nîa há！（おい！じゃ、俺にどうやって帰れっていうんだよ！）」という発話が後続することによってエドワードがコンキアトを非難していることが明示的になっている。例（63）と例（71）の「感情の表出」は上記の例（69）と例（70）の「説明要求／確認要求」と同様に上昇調イントネーションで発話されているが、発話者の声色や態度、特に前後の文脈を見てみると、両者における発話者の意図は全く異なることがわかる。なお、「説明要求／確認要求」の場合は繰り返し発話の後に、必ず相手からの解説が来るのに対し、「感情の表出」の場合はそういった解説は後続しない。

以上のように、タイ語のフィクション会話における繰り返しは日本語と同様に、「時間稼ぎ」、「相手の発話の促進」、「説明要求／確認要求」および「感情の表出」の 4 つの機能を持つことが明らかになった。また、本調査から両言語とも「感情の表出」としての繰り返しは他機能より圧倒的に多く用いられ、際立って目立つことがわかった。つまり、両言語のフィクション会話で使用される繰り返しの機能は相手から情報を求めるまたは相手に説明を与えるというよりも、相手が言ったことに対して

発話者の感情あるいは態度を表出する傾向が強いと言える。このように、フィクションにおける繰り返しの機能と使用傾向に関しては、日本語とタイ語に共通していることが明らかになった。ただし、上記に挙げたタイ語のいくつかの会話例からわかるように、繰り返し発話の後に様々な要素または表現形式（「α」）、特に終助詞が多く後続することが観察され、日本語と比べると、表現形式の種類がより豊富であることが観察された。繰り返しの表現形式については、第 7 章で詳細に分析していく。次節の 5.2.ではタイ語の自然会話における繰り返しについて詳細に説明していきたい。

## 5. 2. タイ語の自然会話における繰り返しの機能と使用傾向

タイのインタビュー番組、トーク番組、バラエティ番組、ラジオ番組合計 15 時間の自然会話を文字化し、繰り返しの例文が 203 例見られた。そして、収集した例文を考察した結果、下記の表（14）が示すようにタイ語の自然会話における繰り返しの発話機能は日本語と同様に「時間稼ぎ」、「相手の発話の促進」、「説明要求／確認要求」、「感情の表出」、「あいづち」、「応答」および「からかい」という 7 種類に分類できることが明らかになった。

**表（14）　日本語とタイ語の自然会話における繰り返しの機能と使用傾向**

| 自然会話における繰り返しの機能と出現率 | | | |
|---|---|---|---|
| 日本語 | | タイ語 | |
| 繰り返しの機能 | 出現率 | 繰り返しの機能 | 出現率 |
| 「感情の表出」 | 47%（178 例） | 「感情の表出」 | 37%（74 例） |
| 「時間稼ぎ」 | 7%（25 例） | 「時間稼ぎ」 | 2%（4 例） |
| 「相手の発話の促進」 | 2%（6 例） | 「相手の発話の促進」 | 2%（3 例） |
| 「説明要求／確認要求」 | 6%（21 例） | 「説明要求／確認要求」 | 16%（32 例） |
| 「あいづち」 | 20%（75 例） | 「あいづち」 | 13.3%（27 例） |
| 「応答」 | 19.3%（73 例） | 「応答」 | 30.1%（61 例） |
| 「からかい」 | 0.3%（1 例） | 「からかい」 | 1%（2 例） |
| 合計　＝　100%（379 例） | | 合計　＝　100%（203 例） | |

（総例文の小数点第 3 位を四捨五入）（出所：筆者作成）

表（14）からわかるように、フィクション会話と同じように、日本語とタイ語の自然会話における「感情の表出」としての繰り返しはそれぞれ 47%（178 例）と 37%（74 例）という出現率が見られ、繰り返しの機能の中で最も多く使用されることがわかった。また、タイ語では日本語と同様に「感情の表出」の次に頻繁に用いられるのは「応答」の機能であり、使用率は 30.1%（61 例）が観察された。しかし、日本語と異なり、タイ語における「応答」としての繰り返しの使用率は「感情の表出」との差がそれほど大きくなく、両者はほぼ同程度に頻繁に使用されることがわかった。また、「応答」の使用率は「あいづち」を半分以上上回ることがわかった。加えて、日本語の自然会話における「あいづち」の機能は「説明要求／確認要求」より圧倒的に多く使われているのに対し、タイ語の場合は「あいづち」より「説明要求／確認要求」の方がやや多く使用され、両者に大きな差は見られなかった。さらに、「時間稼ぎ」、「相手の発話の促進」、「からかい」の使用率はそれぞれ 2%（4 例）、2%（3 例）、1%（2 例）しか見当たらず、日本語と同様に非常に少ないことがわかった。

本調査結果から、タイ語の自然会話において繰り返しの使用目的は、「時間稼ぎ」、「相手の発話の促進」、「からかい」を伝達するよりも、発話者は相手の発話に対する感情や態度を表明する意図として繰り返しを使用する傾向が強いと言える。また、相手の質問に対して返答を与えるのに繰り返しを用いる傾向が見られる。他にも、発話者は相手から説明や確認を求めたり、相手の話に巧みに調子を合わせたりする際にも繰り返しを頻繁に使用すると言えるが、どちらかと言えば 「感情の表出」および「応答」へ傾くのではないかと考えられる。要するに、自然会話において繰り返しが果たす機能は日タイ両言語には共通しているが、それぞれの機能の使用傾向に関しては多少異なることがわかった。

### 5.2.1.「時間稼ぎ」

タイ語の自然会話における「時間稼ぎ」は、以下の例（72）が示すものである。例（72）では、カラメーはオーンに結婚後の生活で今まで突然なんとなく涙が出る経験はあるかについて質問しており、例を挙げてもらうように促している。突然質問されたオーンはすぐに答えが出せず、「yàaŋchên（例えば）」というカラメーの質問を繰り返すことで、沈黙を避けながら、自分に考える時間を与えるのである。そして、オーンは答えを思いついたとたん、話を語り続けている。また、オーンがカラメーの発話を繰り返す際に、相手から目を逸らし、別の方向を見ながら考えるというのは、他機能には見られない、繰り返しにおける「時間稼ぎ」の最も重要な特徴でもあると言える。

例（72）（カラメーはゲストであるオーンの結婚後の生活について尋ねている。）

語る　終助詞　あなた　ある　疑問文文末助詞　経験　関係節　ような　感動詞　なんとなく
カラメー「lâw　sí　khun　mii　mǎy　pràsòpkaan　thîi　bèɛp・・・　âa！　yùu-dii-dii
涙　接続詞　流れる
náamtaa　kɔ̂ɔ　lǎy？

（＝ なんか・・・突然なんとなく泣き出した経験がある？ ぜひ聞かせて。）

ある
オーン「【mii】」

（＝ あるよ。）

それとも　何　このような
カラメー「【rǔu】　àray　yàaŋ-ŋía？」

（＝ それとも、そういうようなこととか。）

ある　COPU　こと　同じ　終助詞　女性丁寧語　こと　同じ　関係節　以前
オーン「mii.　khuu　rûaŋ　dəəm-dəəm　ná　khá.　rûaŋ...diaw-kan　thîi　tɛ̀ɛkɔ̀ɔn
否定　気にする　終助詞
mây　pen-àray　à.

（＝ あるよ。以前と同じようなことだが、前は全然気にしなかったのに。）

うん
カラメー「【əə】」

（＝ うん。）

私　接続詞　非現実　なる
オーン「【raw】　kɔ̂ɔ　cà　pen.」

（＝ でも今になると、気になってしまう。）

例えば
カラメー「yàaŋchên？」

（＝ 例えば？）

例えば　ビーム（名前）　彼／彼女　戻る／帰る
オーン「〈よそを見ながら〉 yàaŋchên・・・（考える）・・・biim　khɔ̌ɔ　klàp
家　ある日
bâan　mii-yùu-wan-nuŋ・・・（後略）・・・」

（＝〈よそを見ながら〉 例えば・・・（考える）・・・ある日、ビームが実家に帰らせてって言い出した・・・（後略）・・・）　（3 Zaaap　2020 年 3 月 8 日）

### 5.2.2.「相手の発話の促進」

タイ語の自然会話において、「相手の発話の促進」としての繰り返しは下記の例（73）に示すものである。例（73）では、ウッディはポンに「マグニートー」という健康食品の商品名は誰が名付けたかについて聞いている。そして、ポンは自分で名付けたと答えたが、その名前を付けた理由を言おうとした時に、「phrɔ́wâa（なぜなら）」というところから急に話が止まってしまった。よって、ウッディはポンの話が止まった前の最後のことばである「phrɔ́wâa（なぜなら）」を繰り返し、ポンに話を続けさせようとしている。その直後に、ポンは「マグニートー」と名付けたきっかけは「X-men」と

いう映画の中に登場する「マグニートー」というキャラクターが好きだからであることを再び語り始めている。加えて、前述したように、繰り返しにおける「相手の発話の促進」は他機能とは異なり、先行発話である相手の発話が必ず突然途切れてしまうという特徴を持つ。また、繰り返された要素のほとんどは接続詞である。

例（73）（ポンが販売している「MAGNETO（マグニートー）」という健康食品の名前について話している。）

それで　誰　である　人　名付ける　マグニートー
ウッディ「ɩ́ɛɛw khray pen khon tâŋ-chûu "MAGNETO"？」
（＝「マグニートー」という名前って誰が付けたの？）

考える　自分で　なぜなら
ポン「khít eeŋ. phrɔ́wâa・・・〈止まる〉」
（＝ 自分で考えた／付けた。なぜかというと・・・〈止まる〉）

なぜなら
ウッディ「〈相手に向かって〉 **phrɔ́wâa**？」
（＝〈相手に向かって〉 なぜかというと？）

キャラクター　この　中　「X-men」（映画名）
ポン「*tualákhɔɔn núi nay "X-men"*
（＝ *これは「X-men」という映画に出てくる装置の名前で、*）

うん
ウッディ「【əə】」
（＝ うん。）

所有　トロージャン　終助詞　彼／彼女　非現実　である　マグニート
ポン「【*khɔ̌ŋ*】 *Trojan à kháw cà pen "MAGNETO".*
（＝ *トロージャンの場合は、「マグニートー」と名付けられた。*）

うん　うん
ウッディ「əə　əə」
（＝ うんうん。）

ああ　だから　である　マグニートー
ポン「*aa. kɔ̂-ləəy pen "MAGNETO"*・・・（後略）・・・」
（＝*ああ。だから、自分の商品に「マグニートー」という名前を付けた。*・・・（後略）・・・）

（Woody World　2018 年 10 月 7 日）

### 5.2.3.「説明要求／確認要求」

タイ語の自然会話における「説明要求／確認要求」は、次の例（74）に示している。例（74）では、カラメーはビームに奥さんが毎日書いている日記を読んだことがあるかについて尋ねている。そして、ビームは「読みたいが、怖い」と答えたのに対して、カラメーはビームが何を怖がっているのかという具体的な事情が理解できなかった。そこで、ビームが言った「klua（怖い）」を「klua（怖い）＋ àray（何）」という「繰り返し＋α」の形で繰り返し、ビームからの追加説明を求めている。その直後、ビームからカラメーの質問に対する解説が後続する。「説明要求／確認要求」としての繰り返しは「時間稼ぎ」とは全く異なり、発話者は必ず相手と目を合わせて発話することが重要な特徴である。

例（74）（カラメーはビームに今まで奥さんの日記を読んだことがあるかについて聞いている。）

あなた　経験の過去　読む　疑問文文末助詞
カラメー「khun　khəəy　àan　mǎy？」
（＝（奥さんの日記を）読んだことがある？）

僕　ほしい　非現実　読む　同じ　終助詞　男性丁寧語
ビーム「phǒm・・・yàak　cà　àan　mǔ̂ankan　ná　khráp.」
（＝ 僕・・・読みたいですが・・・）

しかし
カラメー「tɛ̀ɛ？」
（＝ でも？）

しかし　僕　怖い
ビーム「tɛ̀ɛ　phǒm　klua（笑）」
（＝ でも、怖いです（笑）。）

怖い　何
カラメー「〈相手に向かって〉**klua**　**àray**？」
（＝〈相手に向かって〉何が怖いの？）

僕　怖い　そういう感じ　ような　怖いのは　感動詞　まず　である
ビーム「*phǒm　klua　pràmaanwâa　bɛ̀ɛp・・・klua-wâa　êey　nɯ̀ŋ　kɔ̂ɔ-khɯɯ*
彼／彼女　非現実　怒る　疑問文文末助詞　関係節　関係節　行く　読む
*kháw　cà　kròot　rɯ̌ɯplàaw　thîi...　thîi　pay　àan*」
（＝ *怖いのはなんか..まず、自分が勝手に読んだことが奥さんにバレてしまうのが怖いですね。*）

（3 Zaaap　2020 年 3 月 8 日）

また、第 4 章 4.2.3.項で述べたように、例（74）の「説明要求／確認要求」の場合は、「klua àray？（何が怖いの？）」という繰り返しの代わりに、「àray？（何が）？」や「hǔɯm？（うん？）」などのような「聞き返し」で代用することもできるように見える。しかし、これらの「聞き返し」の表現と繰り返しではニュアンスがかなり異なり、相手の理解に影響を与えるように思われる。

「àray？（何が）？」や「hǔum？（うん？）」などのような「聞き返し」を用いると、明らかに発話者は相手の発話のどの部分が把握できないのか、あるいはどのようなことに関して質問したいのかについて明示的ではないため、相手が発話者の質問に対してすぐに回答できず、発話者ともう一度最初から話を整理するという障害が生じる可能性が高いと推測される。一方、「klua（怖い）」という相手のことばを繰り返すだけで、発話時の表情や声色などによって「あなたが言っていた「klua（怖い）」というのは具体的にどのようなことを指すのか」という意味合いが含意され、相手に「そのことについてさらに説明をしてほしい」ということがより明示的に伝達できると考えられる。

### 5.2.4. 「感情の表出」

タイ語の自然会話における「感情の表出」は、本章の始まりの部分で述べた例（64）が示すものである。例（64）では、アンは男性 2 人のうちどちらを選ぶかについて、くじ引きで決めると言っているが、聞き手であるカラメーにとっては不意打ち的発言である。例（64）の場合は明らかに上の例（74）の「説明要求／確認要求」とは異なり、カラメーがアンの発話の「càp　chalàak（くじ引き）」を繰り返すのは単に「くじ引き」に関する説明や確認を要求するのではなく、確実にアンの発話に対して「驚き」および「面白さ」という感情を表出しているのである。

例（64）（アンは自分が二股をかけた経験について話している。）

アン（名前）　行く　継続　否定　可能　終助詞
アン「εεn　pay　tɔ̀ɔ　mây　dây　à.
（＝ このままだと、前に進めない。）

うん　うん
カラメー「【əə　əə】」
（＝ うんうん。）

私　否定　すっきり　心
ションプー「【raw　mây】sabaay【cay】」
（＝ 心がモヤモヤする。）

しかし　私　否定　すっきり　心　私　接続詞　なければならない　引く　くじ
アン「【tɛ̀ɛ】raw　mây　sabaay　cay.　raw　kɔ̂ɔ　tôŋ　càp　chalàak（笑）」
（＝ 心がモヤモヤするから、くじ引きしないといけない（笑）。）

引く　くじ
カラメー「【**càp　chalàak**！？】（爆笑）〈拍手〉」
（＝ くじ引き！？（爆笑）〈拍手〉。）

COPU　私　引く　くじ　COPU　私　非現実　選択　話す　と　誰
アン「【wâa　raw・・・】càp　chalàak　wâa　raw　cà　lûak　khuy　kàp　khray
継続　何　このように
tɔ̀ɔ　àray　yàaŋ-ŋía（笑）」

（＝ 誰と付き合い続けたら良いかくじ引きで相手を決めるのだ（笑）。）（3 Zaaap　2020 年 5 月 10 日）

また、例（64）が例（74）と異なるのは、繰り返し直後の笑いや拍手、および態度と声色などから考えると、発話者は相手からの説明や回答を一切期待せず、もっぱら「くじ引き」に対して面白さやおかしさなどを感じたことを表明していると考えられる。それに対して、「説明要求／確認要求」である例（74）では、発話者は相手に「klua（怖い）＋ àray（何）」と質問する際に、例（64）の「感情の表出」のように笑いや特別な語調または態度などは全く見られない。なお、「説明要求／確認要求」の場合は繰り返し発話の直後に、必ず相手からの回答や解説が後続する。

### 5.2.5.「あいづち」

タイ語の自然会話に現れる「あいづち」としての繰り返しは、次の例（75）が示すものである。例（75）では、アンはみんなに自分の学生時代の写真を見せながら、この写真は学生証用の証明写真であることを説明している。そして、カラメーは頷きながら「rûup　tìt　bàt　nákrian（学生証の証明写真）」というアンの発話を繰り返している。カラメーの繰り返しの発話とアンの発話「annii yùu　pɔɔ-hòk（当時は小学校 6 年生だった）」を見ると、両者が重なっているのが観察され、アンが話している途中に、カラメーが発言し始めているが、アンは相手の発話を気にせず話して続けている。加えて、カラメーが発話を繰り返した際の表情や声色、特に「頷き」という要素を考えてみると、明らかに相手から何らかの情報を要求するあるいは情報を与えるのではなく、むしろ単に「あ、そうなんだ」または「なるほど」のような意味合いで自分の理解を表しながら、相手の話を聞いているという信号を送っていると考えられる。つまり、そのターンに発話権を持つ者はカラメーではなくアンである。このように、例（75）の場合の繰り返しは「あいづち」と同様な性質を持っているということがわかる。

例（75）（アンは自分の学生時代の証明写真を見せる。）

写真　この　クラシック　とても　終助詞
カラメー「rûup　nii　khláatsìk　mâak　ná」
（＝ この写真はとてもクラシックだね。）

うん　本当
アン「ɔɔ　ciŋ」
（＝ うん、本当だ。）

である　写真　関係節　存在する　中　ソーシャルメディア　そして　否定　ある　日　非現実　消す
カラメー「pen　rûup　thîi　yùu　nay　soochîaw　lɛ́ɛw　mây　mii　wan　cà　lóp

出る　も　終助詞　女性丁寧語
ɔ̀ɔk　dûay　ná　khá.

（＝ ソーシャルメディア上に載っている写真だから、もう永遠に消えない写真ですよね。）

正しい
アン「【tùuk】」

（＝ そう。／そのとおり。）

あなた　アン（名前）　トーンプラソム（苗字）
カラメー「【khun】　ɛɛn　thɔɔŋpràsŏm」

（＝ アン・トーンプラソムさん。）

写真　写真　貼る　免許証　学生
アン「rûup…rûup　tìt　bàt　nákrian

（＝ 学生証の証明写真なんだ。）

写真　貼る　免許証　学生
カラメー「**rûup　tìt　bàt　【nákrian】**〈頷く〉」

（＝ 学生証の証明写真〈頷く〉。）

これ　存在する　小学6年生
アン「【*annii*　*yùu*】　*pɔɔ-hòk*」

（＝ *当時は小学6年生だった。*）　（3 Zaaap　2020年5月10日）

また、この場合の繰り返しは次の例（75’）のように、「ɯɯm（うん）」などのようなあいづち詞に置き換え可能である。しかし、第4章4.2.5.項で説明したように、繰り返しをあいづち詞に置き換えられるとは言え、両者によって生じるニュアンスは多少異なる。相手の発話を再度繰り返して発言する方が、明らかにあいづち詞より発話者の音声や語調などが明確であり、相手の発話のどの部分に対して興味を持つのか、または「あいづち」を打っているのかについて明示的に表示していると言える。

例（75’）（アンは自分の学生時代の証明写真を見せる。）

・・・・・（前略）・・・・・

写真　写真　貼る　免許証　学生
アン「rûup…rûup　tìt　bàt　nákrian

（＝ 学生証の証明写真なんだ。）

写真　貼る　免許証　学生　　うん
カラメー「~~rûup　tìt　bàt　【nákrian】~~　→　**【ɯɯm】**〈頷く〉」

（＝ 学生証の証明写真　→　うん〈頷く〉。）

これ　存在する　小学6年生
アン「【*annii*　*yùu*】　*pɔɔ-hòk*」

（＝ *当時は小学6年生だった。*）

### 5.2.6.「応答」

タイ語の自然会話における「応答」としての繰り返しは下記の例（76）に示すものである。例（76）では、ウッディはペアに彼女のお手伝いさんであるサーとこの建物で知り合ったのかどうかについて聞いている。そして、ペアは頷きながら「cəə　nay　tùk　níi（この建物の中で知り合った）」というウッディの発話を繰り返している。ペアが発話を繰り返した際の表情や語調を考えると、相手から情報を要求したり、特別な感情を表明したりする意図を持つのではなく、単に「はい、そうです」のような意味合いで相手の質問に対して応答している。

例（76）（ウッディはペアにお手伝いさんであるサーとどこで知り合ったのかについて聞いている。）

サーさん　これ　知り合う　お互い　長い　まだ
ウッディ「khun-săa　nîi・・・rúu-càk　kan　naan　yaŋ？」
（＝ サーさんと知り合ってもう長いの？。）

会う　サー（名前）　中　建物　この　女性丁寧語　そして　相性が良い　だから　尋ねる
ペア「cəə　săa　nay　tùk　níi　khà.　lɛ́ɛw　thùuk-chátaa　kɔ̂ɔ-ləəy　thǎam
COPU　する　する　仕事　存在する　ここ　疑問文文末助詞　女性丁寧語
wâa　tham....tham　ŋaan　yùu　thîi-nîi　rɔ̌ɔ　khá
（＝ この建物の中でサーと知り合いました。そして、この人とは相性が良さそうだと感じて、彼女に「ここで働いているの？」と声をかけてみました。）

男性丁寧語
ウッディ「khráp」
（＝ はい。）

そして　誘う　来る　する　一緒に
ペア「lɛ́ɛw-kɔ̂ɔ　chuan　maa　tham　kan.」
（＝ で、私の所で働かないかと彼女を誘った。）

会う　中　建物　この
ウッディ「cəə　nay　tùk　níi？」
（＝この建物の中で知り合ったの？）

会う　中　建物　この
ペア「〈頷く〉**cəə　nay　tùk　níi**」
（＝〈頷く〉この建物の中で知り合った。）　（Woody World　2018 年 9 月 9 日）

例（76）の「応答」は「あいづち」の機能に類似しているように見えるが、「応答」では、繰り返し発話の先行発話が質問文であるのに対し、「あいづち」の場合は、繰り返し発話の先行発話が平叙文である。また、例（76）の場合は例（76'）が示すとおり、日本語と同様に繰り返しの部分は「chây（はい／そう）」という応答詞に入れ替え可能である。

例（76’）（ウッディはペアにお手伝いさんであるサーとどこで知り合ったのかについて聞いている。）

・・・・・(前略)・・・・・

会う　中　建物　この
ウッディ「cɔɔ　nay　tùk　níi？」
（＝ この建物の中で知り合ったの？。）

会う　中　建物　この　はい／そう
ペア「〈頷く〉~~cɔɔ　nay　tùk　níi~~ → **chầy**」
（＝〈頷く〉~~この建物の中で知り合った~~ → はい／そう。）

しかし、「あいづち」と同様に、実際は繰り返しと応答詞ではニュアンスが若干異なり、繰り返しは応答詞と比べると、発話者の応答がより明示的に相手に伝達できると言える。加えて、相手の質問を繰り返して応答する方が応答詞よりも「相手が言っていることや理解していることが正しい」というニュアンスが強く、相手の理解が間違っていないという意味合いがより伝達されるのではないかと考えられる。

### 5.2.7.「からかい」

タイ語の自然会話における、「相手の発話の促進」としての繰り返しは下記の例（77）に示すものである。例（77）では、パットがウッディにある商品について説明している最中に、3 歳児のレースは母であるパットが言った「pǎw-~~húu~~（アワビ）」という単語を発音してみようとしているが、結局「pǎw-hûu」という間違った発音をしてしまった。そして、パットは正しい発音の仕方を指摘したが、レースは再度発音してみても、発音がまた間違っている。それを聞いたパットは笑いを込めながら、「pǎw-hûu～～～」というレースの間違った発音をわざと真似をした。この場合の繰り返しは、発話者が相手をからかったり、相手の発話について冗談を言ったりする目的として相手の発話を繰り返していると考えられる。

例（77）（パットの 3 歳の子供であるレースは（タイ語の）「アワビ」の発音が間違っている。）

エオヴァ　COPU
ウッディ「「AOVA」khuu？」
（＝「AOVA（エオヴァ）」って何？）

コラーゲン　コールドプレス　から　貝　アワビ　女性丁寧語　兄／姉　ウッディ
パット「khɔɔ-laa-ceen　sakàt-yen　càak　hɔ̌ɔy　pǎw-~~húu~~　khà　phîi　wúud-dîi.」
（＝ アワビから作ったコールドプレスコラーゲンです、ウッディお兄さん。）

パオ　フー　パオフー
レース「păw・・・hûu.　păw-hûu.」
（＝（「アワビ」の間違った発音をしている）。）

păw-húu　「húu」　否定　はい／そう　「hûu」
パット「păw-~~húu~~！“~~húu~~”　mây　chây　“hûu”」
（＝「păw-~~húu~~」！「hûu」じゃなくて、「~~húu~~」だよ。）

păw-hûu
レース「〈もう一度頑張って発音してみる〉păw-hûu～～～」
（＝（また間違った発音をする）。）

păw-hûu
パット「（笑）〈レースの真似をする〉**păw-hûu**～～～（笑）」
（＝（レースの間違った発音を真似する）。）　（Woody World　2019 年 11 月 3 日）

加えて、例（77）のような「からかい」としての繰り返しは、一見すると「感情の表出」の機能に見えるが、「からかい」の場合は、相手の発話だけではなく、相手が発話した際の表情や態度および声色までそのままわざと再現することが「感情の表出」との相違点である。また、第 4 章 4.2.7.項で述べたように「からかい」は「相手の発話の内容」について一切触れず、「相手が使用する表現」のみを問題とするということが「感情の表出」との異なる点である。

以上がタイ語の自然会話における繰り返しの機能であり、タイ語も日本語と同様に「時間稼ぎ」、「相手の発話の促進」、「説明要求／確認要求」、「感情の表出」、「あいづち」、「応答」および「からかい」という 7 つの機能を持つことがわかった。しかし、それぞれの機能の使用傾向については言語によって多少異なることがわかった。本調査の結果から「感情の表出」としての繰り返しが最も多く用いられることが観察され、日タイ両言語に共通していることが明らかになった。また、タイ語の自然会話では、「感情の表出」のほか、「応答」としての繰り返しの使用も多く見られ、「感情の表出」との差はほとんど変わらない。加えて、「あいづち」と「説明要求／確認要求」の使用も少なくないが、「感情の表出」と「応答」と比べると、相当に少ないことがわかった。一方、日本語の自然会話では「感情の表出」の次に際立って見えるのは「あいづち」および「応答」であり、両者の使用率はほぼ同程度である。また、タイ語と異なり、「説明要求／確認要求」の使用は非常に少ないことがわかった。

## 5.3. 日本語とタイ語のフィクション会話と自然会話における繰り返しの総合まとめ

第4章および本章の5.1.と5.2.節では、日本語とタイ語のフィクション会話および自然会話における繰り返しの機能と使用傾向についてそれぞれ分析し、会話ごとに両言語における繰り返しの機能と使用傾向の共通点と相違点について述べた。本節では、両言語のフィクション会話と自然会話で使用される繰り返しの全体的な共通点と相違点について簡潔にまとめて論じる。

以上で述べた繰り返しの機能の考察からわかるように、前後の文脈、発話者の態度や声色やイントネーションおよび相手の反応を考慮せずに機能を分析すると、不適切な判断に繋がる可能性が高いことがわかった。つまり、これらの要素は、繰り返しの機能を判断するには必要不可欠な要素であると言える。上述した日本語とタイ語のフィクション会話と自然会話における繰り返しの機能と使用傾向については、下記の表（15）のとおりにまとめることができる。

**表（15）　日本語とタイ語のフィクション会話と自然会話における繰り返しの機能と使用傾向**

| 日本語とタイ語のフィクション会話と自然会話における繰り返しの機能と出現率 | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| フィクション会話 | | | | 自然会話 | | | |
| 日本語 | | タイ語 | | 日本語 | | タイ語 | |
| 繰り返しの機能 | 出現率 | 繰り返しの機能 | 出現率 | 繰り返しの機能 | 出現率 | 繰り返しの機能 | 出現率 |
| 「感情の表出」 | 81%（549例） | 「感情の表出」 | 72.01%（427例） | 「感情の表出」 | 47%（178例） | 「感情の表出」 | 37%（74例） |
| 「時間稼ぎ」 | 3%（18例） | 「時間稼ぎ」 | 5.23%（31例） | 「時間稼ぎ」 | 7%（25例） | 「時間稼ぎ」 | 2%（4例） |
| 「相手の発話の促進」 | 1%（4例） | 「相手の発話の促進」 | 2%（11例） | 「相手の発話の促進」 | 2%（6例） | 「相手の発話の促進」 | 2%（3例） |
| 「説明要求／確認要求」 | 16%（108例） | 「説明要求／確認要求」 | 21%（124例） | 「説明要求／確認要求」 | 6%（21例） | 「説明要求／確認要求」 | 16%（32例） |
| | | | | 「あいづち」 | 20%（75例） | 「あいづち」 | 13.3%（27例） |
| | | | | 「応答」 | 19.3%（73例） | 「応答」 | 30.1%（61例） |
| | | | | 「からかい」 | 0.3%（1例） | 「からかい」 | 1%（2例） |
| 合計　＝　100%（679例） | | 合計　＝　100%（593例） | | 合計　＝　100%（379例） | | 合計　＝　100%（203例） | |

（総例文の小数点第3位を四捨五入）（出所：筆者作成）

表（15）からわかるように、日本語においてもタイ語においてもフィクション会話における繰り返しの機能は「時間稼ぎ」、「相手の発話の促進」、「あいづち」と「感情の表出」という5種類の機能が見られる。また、両言語の自然会話における繰り返しもフィクション会話と同様に「時間稼ぎ」、

「相手の発話の促進」、「あいづち」、「感情の表出」の機能が観察されたが、フィクション会話では見られない「あいづち」、「応答」、「からかい」という機能もあることがわかった。また、日本語とタイ語のフィクション会話における繰り返しは、「感情の表出」としての機能が最も多く見られ、他機能と比較すると使用率が圧倒的に多いことがわかった。特に、両言語のフィクション会話では、「感情の表出」としての繰り返しの使用率は際立って高い。加えて、フィクション会話においては、「説明要求／確認要求」という意図を伝達するのに繰り返しが使用される例文もしばしば見られるが、「感情の表出」と比べると、極めて少ない。つまり、両言語のフィクション会話における繰り返しの主たる使用目的は、発話者の感情または態度の表明である傾向が非常に強く、フィクション会話においては、最も重要な機能であると考えられる。このように、フィクション会話における繰り返しの機能および使用傾向または使用目的については、日タイ両言語に共通していることが明らかになった。

一方、日本語とタイ語の自然会話における繰り返しは、「感情の表出」のほか、「あいづち」と「応答」の機能も多く観察され、タイ語の場合は「説明要求／確認要求」の使用率も少なくない。日本語の自然会話では、「あいづち」と「応答」としての繰り返しの使用傾向は同程度であるのに対し、タイ語では、「あいづち」より「応答」の方が倍ほど多く見られ、「あいづち」と「説明要求／確認要求」の使用率には大きな差がないことがわかった。要するに、両言語の自然会話における繰り返しの主な使用目的は、発話者の感情を表出したり、会話に積極的に参加していることを示したり、相手からの質問に対して応答したりすることであることが明らかになったのである。この点については、日本語とタイ語の共通点である。一方、相違点としては、タイ語のフィクション会話では、相手から説明または確認を求めるということも見られる。このように、自然会話における繰り返しの機能については、日タイ両言語に共通しているが、使用傾向あるいは使用目的に関しては両言語において多少異なることが明らかになった。

加えて、両言語ともにフィクション会話と自然会話では、繰り返しにおける「感情の表出」の機能が頻繁に使われることがわかったとは言え、会話の種類によって「感情の表出」の使用目的は全く異なる。日本語とタイ語のフィクション会話における「感情の表出」としての繰り返しの目的は、下記に挙げた例（50）と例（71）のように、もっぱら発話者の感情を明示的に表出するために使用されることがわかった。また、発話者が表出する感情は「不満」、「怒り」や「非難」などというマイナス傾向がほとんどである。

例(50)（半沢がマキノ精機という会社に3千万の融資をしようとするが、江島が反対している。）

**江島**「わかっとらんな。先のことなんてどうだっていいんだよ！期末まであと1週間しかないんだぞ、1週間。本部から言われた目標融資額100億円を達成するにはあと5億足りないんだ。たかが3千万程度のちっぽけな融資じゃ焼け石に水なんだよ！」

**半沢**「〈大きな声で〉ちっぽけ！？*そう考えるのは悪しき銀行の勝手な論理というものでしょう。*」

（半沢直樹　第1話）

例（71）（エドワードが一人で現場にいるが、コンキアト以外の人はもう宿泊テントに戻った。）

感動詞　他の人　消える　行く　どこ　一緒に　すべて　終助詞

**エドワード**「hɤ́ɔy！khon-ùun　hǎay　pay　nǎy　kan　mòt　nîa！」

（＝ おい！他の人たちはどこに行ってしまったんだよ！）

フィラー　戻る/帰る　宿泊テント　男性丁寧語

**コンキアト**「ɔ̀ɔ・・・〈怯えている表情〉klàp　khɛɛm　khráp」

（＝ えーと・・・〈怯えている表情〉宿泊テントに戻りました。）

戻る/帰る　宿泊テント　感動詞　じゃ　私　無現実

**エドワード**「〈不満げな顔をしながら、大きな声で〉klàp　khɛ́ɛm！？*wóo！　lɛ́ɛw　chán　cà*

戻る/帰る　どうやって　終助詞　終助詞

*klàp　yaŋŋay　nîa　há*！」

（＝〈不満げな顔をしながら、大きな声で〉宿泊テントに戻った！？*おい！じゃ、俺にどうやって帰れっていうんだよ*！）

（Khun Chai Tarathorn　第5話）

一方、両言語の自然会話における「感情の表出」の機能の目的は、「面白がり」や「ユーモア」または相手との「一体感・共感」を表出するために用いられる。また、フィクション会話とは異なり、繰り返しを使用することによって発話者の「不満」や「怒り」などのようなマイナス的意味の感情を表出し、相手を非難するというような例文はほとんど見られなかった。たとえ発話者が相手への非難の気持ちを表明するとしても、次の例（78）のように必ず「笑い」が後続し、最終的には非難の表明から面白がりの表明へ移行していく。このような会話の展開は、両言語のフィクション会話では全く見当たらなかった。

例（78）（上田は岩田の家がお金持ちであることを聞き、岩田に自分がお金持ちであることを証明できるものはあるかについて尋ねている。）

**上田**「あのー、例えば、こういうものが建てる、プールがあるとかさ、

**堀**「うん。」

**上田**「テニスコートがあるとかさ、

**堀**「車何台とか。」

**上田**「ライオンの口から、あのーお湯が.....」

**岩田**「そうですね・・・(考える)・・・」

**上田**「それで言うと何があった？」

**岩田**「犬の...置き物がありますね。

**一同**「【(笑)】」

**岩田**「【に..庭に】。」

**上田**「犬の置き物？ *あ、それはお金持ちだ。〈大きな声で〉わかるか！それは！！(笑)*」

**一同**「(笑)」　（しゃべくり 007　2015 年 1 月 19 日）

このように、フィクション会話に出現する「感情の表出」と自然会話に出現する「感情の表出」は全く異なる使用目的を持つことが明らかになった。日本語においてもタイ語においても、フィクション会話で用いられる「感情の表出」としての繰り返しの使用目的は、発話者の感情や態度を明確に表出するためである。それに対して、自然会話で用いられる「感情の表出」の使用目的は、相手との一体感を作り、会話の場を盛り上げるためであることが予測される。この点については、フィクション会話と自然会話それぞれの会話の目的に関連していると考えられる。自然会話の目的は、他人との人間関係を保つことであるため、円滑なコミュニケーションを築くことが必要不可欠であると言える。したがって、自然会話においては、繰り返しにおける「感情の表出」の機能のほか、会話に積極的に参加していることを示すという「あいづち」および「応答」が多く用いられるのではないかと考えられる。加えて、日本語とタイ語の自然会話では、日常会話の中で重要な要素の一つであるあいづち詞の使用が、合計 15 時間の中でそれぞれ 6,721 回と 4,152 回も観察され、極めて多いことがわかった。また、両言語の自然会話では繰り返しにおける「あいづち」の使用が見られたとしても、あいづち詞の使用と比較すると、圧倒的に少ない。一方、フィクション会話の目的は、登場人物の間との一体感や人間関係を保つのではなく、第三者または視聴者に向けて演技をし、発話者が演じるある人物の感情や態度を視聴者へ伝達する目的である。そのため、フィクション会話においては、発話者の表情や態度などを明示的に伝達するために、発音およびことば内容が明確である繰り返しを使用し、発話者の感情をより明示的に表明するのではないかと考えられる。実際、発音や意味内容が曖昧であるあいづち詞の使用は管見の限り見当たらなかった。このことから、会話の種類の違いによって繰り返しが果たす機能および使用傾向が異なることが明らかになった。

さらに、本研究においては、フィクション会話では日本語は93時間、タイ語は97時間の会話データから、自然会話では日本語は15時間、タイ語は15時間の会話データから繰り返しを収集した。つまり、会話の種類では、会話データの時間はほぼ同時間数である。また、フィクション会話と自然会話では、場面設定、状況、会話の目的、発話当事者の間の会話量、会話の進行の仕方という両種類の会話の性質が完全に異なる。このことは、一見すると、フィクション会話と自然会話でデータ時間数に大きな差があることとも関連する。つまり、フィクション会話のデータの時間数は自然会話より圧倒的に多く見えるかもしれないが、自然会話とは異なり、フィクション会話では発話者がずっと話し続けるのではなく、悲しんだり、寂しんだりするような表情、振る舞いや身振りだけで演じている時間数もカウントされる。実際、表（10）からわかるように、フィクション会話において繰り返しの使用数は、日本語とタイ語はそれぞれ679例と593例が観察され、両言語においてはそれほど大きなは見られなかった。しかし、自然会話では繰り返しの使用数は、日本語では379例、タイ語には203例が観察され、日本語はタイ語の使用数よりほぼ2倍上回ることがわかった。このように、フィクション会話においては、繰り返しの使用率および使用目的は両言語に共通していることが明らかになった。すなわち、両言語においてドラマなどを脚本化するには、繰り返しは登場人物の感情に深い関わりがあり、フィクション会話では必要不可欠な感情表現の一つであると言える。一方、自然会話では繰り返しの使用頻度については、タイ語より日本語の方がかなり多く見られる。この点については、第2章2.1.2.項で取り上げた先行研究にも指摘があり、岡部（2003）、藤村（2012）とMachi（2012）は、日本人と英語圏の外国人留学生の繰り返しの使用について調査を行った。結果として、日本人の方が圧倒的に繰り返しを多く使用していることがわかったと述べている。また、日本人が用いる繰り返しの目的は相手との一体感を作り、会話に参加するのであると説明している。それに対して、英語圏の外国人留学生が使用する繰り返しの目的は相手から説明または確認を求めることがほとんどであると述べている。このことから、タイ語母語話者の繰り返しの使用については、どちらかと言えば、英語圏の外国人に類似していることが推測される。加えて、本調査から日本語の自然会話で見られたあいづち詞の使用数（6,721回）を見ると、実際の会話では日本語母語話者はかなり積極的に会話に参加する傾向が強いと考えられる。よって、タイ語より日本語の方が、繰り返しにおける「感情の表出」、「あいづち」、「応答」が多く用いられ、相手との一体感を作り、会話に積極的に参加したりする目的として使用されていると推論される。

最後に、以上の例文から自然会話においては、発話の重複（オーバーラップ）および言い間違いあるいは言い直しの使用が頻繁に現れることが観察された。それに対して、フィクション会話においては、言い間違いあるいは言い直しは全く見当たらず、発話の重複は日本語とタイ語のドラマおよび

アニメ資料の中では2例しか見当たらなかった。この点については、両種類の会話の性質に関わりがあることが明らかになった。上記で述べたように、自然会話はフィクション会話と異なり、発話者による発話はシナリオに操作されるものではなく、それぞれの時点で感じているまたは思っていることをそのまま表明するのである。そのため、発話の重複や言い間違いや言い直しが頻繁に現れるのが通常であると言える。一方、フィクション会話の目的は視聴者にそれぞれの作品のストーリーを提供することであるため、演出者のことば遣いや発音などを明示的に伝達する必要がある。よって、脚本を執筆する際には、視聴者の聞き取りの妨げになる発話の重複や言い間違いまたは言い直しを避けるのではないかと考えられる。たとえ発話の重複の使用があるとしても、以下の例（79）のように、4人の発話者の発話が同時に完璧に重なっていることがわかった。

例（79）（タラートーンは自分が結婚することにしたと、みんなに告げた。）

（一番上の）兄　男性丁寧語　話す　と　弟／妹　マプラーン（名前）　すでに　どうなの
ロンナピー「phîi-chaay-yày khráp. khuy kàp nɔ́ɔŋ máprraaŋ lɛ́ɛw pen-ŋay-bâaŋ
男性丁寧語
khráp？」

（＝ 兄貴。マプラーンちゃんと話してみてどうでしたか？）

兄／姉　思う　私たち　急ぐ　帰る／戻る　一緒に　終助詞　兄／姉　非現実　行く　告げる　おばあ様
タラートーン「phîi wâa...phûakraw rʉ́ip klàp kan thɔ̀. phîi cà pay rian mɔ̀m-yâa
こと　準備　開催　式　結婚
rʉ̂aŋ triam càt ŋaan tɛ̀ŋŋaan.」

（＝ 俺たち、早く家に帰ろう。俺はおばあ様に結婚式の準備について、話そうと思っているんだ。）

パウォンルット・プッティパット・ラッチャーノン・ロンナピー「〈嬉しそうな顔をしながら、4人が同時に大きな声で〉**tɛ̀ŋŋaan**！？」

（＝〈嬉しそうな顔をしながら、4人が同時に大きな声で〉 **結婚**！？）

（Khun Chai Tarathorn　第10話）

しかし、自然会話では、例（79）のように複数の発話者による発話が完璧に重なっているのは、非常に稀であり、ほとんどあり得ないと言っても過言ではないだろう。つまり、このような発話の重複はフィクション会話特有のものであると考えられる。

# 第 6 章　繰り返しにおける「感情の表出」と発話者の態度

第 4 章と第 5 章では、フィクション会話と自然会話という会話の種類によって繰り返しはどのような機能を果たすのかについて、考察を行った。また、日本語およびタイ語のフィクション会話と自然会話における繰り返しの機能および使用傾向について、どのような共通点と相違点が見られるのかについて詳細に論じた。本調査の結果から、両言語のフィクション会話においても自然会話においても繰り返しは、「感情の表出」としての使用が最も際立って見られることが確認された。つまり、両言語のフィクション会話と自然会話における繰り返しは、発話者の感情に強く結び付いているのではないかと考えられる。しかし、第 2 章 2.5.節で述べたように、発話者が「驚き」や「不満」などの感情を表明する際は、必ずしも繰り返しを使用しなくても、感動詞あるいは別の表現を用いてもよいはずである。したがって、わざわざ同じことを繰り返すのは、相手の発話のある特定の部分に対して問題を感じたり、気になったりするからではないかと考えられる。以下の例（51）と例（80）を考えてみよう。

例（51）（エリカという女性は蔵本の娘であるが、顔は全く蔵本と似ていなく、名字も異なる。）

**泰山**「その・・・エリカとはどういう関係なんだ？ 愛人か？」

**蔵本**「君の頭には色事しかないのか？ エリカは僕の娘だよ。」

**泰山**「〈びっくりした顔をしながら、大きな声で〉娘！？」

**蔵本**「*エクスワイフとのな。だからラストネームが違うんだ*。」　（民王 第 4 話）

例（80）（しんちゃんは名刺を作っている。）

**美冴**「あ～あ、散らかして。何を始めたの？」

**しんちゃん**「名刺作ってる。」

**美冴**「〈戸惑い顔をしながら〉名刺？ *また何か新しい遊びが流行ってんのかな*？」

（クレヨンしんちゃん）

例（51）と例（80）における繰り返しは両方、「感情の表出」の機能を果たすものである。それぞれの例文における繰り返し発話の部分を見ると、相手の発話のある部分が発話者にとっては予想外または不意打ちの出来事ではないかと考えられる。つまり、繰り返しによって、発話者の「意外感」を表明するのではないかと思われる。そしてその直後に、繰り返し発話に対する発話者の態度が示され

ていると思われる。換言すれば、繰り返しを行った詳細な理由とも言えよう。例（51）では、繰り返された発話に対する不信感を示しているのに対し、例（80）では疑わしく思う気持ちを表していると考えられる。このことから、繰り返しにおける「感情の表出」によって、発話者の様々な態度が表される。この点から、繰り返しの持つ「感情の表出」については詳細な検討が必要であると言える。

本章では、繰り返しにおける「感情の表出」による発話者の態度の種類について、詳しく分析していく。具体的には、6.1.で繰り返しにおける「感情の表出」の基本的感情と言える意外感について、例を挙げながら説明し、本研究における意外感を定義する。6.2.で繰り返しによって生じる発話者のポジティブな態度を、6.3.でネガティブな態度を、6.4.で中立的態度について詳細に示す。そして、6.5.で日本語とタイ語のフィクション会話と自然会話における「感情の表出」について考察し、両言語における相違点および会話の種類による相違点を明らかにしていく。

## 6.1. 繰り返しにおける「感情の表出」と意外感について

第4章の4.1.4.項で説明したように、繰り返しにおける「感情の表出」は、他機能と異なり、相手から情報を要求したり、相手の話を促したり、あいづちを打ったり、応答したりする意図を持って相手の発話を繰り返しているのではない。発話者は相手が言ったことに対してある種の感情を表明し、相手にそれらの感情を伝達するために、繰り返しを使用していると言える。「感情の表出」が他の機能と異なるのは、発話者の感情がより顕著に現れ、発話者の感情や態度、または語調、声色やイントネーションなどが発話に非常に強く関連している点である。

しかし、既に述べたように、実際の会話における発話で発話者の感情を表出するには、わざわざ相手の発話を繰り返さなくても、感動詞が使用できるのである。それにもかかわらず、わざわざ相手の発話を再現するのは、発話者にとってその発話に問題を感じたり、気になったなりするという意味合いが、強く含まれているのではないかと考えられる。以下の例（81）と例（82）を詳しく見てみる。

例（81）（羽生は黛のことをいつも「黛」という名字と呼んでいたにもかかわらず、急に「真知子」という黛の名前を呼んだ。）

**黛**「世界遺産に登録されて本当によかった。」

**羽生**「聞けば真知子のお父さんの田舎の近くだそうで。」

**古美門・服部**「〈唖然とした顔をしながら、二人が同時に〉真知子？」

（リーガル・ハイ（第2期）第8話）

例（81）では、羽生はいつも黛のことを「黛」という名字で呼んでいるが、今日は急に「真知子」という黛の名前を呼んでいる。それを聞いた古美門と服部にとっては、不意打ち的発言であるため、唖然とした顔をしながら、「真知子？」という羽生の発話を疑問形式で繰り返している。その繰り返しの発話によって、「なぜ急に名前で呼んでいるのか」という羽生のことば遣いに対して意外性を感じていることを表している。

例（82）（ひろしは旅館で会ったおじいさんのことについて、主人と話している。）

**ひろし**「こちらに来てからおじい様にお世話になってます。」

**主人**「〈びっくりした顔をしながら、大きな声で〉おじいちゃん！？ *おじいちゃんは2年前に亡くなりましたけど*・・・」

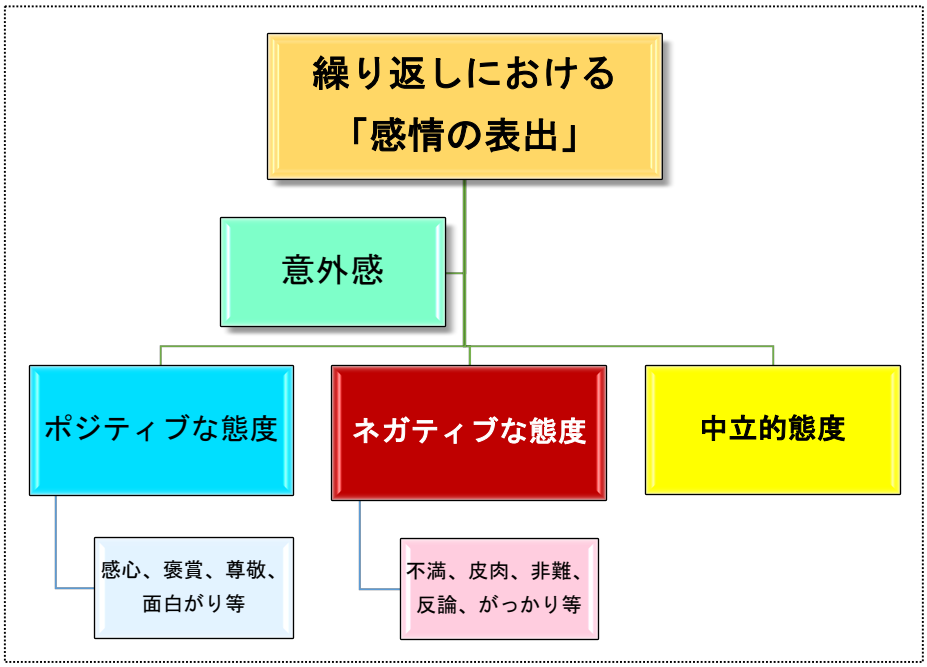
**ひろし**「〈驚いて、大きな声で〉 え！？」　（クレヨンしんちゃん）

また、例（82）も同様に、ひろしはここに来てから主人のおじいさんにお世話になっていると主人に伝えた。しかし、実際主人のおじいさんは2年前に亡くなっていたことを弘は知らなかった。そのため、「おじい様」ということばは、主人にとって不意打ち的発言であるため、「おじいちゃん？」というひろしの発話を繰り返している。その繰り返しの発話によって、ひろしが言っていた「おじい様」の発話に対して意外感を表明していると考えられる。その直後に、「おじいちゃんは2年前に亡くなりましたけど」と発言し、ひろしの発話に対する否定のニュアンスも含まれていると言える。加えて、例（82）のような繰り返しの現象は、第2章で述べている安達（1989）による「問い返し疑問文とダイクシスの形式」という理論で説明することができる（第2章pp.21-22参照）。安達によれば、発話者が相手の「直前の発話のコトガラ的意味内容を問題にする」場合は、発話者は相手のそのままの形式を用いることができず、ダイクシスの形式を変更しなければならないと述べている。例（82）では、主人はひろしの発話の意味内容を問題にするため、「おじい様」ということばの代わりに「おじいちゃん」ということばにダイクシスの形式を変更している。

以上の例（81）と例（82）から、先行発話の内容は、必ず発話者にとって予期していないことであることが観察された。また、発話者は繰り返しを用いることによって、相手の発話のある部分に対して不意打ちされたことという意外性を表していることが確認された。加えて、例（82）で出現する「え！？」という感動詞も発話者の感情を表明することができると見られる。しかし、感動詞を用いると、発話者が相手の発話のどの部分に対して感情を表すのかが不明瞭になるのではないかと考えられる。一方、繰り返しを使用すると、発話者は相手の発話のどの部分が気になっているのかについ

て、明示的に示すことができると思われる。さらに、例（82）を見てみると、発話者は繰り返しで意外感を表明した直後、「おじいちゃんは2年前に亡くなりましたけど」と相手の発話に対する否定を表している。このことから、繰り返しにおける「感情の表出」は、発話者が相手の発話のある部分に対して「意外感」を感じたことを表明すると考えられる。すなわち、繰り返し発話に「相手がこのような発言をするとは思わなかった」という意味合いが含まれるのである。そしてその直後に、その部分に対する具体的な理由などを表出するのではないかと考えられる。

そこで、本研究における意外感を、次のとおりに定義しておきたい。本研究における意外感とは、「予期していなかったこと、または想定していること、期待していること対立する事実に直面した時に起こる感情」と定義づける。そして、発話者が不意打ちを受けたことによって意外性が生じるため、相手の発話の直後を繰り返し、意外感を表明するのである。また、繰り返しにおける「感情の表出」は、相手のことば遣いや表現の仕方を問題にするという「相手が使用する表現」に対する感情と、「相手の発話の内容」に対する感情の2種類に分けることができる。前者は上の例（81）、後者は上の例（82）に示している。また、本調査から、繰り返しにおける「感情の表出」による発話者の態度は下記の図（3）のように整理される。相手の発話は発話者にとって好ましいあるいは感心することであるという「ポジティブな態度」、発話者にとって好ましくないことあるいは不愉快であることという「ネガティブな態度」、ポジティブでもネガティブでもどちらとも言えず、単に発話者が相手に意外感を表明するだけのであるという「中立的態度」の大きな3種類に分類することができる。




**図（3）　繰り返しにおける「感情の表出」による発話者の態度の種類**　　（出所：筆者作成）

## 6.2.「感情の表出」によるポジティブな態度

繰り返しにおける「感情の表出」によるポジティブな態度は、相手が言ったことが発話者の想定していること、あるいは期待していることとは対立するが、そのことは発話者にとって好ましいことであるため、相手の発話を繰り返すことで、「喜び」、「感心」、「褒賞」、「尊敬」、「面白がり」、「賛成」などのポジティブな態度を表すものである。例えば、以下の例（83）のような場合である。

例（83）（紀介はみんなに徳松家秘伝の最高級料理を食べさせようとしている。）

**紀介**「先生、お夜食などいかがですか？」

**蘭丸**「ハハッ。ありがたい。」

**古美門**「いやいや。もう私ワラビでしたらもう。」

**紀介**「では、徳松家秘伝の最高級料理は？」

**古美門**「〈嬉しそうな顔をしながら、大きな声で〉**最高級**！？ *ぜひお願いします*！」

（リーガル・ハイ（第1期）第7話）

例（83）では、徳松家の食事は毎日ワラビばかりであるため、古美門はそれを嫌がっている。しかし、今回は「最高級料理」のようであり、古美門の想定と対立しているため、意外性が生じているのである。加えて、相手の発話は古美門にとって非常に望ましいことであるため、嬉しそうに「最高級！？」と繰り返すことによって、意外感を表明している。その直後に、「ぜひお願いします！」と「最高級」に対して感心する気持ちを表明している。

## 6.3.「感情の表出」によるネガティブな態度

繰り返しにおける「感情の表出」によるネガティブな態度は、相手の発話が発話者の認識や想定していること、あるいは期待していることと対立し、相手の発話は発話者にとって好ましくないことであるため、相手のことばを繰り返すことで、「不満」、「怒り」、「嫌悪感」、「がっかり」、「皮肉」、「軽視」、「非難」、「切ない」、「悲哀」、「不同意」、「反論」などのネガティブな態度を表出するものである。以下の例（84）は、繰り返しにおける「感情の表出」によるネガティブな態度を示している。

例（84）（羽根専務は、湯浅社長の代わりに伊勢島ホテルの営業者になろうと発言している。）

**羽根**「ご心配なく、ここは私が守ります。」

**半沢**「あなたに守れるとは思いません。」

**羽根**「一族経営なんていう愚かなしきたりで選ばれた社長よりはましだと思うけど。」

**半沢**「しかし、湯浅社長はあなたにはないものを持っています。」

**羽根**「何かしら？」

**半沢**「誠実さです。ホテルという接客業をする上でそれは何よりも大切なものだと思います。」

**羽根**「(嘲笑) 誠実さ？ *そんなものでこのホテルが100年もやってこれたと思ってるの*？」

(半沢直樹 第9話)

例（84）では、羽根は、伊勢島ホテルの社長である湯浅社長の代わりに、自分が次期社長になると発言している。一方、半沢はそれに反対し、湯浅社長は羽根と異なり、「誠実さ」を持っていると言っている。しかし、羽根は「誠実さ」で伊勢島ホテルが今まで営業し続けられたわけではないと考えるため、半沢の発話と自分の考えとの間に対立を感じた。そのため、羽根は半沢が言っていることに対して嘲笑し、「よくそんなことが言えるね」という皮肉を込めつつ、「誠実さ？」と繰り返しながら、半沢の発話に対して受け入れたくない気持ちを表明している。その直後に、「そんなものでこのホテルが100年もやってこれたと思ってるの？」と、反語疑問の形で、「誠実さ」に対して反論している。

## 6.4. 「感情の表出」による中立的態度

繰り返しにおける「感情の表出」による中立的意味の感情は、相手が言ったことが発話者の想定していること、期待していること、あるいは事実と対立はするが、上の6.2.と6.3.とは異なり、そのことが発話者にとってポジティブの意味でもネガティブの意味でもなく、どちらの立場にも加担せずに、ポジティブな態度およびネガティブな態度の間に位置する。つまり、発話者は単に相手の発話に対してただ意外感を感じることを表明しているのではないかと考えられる。例えば、以下の例（85）のような場合である。

例（85）（ひろしは会社の人にお土産を選んでいるが、なかなか決まらない。）

**美冴**「もうなんだっていいじゃないそんなもん。」

**ひろし**「なんだっていい？ お前は給湯室の恐ろしさを知らないなー。」

**美冴**「〈戸惑い顔をしている〉 給湯室？ *あーそうね。確かにOL時代、つまんないお土産買ってきた上司を裏でいろいろ文句言ってたわね。*」

ひろし「だったら俺のプレッシャーわかるだろう？」　　（クレヨンしんちゃん）

例（85）では、会話中にひろしが突然「給湯室」に話題を転換したせいで、美冴は意外に感じてしまった。また、「給湯室」ということばは美冴にとって予期されていなかったことであるため、対立が生じていると言える。そのため、ひろしのことばを繰り返しているが、単にひろしから説明を求めているのではなく、自分が意外感を感じたことを表明しているのである。しかし、この場合は美冴がひろしのことばを繰り返したのは単に「なぜ急に「給湯室」と言っているのか」あるいは「「給湯室」と会社に持って行くお土産とはどのような関係があるのか」のような意味合いであると言える。要するに、発話者が単に意外であると相手に伝達するだけであり、ポジティブの意味ともネガティブの意味ともどちらとも言えず、中立的意味の感情を表しているのではないかと考えられる。

## 6.5. フィクション会話と自然会話における「感情の表出」の相違点

以上の分析からわかるように、繰り返しにおける「感情の表出」の機能による発話者の主たる感情は、「意外感」という感情であることが確認された。また、「感情の表出」による発話者の態度は、ポジティブな態度、ネガティブな態度、中立的態度の大きな3種類に分けられる。しかし、第5章5.3.節で多少触れたように、フィクション会話と自然会話とも両方、繰り返しにおける「感情の表出」の機能が最も多く使用されるが、会話の種類によって「感情の表出」の使用目的は全く異なる。言い換えると、それぞれの会話において、発話者が表出する態度の傾向が異なる。本節では、日本語とタイ語のフィクション会話と自然会話における「感情の表出」としての繰り返しについて、詳細に分析していく。そして、両種類の会話の相違点を明らかにしていきたい。

### 6.5.1. フィクション会話における「感情の表出」による発話者の態度

第4章と第5章の調査結果から、日本語とタイ語のフィクション会話における「感情の表出」としての繰り返しの例文は、それぞれ549例と427例観察された。フィクション会話における「感情の表出」は、繰り返しの総例文の半分以上を占めており、繰り返しの機能の中で最も多く用いられることがわかった。また、両言語における「感情の表出」の例文を考察した結果、フィクション会話の中で使用される「感情の表出」は、ポジティブな態度、ネガティブな態度、および中立的態度の3種類とも使用されていることが確認された。次の例（86）と例（87）は日本語とタイ語におけるポジティブな態度、例（39）と例（88）はネガティブな態度、例（80）と例（89）は中立的態度を示している。

ポジティブな態度

例（86）（古美門弁護士は今回の裁判について話している。）

古美門「私まだ負けてないし、負けそうな訴訟を敬遠したこともない。どんな訴訟も必ず勝ってきたんだ！」

羽生「そうですよね。鮎川なんて目じゃないですよね。」

古美門「鮎川なんてデコピン一発でキャインキャインだ。」

本田「〈ワクワクしながら、大きな声で〉デコピン一発で！？」

古美門「キャインキャインだ。」

本田「すっごー〜い！」　（リーガル・ハイ（第2期）第2話）

例（86）では、古美門弁護士は今回の裁判について話しており、相手側の弁護士である鮎川を「デコピン一発で」倒せると自信満々に言っている。しかし、本田は鮎川という人は「デコピン一発で」単純に倒せる人物ではないと思っており、自分の考えと対立している。ところが、そのことは本田にとって素晴らしいことであると考えているため、「デコピン一発で！？」と繰り返し、それに対して「デコピン一発で鮎川を倒せるなんてすごい！」というような意味合いで意外感の表明をしながら、古美門のことに「褒賞」や「尊敬」などというポジティブな態度を表明している。

例（87）（チャナはスという女性が好きだが、スはウアという男性と付き合っていると思っている。）

チャナ「〈悲しそうな顔をしながら〉 nâa-sĭa-daay（残念） caŋ（終助詞） ná（終助詞） khráp（男性丁寧語） thîi（関係節） khun-sŭ（スさん） mii（ある） khon（人） pay（行く） sòŋ（送る） sá（終助詞） lɛ́ɛw（すでに）.」

（＝〈悲しそうな顔をしながら〉 スさんはもう家まで送ってくれる人がいて、残念ですね。）

ゲーンロン「phîi-ûa（ウアお兄さん） kháw（彼／彼女） pen（である） phîi-chaay（兄） khɔ̌ɔŋ（所有） (dèk)（(子供)） sɔ̌ɔŋ（二つ） khon（人） níi（この） nà（終助詞） khà（女性丁寧語）. taam（従う） sàk（身分） lɛ́ɛw（接続詞） kháw（彼／彼女） kɔ̂ɔ（接続詞） pen（である） lûuk-líaŋ（継息子） khɔ̌ɔŋ（所有） khun-sŭ（スさん） khà（女性丁寧語）.」

（＝ ウアお兄さんは、この二人（の子供）のお兄さんなんですよ。つまり、身分としては、彼はスさんの継息子なんです。）

チャナ「〈嬉しそうな顔をしながら〉 lûuk-líaŋ（継息子）？ oo-kay（オーケー） khráp（男性丁寧語）（ニコニコ）」

（＝〈嬉しそうな顔をしながら〉 継息子？ オーケー（了解）です（ニコニコ）。）

（Yah Leum Chan　第5話）

また、例（87）のタイ語も同様に、チャナはスという女性のことが好きだが、彼女がウアという男性と付き合っていると思っている。しかし、ゲーンロンは、ウアはスの継息子であるとチャナに教えた。そのため、ゲーンロンの発話はチャナの認識と対立しており、意外性が生じている。その結果、チャナは嬉しそうに「lûuk-líaŋ（継息子）」と繰り返し、意外感を表明している。その直後、チャナはニコニコしながら、「oo-kay　khráp（オーケー／了解です）」と「継息子」に対して嬉しいという気持ちを表明している。

ネガティブな態度

例（39）（泰山と綾は夫婦で、泰山が綾に貸した 1 億円の返還を求めている。）

**泰山**「綾・・・1 億円返してくれ。」

**綾**「あら。」

**泰山**「どうした？」

**綾**「もう使っちゃった。」

**泰山**「〈不満げな顔をしながら、大きな声で〉使っちゃった！？ *使っちゃったって お前・・・。*（綾を殴ろうとしている）*い・・・1 億だぞ*！？ *1 億だぞ*? *どういうことだ*? *それ！*」　（民王 第 8 話）

例（39）では、泰山は綾に 1 億円を返してほしいが、綾はそのお金をもう使ってしまったと言っている。泰山の表情、態度、声色および繰り返し発話後の文脈を考慮すると、泰山は、綾がそんな多額のお金を短期間で使ってしまうことは予想しておらず、自身の想定と対立している。そのため、泰山は「使っちゃった！？」と繰り返し、かなり怒りながら、「1 億円だぞ？ そんな多額のお金を短期間で全部使うわけないだろう？」という意味合いで綾を非難している。

例（88）（デンチャンとレーヤーが喧嘩しており、デンチャンの友人であるナルディーは二人の喧嘩を止めようとしている。）

| | あなた | 接続詞 | 知る | 家 | この | 町 | この | よく | 終助詞 | 否定 | 怖い | ということは |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| デンチャン「 | thəə | kɔ̂ɔ | núucàk | bâan | níi | mɯaŋ | níi | dii | nì. | mây | klua | sadɛɛŋ-wâa |
| | 強い | 相当 | 残念 | 愚か | 行く | 少々 | 関係節 | 喧嘩を売る | と | 人 | 関係節 | 否定 |
| | kèŋ | phɔɔ-tua. | sĭa-daay | ŋôo | pay | nɔ̀y | thîi | hăa-rûaŋ | kàp | khon | thîi | mây |
| | すべき | 喧嘩を売る | 一緒に | | | | | | | | | |
| | khuan | mii-rûaŋ | dûay」 | | | | | | | | | |

（＝ あなたはこの町のことをよく知っているはずだ。（私のことが）怖くないということは、相当強い

ということなんだね。残念だけど、喧嘩をするべきではない相手と喧嘩してしまったのはかなり

馬鹿げているわよ。）

デン（名前） 私 お願い 終助詞 終助詞 しないで 喧嘩を売る 全く 許す 彼／彼女
ナルディー「dèn chán khɔ̌ɔ-rɔ́ɔŋ thɔ̀ ná yàa mii-rûaŋ ləəy hây-aphay kháw
終助詞 彼／彼女 まだ 若い 状態を表す
thɔ̀ kháw yaŋ dèk yùu」

（＝ デン。お願いんだから、喧嘩はやめてよ。彼女はまだ若いから、許してあげなさい。）

許す どういう意味 どのように
レーヤー「〈不満げな顔で、大きな声で〉 **hây-aphay**！？ *mǎay-khwaam-wâa* *yaŋ-ŋay*！？
私 する 何 間違い まで 非現実 なければならない 許す ある だけ
*chán tham àray phìt thuŋ̌ cà tɔ̂ŋ hây-aphay？ mii tɛ̂ɛ*
私 終助詞 非現実 許す 友達 あなた 見える 疑問文文末助詞 COPU 来る
*chán sì cà hây-aphay phuûan khun hěn máy wâa maa*
喧嘩を売る 私 先 終助詞
*hǎa-ruûaŋ chán kɔ̀ɔn à*！」

（＝〈不満げな顔で、大きな声で〉 **許す**！？ *どういう意味*！？ *私、何か悪いことをしたって言うの*！？

*私こそ許す側なんだよ。あなたの友達は先に喧嘩を売ってきたんだから*！）

（Dok Som See Thong　第 3 話）

また、例（88）のタイ語では、デンチャンとレーヤーが喧嘩しており、二人の喧嘩を止めようとしているナルディーは、デンチャンにレーヤーを許してあげなさいと言った。しかし、レーヤーは自分は何も悪くないと思っているため、「hây-aphay（許す）」というナルディーの発話はレーヤーの考えと対立している。よって、レーヤーは不満そうな顔をしながら、「hây-aphay！？（許す！？）」と大きな声で繰り返すことによって、「こっちは何も悪くないから、許すなんて必要はない」という意味合いで意外感を表しながら、ナルディーの発話に対して反論や非難というネガティブな態度を表明している。

**中立的態度**

例（80）（しんちゃんは名刺を作っている。）

美冴「あ～あ、散らかして。何を始めたの？」

しんちゃん「名刺作ってる。」

美冴「〈戸惑い顔をしながら〉 **名刺**？ *また何か新しい遊びが流行ってんのかな*？」

（クレヨンしんちゃん）

例（80）では、しんちゃんは母である美冴に「名刺」を作っていると言っているが、美冴は幼稚園児であるしんちゃんに名刺が必要であるとは思えない。そのため、しんちゃんが言ったことは美冴の想定と違っており、意外性が生じている。そして、美冴は「名刺？」としんちゃんのことばを疑問形で繰り返し、「幼稚園児には名刺は必要ではないのに、なぜ「名刺」を作っているのか」のような意味合いで、意外感を表明している。ところが、それについて美冴にとっては、ポジティブの意味もネガティブの意味も生じさせるものではなく、単に「また何か新しい遊びが流行ってんのかな？」という意外感である中立的態度を表明しているだけであると見られる。

例（89）（パウォンルットという男性の婚約者について話している。）

それで　結局　彼女　愛する　ルット坊ちゃん　確実に　疑問文文末助詞　女性丁寧語
ヌーアーイ「lɛ́ɛw　tòkloŋ　thəə　rák　khun-chaay-rút　nɛ̂ɛ　rɤ̌ɔ　khá？」
（＝ それで結局、彼女はルット坊ちゃんのことを本当に愛しているんですか？）

彼女　言う　そのように　終助詞　しかし　変　時　関係節　彼女　教える　COPU　彼女　愛する
ワンラサー「thəə　wâa　yàaŋ-nán　ná.　tɛ̀ɛ　plɛ̀ɛk　tɔɔn　thîi　thəə　bɔ̀ɔk　wâa　thəə　rák
坊ちゃん　同じ　彼女　暗記　来る　そのように　終助詞
khun-chaay　mŭan　thəə　thôŋ　maa　yàaŋ-nán　lɛ̌」
（＝ 彼女はそう言ったわよ。でも、彼女は坊ちゃんのことを愛していると言った時に、まるで暗記してきたように喋っていたみたい。）

暗記
ヌーアーイ「〈戸惑い顔をしながら〉thôŋ？」
（＝〈戸惑い顔をしながら〉 暗記？）

ところ　変　さらに　種類　時　関係節　彼女　知る　COPU　坊ちゃん　まだ　否定　帰る／戻る
ワンラサー「thîi　plɛ̀ɛk　ìik　yàaŋ.　tɔɔn　thîi　thəə　rúu　wâa　khun-chaay　yaŋ　mây　klàp
彼女　見る　ほっとする　どのような　教える　否定　正しい
thəə　duu　lôoŋ-òk　yaŋŋay　bɔ̀ɔk　mây　thùuk.」
（＝ それにもう一つ変なのは、坊ちゃんがまだ帰ってきていないことを聞いたとたん、彼女はなんだかほっとしたような気がする。）

ほっとする　も　疑問文文末助詞　女性丁寧語
ヌーアーイ「〈意外な顔をしながら〉lôoŋ-òk　dûay　rɤ̌ɔ　khá？・・・（考える）・・・」
（＝〈意外な顔をしながら〉 ほっとすることもあったんですか？・・・（考える）・・・）

（Khun Chai Pawornruj　第 10 話）

加えて、例（89）のタイ語も同様に、ワンラサーは、パウォンルットという男性の婚約者が彼のことを愛していると言った際に、まるで書かれた文章を暗記して喋っているように見えたということについて、みんなに話している。そして、ワンラサーは、彼女はパウォンルットがまだ帰ってきていないと聞いたら、ほっとしたように見えたと語り続けている。それを聞いたヌーアーイは、意外な顔を

しながら、「thɔ̂ŋ（暗記）」と「lôoŋ-òk　dûay rɔ̌ɔ khá（ほっとすることもあったんですか）」とそれぞれ直接的および間接的に繰り返し、その発話に不信感を抱くことを表明している。この場合は、発話者が単に意外であると相手に伝達するだけであり、ポジティブの意味ともネガティブの意味ともどちらとも言えず、中立的態度を表していると考えられる。

このように、日本語とタイ語におけるフィクション会話で出現する「感情の表出」としての繰り返しは、ポジティブな態度、ネガティブな態度、中立的態度情という 3 種類の態度がいずれも使用されることがわかった。しかし、以下の表（16）に示すとおり、繰り返しにおける「感情の表出」によるネガティブな態度の使用数は、日本語では総 549 例中（100%）433 例（79%）、タイ語では総 427 例中（100%）310 例（73%）が見られ、全体の大部分を占めていることがわかった。

**表（16）　日本語とタイ語のフィクション会話における「感情の表出」による態度の種類の使用傾向**

| フィクション会話における「感情の表出」による態度の種類 | | | |
|---|---|---|---|
| 日本語 | | タイ語 | |
| 態度の種類 | 出現率 | 態度の種類 | 出現率 |
| ポジティブな態度 | 2%（11 例） | ポジティブな態度 | 5%（20 例） |
| ネガティブな態度 | 79%（433 例） | ネガティブな態度 | 73%（310 例） |
| 中立的態度 | 19.13%（105 例） | 中立的態度 | 23%（97 例） |
| 合計　＝　100%（549 例） | | 合計　＝　100%（427 例） | |

（総例文の小数点第 3 位を四捨五入）（出所：筆者作成）

一方、ネガティブな態度の使用に関しては、全体の用例の中で日本語では 11 例（2%）、タイ語では 20 例（5%）しかなく、ネガティブな態度と比較すると、圧倒的に少ないことが明らかになった。加えて、日本語とタイ語において中立的態度の使用数は、それぞれ 105 例（19.13%）と 97 例（23%）が観察され、ポジティブな態度よりある程度多く用いられることがわかった。ただし、ネガティブな態度と比べると、中立的態度の使用は圧倒的に少ない傾向が見られる。

この点については、第 5 章 5.3.節で述べたフィクション会話の目的および性質と結び付いているのではないかと考えられる。日本語においてもタイ語においてもフィクション会話の主たる目的は、

発話者がある人物を演じることで、ストーリーを通じてその人物の感情や態度を視聴者へ伝達するのである。そのため、フィクション会話においては、発話者の表情や態度などを明示的に伝達するために、発音およびことば内容が明確である繰り返しを使用し、発話者の感情をより明示的に表明すると考えられる。しかし、5.3.節で概説したように、フィクション会話における「感情の表出」としての繰り返しは、発話者が表出する感情は「不満」、「怒り」や「非難」などというマイナスの感情や態度がほとんどである。つまり、上記の表（16）のデータと一致していることが確認された。この点に関しては、演技による喜怒哀楽の表現を考えてみると、「嬉しい（喜）」および「楽しい（楽）」というポジティブ感情は、演技者はわざわざ相手の発話を繰り返さなくても、演技者の笑顔や笑い声という身振りによって、それぞれの感情を十分視聴者に伝達できると言える。また、フィクション会話においては、発話者がポジティブな態度を表明する際には、繰り返しを用いず、「本当！？」あるいは「やった！」などのような繰り返し以外の表現を用いることが多く見られる。一方、「悲しい（哀）」および「怒り（怒）」というネガティブ感情の中には、「不満」、「怒り」、「がっかり」、「嫌悪感」、「嫉妬」、「軽視」、「皮肉」、「不快感」、「反論」、「困惑」、「苛立ち」、「絶望」、「羨望」、「孤独感」、「後悔」、「憎悪」、「苦悶」、「切なさ」などという非常に多種多様な感情や態度が内在している。そのため、演技者の泣き声や声のトーンという表情および身振りだけでは、演技者による特定の感情や態度が明示的に伝達するのは大変困難であるだろう。このことから、フィクション会話においては、演技者によるネガティブな態度を明確に表明するには、表情、声色、身振りおよび前後の文脈のみならず、繰り返しも非常に重要な要素であり、必要不可欠な表現であると言える。

また、6.1.節で説明したように、繰り返しにおける「感情の表出」の基本的な感情は、「意外感」であると考えられる。要するに、発話者は相手の発話によって不意打ちを受けた際、相手の発話に問題を感じた部分を繰り返す傾向が強い。しかし、表（16）の調査結果から、発話者が単に意外感を表明するという中立的態度より、ネガティブな態度の方が圧倒的に多く用いられることが観察された。このことによって、フィクション会話においては、発話者がわざわざ相手のことばを繰り返すのは、単に意外感のみを表明するよりも、そのことには問題があり、受け入れたくないという気持ちを表す傾向が高いと言える。つまり、意外感だけにとどまらず、ネガティブな態度まで表明しているのである。このように、日本語とタイ語のフィクション会話における「感情の表出」の最も重要な感情の種類は、ネガティブな態度であるという事実が明らかになった。

### 6.5.2. 自然会話における「感情の表出」による発話者の態度

第4章と第5章の調査結果からわかるように、日本とタイの自然会話における「感情の表出」としての繰り返しの使用数は、それぞれ178例と74例が見られた。また、自然会話もフィクション会話と同様に、繰り返しにおける「感情の表出」の使用率が最も際立って見られることが明らかになった。加えて、両言語の自然会話においての繰り返しにおける「感情の表出」の例文を考察した結果、フィクション会話と同様に、ポジティブな態度、ネガティブな態度、中立的態度の3種類とも使用されていることがわかった。次の例（90）と例（91）は日本語とタイ語におけるポジティブな態度、例（92）と例（93）はネガティブな態度、例（94）と例（95）は中立的態度を示している。

ポジティブな態度

例（90）（みゆがみんなにバレンタインチョコレートを配っている。）

**みゆ**「まずは、太郎くんから〈太郎にチョコレートを渡す〉。」

**太郎**「あらっ。」

**エミリー**「【わ〜い！】」

**太郎**「【*やっと今年*...】

**エミリー**「【わ〜い！】」

**太郎**「【*もらってよかった*】。」

**みゆ**「はい、エミリーちゃんにも〈エミリーにチョコレートを渡す〉。」

**エミリー**「〈太郎に向かって〉*ほら*、*初めてのチョコレート*【*だよ*】。」

**太郎**「【やったやった！】」

**みゆ**「あとで...

**エミリー**「ありがとう〜」

**みゆ**「味わって（笑）。」

**エミリー**「【可愛い〜】」

**太郎**「【可愛い。】いち...一年かけて食べます！」

**みゆ**「〈大きな声で〉一年！（爆笑）」

**エミリー**「（爆笑）」（SHIBUYA MUSIC POWER　2019年2月16日）

例（90）では、みゆは太郎とエミリーにバレンタインチョコレートを配っている。太郎とエミリーの発話の「やっと今年、もらってよかった」と「ほら、初めてのチョコレート」からわかるように、みゆからのチョコレートは太郎にとって、今年初のバレンタインチョコレートである。そのため、太郎は大変嬉しそうに、「一年かけて食べる」と言った。みゆは、太郎がそのような大袈裟な発言を予想しておらず、自分の想定と対立しているため、みゆは大きな声で「一年！？」という太郎の発話を繰り返し、意外感を表明している。そして、みゆの弾けて笑っている様子によって、「一年」ということばに対して「面白さ」や「ユーモア」というポジティブな態度を表出している。

例（91）（俳優兼歌手であるビーの活躍について話している。）

今　彼／彼女　接続詞　教える　COPU　ところ　中国　彼／彼女　も　人気　爆発　終助詞　終助詞
マー「tɔɔn-níi　kháw　kɔ̂ɔ　bɔ̀ɔk　wâa　thîi　ciin　kháw　kɔ̂ɔ　daŋ　rá-bɔ̀ɔt　ná　já.

（＝ 彼は今、中国でも爆発的に大人気なんだよ。）

うん
カラメー「【əə】」

（＝ うん。）

出演　ドラマ　修飾語　ある　視聴者　まで　四　千　百万　視聴回数
マー「【lên】sii-rîi　nîi　mii　khon-duu　thǔŋ　sii　phan　láan　wiw！」

（＝ 彼が出演したドラマは、視聴回数が40億回も突破したのよ！）

四　千　百万　視聴回数　多い　とても
カラメー「〈驚いて大きな声で〉sii　phan　láan　wiw！？　yə́　mâak！」

（＝〈驚いて大きな声で〉 40億回！？ めちゃくちゃ多い！）

人　多い　終助詞　終助詞
ビー「khon　yə́　ŋay　há」

（＝ 人が多いですからね。）　（3 Zaaap　2020年3月8日）

また、例（91）のタイ語も同様に、マーは、俳優兼歌手として活躍中のビーが中国でも大人気であり、彼が出演したドラマの視聴回数は40億回も突破したと言っている。それを聞いたカラメーは非常に驚きながら、大きな声で「sii　phan　láan　wiw！？（40億回！？）」と繰り返し、意外感を表明している。また、その直後には「yə́　mâak（めちゃくちゃ多い）」と発言することによって、「視聴回数が40億回もあったってすごい」という意味合いで、「40億回」に対して「感心」または「褒賞」を表している。

ネガティブな態度

例（92）（音楽活動とラジオ番組の新コーナーについて話している。）

**ゴリ**「やっぱ…さ、リスナーさんは音楽やってる人ばっかり聴いているわけじゃないから。

**ミキ**「【うん】。」

**タカ**「【うん】。」

**ゴリ**「ね？・・・あの、初めての人たちにもどうやって、こう、楽しんだらいいかなということね。

**ミキ**「【うん】。」

**タカ**「【うん】。」

**ゴリ**「えー、僕ら…アーティストが…【ね】。

**タカ**「【うん】。」

**ゴリ**「えー、優しくお教えするという・・・

**ミキ**「【うん】。」

**タカ**「【うん】。」

**ゴリ**「（苦笑）*上から（目線）やめとこうか*（笑）。」

・・・（中略）・・・

**ゴリ**「なんか最近そう…先生の癖が抜けなくなってきたんだ、俺。」

**タカ**「（笑）」

**ミキ**「癖はもうしょうがない。」

**ゴリ**「あの、半月アーティストと半月先生だからそうなん。」

**ミキ**「そうか。」

**ゴリ**「うん。」

**ミキ**「じゃ、もうしょうがない【わ】。」

**ゴリ**「【しょう】がないよね。」

**ミキ**「うん。許す（笑）。」

**ゴリ**「許す？（笑）。*お前もだいぶ上からだ*！（爆笑）」

**ミキ**「（爆笑）」　（うたれんのインディーズチャンネル　2019 年 9 月）

例（92）では、ゴリはラジオ番組の新コーナーについて話しており、アーティストとしてゲストに音楽のことについて優しく教えようとしている。しかし、ゴリは、自分の発言が上から目線であると感じており、そのような癖がなかなか抜けないと言っている。そして、ミキはゴリの発話に対して、「それならしょうがない。許す」と意見を述べている。それを聞いたゴリは、不意打ちを受けたため、「許す？」と繰り返すことによって、意外感を表明している。その直後に、「お前もだいぶ上からだ！」と「許す」のことばに対して「嫌悪感」や「不快感」を表明しながら、ミキのことを非難している。しかしながら、ゴリとミキの「笑い」を考慮すると、本来の「非難」の意味からだんだん「面白さ」へと移行することがわかる。つまり、ネガティブな態度からポジティブな態度に移り変わっていくのである。

例（93）（ペアという女性の眉毛について話している。）

否定　経験の過去　考える　非現実　入れ墨／タトゥー
ウッディー「mây　khəəy　khít　cà　sàk？」
（＝（眉毛に）タトゥーを入れることは考えたこともなかったの？。）

私　である　人　好き　化粧する
ペア「raw　pen　khon　chɔ̂ɔp　tɛ̀ŋ-nâa.
（＝ 私は化粧をすることが好き。）

うん
ウッディー「【ɯɯm】」
（＝ うん。）

それで　私　化粧する　可能　自分で
ペア「【lɛ́ɛw】 raw　tɛ̀ŋ-nâa　dâay　eeŋ.
（＝ あと、自分で化粧ができるし。）

うん
ウッディー「ɯɯm」
（＝ うん。）

・・・・（中略）・・・・

だから　考える　COPU　感動詞　それで　私　する　衣類　はい／そう　疑問文文末助詞
ペア「kɔ̂ɔ-ləəy　khít　wâa　əə　lɛ́ɛw　raw... tham　sûa-phâa　chây　pà
女性丁寧語　私　非現実　可能　ある　多様性　楽しい　良い　何かそんな感じ　だから
khá？　raw　cà　dâay　mii　waa-ray-tii　sa-nùk　dii　àray-yàaŋ-ŋii.　kɔ̂ɔ-ləəy
しない　入れ墨／タトゥー
mây-dây　sàk.
（＝ それで、自分も服飾関係の仕事をしているじゃないですか？ 自分で眉毛を書くことによって、自分の中の多様性を生み出すことができて、楽しいなと思っています。なので、眉毛にタトゥーを入れないことを決めたんです。）

うん
ウッディー「ɯɯm」

（＝ うん。）

しかし　それ　接続詞　非現実　ある　問題　時　関係節　ような　なければならない　書く
ペア「tɛ̀ɛ　man　kɔ̂ɔ　cà　mii　pan-hǎa　tɔɔn　thîi　bɛ̀ɛp　tɔ̂ŋ　khǐan
眉　寝る　それとも　何かそんな感じ　終助詞　女性丁寧語
khíw　nɔɔn　rǔɯ　àray-yàaŋ-ŋía　à　khà.」

（＝ でも、眉毛を書いて寝る時には、やっぱり問題があるんですね。）

うん　書く　眉　寝る　COPU
ウッディー「ɯɯm.　khǐan　khíw　nɔɔn　khɯɯ？」

（＝ うん。眉毛を書いて寝るって？）

書く　眉　それで　寝る
ペア「khǐan　khíw　lɛ́ɛw...nɔɔn（笑）」

（＝ 眉毛を書いてから寝る（笑）。）

書く　眉　それで　寝る
ウッディー「〈理解できない表情をしながら、大きな声で〉 khǐan　khíw　lɛ́ɛw　nɔɔn！？（笑）」

（＝〈理解できない表情をしながら、大きな声で〉 眉毛を書いてから寝る！？（笑）。）

ペア「（爆笑）〈頷く〉」

（＝（爆笑）〈頷く〉。）

〜のために
ウッディー「〈大きな声で〉 phɯ̂a！？（笑）」

（＝〈大きな声で〉 何のため！？（笑）。）

私　非現実　可能　知る　COPU　自分　ある　眉　終助詞　ウッディーお兄さん
ペア「（笑）raw　cà　dâay　rúu　wâa　tua-eeŋ　mii　khíw　ŋay　phîi-wúutdîi（笑）」

（＝（笑）自分がいつも眉毛があって、安心できるから、ウッディお兄さん（笑）。）

ウッディー「（爆笑）」

（＝（爆笑）。）　（Woody World　2018 年 9 月 9 日）

例（93）のタイ語も同様に、ウッディーは、ペアに今まで眉毛にタトゥーを入れるかについて考えた経験の有無について尋ねている。そして、ペアは自分で化粧することが好きで、自分の中の多様性を生み出すため、眉毛にタトゥーを入れないことにしたと答えた。しかし、眉毛を書いて寝る時には、問題があると言っている。ペアの発言は、ウッディーにとって不意打ち的発言であるため、ウッディーは理解できない顔をしながら、大きな声で「khǐan　khíw　lɛ́ɛw　nɔɔn！？（眉毛を書いてから寝る！？）」と繰り返し、意外感を表明している。また、その直後に「phɯ̂a！？（何のため！？）」と大きな声で発言し、眉毛を書いてから寝るというペアの行動に対して理解できないまたは否定を

表しているのである。例（93）は上の例（92）と同様に、ウッディーは明らかにネガティブな態度を表明しているが、二人の「笑い」によって、ネガティブな態度からポジティブな態度へと移行していくことがわかる。このような「感情の表出」は、フィクション会話では全く見当たらなかった。

中立的態度

例（94）（上田はゲストである新川にインタビューしている。）

上田「なんかいろいろ…節制したり、なんだろう…エステみたいなの行ったりなさってんの？」

新川「あ、エステは行ったことないです。」

上田「〈意外な顔をしながら〉　え？　行ったことないの？」

一同「〈意外な顔をしながら〉　へえ～」

新川「（頷く）」　（しゃべくり 007　2015 年 3 月 2 日）

例（94）では、上田は新川にモデルとしてエステに通っているのかについて質問している。しかし、新川はエステに行ったことがないと回答した。上田と他の人の表情や声色を考慮すると、新川はエステに行ったことがあるに違いないため、新川の発話は上田と他の人の想定と対立しているのである。よって、上田は新川が言った「行ったことない」を「繰り返し＋α」の形という「行ったことないの」と繰り返し、意外感を表明している。また、この場合の「α」という「のだ」の基本的概念を考えてみると、「のだ」文は、一般的に背後の事情や前提あるいは既定的事態が存在すると言われている（田野村 1990：5-7、野田 1997：64-66）。つまり、発話者である上田は、最初から新川の情報をある程度持っていることが想定される。言い換えると、この場合の「繰り返し＋α」という「行ったことないの」は、「私が知っている情報とは全く逆だ」という意味合いがより強くなるのではないかと考えられる。ところが、その発話は上田にとっては、ポジティブな態度もネガティブな態度も生じさせるものではなく、単に「行ったことがあるはずだと思っていた」という意外感である中立的態度を表明しているだけであると見られる。

例（95）（チョードは自分の日常生活について語っている。）

する　仕事　上　車
チョード「tham ŋaan bon rót.
（＝ 車の中で仕事をする。）

うん
ウッディー「【ɯɯm】」
（＝ うん。）

意味する　時　運転する　車　以前　終助詞　非現実　考える
チョード「【mǎay-thǔŋ】 wee-laa khàp rót mûa-kɔ̀ɔn à cà khít
（＝ なんか、以前は運転中に、仕事のことについても同時に考える。）

うん
ウッディー「【ɯɯm】」
（＝ うん。）

のような　仮定する　する　コンサート　終助詞　接続詞　考える　スクリプト　行く　一緒に
チョード「yàaŋ sǒm-mút tham khɔɔn-sɛ̀ɛt nǐia kɔ̂ɔ khít sakhríp pay dûay
書く　一緒に
【khǐan dûay】」
（＝ 例えば、コンサートに関する仕事だと、（車の中で）スクリプトを考えたり、書いたりするの。

間　運転する　車　終助詞　疑問文文末助詞　兄／姉
ウッディー「【rá-wàaŋ khàp rót】 à rɔ̌ɔ phîi？」
（＝ 運転中にですか、お姉さん？）

はい／そう　はい／そう　そして　時
チョード「〈頷く〉 chây chây lɛ́ɛw 【wee-laa】...」
（＝〈頷く〉そう、そうだよ。～する時に...）

書く　一緒に
ウッディー「〈意外な顔をしながら〉【khǐan dûay】？」
（＝〈意外な顔をしながら〉 書いたりすることもあるの？）

欲しい　あげる　止まる　明かり　赤
チョード「yàak hây tìt fay dɛɛŋ（笑）」
（＝ 赤信号が長く続いて欲しい（笑）。）　（Woody World　2019 年 11 月 3 日）

加えて、例（95）のタイ語では、チョードは自分はよく運転しながら、コンサートに関するスクリプトを考えたり、書いたりしていると語っている。しかし、運転中にスクリプトを書くのは、ウッディーにとって想定外な行動である。そのため、ウッディーは意外な顔をしながら、「khǐan dûay？（書いたりすることもあるの？）というチョードの発話を繰り返し、意外感を表明している。ただし、この場合は、ウッディーは単に「運転中に書き物をするのはあり得るのか」という不信感を抱くことを伝達するだけであり、ポジティブの意味ともネガティブの意味ともどちらとも言えず、中立的態度を表していると考えられる。

以上のように、日本語とタイ語の自然会話における「感情の表出」としての繰り返しは、フィクション会話と同様に、ポジティブな態度、ネガティブな態度、中立的態度という 3 種類すべてが確認された。しかし、以下の表（17）が示すように、繰り返しにおける「感情の表出」によるポジティブな態度の使用数は、日本語では総 178 例中（100%）141 例（79.21%）、タイ語では総 74 例中（100%）54 例（73%）が観察され、総例の大部分を占めていることがわかった。それに対して、ネガティブな態度の使用は、全体の中で日本語では 12 例（7%）、タイ語では 6 例（8.11%）しかなく、ポジティブな態度と比較すると、非常に少ないことが明らかになった。加えて、日本語とタイ語における中立的態度の使用数は、それぞれ 25 例（14.04%）と 14 例（19%）が見られ、ネガティブな態度よりやや多く用いられることがわかった。しかしながら、ポジティブな態度と比べると、中立的態度の使用は圧倒的に少ない。このように、フィクション会話と自然会話における「感情の表出」の使用目的および使用傾向は、全く異なることが明らかになった。

**表（17）　日本語とタイ語の自然会話における「感情の表出」による態度の種類の使用傾向**

| 自然会話における「感情の表出」による態度の種類 | | | |
|---|---|---|---|
| 日本語 | | タイ語 | |
| 態度の種類 | 出現率 | 態度の種類 | 出現率 |
| ポジティブな態度 | 79.21%（141 例） | ポジティブな態度 | 73%（54 例） |
| ネガティブな態度 | 7%（12 例） | ネガティブな態度 | 8.11%（6 例） |
| 中立的態度 | 14.04%（25 例） | 中立的態度 | 19%（14 例） |
| 合計　＝　100%（178 例） | | 合計　＝　100%（74 例） | |

（総例文の小数点第 3 位を四捨五入）（出所：筆者作成）

6.5.1.項で説明したように、フィクション会話における「感情の表出」としての繰り返しは、発話者が表出する態度はネガティブな態度がほとんどである。一方、表（17）からわかるように、自然会話における「感情の表出」の機能の目的は、「面白がり」や「ユーモア」または相手との「一体感・共感」というポジティブな態度を表出するために用いられることがわかった。このことから、第 5 章 5.3.節で述べたように、日本語とタイ語の自然会話の主な目的は、もっぱら発話者の感情を表出するのみならず、相手との一体感を作り、他人との人間関係を保ちながら、円滑なコミュニケーションを

築くのである。また、フィクション会話と異なり、発話者が第三者または視聴者に向けて演じたり、シナリオに沿って話したりするのではない。したがって、話者間の良好な人間関係を構築するために、ネガティブな態度というより、むしろポジティブな態度を使用する傾向が強いと言える。加えて、自然会話においては、繰り返しは「感情の表出」の機能のほか、会話に積極的に参加していることを示す「あいづち」および「応答」の使用も多く見られる。なお、フィクション会話では見られないあいづち詞の使用も非常に多く観察された。

さらに、上の表（17）に示すとおり、両言語の自然会話においてはネガティブな態度の例文も少し見られた。ただし、たとえ発話者が相手への「非難」や「反論」などというネガティブな態度を表明するとしても、すべてのネガティブな態度の例文は前述の例（92）と例（93）のように、必ず「笑い」が後続し、最終的には非難の表明から面白がりの表明へ移行していく。それに対して、フィクション会話では、自然会話とは異なり、発話者がネガティブな態度を表明する際は、「面白がり」などのようなポジティブな態度への移行というのは全く見当たらなかった。また、自然会話における中立的態度に関しては、調査結果によると、発話者が単に意外感を表明するという中立的態度より、ポジティブな態度の方が圧倒的に多く用いられることが観察された。このことから、自然会話においては、発話者がわざわざ相手のことばを繰り返すのは、単に意外感のみを表明するよりも、面白がりを表すことによって会話の場を盛り上げる傾向が高いと考えられる。このように、日本語とタイ語の自然会話における「感情の表出」の最も重要な感情の種類は、ポジティブな態度であることが明らかになった。

総合的には、繰り返しが表明する基本的な感情は、「意外感」という感情である。また、両言語のフィクション会話と自然会話で用いられる「感情の表出」としての繰り返しは、ポジティブな態度、ネガティブな態度、中立的態度という大きな 3 種類の態度が分類できる。しかし、会話の種類の違いによって、繰り返しにおける「感情の表出」の使用目的と使用傾向が異なっていくことが明らかになった。

# 第 7 章　繰り返しの表現形式の種類

第 3 章 3.2.節で述べたように、繰り返しは、発話者が相手の発話をオウム返しすることで先行発話をそのまま繰り返すという「直接的繰り返し」と、他要素を追加し、先行発話に近い形で繰り返すという「間接的繰り返し」（α＋繰り返し＋α）の大きな 2 種類の表現形式が存在する。従来の研究では主に前者に注目されているが、後者についてはそれほど言及されていないことがわかった。本章では、日本語とタイ語のフィクション会話および自然会話の中に出現する繰り返しに後続する表現形式を中心に、考察を行っていく。具体的には、7.1.と 7.2.で日本語のフィクション会話と自然会話における繰り返しの表現形式、7.3.と 7.4.でタイ語のフィクション会話と自然会話における繰り返しの表現形式を詳細に分析する。そして、両言語のフィクション会話と自然会話においては、繰り返しと最も高頻度で共起する要素を明らかにしていく。加えて、それぞれの言語と会話の種類の違いによって、繰り返しの表現形式の使用傾向はどのように異なるのかについて説明する。最後に、それぞれの言語と会話の種類における「直接的繰り返し」と「間接的繰り返し」との相違点について触れていく。

## 7. 1.　日本語のフィクション会話における繰り返しの表現形式

日本のテレビドラマおよびアニメに出現する繰り返しのデータ用例合計 679 例（100%）を考察した結果、以下の表（18）のとおり、日本語のフィクション会話における「間接的繰り返し」の使用は 143 例（21.1%）が見られた。その中では、「繰り返し＋引用形式」という繰り返しと引用形式「と」と「って」の複合形が 104 例（16%）見られ、全体の表現形式の大部分を占めていることがわかった。「繰り返し＋引用形式」においては、「「～」[9]＋引用形式「って」」の使用は 72 例（11%）が観察され、全体の半分を占めていることがわかった。また、「「～」＋引用形式「と」」の使用についても、32 例（5%）が見られ、他の形式より際立って使用されることが観察された。しかし、「「～」＋引用形式「と」」と「「～」＋引用形式「って」」の出現数からわかるように、両者との差は倍であり、「「～」＋引用形式「と」」は「「～」＋引用形式「って」」と比較すると、圧倒的に少ない。

[9] 以降の表（18）～表（30）においての「～」は、繰り返し発話の部分を指している。

表（18）　日本語のフィクション会話における繰り返しの表現形式の種類と使用傾向

| 日本語のフィクション会話における繰り返しの表現形式 | 出現率 |
|---|---|
| 「～」　＋（引用形式）と？ | 5%（32 例） |
| 「～」　＋（引用形式）って？ | 11%（72 例） |
| 「～」　＋　か？ | 0.3%（2 例） |
| 「～」　＋　か。（下降調） | 1.2%（8 例） |
| 「～」　＋　ね。 | 1%（4 例） |
| 「～」　＋　（ん）ですか（！）？ | 3%（18 例） |
| 「～」　＋　でございますか？ | 0.2%（1 例） |
| 「～」　＋　だ（！）？ | 0.2%（1 例） |
| 「～」　＋　なんだ（！）？ | 0.2%（1 例） |
| 「～」　＋　なんだよ？ | 0.2%（1 例） |
| なにが　＋　「～」　＋　ですか？ | 0.2%（1 例） |
| 「～」　＋　じゃない（！）。 | 0.3%（2 例） |
| 合計　＝　21.1%（143 例） | |

（総例文の小数点第 3 位を四捨五入）（出所：筆者作成）

加えて、残りの 39 例（5.1%）は、引用形式「と」と「って」以外の要素が繰り返しに後続されているものである。また、39 例の中で、「「～」＋（ん）ですか（！）？」および「「～」＋下降調の「か」」の使用は、18 例（3%）と 8 例（1.2%）が見られ、他の形式に比べれば割と多く用いられることが観察された。一方、残りの表現形式は、それぞれほとんど 1 例ずつしか見られず、極めて少ないことがわかった。また、引用形式以外の「α」を合わせても、引用形式の半分にも満たず、使用率は非常に少ないことがわかった。このように、日本語のフィクション会話における「α＋繰り返し＋α」の表現形式の中では、「繰り返し＋引用形式」という形が最も多く用いられることが明らになった。なお、本調査による繰り返しの例文 679 例（100%）のうち、繰り返しのみという「直接的繰り返し」の使用は 536 例（79%）見られ、総例文の大半を占めている。それに対して、「間接的繰り返し」の使用は 143 例（21.1%）しかなく、「直接的繰り返し」と比較すると、圧倒的に少ない。つまり、日本語のフィクション会話においては、「間接的繰り返し」よりも「直接的繰り返し」が用いられる傾向が非常に強いと言える。

### 7.1.1. 引用表現に関する研究の概観と展望

上記の表（18）からわかるように、繰り返しに後続する表現形式の中で、引用形式「と」と「って」が最も用いられることが明らかになった。以下の例（96）は「繰り返し＋引用形式「と」」、例（97）は「繰り返し＋引用形式「って」」を示している。

例（96）（女性にサプライズをする方法について話している。）

**和田**「最後の最後まで何もないと思わせといて、最高のエンディングを用意するんだよ。」

**鮫島**「〈相手に向かって〉 最高のエンディングとは？」

**和田**「*バラの花束*。」 （世界一難しい恋　第 4 話）

例（97）（上尾は給料日前に幼稚園児たちにカラオケに連れてきているが、子供たちがたくさんの食べ物を注文してしまった。）

**上尾**「げっー！だ、だ、だれこんなに頼んだの！？」

**しんちゃん**「おかまいなく～」

**上尾**「〈困っている顔をしながら〉 お、おかまいなくって・・・」 （クレヨンしんちゃん）

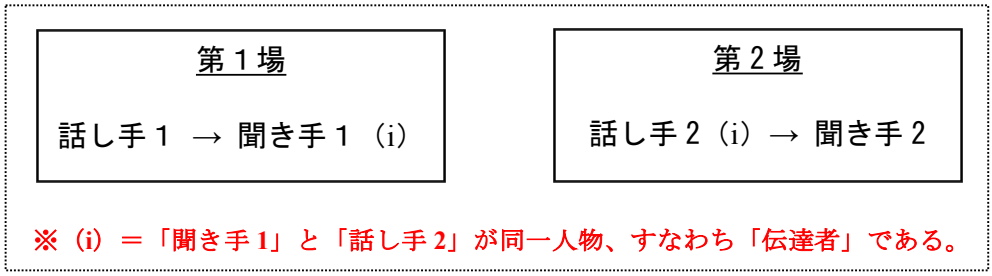
しかし、繰り返しと引用表現についてはそれぞれ従来から多く研究されてきたのにもかかわらず、「繰り返し＋引用表現」という繰り返しと引用表現の複合形についての研究は管見の限り見当たらない。よって、本研究では引用表現の定義を概観し、引用形式「と」と「って」の基本的概念と機能に関する研究の概略について述べる。そして、繰り返しとそれに後続する引用形式との関係性について触れることとする。

#### 7.1.1.1. 引用表現の定義と基本的概念

『日本国語大辞典（第二巻：93）』によれば、「引用」の本来の定義は「自分の論のよりどころなどを補足し、説明、証明するために、他人の文章や事例または古人の言を引くこと」または「人を引き挙げて任用すること」と定義されている。しかし、先行研究における「引用」は本来の「引用」の意味と多少異なっている。本研究で扱う引用表現の主な先行研究は、加藤（2010）、鎌田（2000）、鈴木（2007）と砂川（1987）である。加藤（2010：19-20）によれば、「引用」とは「既に存在している言葉を実物提示の形で発話の場に再現すること」であり、「引用する」というのは「発話の場における様々な環境・条件に照らし合わせ、最も適当な表現を引用された言葉として選択する、話者の主体的な営み」であ

る。また、鈴木（2007）は、「発話を引用する」というのは、次のとおりに述べている。第一に、引用とは、ある発話の「再現・再生」であるということ。第二に、第一の特質の拡張として、オリジナルの発話と再現された発話の間には「距離」があるということ、である。オリジナルの発話と再現された発話の間には、話し手の違い、時間的隔たり、発話を行う場の違い、そして言葉の違い、音調の違いなどがある。つまり、同じ出来事について二回話そうとしても、たとえ原稿を暗記したり読み上げたりしても、全く同じに再現する事はできないのである。一方、鎌田（2000：52-61）は「引用句創造説」という概念を提唱し、「日本語の引用表現は元々のメッセージを新たな伝達の場においてどのように表現したいかという伝達者の表現意図に応じて決まる」と説明している。その理由として、鎌田による「引用」の定義は、加藤（2010）と鈴木（2007）が主張している定義とは多少異なり、オリジナル発話の「再現」というよりも元発話の「デモンストレーション」であると述べている。また、鎌田によれば「引用句創造説」に導かれる帰結は、「(a) 直接引用であれ、間接引用であれ、元発話とかけ離れた引用を行うか、元発話を再現するような引用を行うかは、伝達の場における伝達者の意図によって決まる」、「(b) 直接引用であれ、間接引用であれ、伝達の場への適合を無視することはできない」、そして「(c) 伝達の場を構成するのは話し手、聞き手、言及を受ける第三者、ダイクシス、及びソーシャルダイクシスであり、引用表現はそれらの相互関係を伝達者の意図に応じて調整した結果の産物である」と指摘している。

加えて、砂川（1987）は「場の二重性」という概念を提唱し、以下の図（4）が示すように引用文は元の文の発言の場と当の引用文の発言の場という二つの場において、前者を後者の中に入れ子型に取り込むという形の二重性によって成り立っている文であると主張している。




**図（4）　砂川（1987）による「場の二重性」について**　　（出所：筆者作成）

砂川によれば、引用文が発言される場は現実の時間の流れの中に位置付けられるものであるが、引用文によって再現される発言の場は現実の時間とは切り離された、相対的な時間関係の中にしか位置付けられないものであると指摘している。要するに、引用文そのものが発言される場と引用文によって再現されている発言の場は、もとから同じ場ではあり得ないのである。

#### 7.1.1.2. 引用形式「と」の意味機能

本研究では、主な引用形式「と」の先行研究として、岩男（2006, 2012）と藤田（2000）を扱う。藤田（2000：133-134）では、出来事としての「引用されたコトバ」が一文に取り込まれる場合として、「①ガ・ニ・ヲ等の助詞を伴い名詞句としておさまる」、「②もっぱら言い切りで、動詞的述語句としておさまる」、「③引用句「～ト」によって導入される」、「④引用的提示句「～トハ」によって導入される」と「⑤引用的連体句「～トイウ」によって導入される」という 5 つの項目を挙げている。また、これらの例として以下の例（98）は①、例（99）は②、例（100）は③、例（101）は④、そして例（102）は⑤を示している。藤田によれば、引用構文の典型的な表現としては下記の「③引用句「～ト」によって導入される」と主張している。

例（98）「バカヤロー」には、正直おどろいたよ。（藤田 2000）

例（99）ヒゲの男が、「オイ、コラ」。（藤田 2000）

例（100）誠は、「こんにちは」と言った。（藤田 2000）

例（101）この忙しい時に「帰りたい」とは何事だ。（藤田 2000）

例（102）武蔵が来たぞという声／負傷者が三人出るという騒ぎ（藤田 2000）

また、藤田（2000：142, 459）は「トハ」形式についても説明し、「トハ」はもともとは引用標識の「ト」に提題助詞「ハ」が付いたものであるが、現在では「トハ」で一つの独立した複合辞と位置付けられているとしている。加えて、「トハ」の機能については「①コトバをとり上げて、それを定義づけたり解説するもの」と「②そんなコトバを言われたということを承けて、それに対する判断・評価・所感・とがめ立てを述べるもの」の 2 種類に分類される。例（103）は前者を、例（104）は後者を示している。

例（103）「ピンキリ」<u>とは</u>、質の良いものも悪いものもあるということだ。（藤田 2000）

例（104）あんたが勝手にやれば」<u>とは</u>無責任すぎる。（藤田 2000）

岩男（2006）によれば、「トハ」を用いた表現は以下の例（105）～例（107）のとおり、「①引用構文の「トハ」」（例（105））、「②トハ文の「トハ」」（例（106））、および「③名詞（句）の「トハ」」（例（107））という大きく 3 つのタイプに分けられると述べている。

例（105）あの真理が一ヶ月やそこらの停学で気落ちしている**とは**思えない。　（岩男 2006）

例（106）こんなに急に乗れるようになる**とは**意外であった。　（岩男 2006）

例（107）ヘルペス**とは**水ぼうそうと同じ菌で、疲れていると神経に沿って出てくる。（岩男 2006）

岩男は、主に例（105）の「①引用構文の「トハ」」と例（106）の「②トハ文の「トハ」」に重点を置き、「トハ」に後続する述部（発話・思考動詞に代表されるもの）について調査した。その結果、「トハ」に後続する述部は否定形になるという傾向が見られたため、「トハ」という形式が用いられている場合、その大部分は話者にとって想定外の事柄であることを述べるものではないかと指摘している。つまり、「トハ」は話者にとって「意外」であるという意味が表されていると考えられる。また、岩男（2012）では助詞「と」＋動詞「言う」の条件形である「と言う」を用いた文について考察し、「と言う」条件形を用いた文の用法には「①引用」、「②応答」、「③連想」と「④提題」の 4 種があることが指摘されている。岩男によれば、「①引用」の用法は引用の本来の性質が最も高いものであり、「と言う」の典型的な用法であると述べているが、「①引用」の用法から派生すればするほど（つまり、① → ② → ③ → ④と言う順番であると）引用の本来の性質がだんだん失っていくと説明している。

#### 7.1.1.3. 引用形式「って」の機能とその展開

引用形式の中では、「って」形式は「と」形式より比較的に多く研究されてきており、数多くの先行研究が存在する。本研究では、主な引用形式「って」の先行研究として、池谷（2018）、岩男（2003）、加藤（2010）、許（1999）、鈴木（2007）、守時（1994）を扱う。

守時（1994）は、「「～」[10]が、既に述べられているか否か」と「「～」が、誰によって提供された情報か（話し手・聞き手・第三者）」という 2 点に基づき、引用形式「～ッテ」の機能について分析した。守時によれば、「～ッテ」は話し手が情報源となる情報を談話の参加者が適切に理解していないと推測し、時には対話の継続が困難であると考えた場合に使用されると述べている。つまり、「～ッテ」は情報源の情報が適切に理解されていないことを示すという重要な談話的な機能を持つと指摘している。また、許（1999）によれば文末の「って」には「引用」という用法の他、「第三者の話を伝える」、「相手に働きかける（問い返し、相手の話に反発する）」、「自分の考えを引用して説明する」という 3 種類の用法があると説明している。加えて、鈴木（2007）は、「って」の機能の変化について、以下の図（5）のとおりに典型的機能である相手・第三者の発話の「引用」から離れ、段々と「提題」、「終助詞」、

[10] 守時（1994）によれば、「～」は引用された発話であると指摘している。

「接続表現（文頭に来る「っていうか」「ってか」など）」という機能に派生していくと説明している。なお、それぞれの機能は下記のとおり、例（108）は「引用」、例（109）は「提題」、例（110）は「終助詞」、そして例（111）は「接続表現」を示している。

**図（5）　鈴木（2007）による引用形式「って」の機能の変化**　（出所：筆者作成）

例（108）利奈ちゃんからです。渡してくれって。（鈴木 2007）

例（109）幾つなんですか、妹さんって。（鈴木 2007）

例（110）大人をみてると、仕事は大変なんだなって。（鈴木 2007）

例（111）**A**：・・・バスケも、バレーも、無理じゃん。

**B**：うん。

**A**：ってか、とてもじゃなくて、下手なんだ。（鈴木 2007）

岩男（2003）は、引用文の元話者が（聞き手・話し手・第三者のうち）誰であるのかという条件に注目し、「～ッテ」の用法を「知識未定着用法」、「押し付け用法」、「表出的用法」、「伝聞的用法」の4つに分類している。岩男によれば、引用文の発話が聞き手のものである場合は「知識未定着用法」であり、「知識未定着用法」は、引用文の発話を通して、その発話を行った理由や態度などを表す用法であると述べている（例（112））。引用文の発話が話し手自身のものである場合は「押し付け用法」と「表出的用法」があり、「押し付け用法」は自らの発話に「ッテ」を付け、引用してきた発話であるかのような形式をとることによって、当該の発話は話し手の独り善がりの意見ではないことを表そうとしていると指摘している（例（113））。また、「表出的用法」は発話に「ッテ」を付け、引用であるかのような形式をとることで「～な（あ）」で表される自分の気持ちはこの発話時よりも前に抱いたものであることを表そうとしていると述べている（例（114））。そして、引用文の発話が第三者のものである場合は第三者の発話を聞き手に伝えているという「伝聞的用法」があるとしている（例（115））。

例（112）（村松は野口が大阪に何度も行っていることを知っている。）

**野口**「いいなあ。俺も行きたいなあ。」

**村松**「行きたいなあ<u>ッテ</u>……」

**野口**「だって、俺ももう 3 年は行ってないよ、大阪。」（岩男 2003）

例（113）**樹**「あの人に怒られる。」

**秋葉**「そんなことない<u>ッテ</u>！」（岩男 2003）

例（114）**晶子**「どうしてそんなに驚くの？」

**貴紀**「いや、意外と優しいとこあるんだなあ<u>ッテ</u>。」

**晶子**「失礼ね。」（岩男 2003）

例（115）**佳菜子**「石井先生、すぐ来ます<u>ッテ</u>。」

**和夫**「あっ、そう。とにかく、お父さん達、でかけるから、先生に良くお話をうかがって。」（岩男 2003）

しかし、例（112）のような発話者の態度を表す用法は明らかに「って」形式によって生じるのではなく、むしろ「って」の前の要素である繰り返しによって生じるのであり、「って」は単に終助詞のような機能を持ち、繰り返しの部分または「って」の前の要素の意味を盛り上げるものではないかと考えられる。

また、加藤（2010）は話しことばにおける引用表現の機能は「A.引用の基本型を表示する機能を果たすもの」、「B.先行文脈の関連情報を談話内で追加するもの」、「C.話者の情報伝達・受容にあたっての心的態度を表すもの」、「D.情報の種類を明示しつつ情報の伝達に関わるもの」、「E.発話意識の表明により発話境界を表示するもの」という大きく 5 つのカテゴリーを分類している。これらの機能の中では、「C.話者の情報伝達・受容にあたっての心的態度を表すもの」の項目に繰り返しとの関わりが見られ、その下位の用法として「理解困難表示用法」と「意外感表示用法」がある。加藤によれば、「理解困難表示用法」は、主に直前の聞き手の発話（の一部）を引用部に置くもので、直前の談話において聞き手から示された意味のわからないことばに直面して、その理解が困難であることを表示するものであると説明している。また、「意外感表示用法」は、与えられた情報の語彙的意味や、談話の中での情報の

位置付けなどがわからないということを表出しているというより、情報に対して「意外だ」「腹立たしい」等の話者の否定的心情を表出するものであると述べている。以下の例（116）は「理解困難表示用法」、例（117）は「意外感表示用法」を示すものである。

例（116）**1**：えーーーと、サワーさんの趣味は何ですか？

**2**：あの、すみません趣味<u>って</u>。あの。

**1**：好きな事。（加藤 2010：125）

例（117）（A は、ヤマンバメイクと言われる奇抜な化粧をしている若い女性。ヤマンバを卒業するために、美容師などの助けを借りて付けまつげを落としているところを番組レポーターの B が見守っている。）

**B**：ぶっさいく。（付け睫毛がとれた素顔に近い A を見て大笑いする。）

**A**：うるさいからねほんとに。うるさくてねこれね。（B を「これ」と言って指す）

**B**：これね<u>って</u>。（笑）これじゃないから。（加藤 2010：128）

上記の加藤が挙げた例文を見ると、「理解が困難であることを表示する」または「意外感」や「不満」などという発話者の態度は明らかに引用形式「って」が果たす機能ではなく、実際は前の要素である繰り返しによって果たされるのではないかと思われる。また、前述したようにこの場合の「って」は、単に終助詞のような機能を持ち、繰り返しの持つ機能をより高める効果があると考えられるため、仮に「って」がなくても発話は成立するように思われる。

さらに、池谷（2018）によれば、文末の「って」は単なる引用ではなく、「強調」、「話し手の印象」および「独り言」の用法という話し手の「私的領域内情報[11]」の引用を表す形式であると述べている。それぞれの用法について、以下の例（118）は「強調」、例（119）は「話し手の印象」、例（120）は「独り言」を示している。

例（118）この服、絶対あなたに似合う<u>って</u>！（池谷 2018）

例（119）大人をみてると、仕事は大変なんだな<u>って</u>。（池谷 2018）

例（120）俺の仕事、うばいやが<u>って</u>。（池谷 2018）

[11] 池谷（2018）によれば、「私的領域内情報」とは「話者に関わりが深く、話者に属すると考えられる情報である」と定義付けている。

池谷は、上記の例文から「って」は引用を表すものとして知られているが、文末に現れる「って」には先行発話が存在せず、単なる引用ではないと思われる用法があり、それは「終助詞的機能」であると主張している。上の例（118）と例（119）を見てみると、文末の「って」は確かに池谷が指摘している終助詞のような機能を持っていると言えるのだが、例（120）の「独り言」という用法は実際に「って」によって生み出されたものであろうか。

以上が本研究で扱う引用表現および引用形式「と」と「って」についての主な先行研究であり、引用表現と本研究における繰り返しには少なからず関係があることがわかった。また、引用形式「と」と「って」には本来の「引用」という機能から派生した様々な機能が見られた。しかし、従来の研究で述べられている感情的機能の種類については、「と」と「って」の前の要素のほとんどが繰り返しであることが観察され、実際はこれらの感情的機能は引用形式ではなく、むしろ繰り返しによって生じるものではないと考えられる。次に、繰り返しに後続する引用形式「と」と「って」の性質や働きを概観し、引用形式「と」と「って」によって繰り返しの意味にはどのような影響を及ぼすかについて、考察する。

### 7.1.2. 繰り返しに後続する引用形式「と」の働きと使用傾向

上記の表（18）から、「繰り返し＋引用形式「と」」の使用は、32 例（5%）が観察された。その中では、以下の表（19）が示すように、さらに細かい分類をすることができる。

**表（19）　繰り返しに後続する引用形式「と」の種類と使用傾向**

| 繰り返しに後続する引用形式「と」 | 出現率 |
|---|---|
| 「～」 ＋ とは？ | 1.25%（8 例） |
| 「～」 ＋ とは ＋ どこ ＋ だ？ | 0.2%（1 例） |
| 「～」 ＋ とは ＋ なんでしょうか？ | 0.2%（1 例） |
| 「～」 ＋ とは ＋ どういう意味 ＋ だ？ | 0.2%（1 例） |
| 「～」 ＋ とは ＋ 何を指している ＋ のでしょうか？ | 0.2%（1 例） |
| 「～」 ＋ とは ＋ 具体的に？ | 0.2%（1 例） |
| 「～」 ＋ と ＋ 言うと？ | 0.2%（1 例） |
| 「～」 ＋ と ＋ 言いますと？ | 1%（3 例） |
| 「～」 ＋ と ＋ 申しますと？ | 0.31%（2 例） |
| 「～」 ＋ と ＋ 言うのは？ | 0.2%（1 例） |
| 「～」 ＋ だと（！）？ | 2%（12 例） |
| 合計 ＝ 5%（32 例） | |

（総例文の小数点第 3 位を四捨五入）（出所：筆者作成）

本研究における引用形式「と」は、「～とは？」、「～というと？」、「～とはなに？」や「～だと？」などの様々な形式を持つが、便宜上、それぞれの表現形式をすべて「と」という形で示す。表（19）からわかるように、繰り返しに後続する引用形式「と」の中で、「～とは？」および「～だと（！）？」形式はそれぞれ 8 例（1.25%）、12 例（2%）見られ、それが最も用いられることがわかった。前者は例（96）と例（121）、後者は例（122）と例（123）に示している。

例（96）（女性にサプライズをする方法について話している。）

**和田**「最後の最後まで何もないと思わせといて、最高のエンディングを用意するんだよ。」

**鮫島**「〈相手に向かって〉最高のエンディングとは？」

**和田**「*バラの花束*。」（世界一難しい恋　第 4 話）

例（121）（和解金について話している。）

**黛**「それじゃ、和解金をできるだけ取りますね。」

**ボニータ**「あっ・・・。それもいい。」

**古美門**「〈相手に向かって〉いいとは？」

**ボニータ**「*いらない*。」（リーガル・ハイ（第 1 期）第 2 話）

例（96）と例（121）では、「バラの花束」と「いらない」という相手の解説を考慮すると、発話者は「最高のエンディング＋「とは？」」および「いい＋「とは？」」という「繰り返し＋「とは？」」の形で相手の発話を繰り返すのは、相手から何らかの情報を求めていると考えられる。また、本調査の結果から、上記の例（96）と例（121）のような「繰り返し＋「とは？」」の使用は 8 例（1.25%）が見られ、すべての例文は「説明要求／確認要求」として用いられることが確認された。この場合の「とは」は、7.1.1.2.で述べたように、藤田(2000)による「トハ」の機能の一つである「コトバをとり上げて、それを定義づけたり解説するもの」と関連しているのではないかと考えられる。

しかし、この場合は以下の例（96’）と例（121’）のように「とは」が付加されていない、「最高のエンディング？」、「いい？」という繰り返しの部分だけでも「説明要求／確認要求」が伝達されているのではないかと思われる。つまり、「バラの花束」と「いらない」という相手からの情報提供や解説からわかるように、繰り返しは通常の「説明要求／確認要求」という機能を表していることが明らかである。

例（96’）（女性にサプライズをする方法について話している。）

**和田**「最後の最後まで何もないと思わせといて、最高のエンディングを用意するんだよ。」

**鮫島**「〈相手に向かって〉~~最高のエンディング~~とは~~？~~」　→　「最高のエンディング？」

**和田**「*バラの花束*。」

例（121’）（和解金について話している。）

**黛**「それじゃ、和解金をできるだけ取りますね。」

**ボニータ**「あっ・・・。それもいい。」

**古美門**「〈相手に向かって〉~~いい~~とは~~？~~」　→　「いい？」

**ボニータ**「*いらない*。」　（リーガル・ハイ（第 1 期）第 2 話）

一方、以下の例（122）と例（123）は「繰り返し＋「だと（！）？」」という会話例である。両者は一見、発話者が情報を求めているように見えるが、発話者の表情、態度、声色、語調などを考慮すると、実際は上述した例（96）と例（121）とは異なるのである。また、例（122）と例（123）では、発話者が相手の発話を繰り返した直後に、相手からの説明や確認が後続しないことが観察された。要するに、発話者の意図は、相手から「同窓会」、「関係ない」という言葉の内容の説明または確認を要求することではなく、むしろ相手が言った「同窓会」、「関係ない」に対する「不満」や「苛立ち」などの否定的態度を表出することであると考えられる。加えて、本調査からは「繰り返し＋「だと（！）？」」の使用は 12 例（2%）が見られ、すべての例文は「感情の表出」の機能として用いられることがわかった。

例（122）（事務所の仕事がたくさん残っているにも関わらず、黛は同窓会に行くと言っている。）

**黛**「高校の同窓会です。今日これから。」

**古美門**「〈憤慨しながら、大きな声で〉　同窓会だと！？　*事務所の苦境をほったらかして、過去を美化してお互い慰め合うだけの 何の発展性もない集会に出るというのか*？」

（リーガル・ハイ（第 2 期）第 3 話）

例（123）（柴山は鮫島の元部下であり、新しい就職先で働くことを決断した。）

**鮫島**「柴山は俺のこと憎んでいるのか？」

**柴山**「いいえ、決してそのようなことは。」

**鮫島**「じゃ、どうして和田なんかのところに？」

**柴山**「将来の夢や職場環境労働条件などを考慮した結果、最善の選択だと思ったからです。」

**鮫島**「俺が一番嫌がる就職先だとわかっているのにか？」

**柴山**「正直、私の再就職を社長がどう思うかは関係ないと思いますが。」

**鮫島**「〈不満げな顔をしながら、大きな声で〉 関係ないだと！？」

**柴山**「私にクビだと言ったのは社長です。」 （世界一難しい恋　第8話）

しかし、この場合は以下の例（122’）と例（123’） のように、「同窓会」および「関係ない」の背後に「だと（！）？」が付加されなくても、明らかに「不満」や「苛立ち」などが伝達されていることがわかる。つまり、「同窓会」と「関係ない」という繰り返し発話自体に既に相手の発話に対する「不満」や「苛立ち」の感情が内在していると言える。

例（122’）（事務所の仕事がたくさん残っているにも関わらず、黛は同窓会に行くと言っている。）

**黛**「高校の同窓会です。今日これから。」

**古美門**「〈憤慨しながら、大きな声で〉~~同窓会だと！？~~ → 「同窓会！？」

*事務所の苦境をほったらかして、過去を美化してお互い慰め合うだけの 何の発展性もない集会に出るというのか*？」 （リーガル・ハイ（第2期）第3話）

例（123’）（柴山は鮫島の元部下であり、新しい就職先で働くことを決断した。）

・・・・・（前略）・・・・・

**柴山**「正直、私の再就職を社長がどう思うかは関係ないと思いますが。」

**鮫島**「〈不満げな顔をしながら、大きな声で〉~~関係ないだと！？~~」 → 「関係ない！？」

**柴山**「私にクビだと言ったのは社長です。」 （世界一難しい恋　第8話）

以上の考察から、引用形式「と」が後続されなくても、繰り返しのみでは例（96’）と例（121’）のような「説明要求／確認要求」および例（122’）と例（123’）のような「感情の表出」の両方が伝達

されることが明らかになった。しかし、本調査による日本語のフィクション会話における繰り返しの機能（第4章4.1.節の表（10））からわかるように、実際の会話では繰り返しは「時間稼ぎ」、「相手の発話の促進」より「説明要求／確認要求」という機能として用いられることが多く見られたが、「感情の表出」という機能と比較すると、圧倒的に少ないことが明らかになった。要するに、繰り返しのみでは、通常の「説明要求／確認要求」、つまり相手からの情報を要求することを表すには向かない表現であると考えられる。一方、本調査においては、「〜だと（！）？」以外、繰り返しに引用形式「と」が後続する場合は「感情の表出」より通常の「説明要求／確認要求」を表す用例がほとんどであるため、引用形式「と」が付くことによって、「説明要求／確認要求」の機能の使用に偏るのではないかと考えられる。このことから、繰り返しに後続する引用形式「と」はいわば、終助詞と類似した性質を持つのではないかと推測される。

### 7.1.3. 繰り返しに後続する引用形式「って」の性質と使用傾向

前述した表（18）から、「繰り返し＋引用形式「って」」の使用は総143例（21.1%）の中、72例（11%）が観察され、繰り返しに後続する表現形式の中で最も多く使用されることがわかった。また、次の表（20）のとおりに、引用形式「って」は様々な表現形式に分類することができる。本研究における引用形式「って」は、「〜って？」、「〜ってなに？」、「〜っていつ？」「ってどういうこと？」や「〜って。」などの様々な形式を持つが、便宜上、それぞれの表現形式をすべて「って」という形で示す。表（20）からわかるように、繰り返しに後続する引用形式「って」の中で、上昇調イントネーションの「〜って（！）？」および下降調イントネーションの「〜って。」形式がそれぞれ19例（3%）、18例（2.75%）見られ、最も使用されていることがわかった。以下の例（124）と例（125）は前者、例（97）と例（126）は後者を示している。

表（20）　繰り返しに後続する引用形式「って」の種類と使用傾向

| 繰り返しに後続する引用形式「って」 | 出現率 |
|---|---|
| 「～」　＋　って（！）？ | 3%（19 例） |
| 「～」　＋　って。（下降調） | 2.75%（18 例） |
| 「～」　＋　って　＋　［名詞］ | 0.2%（1 例） |
| 「～」　＋　って　＋　［名詞］　＋　ですか？ | 0.2%（1 例） |
| 「～」　＋　って　＋　ね。 | 0.2%（1 例） |
| 「～」　＋　って　＋　なんですか？ | 1%（6 例） |
| 「～」　＋　って　＋　なんだ（！）？ | 0.2%（1 例） |
| 「～」　＋　って　＋　なんだ　＋　よ（？）。 | 1%（3 例） |
| 「～」　＋　って　＋　なに　＋　よ（！）？ | 0.2%（1 例） |
| 「～」　＋　って　＋　［名詞］　＋　なの？ | 0.2%（1 例） |
| 「～」　＋　って　＋　いつ？ | 0.2%（1 例） |
| 「～」　＋　って　＋　誰ですか？ | 0.2%（1 例） |
| 「～」　＋　って　＋　誰？ | 0.2%（1 例） |
| 「～」　＋　って　＋　言うのは　＋　誰に？ | 0.2%（1 例） |
| 「～」　＋　って　＋　どこに？ | 0.31%（2 例） |
| 「～」　＋　って　＋　どういうこと？ | 1%（4 例） |
| 「～」　＋　って　＋　どういうこと　＋　ですか？ | 0.2%（1 例） |
| 「～」　＋　って　＋　どんなこと？ | 0.2%（1 例） |
| 「～」　＋　って　＋　どういう意味　＋　だ？ | 0.2%（1 例） |
| 「～」　＋　って　＋　どういう意味　＋　でしょうか？ | 0.2%（1 例） |
| 「～」　＋　って　＋　どうなの　＋　よ？ | 0.2%（1 例） |
| 「～」　＋　って　＋　どういう　＋　［名詞］　＋　よ？ | 0.2%（1 例） |
| 「～」　＋　って　＋　［名詞］　＋　どうなる　＋　（ん）ですか？ | 0.2%（1 例） |
| 「～」　＋　です　＋　って（！）？ | 0.2%（1 例） |
| なんですか　＋　［名詞］　＋　って？ | 0.2%（1 例） |
| なに　＋　［名詞］　＋　って？ | 0.2%（1 例） |
| 合計　＝　11%（72 例） | |

（総例文の小数点第 3 位を四捨五入）（出所：筆者作成）

例（124）（社員用のジムについて話している。）

堀「美咲さ～ん、すごいですよ。ここサウナにジェットバスまで付いてます。」

柴山「それは助かる。」

三浦「〈相手に向かって〉ん？ 助かるって？」

柴山「通ってる銭湯がたまに平日休むんです。」　（世界一難しい恋　第 1 話）

例（125）（西門という優紀の憧れの男性のバイクについて話している。）

**つくし**「 そういえばさ優紀、西門さんのバイクの後ろに乗せてもらったことある？」

**優紀**「ないけど。」

**幸代**「間違いないね・・・そいつは指定席だよ。」

**優紀**「〈相手に向かって〉 指定席って？」

**幸代**「*特定の女しか乗せないってこと*。」　（花より男子（リターンズ）第 6 話）

上記の例（124）と例（125）では、後続する相手からの解説や説明を考えてみると、発話者は「繰り返し＋上昇調イントネーションの「って（！）？」」という形で相手から何らかの情報を求めていることが推測される。また、本調査の結果から、例（124）と例（125）のような「繰り返し＋「って（！）？」」の使用は 19 例（3%）が見られ、18 例は「説明要求／確認要求」として用いられることが確認された。この場合の「って」は、7.1.1.3.で述べた加藤(2010)による「理解困難表示用法」の「って」と同様な機能を持つと言えるだろう。

しかし、この場合は上述した「とは」と同様に、以下の例（124’）と例（125’）のように「って（！）？」が付加されていない、「助かる？」および「指定席？」という繰り返しだけでも「説明要求／確認要求」が伝達されると考えられる。つまり、「通ってる銭湯がたまに平日休むんです」と「特定の女しか乗せないってこと」という相手からの解説や説明からわかるように、「説明要求／確認要求」という機能を表しているのは繰り返しの部分であることが明らかである。

例（124’）（社員用のジムについて話している。）

**堀**「美咲さ～ん、すごいですよ。ここサウナにジェットバスまで付いてます。」

**柴山**「それは助かる。」

**三浦**「〈相手に向かって〉 *ん*？ ~~助かるって？~~」　→　「助かる？」

**柴山**「*通ってる銭湯がたまに平日休むんです*。」　（世界一難しい恋　第 1 話）

例（125’）（西門という優紀の憧れの男性のバイクについて話している。）

・・・・・（前略）・・・・・

**幸代**「間違いないね・・・そいつは指定席だよ。」

**優紀**「〈相手に向かって〉 ~~指定席って？~~」　→　「指定席？」

**幸代**「*特定の女しか乗せないってこと*。」　（花より男子（リターンズ）　第 6 話）

一方、以下の例（97）と例（126）は「繰り返し＋下降調イントネーションの「って。」」という実際の会話例である。両者における発話者の困っている表情や声色などを考えると、相手が言った「おかまいなく」、「ハトの小屋」に対して「困難」や「不満」などというある種の否定的態度を表出しているのではないかと考えられる。また、本調査から「繰り返し＋「って。」」の使用は 18 例（2.75%）が見られ、すべての例文は「感情の表出」の機能として用いられることがわかった。

例（97）（上尾は給料日前に幼稚園児たちにカラオケに連れてきているが、子供たちがたくさんの食べ物を注文してしまった。）

**上尾**「げっー！だ、だ、だれこんなに頼んだの！？」

**しんちゃん**「おかまいなく～」

**上尾**「〈困っている顔をしながら〉　お、おかまいなくって・・・」　（クレヨンしんちゃん）

例（126）（滋はつくしの家について話している。）

**滋**「なんかこの部屋懐かしい感じするなあ。あっ、何でか分かった！昔うちで飼ってたハトの小屋に大きさも汚さも似てるからだ～」

**つくし**「〈不満げな顔をしながら、小さな声で〉　ハトの小屋って・・・」

（花より男子（リターンズ）　第 4 話）

この点については、7.1.1.3.で述べたように、従来の研究（池谷 2018、加藤 2010）によれば、文末の「って」は発話者の「不満」、「驚き」、「不快感」、「意外感」などのような発話者による「感情の表出」を表す機能を持つとされている。しかし、以下の（117）と（127）のように先行研究に挙がっているそれぞれの例文では引用形式「って」の直前は、必ず繰り返しであることが確認された。

例（117）（A は、ヤマンバメイクと言われる奇抜な化粧をしている若い女性。ヤマンバを卒業するために、美容師などの助けを借りて付けまつげを落としているところを番組レポーターの B が見守っている。）

**B**：ぶっさいく。（付け睫毛がとれた素顔に近い A を見て大笑いする。）

**A**：うるさいからねほんとに。うるさくてねこれね。（B を「これ」と言って指す）

**B**：これねって。（笑）これじゃないから。　（加藤 2010：128）

例（127）千：あの人湯屋にいるからいけないの。あそこを出た方がいいんだよ。

リン：だってどこ連れてくんだよー！

千：わかんないけど。

リン：わかんないって・・・！・・・あーあついてくんぞあいつ・・・　（池谷 2018）

このように、上記の例（117）と例（127）の場合は、以下の例（117'）と例（127'）のように引用形式「って」が省かれても、発話者の表情や声色などによって、「わかんない」と「これね」という繰り返された部分だけでも例（117）と例（127）と同様に発話者の「不満」、「怒り」や「意外感」などの感情が表出される。つまり、発話者のそれぞれの感情は「って」が担っているのではなく、明らかに「って」の前の要素である繰り返しが担っているのではないかと推測される。

例（117'）　・・・・・（前略）・・・・・

**A**：うるさいからねほんとに。うるさくてねこれね。（B を「これ」と言って指す）

**B**：~~これね~~~~って~~。　→　「これね。」（笑）これじゃないから。

例（127'）　・・・・・（前略）・・・・・

千：わかんないけど。

リン：~~わかんない~~~~って~~　→　「わかんない」・・・！・・・あーあついてくんぞあいつ・・・

また、上記例（97）と例（126）という本調査からの会話例を考察してみると、次の例（97'）と例（126'）のように「って」が付加されていない、「おかまいなく」および「ハトの小屋」という繰り返しだけでも発話者の「困難」や「不満」などの感情が伝達されていると思われる。

例（97'）（上尾は給料日前に幼稚園児たちにカラオケに連れてきているが、子供たちがたくさんの食べ物を注文してしまった。）

上尾「げっー！だ、だ、だれこんなに頼んだの！？」

しんちゃん「おかまいなく～」

上尾「〈困っている顔をしながら〉　~~お、おかまいなく~~~~って~~　→　「お、おかまいなく・・・」

（クレヨンしんちゃん）

例（126’）（滋はつくしの家について話している。）

**滋**「なんかこの部屋懐かしい感じするなあ。あっ、何でか分かった！昔うちで飼ってたハトの小屋に大きさも汚さも似てるからだ～」

**つくし**「〈不満げな顔をしながら、小さな声で〉 ~~ハトの小屋って~~ → 「ハトの小屋・・・」

（花より男子（リターンズ） 第4話）

他にも、「繰り返し＋上昇調イントネーションの「って（！）？」」という表現形式で「感情の表出」の機能が果たすことも見られる。下記の例（128）では、発話者の声の大きさおよび表情を考慮すると、発話者の意図は相手から「乱暴な高校生」ということばの内容の説明または確認を要求することではなく、むしろ相手が言った「乱暴な高校生」に対する「不満」や「怒り」などの否定的感情を表出することである。加えて、例（128’）のように「って」が付加されなくても、明らかに発話者が繰り返した「乱暴な高校生！？」自体に既に相手に対する「不満」や「苛立ち」が内在していると言える。

例（128）（高校生たちがアルバイト先の上司と喧嘩している。）

**上司**「なんて乱暴な高校生なんだ。」

**高校生たち**「〈怒りながら、大きな声で〉乱暴な高校生って！？」 （クレヨンしんちゃん）

例（128’）（高校生たちがアルバイト先の上司と喧嘩している。）

**上司**「なんて乱暴な高校生なんだ。」

**高校生たち**「〈怒りながら、大きな声で〉~~乱暴な高校生って~~！？」 → 「乱暴な高校生！？」

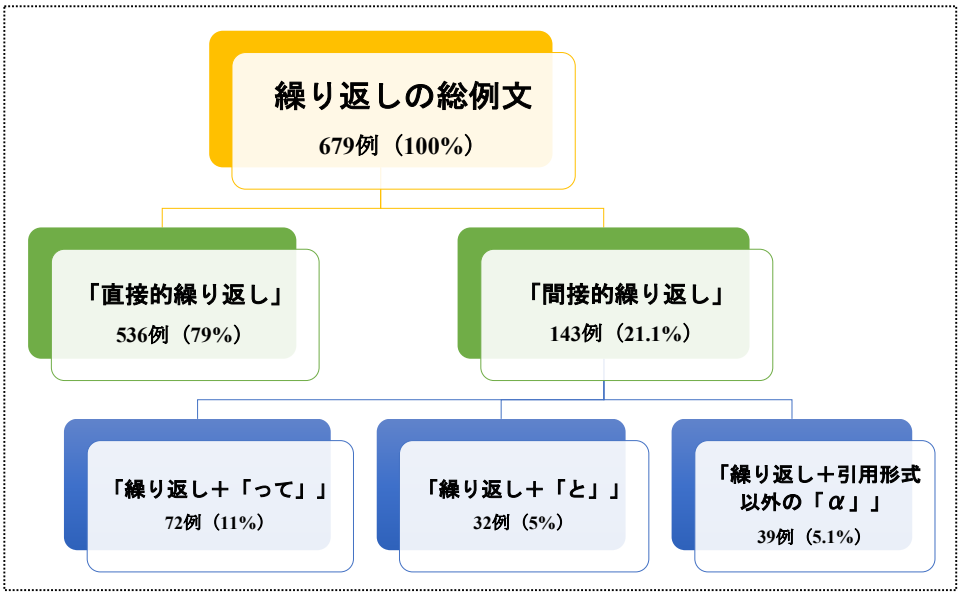
（クレヨンしんちゃん）

以上の考察から、引用形式「って」が後続されなくても、繰り返しのみでも（124’）と（125’）のような通常の「説明要求／確認要求」および（97’）、（126’）、（128’）のような「感情の表出」の両方が伝達されることが明らかになった。しかし、第4章4.1.節で示す表（10）の日本語のフィクション会話における繰り返しの機能からわかるように、実際の会話では繰り返しは「説明要求／確認要求」というより「感情の表出」の機能が圧倒的に多く使用されることが明らかになった。要するに、繰り返しのみでは、通常の「説明要求／確認要求」、つまり相手からの情報を要求することを表すには適当ではない表現であると考えられる。一方、本調査において見られた繰り返しに「って」が後続する場合は、上述した引用形式「と」と同様に「感情の表出」より通常の「説明要求／確認要求」を表す

用例が非常に多く見られた。そのため、引用形式「って」が付くことによって、「説明要求／確認要求」の機能として用いられる傾向が強いのではないかと考えられる。

以上が日本語のフィクション会話における繰り返しの表現形式である。日本語のフィクション会話においては、「直接的繰り返し」および「間接的繰り返し」の両種類の形式が観察された。「間接的繰り返し」の中では、引用形式「と」と「って」が最も多く用いられることが明らかになった。また、従来の研究では引用形式「って」は、発話者の「不満」、「意外感」や「驚き」などの感情を表す機能を持つことが指摘されている。しかし、上記の考察からわかるように、繰り返しに後続する引用形式「と」と「って」には実質的意味を持たないため、「感情の表出」という機能を果たすことが不可能であると考えられる。つまり、実際はそれぞれの感情は「って」の機能によって生じるものではなく、むしろ前の要素の繰り返しが担っていると考えられる。さらに、繰り返しは相手に情報を求めるというより、相手の発話に対する感情を表出するのに非常に多く用いられることが観察されたが、「と」あるいは「って」が後続することによって、より通常の「説明要求／確認要求」のニュアンスが強まると考えられる。要するに、繰り返しに後続する引用形式「と」と「って」は、単に終助詞のような機能を持ち、繰り返しの持つ機能をより高める効果があるのではないかと考えられる。

また、以下の図（6）が示すように、「繰り返し＋引用形式「と」／「って」」が他の形式より多く使用されるとは言え、「直接的繰り返し」の使用率と比較すると、極めて少ないことがわかった。




**図（6）　日本語のフィクション会話における繰り返しの表現形式の種類と使用傾向**

（出所：筆者作成）

表（21）　日本語のフィクション会話における繰り返しの機能と表現形式の使用傾向

| 日本語のフィクション会話における繰り返しの発話機能 | 出現率 | 「直接的繰り返し」の出現率 | 「間接的繰り返し」の出現率 |
|---|---|---|---|
| 「感情の表出」 | 81%（549 例） | 69%（465 例） | 12.1%（82 例） |
| 「時間稼ぎ」 | 3%（18 例） | 2.5%（15 例） | 0.5%（3 例） |
| 「相手の発話の促進」 | 1%（4 例） | 0.75%（3 例） | 0.25%（1 例） |
| 「説明要求／確認要求」 | 16%（108 例） | 8%（51 例） | 8.44%（57 例） |
| 合計　＝　100%（679 例） | | | |

（出所：筆者作成）

加えて、繰り返しの各機能で現れる「直接的繰り返し」および「間接的繰り返し」の出現数に関しては、上記の表（21）にまとめられる。表（21）と図（6）からわかるように、繰り返しのみという「直接的繰り返し」では「時間稼ぎ」、「相手の発話の促進」、「説明要求／確認要求」、「感情の表出」の機能を果たしていることが明らかになった。しかし、実際は「説明要求／確認要求」は「直接的繰り返し」より、「間接的繰り返し」という表現形式で用いられる傾向が高いことがわかった。また、その中では引用形式「と」と「って」がほとんどであることが確認された。一方、「感情の表出」の場合は「間接的繰り返し」よりも、「直接的繰り返し」が圧倒的に多く使われることが観察された。このことから、繰り返しは感情的機能に適している表現なのではないかと考えられる。

また、繰り返しと引用形式を対照して考えると、繰り返しは引用表現と類似した性質を持つことが明らかになった。繰り返しは、引用形式が現れなくても、実質的には相手の発話の一部ないし全部をそのまま引用的に取り上げられる。つまり、繰り返しも引用表現も両方、既に存在していることばや発話を再現する機能を持つという共通点があると言える。

## 7.2.　日本語の自然会話における繰り返しの表現形式

前節では、日本語のフィクション会話における繰り返しの表現形式を分析し、繰り返しと共起する最も高頻度の要素について考察した。本節では、日本語の自然会話で使用される繰り返しの表現形式について、分析していく。

日本のインタビュー番組、トーク番組、バラエティ番組、ラジオ番組合計 15 時間から収集した繰り返しの例文総 379 例（100%）を考察した結果、以下の表（22）が示すように、日本語の自然会話においては、「間接的繰り返し」の使用は 96 例（25.32%）が観察された。

表（22）　日本語の自然会話における繰り返しの表現形式の種類と使用傾向

| 日本語の自然会話における繰り返しの表現形式 | 出現率 |
|---|---|
| 「～」　＋（引用形式）って？ | 2.4%（9 例） |
| 「～」　＋　です。 | 4%（14 例） |
| 「～」　＋　ですか。 | 1%（2 例） |
| 「～」　＋　ですか？ | 2.11%（8 例） |
| 「～」　＋　んですか？ | 1%（3 例） |
| 「～」　＋　ですね。 | 2.4%（9 例） |
| 「～」　＋　んですね。 | 1%（2 例） |
| 「～」　＋　ですよ。 | 0.3%（1 例） |
| 「～」　＋　ですよね。 | 0.3%（1 例） |
| 「～」　＋　でしたか？ | 0.3%（1 例） |
| 「～」　＋　でしたね。 | 0.3%（1 例） |
| 「～」　＋　んだ。 | 1%（2 例） |
| 「～」　＋　だったです。 | 0.3%（1 例） |
| 「～」　＋　だね。 | 0.3%（1 例） |
| 「～」　＋　だった　＋　ね。 | 1%（2 例） |
| 「～」　＋　か。 | 1.1%（4 例） |
| 「～」　＋　よ。 | 1%（2 例） |
| 「～」　＋　ね。 | 4.22%（16 例） |
| 「～」　＋　も（！）？ | 0.3%（1 例） |
| 「～」　＋（な）の？ | 2%（7 例） |
| 「～」　＋（の）かな？ | 0.3%（1 例） |
| 「～」　＋　じゃない。 | 1%（2 例） |
| 「～」　＋　じゃない　＋ですか？ | 0.3%（1 例） |
| 「～」　＋　じゃない　＋（ん）だ。 | 0.3%（1 例） |
| 「～」　＋　じゃねぇ　＋（わ）。 | 1%（3 例） |
| 「～」　＋　ではない　＋　です　＋　ね。 | 0.3%（1 例） |
| 合計　＝　25.32%（96 例） | |

（総例文の小数点第 3 位を四捨五入）（出所：筆者作成）

表（22）からわかるように、「「～」＋「ね。」」および「「～」＋「です。」」の使用数はそれぞれ16例（4.22%）と14例（4%）が見られ、「α」の中で最も多く用いられることが明らかである。また、「「～」＋ですね。」、「「～」＋引用形式「って？」」、「「～」＋ですか？」、「「～」＋（な）の？」の形式も多少見られ、それぞれの形式の使用数は、9例（2.4%）、9例（2.4%）、8例（2.11%）、7例（2%）が観察された。しかし、「「～」＋「ね。」」と「「～」＋「です。」」と比較すると、それほど多くない。残りの「α」は、ほとんど1例ずつしか見られず、非常に少ないことがわかった。

このように、日本語の自然会話においては、繰り返しに付加される形式はフィクション会話よりも種類が豊富であることが明らかになった。しかし、フィクション会話と異なり、「繰り返し＋引用形式」という形式の使用は非常に少なく、引用形式「と」の使用は全く見当たらなかった。一方、フィクション会話においては、「繰り返し＋「ね。」の使用率が非常に少なく、「繰り返し＋「です。」」形式は全く使用されていないが、自然会話では両者の使用は他形式より圧倒的に多く用いられることがわかった。つまり、会話の種類によって、繰り返しの表現形式の使用傾向は異なるのである。ただし、繰り返しの総例文379例（100%）の中で、「直接的繰り返し」の使用は283例（75%）見られ、総例文の大半を占めている。一方で、「間接的繰り返し」の使用は96例（25.32%）しかなく、「直接的繰り返し」と比較すると、圧倒的に少ない。つまり、日本語の自然会話はフィクション会話と同様に、「間接的繰り返し」よりも「直接的繰り返し」が用いられる傾向が非常に強いことがわかった。

### 7.2.1. 繰り返しに後続する終助詞「ね」

本調査の結果によると、日本語の自然会話では「「～」＋「ね。」」と「「～」＋「です。」」の形式が最も使用されることがわかった。本項では、「「～」＋「ね。」」について、実際の会話例を挙げながら詳細に分析していく。以下の例（129）と例（130）は、「「～」＋「ね。」」を示している。

例（129）（新年の挨拶をしている。）

**麻花**「ねぇ、年末年始を越えて、【またこうして】、

**ミユウ**「〈頷く〉【越えてね】。」

**和京**「はい。」

**麻花**「三人揃えて本当に良かったです。」　（SHIBUYA MUSIC POWER　2017年1月7日）

例（130）（秋の食べ物について話している。）

**バブル**「そして私はですね、秋と言えば、

**ココ**「はい。」

**バブル**「なんでしょう。お魚。

**ココ**「【お魚】？」

**バブル**「【さんま】！」

**カリン**「【あ～美味しい】！」

**ココ**「〈頷く〉【さんまね】。*なるほど*。」　（SHIBUYA MUSIC POWER　2017 年 9 月 9 日）

上記の例（129）と例（130）では、発話者は「繰り返し＋「ね。」」という形で相手の発話を繰り返している。この場合は、発話者は相手が話している途中で、頷きながら相手のことばを繰り返している。つまり、相手の発話を繰り返すことによって、発話者は単に「あ、そうなんだ」または「なるほど」のような意味合いで自分の理解を表しながら、相手の話を聞いているという信号を送っていると考えられる。言い換えれば、この場合の繰り返しは「あいづち」と同様の性質を持っているのである。加えて、上の表（22）が示すように、「繰り返し＋「ね。」」の使用は 16 例（4.22%）が観察され、14 例が「あいづち」として用いられることが確認された。また、この場合は、終助詞「ね」が付加されなくても、「越えて」および「さんま」という繰り返しの部分だけでも、「あいづち」の機能を果たすことができる。一方、「ね」が付加することによって、終助詞「ね」の基本的機能であると言われている「話し手と聞き手の間の共有情報を表示する」という性質も、繰り返しの発話に追加されるのではないかと考えられる。

### 7.2.2. 繰り返しに後続する「です」

日本語の自然会話においては、「「～」＋「ね。」」のほか、「「～」＋「です。」」形式も多用されることが観察された。「「～」＋「です。」」の実際の会話用例については、下記の例（60）と例（131）に示している。

例（60）（ある歌手グループのメンバーの自己紹介をしている。）

**小林**「はい。えー、なおとさんと同じパフォーマーとリーダーをやらせていただきます
小林直己です。」

**上田**「おおー！」

**小林**「よろしくお願いします。」

**上田**「リーダー2人体制？」

**なおと**「〈頷く〉2人体制です。」

**上田**「あ、そうなんだ。おーおー。」　（しゃべくり 007　2015年1月19日）

例（131）（高橋は初めてのライブハウスで出演したことについて話している。）

**高橋**「・・・（前略）・・・でもやっぱりその一、自分が歌うという信念は負けたくなかったから、

**ミユウ**「【うん】。」

**高橋**「【それでも】歌い続けたけど、

**ミユウ**「【うん】。」

**高橋**「【あの時は】すごく凹みましたね。」

**美千歌**「あーー。」

**ミユウ**「一番最初のライブ？」

**高橋**「〈頷く〉一番最初のライブです。」　（SHIBUYA MUSIC POWER　2019年2月9日）

上の例（60）と例（131）では、相手の質問である「2人体制？」と「一番最初のライブ？」、および発話者が回答する際の「頷き」を考慮すると、発話者は相手の発話を「繰り返し＋「です。」」の形で繰り返したのは、相手の質問に対して返答していることがわかった。また、本調査から、「「～」＋「です。」」の使用は14例（4%）が見られ、すべての例文は「応答」の機能として用いられることが確認された。しかし、この場合も上の「繰り返し＋「ね。」」と同様に、「です」が付加されなくても、「2人体制」および「一番最初のライブ」という繰り返しのみでも発話者による「応答」が伝達される。それに対して、「です」が付加することによって、繰り返しの発話に相手への配慮や敬意の意味も付け加えられると言える。

以上が日本語の自然会話における繰り返しの表現形式である。日本語の自然会話ではフィクション会話と同様に、「直接的繰り返し」および「間接的繰り返し」の両種類の形式が観察された。「間接的繰り返し」の中では、「繰り返し＋「ね。」」と「繰り返し＋「です。」」が最も多く用いられることが明らかになった。また、「繰り返し＋「ね。」」は「あいづち」、「繰り返し＋「です。」」は「応答」の機能として使用されることがわかった。この点については、自然会話の性質と関連するのではないか

と推測される。第4章4.2.節で述べたように、自然会話の目的は、会話の相手とお互いに何らかの情報を交換したり、他人との良好な人間関係を構築したりすることが目的である。そのため、相手との円滑なコミュニケーションで良好な関係を築くために、相手への配慮や共感を示す「あいづち」および「応答」が多く使用されているのではないかと考えられる。その理由で、自然会話においては、「α」の中で、終助詞「ね」と「です」が最も多く用いられるのであると言える。一方、フィクション会話で多用される「繰り返し＋引用形式「って」」は非常に少なく、「繰り返し＋引用形式「と」」の場合は全く見当たらなかった。このことから、繰り返しに後続する引用形式「って」は自然会話では多少使われるが、引用形式「と」の場合はテレビドラマやアニメの脚本特有の表現ではないかと考えられる。

さらに、日本語の自然会話における繰り返しの各機能で現れる「直接的繰り返し」および「間接的繰り返し」の出現数については、以下の表（23）に示している。

**表（23）　日本語の自然会話における繰り返しの機能と表現形式の使用傾向**

| 日本語の自然会話における繰り返しの発話機能 | 出現率 | 「直接的繰り返し」の出現率 | 「間接的繰り返し」の出現率 |
|---|---|---|---|
| 「感情の表出」 | 47%（178 例） | 35.4%（134 例） | 11.1%（42 例） |
| 「時間稼ぎ」 | 7%（25 例） | 6.44%（23 例） | 1%（2 例） |
| 「相手の発話の促進」 | 2%（6 例） | 2%（6 例） | 0%（0 例） |
| 「説明要求／確認要求」 | 6%（21 例） | 4%（14 例） | 2%（7 例） |
| 「あいづち」 | 20%（75 例） | 15.2%（57 例） | 4.8%（18 例） |
| 「応答」 | 19.3%（73 例） | 12%（44 例） | 7.14%（27 例） |
| 「からかい」 | 0.3%（1 例） | 0.3%（1 例） | 0%（0 例） |
| 合計　＝　100%（379 例） | | | |

（総例文の小数点第3位を四捨五入）（出所：筆者作成）

表（23）からわかるように、「直接的繰り返し」では「時間稼ぎ」、「相手の発話の促進」、「説明要求／確認要求」、「感情の表出」、「あいづち」、「応答」、「からかい」の機能を果たしていることが見られた。また、すべての機能において、「間接的繰り返し」というより「直接的繰り返し」の方が圧倒的に多く用いられることがわかった。つまり、日本語の自然会話では「間接的繰り返し」が使用されているとは言え、それぞれの要素は聞き手への配慮という意味が繰り返しの発話に追加されるのではないかと考えられる。

## 7.3. タイ語のフィクション会話における繰り返しの表現形式

7.1.と 7.2.節では、日本語会話における繰り返しの表現形式について詳細に分類した。また、フィクション会話と自然会話で出現する形式を考察し、両者の会話における繰り返しの形式の相違点について明らかにした。本節では、タイ語のフィクション会話における繰り返しの表現形式を中心に、分析を行っていく。また、日本語とタイ語で用いられる繰り返しの形式の種類や使用傾向の違いについて、多少触れる。

タイのテレビドラマにおける繰り返しの会話用例合計 593 例文（100%）を考察した結果、日本語のフィクション会話と同様に、「直接的繰り返し」と「間接的繰り返し」の両方が観察された。「間接的繰り返し」の使用に関しては、下記の表（24）が示すように、244 例（41.2%）が見られ、様々な形式に分類できることが明らかになった。

**表（24）　タイ語のフィクション会話における繰り返しの表現形式の種類と使用傾向**

| タイ語のフィクション会話における繰り返しの表現形式 | 出現率 |
|---|---|
| 「～」 ＋ àray？ （「～」＋ なに） | 19%（111 例） |
| 「～」 ＋ rǔu？ （「～」＋ 疑問文文末助詞） | 15.03%（89 例） |
| 「～」 ＋ yaŋŋay？ （「～」＋ どうやって） | 2%（10 例） |
| 「～」 ＋ thammay？ （「～」＋ なぜ） | 2%（9 例） |
| 「～」 ＋ nǎy？ （「～」＋ どこ／どの） | 1.2%（7 例） |
| 「～」 ＋ kray？ （「～」＋ だれ ） | 1.2%（7 例） |
| 「～」 ＋ chây-mǎy？ （「～」＋ 疑問文文末助詞） | 0.34%（2 例） |
| 「～」 ＋ khráp/khá？ （「～」＋ 男性丁寧語／女性丁寧語） | 1%（3 例） |
| 「～」 ＋ sì. （「～」＋ 終助詞） | 0.2%（1 例） |
| 「～」 ＋ dûay？ （「～」＋ も） | 0.2%（1 例） |
| 「～」 ＋ nîa ＋ ná？ （「～」＋ 終助詞 ＋ 終助詞） | 0.34%（2 例） |
| 「～」 ＋ nîa ＋ ná ＋ khráp/khá？ （「～」＋ 終助詞 ＋ 終助詞 ＋ 男性丁寧語／女性丁寧語） | 0.2%（1 例） |
| 「～」 ＋ ìik-lá？ （「～」＋ また） | 0.2%（1 例） |
| 合計 ＝ 41.2%（244 例） | |

（総例文の小数点第 3 位を四捨五入）（出所：筆者作成）

表（24）からわかるように、「α」の中で最も用いられるのは、「àray（なに）」および「rǔu（疑問文文末助詞）」であり、それぞれの使用数は111例（19%）と89例（15.03%）が観察された。また、「àray（なに）」と「rǔu（疑問文文末助詞）」の使用だけで、「間接的繰り返し」の大部分を占めていることがわかった。一方、残りの「α」はそれぞれの使用数が非常に少なく、全形式を合わせても、「àray（なに）」と「rǔu（疑問文文末助詞）」の半分にも満たないことが明らかである。加えて、「àray（なに）」は「rǔu（疑問文文末助詞）」よりやや多く使用されることが見られたが、両者の割合の差はそれほど変わらない。さらに、「àray（なに）＋rǔu（疑問文文末助詞）」という複合形の使用も観察された。しかし、本研究から収集したタイ語のフィクション会話における繰り返しの中で、「直積的繰り返し」の使用は349例（60%）が見られ、「間接的繰り返し」よりもある程度多く用いられることがわかった。つまり、タイ語のフィクション会話においては、どちらかといえば、「間接的繰り返し」よりも「直接的繰り返し」が用いられる傾向がやや強いと考えられる。

### 7.3.1. 繰り返しと共起する「àray（なに）」

本調査の結果から、タイ語のフィクション会話において、「「～」＋àray？（なに）」および「「～」＋rǔu？（疑問文文末助詞）」という形式は最も多く用いられることが確認された。本項では、「「～」＋àray？（なに）」について詳しく分析していく。上記の表（24）が示すように、「「～」＋àray？（なに）」形式については、111例（19%）の使用が見られ、その中では以下の表（25）のとおり、さらに細かい分類をすることができる。

**表（25）　繰り返しに付加される「àray（なに）」の形式と使用傾向**

| 繰り返しと共起する「àray（なに）」の形式 | 出現率 |
|---|---|
| 「～」＋ àray（！）？　（「～」＋ なに） | 5.31%（31例） |
| 「～」＋ àray ＋ [呼称詞]？　（「～」＋ なに ＋ [呼称詞]） | 0.34%（2例） |
| 「～」＋ àray ＋ khráp/khá？　（「～」＋ なに ＋ 男性丁寧語／女性丁寧語） | 4%（22例） |
| 「～」＋ àray ＋ khráp/khá ＋ [呼称詞]？<br>（「～」＋ なに ＋ 男性丁寧語／女性丁寧語 ＋ [呼称詞]） | 0.2%（1例） |
| 「～」＋ àray ＋ rɔ̌ɔ？　（「～」＋ なに ＋ 疑問文文末助詞） | 1.03%（6例） |
| 「～」＋ àray ＋ rɔ̌ɔ ＋ [呼称詞]？<br>（「～」＋ なに ＋ 疑問文文末助詞 ＋ [呼称詞]） | 1%（3例） |

| 繰り返しと共起する「àray（なに）」の形式 | 出現率 |
|---|---|
| 「～」 ＋ **àray** ＋ **rɔ̌ɔ** ＋ **khráp/khá？**<br>（「～」＋ なに ＋ 疑問文文末助詞 ＋ 男性丁寧語／女性丁寧語） | 2%（10 例） |
| 「～」 ＋ **àray** ＋ **rɔ̌ɔ** ＋ **khráp/khá** ＋ ［呼称詞］？<br>（「～」＋ なに ＋ 疑問文文末助詞 ＋ 男性丁寧語／女性丁寧語 ＋［呼称詞］） | 1%（4 例） |
| 「～」＋ **àray** ＋ **rɔ̌ɔ** ＋ **khráp/khá** ＋ ［呼称詞］＋ **khráp/khá？**<br>（「～」＋ なに ＋ 疑問文文末助詞 ＋ 男性丁寧語／女性丁寧語 ＋［呼称詞］ ＋ 男性丁寧語／女性丁寧語） | 0.2%（1 例） |
| 「～」 ＋ **àray** ＋ **rɔ̌ɔ** ＋ **yá？**（「～」＋ なに ＋ 疑問文文末助詞 ＋ 終助詞） | 0.2%（1 例） |
| 「～」 ＋ **àray** ＋ **à？**（「～」＋ なに ＋ 終助詞） | 1%（5 例） |
| 「～」 ＋ **àray** ＋ **à** ＋ **khráp/khá？**<br>（「～」＋ なに ＋ 終助詞 ＋ 男性丁寧語／女性丁寧語） | 0.34%（2 例） |
| 「～」 ＋ **àray** ＋ **kan？**（「～」＋ なに ＋ 多人数を表す副詞） | 0.2%（1 例） |
| 「～」 ＋ **àray** ＋ **kan** ＋ **à？**<br>（「～」＋ なに ＋ 多人数を表す副詞 ＋ 終助詞） | 0.2%（1 例） |
| 「～」 ＋ **àray** ＋ **kan** ＋ **cá** ＋ ［呼称詞］？<br>（「～」＋ なに ＋ 多人数を表す副詞 ＋ 終助詞 ＋［呼称詞］） | 0.2%（1 例） |
| 「～」 ＋ **àray** ＋ **wá？**（「～」＋ なに ＋ 終助詞（失礼な言い方）） | 1%（3 例） |
| 「～」 ＋ **àray** ＋ **là？**（「～」＋ なに ＋ 終助詞） | 0.34%（2 例） |
| 「～」 ＋ **àray** ＋ **là** ＋ ［呼称詞］？（「～」＋ なに ＋ 終助詞 ＋［呼称詞］） | 0.34%（2 例） |
| 「～」 ＋ **àray** ＋ **khɔ̌ɔŋ** ＋ ［人称代名詞］ ？<br>（「～」＋ なに ＋ 所有 ＋［人称代名詞］） | 0.2%（1 例） |
| 「～」 ＋ **rûaŋ** ＋ **àray？**（「～」＋ こと ＋ なに） | 0.2%（1 例） |
| 「～」 ＋ **rûaŋ** ＋ **àray** ＋ **à？**（「～」＋ こと ＋ なに ＋ 終助詞） | 0.2%（1 例） |
| 「～」 ＋ **rûaŋ** ＋ **àray** ＋ **à** ＋ **khráp/khá？**<br>（「～」＋ こと ＋ なに ＋ 終助詞 ＋ 男性丁寧語／女性丁寧語） | 0.2%（1 例） |
| 「～」 ＋ **rûaŋ** ＋ **àray** ＋ **khráp/khá** ＋ ［呼称詞］？<br>（「～」＋ こと ＋ なに ＋ 男性丁寧語／女性丁寧語 ＋ [呼称詞]） | 0.2%（1 例） |

| 繰り返しと共起する「àray（なに）」の形式 | 出現率 |
|---|---|
| 「～」 ＋ wâa ＋ àray ＋ khráp/khá ＋ ［呼称詞］？<br>（「～」＋ COPU ＋ なに ＋ 男性丁寧語／女性丁寧語 ＋［呼称詞］） | 0.2%（1 例） |
| 「～」 ＋ plɛɛ ＋ wâa ＋ àray ＋ khráp/khá？<br>（「～」＋ 訳 ＋ COPU ＋ なに ＋ 男性丁寧語／女性丁寧語） | 0.2%（1 例） |
| 「～」 ＋ plɛɛ ＋ wâa ＋ àray ＋ câ？<br>（「～」＋ 訳 ＋ COPU ＋ なに ＋ 終助詞） | 0.2%（1 例） |
| 「～」 ＋ khɯɯ ＋ àray ＋ rɤ̌ɔ ＋ khráp/khá？<br>（「～」＋ COPU ＋ なに ＋ 疑問文文末助詞 ＋ 男性丁寧語／女性丁寧語） | 0.2%（1 例） |
| 「～」 ＋ bâa ＋ àray ＋ khɔ̌ɔŋ ＋ ［人称代名詞］（！）？<br>（「～」＋ バカ ＋ なに ＋ 所有 ＋［人称代名詞］） | 0.2%（1 例） |
| àray ＋ khráp/khá ＋ 「～」？ （なに ＋ 男性丁寧語／女性丁寧語 ＋ 「～」） | 0.2%（1 例） |
| àray ＋ ná ＋ 「～」？ （なに ＋ 終助詞 ＋ 「～」） | 0.2%（1 例） |
| àray ＋ ná ＋ 「～」 ＋ rɤ̌ɔ？（なに ＋ 終助詞 ＋ 「～」＋ 疑問文文末助詞） | 0.2%（1 例） |
| 合計 ＝ 19%（111 例） | |

（総例文の小数点第 3 位を四捨五入）（出所：筆者作成）

表（25）から、繰り返しと共起する「àray（なに）」の表現形式の中で、「「～」＋àray（！）？（なに）」および「「～」＋àray（なに）＋khráp/khá？（男性丁寧語／女性丁寧語）という形式はそれぞれ 31 例（5.31%）と 22 例（4%）が使用され、「àray（なに）」形式の中で最も頻繁に用いられることが明らかになった。次に際立って見られるのは、「「～」＋àray（なに）＋rɤ̌ɔ[12]（疑問文文末助詞）＋khráp/khá？（男性丁寧語／女性丁寧語）」という様々な要素が複合している表現形式であり、10 例（2%）の使用数が観察された。残りの「àray（なに）」形式は、それぞれほとんど 1 例ずつしかなく、極めて少ないことがわかった。次の例（132）～例（134）は、「「～」＋àray（！）？（なに）」の例文を示している。

[12] 「rɤ̌ɔ」は、「rɯ̌ɯ」の話しことばであり、実際の会話においては多用されている。

例（132）（ナットとレーヤーは田んぼの中で立ち話している。）

香ばしい　終助詞
ナット「hɔ̌ɔm　nɔ́.」
（＝ 香ばしいね。）

香ばしい　なに
レーヤー「〈相手に向かって〉 hɔ̌ɔm　àray？」
（＝ 何が香ばしいなの？）

匂い　稲穂
ナット「klìn　khâaw.」
（＝ 稲穂の匂い。）

否定　見える　匂いがする　全く
レーヤー「〈稲の匂いを嗅ぐ〉 mây　hěn　dâay-klìn　lɔ̀ɔy.」
（＝〈稲の匂いを嗅ぐ〉　全然臭わないけど。）　（Dok Som See Thong　第 3 話）

例（133）（コンキアトのお父さんは、コンキアトと祖母が話していたのを見て、それについて尋ねている。）

あなた　話す　何　と　祖母
父「ʼúu　khuy　àray　kàp　aa-ùm？」
（＝ おばあちゃんと何を話していたの？）

フィラー　話す　こと
コンキアト「〈躊躇しながら〉 ɔ̀ɔ・・・khuy　rûaŋ・・・〈止まる〉」
（＝〈躊躇しながら〉　えーと・・・話していたのは（....）のこと・・・〈止まる〉）

こと　何
父「〈相手に向かって〉 rûaŋ　àray？」
（＝ 何のこと？）

こと　カムキャオ（名前）　男性丁寧語
コンキアト「〈戸惑いながら〉 ・・・rûaŋ　kham-kɛ̂ɛw　khráp.」
（＝〈戸惑いながら〉・・・カムキャオのことについて話していました。）

（Dok Som See Thong　第 6 話）

例（134）（ワニターは急いでケームという男性を探している。）

ケームさん　否定　存在する　男性丁寧語
ウィブーン「khun-khěem　mây　yùu　khráp.」
（＝ ケームさんがいないです。）

行く　どこ
ワニター「〈怒って、大きな声で〉 pay　nǎy！？」
（＝〈怒って、大きな声で〉　どこに行った！？）

COPU　こと　所有　上司　終助詞　男性丁寧語　僕　おそらく　勝手に　教える
ウィブーン「khʼuu　rûaŋ　khɔ̌ɔŋ　câw-naay　à　khráp.　phǒm　khoŋ　síi-sûa　bɔ̀ɔk

他人　否定　可能　終助詞　男性丁寧語
khon-ùun　mây　dây　à　khráp.」

（＝ 上司のことなので、他人に勝手に教えることができないんですよ。）

勝手に　何　私　である　人　親しい　所有
ワニター「〈怒りながら、大きな声で〉 sǐi-sûa　àray！？ chán　pen　khon　sa-nùt　khɔ̌ɔŋ

ケーム（名前）　私　経験の過去　入る　出る　ここ　毎日　教える　私　来る　今すぐ
khěem！　chán　khəəy　khâw　ɔ̀ɔk　thîi-nîi　thúk-wan.　bɔ̀ɔk　chán　maa　dĭaw-níi

COPU　ケーム（名前）　行く　どこ　行く　と　誰
wâa　khěem　pay　nǎy　pay　kàp　khray！」

（＝〈怒りながら、大きな声で〉何が勝手になんだよ！？ *私はケームの親しい人なのよ！毎日ここに出入りしているし。ケームはどこに誰と行ったのか今すぐ教えなさい*！）

（Yah Leum Chan　第 4 話）

上記の例（132）～例（134）においては、3 つの例文とも「「～」＋àray（！）？（なに）」形式が使用されるが、実際はそれぞれの例文における繰り返しは異なる機能を果たしている。例（132）では、「klìn　khâaw（稲穂の匂い）」というナットからの解説を考慮すると、レーヤーはナットのことばの「hɔ̌ɔm（香ばしい）」を「繰り返し＋α」の形という「hɔ̌ɔm　àray？（何が香ばしいなの？）」と繰り返し、相手からその香ばしい匂いに関する内容について説明や解説を求めている。一方、例（133）では、コンキアトは祖母と父親の新しい奥さんについて話していたが、それについて父に知られたくない。そして、父に聞かれると、コンキアトは躊躇しながら答えたが、なかなか直接伝えられず、途中で話が止まってしまった。そのため、父は「rûaŋ（こと）」というコンキアトの話が止まる前の最後のことばを「繰り返し＋α」の形という「rûaŋ　àray？（何のこと？）」と繰り返し、相手に話を続けさせようとしているのである。また、例（134）では、ワニターの態度や声色からわかるように、ワニターはウィブーンの発話の「sǐi-sûa（勝手に）」を「sǐi-sûa　àray！？（何が勝手になんだよ！？）」と繰り返したのは、「sǐi-sûa（勝手に）」に対する否定的な態度を表出していると考えられる。加えて、上の表（25）が示すように、「「～」＋àray（なに）（！）？」の使用は 31 例（5.31%）が観察された。その中では、13 例は「説明要求／確認要求」、5 例は「相手の発話の促進」、13 例は「感情の表出」の機能として用いられることが確認された。このことから、「「～」＋àray（！）？（なに）」形式によって、「説明要求／確認要求」、「相手の発話の促進」、「感情の表出」の 3 つの機能を果たしていることが明らかになった。特に、「説明要求／確認要求」および「感情の表出」として際立っている。

続いては、以下の例（135）と例（136）を考えてみよう。両者は、実際の会話における「「～」＋àray（なに）＋khráp/khá？（男性丁寧語／女性丁寧語）」という形式を示している。

例（135）（古いお城を見学している。）

匂い　それ　変　終助詞　男性丁寧語
アン「klìn　man　plɛ̀ɛk-plɛ̀ɛk　ná　khráp.」
（＝ なんか変な匂いがするような気がしますね。）

匂い　何　女性丁寧語
ヌーウアイ「〈相手に向かって〉　klîn　àray　khá？」
（＝〈相手に向かって〉　何の匂いですか？）

以前　ここ　経験の過去　ある　棺　男性丁寧語　そして　ある　人　死ぬ
アン「*tɛ̀ɛ-kɔ̀ɔn　troŋ-níi　khəəy　mii　looŋ-sòp　khráp.　lɛ́ɛw　mii　khon　taay*
存在する　ここ　たくさん　終助詞　男性丁寧語
*yùu　troŋ-níi　yə-yɛ́　ləay　khráp.*」
（＝ *以前、ここには棺がありました。あと、たくさんの死者がいた場所でした。*）

（Khun Chai Pawornruj　第 5 話）

例（136）（ケームチャードはスリヨンの上司であり、夕方の待ち合わせについて話している。）

こと　個人　否定　はい／そう　こと　仕事　夕方　この　終わる　仕事　すでに
ケームチャード「rûaŋ　sùan-tua　mây　chây　rûaŋ　ŋaan.　yen　níi　lə̂ək　ŋaan　lɛ́ɛw
しないで　ちょうど　戻る／帰る　終助詞　存在する　待つ　僕　まず　僕　ある　こと
yàa　phûŋ　klàp　ná.　yùu　rɔɔ　phŏm　kɔ̀ɔn.　phŏm　mii　rûaŋ
サプライズ
səə-phráy.」
（＝ 仕事のことじゃなくて、個人的なことなんだけど、今晩仕事が終わったら待ってて。

サプライズがあるから。）

サプライズ　何　女性丁寧語
スリヨン「〈相手に向かって〉　**səə-phráy**　àray　khá？」
（＝〈相手に向かって〉　何のサプライズですか？）

欲しい　知る　接続詞　なければならない　待つ
ケームチャード「*yàak　rúu　kɔ̀ɔ　tɔ̂ŋ　rɔɔ.*」
（＝ *知りたかったら、待つんだ。*）　（Yah Leum Chan　第 3 話）

例（135）と例（136）とも、発話者は相手の発話を繰り返した直後に、相手からの解説が後続する。この点については、第 4 章と第 5 章で述べた繰り返しにおける「説明要求／確認要求」の特徴である。つまり、例（135）と例（136）において、発話者は「klìn（匂い）」と「səə-phráy（サプライズ）」を、それぞれ「繰り返し＋α」の形という「klìn　àray　khá？（何の匂いですか？）」と「səə-phráy　àray　khá？（何のサプライズですか？）」と繰り返したのは、相手が言ったそのことばに対する追加説明を要求していると考えられる。また、本調査によると、「「～」＋àray（なに）＋khráp/khá？（男性丁寧語／女性丁寧語）」の使用数は、22 例（4%）が観察され、例（135）と例（136）のような「説明要求／確認要求」として用いられるのは、20 例も確認された。要するに、

タイ語のフィクション会話において、「説明要求／確認要求」という機能を果たすには、「「～」＋àray（なに）＋khráp/khá？（男性丁寧語／女性丁寧語）」の表現形式が使用される傾向が強いのではないかと考えられる。

他にも、下記の例（69）と例（137）のように、「「～」＋àray（なに）＋rɔ̌ɔ（疑問文文末助詞）＋khráp/khá？（男性丁寧語／女性丁寧語）」という形式がやや多く用いられる。

例（69）（タラートーンはある紙を落とした。）

紙　何　疑問文文末助詞　女性丁寧語　先生
ポーン「kràdàat　àray　rɔ̌ɔ　khá　aacaan-mɔ̀m？」
（＝ 先生、これは何の紙ですか？）

地図　終助詞　男性丁寧語
タラートーン「phɛ̌ɛnthîi　à　khráp.」
（＝ 地図です。）

地図　何　疑問文文末助詞　女性丁寧語
ポーン「〈相手に向かって〉　phɛ̌ɛnthîi　àray　rɔ̌ɔ　khá？」
（＝〈相手に向かって〉　何の地図ですか？）

地図　サイトマップ　男性丁寧語
タラートーン「*phɛ̌ɛnthîi　sáy-ŋaan　khráp.*」
（＝（*キャンプ場の）サイトマップです。*）　（Khun Chai Tarathorn　第 5 話）

例（137）（キャンプの中に女の子が絶対いないにもかかわらず、シンナコーンは女の子の声が聞こえると言っている。）

坊ちゃん　聞こえる　疑問文文末終助詞　男性丁寧語
シンナコーン「khunchaay　dâay-yin　rɯ̌u-plàaw　khráp？」
（＝ 坊ちゃん、聞こえますか？）

聞こえる　何　疑問文文末助詞　男性丁寧語
タラトーン「〈相手に向かって〉　dâay-yin　àray　rɔ̌ɔ　khráp？」
（＝〈相手に向かって〉　聞こえるって何がですか？）

接続詞　声　女性　終助詞　男性丁寧語
シンナコーン「*kɔ̂ɔ　sǐaŋ　phûu-yǐŋ　ŋay　khráp.*」
（＝ *女性の声ですよ。*）　（Khun Chai Tarathorn 第 3 話）

例（69）と例（137）では、「phɛ̌ɛnthîi　sáy-ŋaan　khráp（（キャンプ場の）サイトマップです）」と「kɔ̂ɔ　sǐaŋ　phûu-yǐŋ　ŋay　khráp（女性の声ですよ）」という相手からの解説を考慮すると、上の例（135）と例（136）と同様に、発話者は相手の発話を「繰り返し＋àray（なに）＋rɔ̌ɔ（疑問文文末助詞）＋khráp/khá？（男性丁寧語／女性丁寧語）」の形で繰り返したのは、「phɛ̌ɛnthîi（地図）」

および「dâay-yin（聞こえる）」に対する説明を求めていると考えられる。加えて、「「～」＋àray（なに）＋rɔ̌ɔ（疑問文文末助詞）＋khráp/khá？（男性丁寧語／女性丁寧語）」の使用は、10 例（2%）が見られ、すべての例文は「説明要求／確認要求」として使われることが明らかになった。

以上の「「～」＋àray？（なに）」形式の考察から、「「～」＋àray（！）？（なに）」、「「～」＋àray（なに）＋khráp/khá？（男性丁寧語／女性丁寧語）」、「「～」＋àray（なに）＋rɔ̌ɔ（疑問文文末助詞）＋khráp/khá？（男性丁寧語／女性丁寧語）」が最も頻繁に用いられることがわかった。「「～」＋àray（！）？（なに）」によって、「説明要求／確認要求」、「相手の発話の促進」、「感情の表出」の 3 つの機能を果たしていることが観察された。一方、「「～」＋àray（なに）＋khráp/khá？（男性丁寧語／女性丁寧語）」および「「～」＋àray（なに）＋rɔ̌ɔ（疑問文文末助詞）＋khráp/khá？（男性丁寧語／女性丁寧語）」は、「説明要求／確認要求」の機能の使用に偏ることがわかった。換言すれば、「àray（なに）」の後に「疑問文文末助詞」や「男性丁寧語／女性丁寧語」が付加されればされるほど、繰り返し発話はより疑問の意味として使用されるのではないかと推測される。

### 7.3.2. 繰り返しと共起する「rǔu（疑問文文末助詞）」

上記の表（24）が示すとおり、繰り返しに付加される「àray（なに）」の次に多く用いられるのは、「rǔu（疑問文文末助詞）」であることがわかった。本項では、「「～」＋rǔu？（疑問文文末助詞）」について詳しく考察を行っていく。本調査において収集した「「～」＋rǔu？（疑問文文末助詞）」という形式は、89 例（15.03%）が見られ、その中では次の表（26）のように、さらに下位分類することができる。

**表（26）　繰り返しに付加される「rǔu（疑問文文末助詞）」の形式と使用傾向**

| 繰り返しに後続する「rǔu（疑問文文末助詞）」の形式 | 出現率 |
|---|---|
| 「～」＋ rɔ̌ɔ（！）？ （「～」＋ 疑問文文末助詞） | 5.4%（32 例） |
| 「～」＋ rɔ̌ɔ ＋ khráp/khá（！）？ （「～」＋ 疑問文文末助詞 ＋ 男性丁寧語／女性丁寧語） | 4%（23 例） |
| 「～」＋ rɔ̌ɔ ＋ [呼称詞]？ （「～」＋ 疑問文文末助詞 ＋ [呼称詞]） | 0.2%（1 例） |
| 「～」＋ à ＋ rɔ̌ɔ？ （「～」＋ 終助詞 ＋ 疑問文文末助詞） | 0.2%（1 例） |
| 「～」＋ nà ＋ rɔ̌ɔ？ （「～」＋ 終助詞 ＋ 疑問文文末助詞） | 0.2%（1 例） |

| 繰り返しに後続する「rǔu（疑問文文末助詞）」の形式 | 出現率 |
|---|---|
| 「～」 ＋ yàaŋ-ŋán ＋ rɔ̌ɔ（！）？ （「～」＋ そのように ＋ 疑問文文末助詞） | 0.2%（1 例） |
| 「～」 ＋ ŋán ＋ rɔ̌ɔ？ （「～」＋ そのように ＋ 疑問文文末助詞） | 0.2%（1 例） |
| 「～」 ＋ chiaw ＋ rɔ̌ɔ？ （「～」＋ そんなに ＋ 疑問文文末助詞） | 0.2%（1 例） |
| 「～」 ＋ ləəy ＋ rɔ̌ɔ ＋ khráp/khá？ （「～」＋ そんなに ＋ 疑問文文末助詞 ＋ 男性丁寧語／女性丁寧語） | 1%（3 例） |
| 「～」 ＋ ìik-lɛ́ɛw ＋ rɔ̌ɔ？ （「～」＋ また ＋ 疑問文文末助詞） | 0.2%（1 例） |
| 「～」 ＋ plɛɛ ＋ wâa ＋ [名詞] ＋ rɔ̌ɔ ＋ khráp/khá？ （「～」＋ 訳 ＋ COPU ＋ [名詞] ＋ 疑問文文末助詞 ＋ 男性丁寧語／女性丁寧語） | 0.2%（1 例） |
| 「～」 ＋ ɔ̌ɔ（！）？ （「～」＋ 疑問文文末助詞） | 3.04%（18 例） |
| 「～」 ＋ ləəy ＋ ɔ̌ɔ（！）？ （「～」＋ そんなに ＋ 疑問文文末助詞） | 0.2%（1 例） |
| 「～」 ＋ rú？ （「～」＋ 疑問文文末助詞） | 1%（3 例） |
| 「～」 ＋ rǔu ＋ [呼称詞]？ （「～」＋ 疑問文文末助詞 ＋ [呼称詞]） | 0.2%（1 例） |
| 合計 ＝ 15.03%（89 例） | |

（総例文の小数点第 3 位を四捨五入）（出所：筆者作成）

表（26）が示すように、「rǔu」は「rɔ̌ɔ」、「rə̌ə」、「ɔ̌ɔ」、「rú」という様々な発音がある。「rǔu」は、文章の中で一般的に使われている典型的な形式であり、「rɔ̌ɔ」、「rə̌ə」、「ɔ̌ɔ」、「rú」は、「rǔu」の話しことばとして用いられている。本調査の結果から、繰り返しと共起する「rǔu（疑問文文末助詞）」の表現形式の中で、「「～」＋rɔ̌ɔ（！）？（疑問文文末助詞）」および「「～」＋rɔ̌ɔ（疑問文文末助詞）＋khráp/khá（！）？（男性丁寧語／女性丁寧語）」という形式はそれぞれ 32 例（5.4%）と 23 例（4%）が観察され、最も多く用いられることが明らかになった。次に頻繁に使用されるのは、「rɔ̌ɔ」のくだけた口語表現である「「～」＋ɔ̌ɔ（！）？（疑問文文末助詞）」であり、18 例（3.04%）の使用数が見られた。残りの「rǔu（疑問文文末助詞）」形式は、それぞれほとんど 1 例ずつしかなく、非常に少ないことがわかった。次の例（138）と例（139）は、「「～」＋rɔ̌ɔ（！）？（疑問文文末助詞）」の例文を示している。

例（138）（ヌーレックという女性の病気の症状について話している。）

チューン「chûɯn　núk-ɔ̀ɔk　lɛ́ɛw　là　khà.　aa-kaan　bèɛp　khun-nǔu-lék　nîia
（チューン）（思い出す）（すでに）（終助詞）（女性丁寧語）（症状）（ような）（ヌーレックさん）（終助詞）
mǔan　khray.」
（似ている）（誰）
（＝（チューンは）　思い出しました。ヌーレックさんの症状は誰に似ているのか、思い出しました。）

アーティット「〈相手に向かって〉　mǔan　khray　rɤ̌ɔ？」
（似ている）（誰）（疑問文文末助詞）
（＝〈相手に向かって〉　誰に似ているの？）

チューン「*mǔan　nɔ́ɔŋ-sàpháy　chûɯn　khà.*」
（似ている）（弟の嫁）（チューン）（女性丁寧語）
（＝*私の弟の嫁に似ています。*）

アーティット「lɛ́ɛw　kháw　pùay　pen　àray？」
（それで）（彼／彼女）（病気）（である）（何）
（＝ で、彼女はどんな病気にかかっているの？）

チューン「kháw　mây-dây　pùay　kháw　thɔ́ɔŋ.」
（彼／彼女）（しない）（病気）（彼／彼女）（妊娠）
（＝ 彼女は病気じゃなくて、妊娠していたんです。）　（Yah Leum Chan　第 9 話）

例（139）（屋敷の買取について話している。）

アナック「〈不満げな顔をしながら〉　mûa-rày　khun-nin　cà　yɔɔm　khǎay　waŋ
（いつ）（ニンさん）（非現実）（承諾）（売却）（屋敷）
tin-na-châat　hây　chán　sák-thii　à　há？」
（ティンナチャード（名前））（あげる）（私）（やっと）（終助詞）（終助詞）
（＝〈不満げな顔をしながら〉　ニンさんは、いつになったらティンナチャード屋敷を売却してくれるのかな？）

タサナ「〈怖がりながら〉　klây　lɛ́ɛw　khráp.」
（近い）（すでに）（男性丁寧語）
（＝〈怖がりながら〉　もうすぐです。）

アナック「〈不満げな顔をしながら〉　klây　rɤ̌ɔ？　*ay　kham　wâa　klây*
（近い）（疑問文文末助詞）（やつ）（言葉）（COPU）（近い）
*khɔ̌ɔŋ　khun　nà　man　khɯɯ　mûa-rày　kan-nɛ́ɛ　há？　yen　níi　phrûŋ-níi*
（所有）（あなた）（終助詞）（それ）（COPU）（いつ）（一体）（終助詞）（夕方）（この）（明日）
*rɯ̌ɯ　má-rɯɯn-níi*？」
（それとも）（あさって）
（＝〈不満げな顔をしながら〉　もうすぐって？　*あなたのもうすぐって一体いつになるんだろう。今晩、明日、それともあさって?*）　（Kam Lai Mas　第 17 話）

例（138）と例（139）とも、「「～」＋rɤ̌ɔ（！）？（疑問文文末助詞）」という形式が使われているが、実際には両者の果たす機能は異なる。例（138）では、チューンの解説という「mǔan　nɔ́ɔŋ-sàpháy　chûɯn　khà（私の弟の嫁に似ています）」からわかるように、アーティットはチューンの

発話を「mŭan khray rɔ̌ɔ？（誰に似ているの？）」という「「～」＋rɔ̌ɔ（！）？（疑問文文末助詞）」の形で繰り返したのは、相手からの詳細な情報や説明の要求である。それに対して、例（139）ではアナックの不満げな表情と繰り返し発話に後続する文脈を考慮すると、タサナのことば「klây（もうすぐ）」を「klây rɔ̌ɔ？（もうすぐって？）」と繰り返したのは、ある種の感情を表出していると考えられる。加えて、繰り返しをした直後に、一切相手からの説明を待たず、すぐ相手に非難の言葉を投げている。このように、例（139）で出現する「「～」＋rɔ̌ɔ（！）？（疑問文文末助詞）」は、例（138）と異なり、発話者は単に相手から説明または確認を要求する目的として使われていないことが明らかである。また、表（26）が示すとおり、「「～」＋rɔ̌ɔ（！）？（疑問文文末助詞）」の使用数は32例（5.4%）が観察されたが、30例は「感情の表出」の機能として用いられ、全体のほとんどを占めていることがわかった。一方、残り2例は、「説明要求／確認要求」である。このことから、「「～」＋rɔ̌ɔ（！）？（疑問文文末助詞）」形式は、「説明要求／確認要求」より「感情の表出」へと使用の傾向が傾くのではないかと考えられる。

その次に、以下の例（65）と例（140）を考えてみよう。両者とも、「～」＋rɔ̌ɔ（疑問文文末助詞）＋khráp/khá（！）？（男性丁寧語／女性丁寧語）」という「rɔ̌ɔ」の後に「男性丁寧語／女性丁寧語」が付加される形である。

例（65）（ゲーンロンという女性はインタビューに答えている。）

もし　あげる　ゲーンさん　ある　力　特別　可能　一つ　種類　ゲーンさん　ほしい
取材者「thâa hây khun-keen mii pha-laŋ phí-sèet dâay nùŋ yàaŋ khun-keen yàak
ある　力　何　女性丁寧語
mii phalaŋ àray khá？」

（＝ もし、ゲーンさんが特別な力を持つとしたら、どのような特別な力が欲しいですか？）

力　特別　疑問文文末助詞　女性丁寧語
ゲーンロン「〈よそを見る〉 pha-laŋ phí-sèet rɔ̌ɔ khá？・・・（考える）・・・
ほしい　ある　力　特別　関係節　非現実
〈外に立っている自分の恋人を見ながら〉 yàak mii phalaŋ phísèet thii cà
入る　行く　中　心　所有　人　可能　終助詞　女性丁寧語
khâw pay nay cìtcay khɔ̌ɔŋ khon dâay nà khà・・・（後略）・・・」

（＝〈よそを見る〉 特別な力ですか？・・・（考える）・・・〈外に立っている自分の恋人を見ながら〉
人の心が読めるという特別な力が欲しいですね。・・・（後略）・・・）

（Yah Leum Chan　第1話）

例（140）（お手伝いさんは、タがある女性と一緒に来社するのを見た。しかし、部屋に入ってきたら、タしかいない。）

友達　タさん　終助詞　女性丁寧語　さっき　関係節　歩く　来る　と　タさん　終助詞
お手伝いさん「phûan　khun-tá　là　khá？　tà-kîi　thîi　dəən　maa　kàp　khun-tá　à
女性丁寧語　兄／姉　まだ　あいさつ　状態を表す　終助詞　女性丁寧語
khà.　phîi　yaŋ　sa-wàt-dii　yùu　ləəy　khà.」

（＝ タさんの友達は？ さっき、タさんと一緒にここまで歩いてきた人です。私、あいさつもしっかりしていたし。）

僕　来る　一人（で）　終助詞　男性丁寧語
タ「phŏm　maa　khon-diaw　ná　khráp.」

（＝ 僕、一人で来ましたよ。）

一人（で）　疑問文文末助詞
お手伝いさん「〈唖然とした顔をして、部屋の周りを見ながら〉　ka... khondiaw　rɔ̌ɔ
女性丁寧語
khá？」

（＝〈唖然とした顔をして、部屋の周りを見ながら〉　ひ...一人でですか？。）

兄／姉　おそらく　目の錯覚　僕　来る　一人（で）　本当　男性丁寧語
タ「phîi　khoŋ　taa-fàat.　phŏm　maa　khon-diaw　ciŋ-ciŋ　khráp.」

（＝ たぶん目の錯覚かもしれないですね。僕は本当に一人で来ました。）

じゃ　行く　先　終助詞　女性丁寧語
お手伝いさん「〈怯えている表情で〉　*ŋa...ŋán　pay　kɔ̀ɔn　ná　khá.*　〈急いで部屋から出て行った〉」

（＝〈怯えている表情で〉　*じ...じゃ、お先に失礼します*〈急いで部屋から出て行った〉。）

（Kam Lai Mas　第 6 話）

上の例（65）では、ゲーンロンは取材者の質問に対してすぐに回答できないため、取材者の質問の主な部分である「特別な力」を繰り返し、自分に考える時間を与える。そして、考える最中に、外に立っている自分の恋人を見たとたん、「人の心が読める力が欲しい」と回答している。一方、例（140）では、お手伝いさんはタがある女性と一緒に来社するのを見たが、部屋に入ってきたら、タしかいない。そして、タにその女性について尋ねると、「一人で来た」と回答した。この場合は、お手伝いさんがタの発話「khondiaw（一人で）」を「khondiaw　rɔ̌ɔ　khá？（一人でですか？）」の形式で繰り返したのは、相手から説明あるいは確認を求めているように見える。しかし、お手伝いさんの唖然とした表情および怯えている表情や震え声という要素を考えると、タの発話はお手伝いさんの認識と対立しているため、タが言った「khondiaw（一人で）」に対して不信あるいは否定しているのではないかと考えられる。さらに、最後にはお手伝いさんは怯えている表情で「じゃ、お先に失礼します」と言いながら、急いで部屋から出て行った。つまり、例（140）における繰り返しは、「説明要求／確認要求」よりも、「感情の表出」という目的として用いられる傾向が強いと考えられる。

このように、「～」＋rɔ̌ɔ（疑問文文末助詞）＋khráp/khá（！）？（男性丁寧語／女性丁寧語）」によって、「時間稼ぎ」と「感情の表出」の機能を果たしていることがわかった。また、本調査から「～」＋rɔ̌ɔ（疑問文文末助詞）＋khráp/khá（！）？」（男性丁寧語／女性丁寧語）の例文は、23 例（4%）が見られたが、「感情の表出」として用いられるのは 20 例も観察されたのに対し、「時間稼ぎ」の場合は 3 例しか見当たらなかった。このことによって、「～」＋rɔ̌ɔ（疑問文文末助詞）＋khráp/khá（！）？（男性丁寧語／女性丁寧語）」も「「～」＋rɔ̌ɔ（！）？（疑問文文末助詞）」と同様に、主に「感情の表出」として使用されるのではないかと推測される。

他にも、次の例（141）のように、「「～」＋ɔ̌ɔ（！）？（疑問文文末助詞）」という「rɔ̌ɔ」のくだけた表現の使用も若干見られた。

例（141）（レーヤーはデンチャンに電話をかけているが、デンチャンはレーヤーのことを知らない。）

デンチャン「〈不満げな顔をしながら、大きな声で〉 chán（私） mây（否定） mii（ある） thú-rá（用事） sùan-tua（個人） àray（何） cà（非現実）
phûut（話す） kàp（と） thəə（あなた） lɛ́（そして） thəə（あなた） kɔ̂ɔ（接続詞） bɔ̀ɔk（教える） chán（私） maa（来る） dĭaw-níi（今すぐ） ná（終助詞） wâa（COPU）
thəə（あなた） pen（である） khray（誰）！」
（＝ あなたとは個人の用事なんか話すことがない。あなたが誰なのか、今すぐ教えなさい！）

レーヤー「mây（否定） tôŋ（なければならない） yàak（欲しい） rúu（知る） rɔ̀ɔk（終助詞） wâa（COPU） chán（私） pen（である） khray（誰） aw-pen-wâa（一応） rúu（知る）
wáy（～ておく） khɛ̂ɛ（だけ） wâa（COPU） chán（私） pen（である） phûu-wǎŋ-dii（好意を寄せる人） kɔ̂ɔ（接続詞） lá（終助詞） kan（終助詞）」
（＝ 私が誰だなんて知らなくてもいい。一応、私はあなたに好意を寄せる人ということだけで知っておけば十分なのよ。）

デンチャン「〈憤慨しながら、大きな声で〉 phûu-wǎŋ-dii（好意を寄せる人） ɔ̌ɔ（疑問文文末助詞）！？ pay（行く） wǎŋ-dii（好意を寄せる） thîi（ところ）
tʉʉn（ほか） thə̀（終助詞） pay（行く）！〈電話を切った後、スマホを勢いよく放り投げた〉」
（＝〈憤慨しながら、大きな声で〉 好意を寄せる人だって！？ 他のところで好意を寄せて行け！
〈電話を切った後、スマホを勢いよく放り投げた〉） （Dok Som See Thong 第 2 話）

例（141）では、デンチャンの非常に怒った表情、声の大きさ、スマホを放り投げた態度からわかるように、レーヤーの発話の「phûu-wǎŋ-dii（好意を寄せる人）」を「「～」＋ɔ̌ɔ（！）？（疑問文文末助詞）」の形という「phûu-wǎŋ-dii ɔ̌ɔ！？（好意を寄せる人だって！？）」と繰り返したのは、レーヤーが言ったことばに対して不快感などのような否定的な感情を表明していると言える。また、

その直後に、「pay wǎŋ-dii thî ùun thɔ̀ pay！（他のところで好意を寄せて行け！）」と「phûu-wǎŋ-dii（好意を寄せる人）」に対するネガティブな態度を表しながら、レーヤーを非難している。加えて、上記の表（26）が示すように、「「～」＋ɔ̌ɔ（！）？（疑問文文末助詞）」の使用は、18 例（3.04%）が観察され、17 例は「感情の表出」として使われ、例文全体のほとんどを占めていることが明らかになった。

以上が繰り返しと共起する「rǔɯ（疑問文文末助詞）」形式についての考察である。結果として、「「～」＋rǔɯ？（疑問文文末助詞）」という表現形式の中で、「「～」＋rɔ̌ɔ（！）？（疑問文文末助詞）」、「「～」＋rɔ̌ɔ（疑問文文末助詞）＋khráp/khá（！）？（男性丁寧語／女性丁寧語）」、「「～」＋ɔ̌ɔ（！）？（疑問文文末助詞）」が最も多く使用されることが確認された。また、この 3 つの形式はすべて、主に「感情の表出」という目的として用いられることが明らかになった。この点については、「rǔɯ（疑問文文末助詞）」と 7.3.1.で述べた「àray（なに）」形式の間には相違点があることがわかった。前述したように、「「～」＋àray（！）？（なに）」によって、「説明要求／確認要求」、「相手の発話の促進」、「感情の表出」の 3 つの機能をほぼ同様な程度で使用される。また、「àray（なに）」の後に、「rɔ̌ɔ（疑問文文末助詞）」や「khráp/khá（男性丁寧語／女性丁寧語）」のような文末助詞あるいは終助詞が付加されると、「説明要求／確認要求」の機能へ傾くことがわかった。つまり、それぞれの要素が後続することによって、繰り返し発話はより疑問化されるのではないかと推測される。それに対して、繰り返しに付加される「rǔɯ（疑問文文末助詞）」の場合は、「説明要求／確認要求」と「時間稼ぎ」よりも、「感情の表出」の方が圧倒的に多く用いられることがわかった。なお、「rǔɯ（疑問文文末助詞）」の後に、「khráp/khá（男性丁寧語／女性丁寧語）」という終助詞が後続しても、依然として「感情の表出」として最も多く使用されることが明らかになった。この点に関しては、「rǔɯ（疑問文文末助詞）」の性質と関連するのではないかと考えられる。宮本（2003）は、以下の例（142）を挙げて「rǔɯ」について説明している。

| | あなた | 食べる／飲む | コーヒー | 疑問文文末助詞 |
|---|---|---|---|---|
| 例（142） | khun | thaan | kaa-fɛ̌ɛ | **rǔɯ**？ |

（＝ あなたはコーヒーを飲みますか？）　（宮本 2003：14-15）

宮本によれば、疑問文文末助詞「rǔɯ」は、「あなたは本当にコーヒーを飲む（または飲んだ）のですか」と、「普段コーヒーを飲まないのに（またはコーヒーを飲めないのに）、コーヒーを飲む（または飲んだ）ことは事実ですか」という意味合いが含まれると述べている。すなわち、その出来事が話者の

認知、感想、基準と違っているため、それが事実であるかどうかを確認する時に使うと指摘している。このことから、疑問文文末助詞「rǔu」自体には、「ある事柄について発話者の認識と対立している」という意味合いが内在していると言えるだろう。つまり、「rǔu」は繰り返しにおける「感情の表出」の機能と同様な性質を持っているのである。このように、繰り返しと共起する「rǔu（疑問文文末助詞）」は、他の機能よりも「感情の表出」として圧倒的に多く用いられることが明らかになった。さらに、「繰り返し＋àray？（なに）」と「繰り返し＋rǔu？（疑問文文末助詞）」を対照させて考えると、「繰り返し＋rǔu？（疑問文文末助詞）」の場合は主に「感情の表出」の機能を果たしてはいるものの、「rǔu」が「àray（なに）」のような「疑問語疑問文（WH 疑問文）」の後に後続する場合は、「rǔu」の性質が薄まり、繰り返し発話がより疑問化され、「説明要求／確認要求」へ傾くことが明らかになった。

加えて、タイ語のフィクション会話における繰り返しの表現形式の中で、「直接的繰り返し」は 349 例（60%）、「間接的繰り返し」は 244 例（41.2%）が観察された。一方、日本語のフィクション会話で出現する繰り返しの表現形式の中で、「直接的繰り返し」は 534 例（79%）、「間接的繰り返し」は 143 例（21.1%）が見られた。本調査の結果から、タイ語会話では日本語会話より、「間接的繰り返し」の使用が倍以上多く用いられることがわかった。また、タイ語で使用される「間接的繰り返し」の種類は、日本語と比較すると、より豊富であることが見受けられた。この点については、タイ語は声調言語であり、日本語のようにイントネーションの違いによって、伝達したい意味や意図を変えることができないために、一つの単語のみでは発話者の意図を明確に伝達するのが非常に困難だからではないかと考えられる。このように、タイ語では繰り返しされた発話の前後に「疑問詞」、「疑問文文末助詞」、「終助詞」などが付加される傾向が強いと見られる。下記の表（27）は、タイ語のフィクション会話における繰り返しの機能と表現形式の使用傾向についてのまとめである。

**表（27）　タイ語のフィクション会話における繰り返しの機能と表現形式の使用傾向**

| タイ語のフィクション会話における繰り返しの発話機能 | 出現率 | 「直接的繰り返し」の出現率 | 「間接的繰り返し」の出現率 |
|---|---|---|---|
| 「感情の表出」 | 72.01%（427 例） | 52%（307 例） | 20.24%（120 例） |
| 「時間稼ぎ」 | 5.23%（31 例） | 5%（28 例） | 1%（3 例） |
| 「相手の発話の促進」 | 2%（11 例） | 0%（0 例） | 2%（11 例） |
| 「説明要求／確認要求」 | 21%（124 例） | 2.4%（14 例） | 19%（110 例） |
| 合計　＝　100%（593 例） | | | |

（総例文の小数点第 3 位を四捨五入）（出所：筆者作成）

表（27）からわかるように、繰り返しにおける「感情の表出」と「時間稼ぎ」の表現形式については、「間接的繰り返し」よりも「直接的繰り返し」の使用率が圧倒的に多いことがわかった。それに対して、「相手の発話の促進」および「説明要求／確認要求」の場合は「直接的繰り返し」より「間接的繰り返し」の方が極めて多く用いられることが明らかになった。上記に挙げた例（69）、例（132）、例（135）、例（136）の「説明要求／確認要求」および例（133）の「相手の発話の促進」の例文では、日本語と異なり、タイ語の場合は「疑問詞」や「疑問文文末助詞」なしの、繰り返しの部分だけでは「説明要求／確認要求」の意味になりにくいと考えられる。一方、例（65）の「時間稼ぎ」および例（134）、例（139）、例（140）、例（141）の「感情の表出」の場合は、「rǔu（疑問文文末助詞）」や「àray（なに）」が付加されなくても、繰り返しの部分のみでも「時間稼ぎ」と「感情の表出」を果たすことができる。要するに、タイ語では相手から何らかの情報を要求する場合は、繰り返しの部分だけでは成り立ちにくいため、質問文の要素や終助詞などの性質を利用し、「説明要求／確認要求」と「相手の発話の促進」の機能を果たすのではないかと考えられる。それに対して、相手から情報を要求する目的ではない「時間稼ぎ」と「感情の表出」の場合は、疑問文の要素や終助詞の使用がなくても、それぞれの機能が成立する。しかし、表（27）が示すとおり、繰り返しにおける「時間稼ぎ」は「感情の表出」と比べると、圧倒的に少ないことが観察された。このように、タイ語のフィクション会話においては日本語と同様に、「直接的繰り返し」は「感情の表出」として使用される傾向が強いのではないかと推測される。

他にも、上の表（25）と表（26）から、タイ語における繰り返しと共起する形式の中では、下記の例（143）のように繰り返し発話の最後に相手の名前や呼びかけという「呼称詞」が後続する例文も少なくない。

例（143）（レーヤーの母であるラムヨーンの現在の仕事について話している。）

しかし　母　欲しい　する　仕事　母　否定　欲しい　行く　どこ　終助詞　存在する　ここ
**ラムヨーン**「tɛ̀ɛ　mɛ̂ɛ　yàak　tham　ŋaan.　mɛ̂ɛ　mây　yàak　pay　nǎy　rɔ̀ɔk.　yùu　nîi
接続詞　楽　状態を表す　すでに
kɔ̂ɔ　sa-baay　yùu　lɛ́ɛw」

（＝でも、お母さんはここで働きたくて、どこにも行きたくないよ。ここに住むのは、楽だから。）

楽　何　終助詞　母　仕事　接続詞　たくさん　夫人
**レーヤー**「〈不満げな表情で〉　sa-baay　àray　là　mɛ̂ɛ？　ŋaan　kɔ̂ɔ　yə́-yɛ.　mɛɛm
終助詞　夢中　清潔さ　非現実　死ぬ　すべて　種類　終助詞　なければならない　覗く
nà　bâa　khwaam-sà-àat　cà　taay　thúk　yàaŋ　à　tɔ̂ŋ　sɔŋ
すでに　覗く　再度　規則　も　たくさん　ファー（名前）　終助詞　つまらない　夫人
lɛ́ɛw　sɔŋ　ùk.　kòt-keen　kɔ̂ɔ　yə́-yɛ.　fáa　à　bɯa　mɛɛm
ほとんど　非現実　吐く　すでに　終助詞
thɛ̂ɛp　cà　ûak　lɛ́ɛw　ná.」

（＝〈不満げな表情で〉 何が楽なのよ、お母さん？ *仕事もたくさんあるし、夫人は潔癖すぎるから、終わる仕事も終わらせられないし。規則やルールも多くて、ファーは夫人のことが吐き気がするくらいうんざりなの。*） （Dok Som See Thong　第 2 話）

例（143）では、レーヤーの不満げな表情および繰り返し発話の直後の文脈から、明らかにレーヤーは不機嫌である。しかし、タイ語では繰り返しの最後に後続する「mêɛ（母）」という「呼称詞」が付加されることで、不機嫌の度合いがより抑えられる。一方、「呼称詞」を使用しないと、発話者の怒りや不機嫌さがより顕著に表明されると考えられる。つまり、この場合の「呼称詞」は、ある種の終助詞と似たような機能を持ち、発話を和らげる機能を持つと言えるだろう。この現象については、日本語では管見の限り見当たらない、タイ語の会話上の特徴ではないかと考えられる。

## 7.4. タイ語の自然会話における繰り返しの表現形式

前節では、タイ語のフィクション会話における繰り返しの表現形式を分析し、繰り返しと共起する最も高頻度の要素について説明した。また、日本語のフィクション会話における繰り返しの表現形式との共通点および相違点を明らかにした。本節では、タイ語の自然会話で使用される繰り返しの形式について、分析していく。

タイのインタビュー番組、トーク番組、バラエティ番組、ラジオ番組合計 15 時間から収集した繰り返しの例文総 203 例（100%）を考察した結果、次の表（28）が示すように、タイ語の自然会話においては、「間接的繰り返し」の使用は 51 例（25.12%）が観察された。表（28）からわかるように、「「～」＋rǔu？（疑問文文末助詞）」形式の使用数は、14 例（7%）が観察され、「α」の中で最も多く用いられることが明らかになった。次に際立って見えるのは、「「～」＋khráp/khà.（男性丁寧語／女性丁寧語）」、「「～」＋àray？（なに）」、「「～」＋mǎay-khwaam-wâa？（どういう意味）」であり、それぞれの形式の使用は 8 例（4%）、6 例（3%）、5 例（3%）が見られた。

表（28）　タイ語の自然会話における繰り返しの表現形式の種類と使用傾向

| タイ語の自然会話における繰り返しの表現形式 | 出現率 |
|---|---|
| 「～」 ＋ àray？ （「～」＋ なに） | 3%（6 例） |
| 「～」 ＋ rǔu？ （「～」＋ 疑問文文末助詞） | 7%（14 例） |
| 「～」 ＋ yaŋŋay？ （「～」＋ どうやって） | 1%（1 例） |
| 「～」 ＋ thammay？ （「～」＋ なぜ） | 1%（1 例） |
| 「～」 ＋ nǎy？ （「～」＋ どこ／どの） | 1%（2 例） |
| 「～」 ＋ mǎy？ （「～」＋ 疑問文文末助詞） | 1%（1 例） |
| 「～」 ＋ khráp/khà. （「～」＋ 男性丁寧語／女性丁寧語） | 4%（8 例） |
| 「～」 ＋ mǎay-khwaam-wâa？ （「～」＋ どういう意味） | 3%（5 例） |
| 「～」 ＋ khɯɯ？ （「～」＋ COPU） | 2%（4 例） |
| 「～」 ＋ ná？ （「～」＋ 終助詞） | 1%（1 例） |
| 「～」 ＋ dûay？ （「～」＋ も） | 1%（2 例） |
| 「～」 ＋ ləəy？ （「～」＋ 全く） | 1%（2 例） |
| 「～」 ＋ eeŋ. （「～」＋ だけ） | 1%（1 例） |
| 「～」 ＋ nîi ＋ chên？ （「～」＋ これ ＋ 例えば） | 1%（1 例） |
| 「～」 ＋ ［名詞］. | 1%（2 例） |
| 合計 ＝ 25.12%（51 例） | |

（総例文の小数点第 3 位を四捨五入）（出所：筆者作成）

また、タイ語の自然会話における繰り返しの表現形式の種類は、フィクション会話とはそれほど変わらないことが観察された。しかし、フィクション会話と異なり、各形式の間には大きな差は見られないことがわかった。加えて、自然会話で用いられる「「～」＋àray？（なに）」の使用率は、フィクション会話と比較すると、圧倒的に少ないことが明らかになった。それに対して、フィクション会話では出現しない「「～」＋khráp/khà.（男性丁寧語／女性丁寧語）」の使用は、自然会話の中では観察された。このように、会話の種類の違いによって、繰り返しの表現形式の使用傾向は異なっている。ただし、本研究から収集したタイ語の自然会話における繰り返しの中で、「直積的繰り返し」の使用は 152 例（75%）が見られ、「間接的繰り返し」よりもある程度多く用いられることがわかった。つまり、タイ語の自然会話においてはフィクション会話と同様に、「間接的繰り返し」よりも「直接的繰り返し」が用いられる傾向がやや強いと言える。

### 7.4.1. 自然会話における繰り返しと共起する「rŭɯ（疑問文文末助詞）」

本調査の結果から、タイ語の自然会話においては、「～」＋rŭɯ（！）？（疑問文文末助詞）」という形式が最も多く用いられることが確認された。上記の表（28）が示すように、「～」＋rŭɯ（！）？（疑問文文末助詞）」形式については、14 例（7%）の使用が見られ、その中では以下の表（29）のとおり、さらに細かい分類をすることができる。

**表（29）　自然会話における繰り返しに付加される「rŭɯ（疑問文文末助詞）」の形式と使用傾向**

| 繰り返しに後続する「rŭɯ（疑問文文末助詞）」の形式 | 出現率 |
|---|---|
| 「～」 ＋ rɔ̌ɔ（！）？ （「～」＋ 疑問文文末助詞） | 2.5%（5 例） |
| 「～」 ＋ rɔ̌ɔ ＋ khráp/khá？ （「～」＋ 疑問文文末助詞 ＋ 男性丁寧語／女性丁寧語） | 1%（2 例） |
| 「～」 ＋ rɔ̌ɔ ＋ khráp/khá ＋ ［呼称詞］？ （「～」＋ 疑問文文末助詞 ＋ 男性丁寧語／女性丁寧語 ＋［呼称詞］） | 0.5%（1 例） |
| 「～」 ＋ ləəy ＋ rɔ̌ɔ？ （「～」＋ そんなに ＋ 疑問文文末助詞） | 0.5%（1 例） |
| 「～」 ＋ ɔ̌ɔ？ （「～」＋ 疑問文文末助詞） | 1%（2 例） |
| 「～」 ＋ ɔ̌ɔ ＋ khráp/khá？ （「～」＋ 疑問文文末助詞＋ 男性丁寧語／女性丁寧語） | 0.5%（1 例） |
| 「～」 ＋ ləəy ＋ ɔ̌ɔ？ （「～」＋ そんなに ＋ 疑問文文末助詞） | 0.5%（1 例） |
| ɔ̌ɔ ＋ rɔ̌ɔ ＋ 「～」？ （なるほど ＋ 疑問文文末助詞 ＋ 「～」） | 0.5%（1 例） |
| 合計 ＝ 7%（14 例） | |

（総例文の小数点第 3 位を四捨五入）（出所：筆者作成）

表（29）から、タイ語の自然会話において、繰り返しと共起する「rŭɯ（疑問文文末助詞）」の表現形式の中で、「「～」＋rɔ̌ɔ（！）？（疑問文文末助詞）」という形式は 5 例（2.5%）が観察され、最も多く用いられることが明らかになった。残りの形式は、それぞれほとんど 1 例ずつしかなく、非常に少ないことがわかった。次の例（144）は、「「～」＋rɔ̌ɔ（！）？（疑問文文末助詞）」の例文を示している。

例（144）（ミュウという女性の結婚後の生活について話している。）

後　結婚　ある　このような　疑問文文末助詞　ある　記録する　同じ　時　頃
カラメー「lǎŋ　tèŋ-ŋaan　mii　yàaŋ-ŋíi　má.？…　mii　còt　mŭan　tɔɔn…chûaŋ

付き合う　一緒に　疑問文文末助詞
【khóp　kan】　má？」

（＝ 結婚後はこのようなことがある？…なんか付き合った時みたいに、（恋についての）日記をつけることとか?）

マーク「(笑)」

接続詞　否定　記録する　すでに　終助詞
ミュウ「kɔ̂ɔ　mây　còt　lɛ́ɛw　ná.（笑）」

（＝ もうつけないね（笑)。）

否定　記録する　すでに　疑問文文末助詞
カラメー「〈大きな声で〉 mây　còt　lɛ́ɛw　rɔ̌ɔ！？（爆笑）」

（＝〈大きな声で〉 もうつけないの！？（爆笑））

マーク「【(笑)】」

ミュウ「【(笑)】」　（3 Zaaap　2020 年 5 月 24 日）

上の例（144）では、ミュウは結婚前に恋人と毎日二人の恋についての日記をつけていたことを語った。カラメーは、ミュウに結婚後でも前のように恋日記をつけているのかについて、質問している。そして、ミュウは「mây　còt　lɛ́ɛw（もう（日記を）つけない）」ときっぱりと答えた。この場合は、カラメーの笑い声や声色を考慮すると、ミュウの発話の一部である「mây　còt　lɛ́ɛw（もう（日記を）つけない）」を「繰り返し ＋ rɔ̌ɔ（！）？（疑問文文末助詞)」という形で繰り返したのは、単にそのことに対する説明や確認を要求したからとは考え難いだろう。むしろ、ミュウの発話に対して「ずっと（恋）日記をつけていたのに、なぜ突然やめるのか」という意味合いを込めながら、意外感や面白がりを表明しているのではないかと考えられる。また、繰り返し発話の直後に、ミュウからの解説が一切後続しないということは、この場合の繰り返しは「説明要求／確認要求」の目的として用いられていないことの証しでもある。

加えて、7.3.節で述べたように、「ɲɯ̌ɯ（疑問文文末助詞)」自体に「ある事柄について発話者の認識と対立している」という意味合いが内在しており、繰り返しにおける「感情の表出」と同様な性質を持つことがわかった。そのため、例（144）のような「感情の表出」の場合は、「ɲɯ̌ɯ（疑問文文末助詞）が付加されなくても、「mây　còt　lɛ́ɛw（もう（日記を）つけない）という繰り返しの部分だけでも、「感情の表出」の機能を果たすことができる。一方、「ɲɯ̌ɯ」が付加することによって、繰り返しの意味合いが増すのではないかと考えられる。要するに、この場合の「ɲɯ̌ɯ」は、終助詞と類似し

たような働きを持つと言えよう。なお、本調査によると、「「～」＋rɔ̌ɔ（！）？（疑問文文末助詞）」形式は5例が観察され、すべての例文は「感情の表出」として使用されていることがわかった。

### 7.4.2. 繰り返しに後続する「khráp/khà.（男性丁寧語／女性丁寧語）」

上述したように、タイ語の自然会話においては、フィクション会話で使われない「「～」＋khráp/khà.（男性丁寧語／女性丁寧語）」という形式が観察された。「「～」＋khráp/khà.（男性丁寧語／女性丁寧語）」の実際の会話用例については、下記の例（145）に示している。

例（145）（ウッディーはトーの過去の生活について尋ねている。）

大人／親戚　あげる　出家
ウッディー「phûu-yày　hây　bùat？」
（＝ 親戚に出家してくれって言われたの？）

はい／そう　母　これ　終助詞　男性丁寧語
トー「châ̌y.　mɛ̂ɛ　nîi　lɛ̀　khráp.」
（＝ はい、母にそう言われました。）

うん　うん
ウッディー「【ɔɔ　ɔɔ】.」
（＝ うんうん。）

母　欲しい　あげる　出家　とても　しかし　知る　COPU　子供　否定　出家　～ほど
トー「【mɛ̂ɛ　yàak　hây】　bùat　mâak　tɛ̀ɛ　rúu　wâa　lûuk　mây　bùat.　con
まで　まで　まで　まで　なければならない　ような　まで　段階　なければならない　持つ　お金
thǔŋ... thǔŋ... thǔŋ... thǔŋ　tɔ̂ŋ　bɛ̀ɛp　thǔŋ　khân　tɔ̂ŋ　aw　ŋən
来る　釣る　COPU　のような　感動詞　しばらく　母　あげる　お金　終助詞　出家　あげる　母
maa　lɔ̂ɔ　wâa　bɛ̀ɛp...　hɛ́ɔy！　dǐaw　mɛ̂ɛ　hây　taŋ　lɔɔy.　bùat　hây　mɛ̂ɛ
少々
nɔ̀y.」
（＝ 母は本当に（僕に）出家して欲しいのですが、僕は絶対に出家しないことがわかっているみたいです。なので、母はお金で釣るほどまで…まで…まで…しました。なんか、「おい！私のために、出家してくれたら、お金をあげるよ。」と言われました。）

しかし　接続詞　否定　出家
ウッディー「tɛ̀ɛ　kɔ̂ɔ　mây　bùat？」
（＝ でも結局、出家しなかったんだよね？）

否定　出家　男性丁寧語
トー「〈頭を振る〉　mây　bùat　khráp.」
（＝〈頭を振る〉　出家しなかったです。）　（Woody FM　2019年6月11日）

例（145）では、ウィディーの質問である「mây bùat？（出家しなかった？）」、およびトーが回答する際に頭を振っている様子を考えると、トーはウッディーの発話を「mây bùat khráp.（出家しなかったです）」という「繰り返し ＋khráp/khà.（男性丁寧語／女性丁寧語）」の形で繰り返したのは、相手の質問に対する返答であることがわかる。また、本調査から、「「～」＋khráp/khà.（男性丁寧語／女性丁寧語）」の使用は 8 例（4%）が見られ、すべての例文は「応答」の機能として用いられることが確認された。しかし、この場合は「khráp/khà.（男性丁寧語／女性丁寧語）」が付加されなくても、「mây bùat（出家しなかったです）」という繰り返しのみでも発話者による「応答」が伝達される。それに対して、「khráp/khà.（男性丁寧語／女性丁寧語）」が付加することによって、繰り返しの発話に相手への配慮や敬意の意味も付け加えられると言えよう。この点については、繰り返しに後続する「khráp/khà.（男性丁寧語／女性丁寧語）」は、7.2.2.項で述べた繰り返しに後続する「です」と同質の性質を持つことが明らかになった。

### 7.4.3. 自然会話における繰り返しと共起する「àray（なに）」

タイ語の自然会話においても、「繰り返し＋àray？（なに）」形式が多用されることが観察された。次の例（74）は、「「～」＋àray？（なに）」の会話例を示している。

例（74）（カラメーはビームに今まで奥さんの日記を読んだことがあるかについて聞いている。）

あなた　経験の過去　読む　疑問文文末助詞
カラメー「khun　khəəy　àan　mǎy？」
（＝（奥さんの日記を）読んだことがある？）

僕　ほしい　非現実　読む　同じ　終助詞　男性丁寧語
ビーム「phǒm・・・yàak　cà　àan　mǔankan　ná　khráp.」
（＝ 僕・・・読みたいですが・・・）

しかし
カラメー「tɛ̀ɛ？」
（＝ でも？）

しかし　僕　怖い
ビーム「tɛ̀ɛ　phǒm　klua（笑）」
（＝ でも、怖いです（笑）。）

怖い　何
カラメー「〈相手に向かって〉**klua**　**àray**？」
（＝〈相手に向かって〉何が怖いの？）

僕　怖い　そういう感じ　ような　怖いのは　感動詞　まず　である
ビーム「*phǒm　klua　pràmaanwâa　bɛ̀ɛp・・・klua-wâa　êey　nɯ̀ŋ　kɔ̂ɔ-khɯɯ*
彼／彼女　非現実　怒る　疑問文文末助詞　関係節　関係節　行く　読む
*kháw　cà　kròot　rɯ́ɯplàaw　thîi...　thîi　pay　àan*」

（＝ *怖いのはなんか…まず、自分が勝手に読んだことが奥さんにバレてしまうのが怖いですね。*）

（3 Zaaap　2020 年 3 月 8 日）

例（74）では、ビームの解説からわかるように、カラメーはビームが言った「klua（怖い）」を「klua（怖い）＋ àray（何）」という「繰り返し＋α」の形で繰り返したのは、ビームからの追加説明を求めているのである。その直後、ビームからカラメーの質問に対する解説が後続する。また、上の表（28）が示すように、「「～」＋àray？（なに）」の使用は 6 例（3%）が観察され、6 例とも「説明要求／確認要求」として用いられることが確認された。このように、タイ語の自然会話で使われる「「～」＋àray？（なに）」は、フィクション会話と同様に、他の機能よりも「説明要求／確認要求」としてもっぱら用いられることがわかった。

### 7. 4. 4.　繰り返しに後続する「mǎay-khwaam-wâa（どういう意味）」

タイ語の自然会話においては、上記の 7.4.1.～7.4.3.以外の形式は、「繰り返し＋mǎay-khwaam-wâa？（どういう意味）」という表現形式も多少用いられることが観察された。「「～」＋mǎay-khwaam-wâa？（どういう意味）」の実際の会話例については、下記の例（146）に示している。

例（146）（ウッディーはキッティーの過去の人生問題について尋ねている。）

こと　関係節　悪い　最も　関係節　自分　考える　非現実　する　時　その　関係節　自分
ウッディー「sìŋ　thîi　yɛ̂ɛ　thîi-sùt　thîi　raw　khít　cà　tham　tɔɔn　nán　thîi　raw...
関係節　自分　うつ状態　それとも　COPU　自分　遭う　問題　重い　終助詞　期間　その
thîi　raw　sɯm-sâw...　rɤ̌ɯ　wâa　raw...　cəə　pan-hǎa　nàk　à.　chûaŋ　nán
COPU　何
khɯɯ　àray？」

（＝ うつ状態になった…または…大変なことに遭ったその時は、自分が最も悪いことをしようと思ったのはどんなこと？）

COPU　中　期間　時間　その　考える　接続詞　過去の経験　考える　COPU　のような
キッティー「khɯɯ・・・nay　chûaŋ　wee-laa　nán　khít　kɔ̂ɔ　kəəy　khít　wâa　bɛ̀ɛp...
（舌打ち）　それとも　本当　のような　否定　存在する　すでに　良い　より　疑問文文末助詞
rɤ̌ɯ　ciŋ-ciŋ　bɛ̀ɛp　mây　yùu　lɛ́ɛw　dii　kwàa　máy？」

（＝ えーと・・・その時考えていたのは…（舌打ち）もういない方がいいかなって思っていました。）

否定　存在する　すでに　どういう意味
ウッディー「〈相手に向かって〉　mây　yùu　lɛ́ɛw　mǎay-khwaam-wâa？」

（＝〈相手に向かって〉　もういないってどういう意味？）

接続詞　死ぬ　行く　終助詞　何かそんな感じ　のような　COPU　自分　過去の経験　こっそり　考える
キッティー「*kɔ̂ɔ　taay　pay　ləəy　àray-ŋía.　bɛ̀ɛp...　khɯɯ　raw　khəəy　ɛ̀ɛp　khít*
COPU　もし　自分　死ぬ　人　～たち　この　非現実　感じる　どのように　彼／彼女　非現実
*wâa　thâa　raw　taay　khon　phûak　níi　cà　rúu-sɯk　yaŋ-ŋay.　kháw　cà*

感じる、　悪い　一緒に　少しは　疑問文文末助詞　何かそんな感じ
*rúu-sʉ̀k　yɛ̂ɛ　kan　bâaŋ　máy　àray-yàaŋ-ŋía*.」

（＝「死んじゃえ」みたいな感じです。なんか...もし自分が死んでしまったら、他の人たちがどのように感じるのか、または少しでも落ち込むのかなって思ったことがあります。）

（Woody World　2018 年 10 月 7 日）

上の例（146）では、キッティーからの説明や解説を考慮すると、ウッディーはキッティーの発話を「mây　yùu　lɛ́ɛw　mǎay-khwaam-wâa？（もういないってどういう意味？）」という「繰り返し＋mǎay-khwaam-wâa（どういう意味）」の形での繰り返しは、キッティーから詳細な情報や説明を求めたものだと考えられる。また、表（28）が示すとおり、「「～」＋mǎay-khwaam-wâa？（どういう意味）」の使用数は 5 例（3%）が見られ、5 例とも「説明要求／確認要求」として使用されることがわかった。

以上がタイ語の自然会話における繰り返しの表現形式である。タイ語の自然会話ではフィクション会話と同様に、「直接的繰り返し」および「間接的繰り返し」の両種類の形式が観察された。「間接的繰り返し」の種類については、フィクション会話と自然会話の間には大きな差が見られないが、それぞれの形式の使用率および使用傾向が異なることがわかった。自然会話においては、フィクション会話で使用されない「「～」＋khráp/khà.（男性丁寧語／女性丁寧語）」形式がやや目立ち、すべての例文は「応答」として用いられることが明らかになった。この点については、両種類の会話の機能の違いと関連しているのではないかと考えられる。第 4 章と第 5 章で述べたように、日本語とタイ語のフィクション会話においては、自然会話と異なり、「あいづち」、「応答」、「からかい」の機能が見当たらない。つまり、フィクション会話では「応答」の機能がないため、「応答」として用いられる「「～」＋khráp/khà.（男性丁寧語／女性丁寧語）」の形式は見当たらない。このことに関しては、日本語の自然会話における「繰り返し＋「です。」」形式と同様であることがわかった。

加えて、タイ語の自然会話とフィクション会話とも、「繰り返し＋àray？（なに）」によって、「説明要求／確認要求」としてより用いられる傾向が強いことが明らかになった。一方、「繰り返し＋rʉ́ʉ（疑問文文末助詞）」の場合は、主に「感情の表出」として使用される傾向が強く、両種類の会話に共通していることが明らかになった。さらに、タイ語の自然会話における繰り返しの各機能で現れる「直接的繰り返し」および「間接的繰り返し」の出現率については、下記の表（30）に示している。

表（30）　タイ語の自然会話における繰り返しの機能と表現形式の使用傾向

| タイ語の自然会話における繰り返しの発話機能 | 出現率 | 「直接的繰り返し」の出現率 | 「間接的繰り返し」の出現率 |
|---|---|---|---|
| 「感情の表出」 | 37%（74 例） | 30%（60 例） | 7%（14 例） |
| 「時間稼ぎ」 | 2%（4 例） | 1%（2 例） | 1%（2 例） |
| 「相手の発話の促進」 | 2%（3 例） | 2%（3 例） | 0%（0 例） |
| 「説明要求／確認要求」 | 16%（32 例） | 4%（8 例） | 12%（24 例） |
| 「あいづち」 | 13.3%（27 例） | 12.31%（25 例） | 1%（2 例） |
| 「応答」 | 30.1%（61 例） | 26%（52 例） | 4.44%（9 例） |
| 「からかい」 | 1%（2 例） | 1%（2 例） | 0%（0 例） |
| 合計　＝　100%（203 例） | | | |

（総例文の小数点第 3 位を四捨五入）（出所：筆者作成）

表（30）からわかるように、「直接的繰り返し」では「時間稼ぎ」、「相手の発話の促進」、「説明要求／確認要求」、「感情の表出」、「あいづち」、「応答」、「からかい」の機能を果たしていることが観察された。また、「説明要求／確認要求」以外の機能は、すべて「間接的繰り返し」よりも「直接的繰り返し」の方が圧倒的に多く用いられることがわかった。つまり、タイ語の自然会話においては、フィクション会話と同様に、相手から何らかの情報を要求するには、繰り返しの部分だけでは「説明要求／確認要求」の意味になりにくいのである。よって、質問文の要素である「疑問語」を利用することによって、繰り返し発話がより疑問化されるのではないかと考えられる。なぜならば、タイ語は声調言語であり、日本語のようにイントネーションで発話者の意図を変えることができない。このような理由から、タイ語会話における繰り返しの表現形式は、日本語よりも多く使用されることとなるわけである。しかし、上述したように、「繰り返し＋àray？（なに）」形式の使用率については、自然会話よりフィクション会話では極めて多く使用されることが確認された。この点に関しては、両種類の会話の性質と関係するのではないかと推測される。第 4 章と第 5 章で明らかにしたように、フィクション会話の目的は、第三者または視聴者に向けて演技をし、発話者が演じるある人物の発話意図を視聴者へ伝達することである。そのため、フィクション会話においては、発話者の意図を明示的に伝達するために、「疑問語」、「疑問文文末助詞」、「終助詞」などの要素も使用する必要があるのではないかと考えられる。一方、それぞれの要素を使わずに、繰り返しの部分のみで発話すると、より「感情の表出」へ傾く。

以上が日本語とタイ語のフィクション会話と自然会話における繰り返しの表現形式についての考察である。本調査の結果から、両言語のフィクション会話と自然会話においては、「直接的繰り返し」および「間接的繰り返し」の両方が観察され、「間接的繰り返し」の中で多種多様な形式があることが確認された。しかし、会話の種類の違いによって、使用される形式の種類および使用傾向が異なることが明らかになった。また、両言語の両種類の会話においては、「間接的繰り返し」が用いられるとは言え、「直接的繰り返し」と比較すると、圧倒的に少ないことがわかった。加えて、「直接的繰り返し」によって、「感情の表出」の機能を最も多く果たしていることが明らかになった。このことから、繰り返しはどちらか言えば、感情表現に指向したものではないかと推測される。

# 第 8 章　繰り返しと感動詞の性質

第 4 章と第 5 章で明らかにしたように、日本語もタイ語のどちらにおいても、フィクション会話と自然会話における繰り返しは、「感情の表出」の機能として最も多く用いられることが確認された。また、第 6 章においては、発話者は繰り返しを用いることによって、相手の発話のある部分に対して不意打ちされたことをいう「意外感」を表明することが明らかになった。すなわち、繰り返し発話に「相手がこのような発言をするとは思わなかった」という意味合いが含まれるのである。なお、その直後に、それぞれの繰り返し発話に対する「ポジティブな態度」、「ネガティブな態度」、「中立的態度」という発話者の態度を表明することがわかった。加えて、前章では両言語、両種類の会話において、「直接的繰り返し」による「感情の表出」が最も多く機能しているということを見出した。つまり、会話における繰り返しは、発話者の感情と深い関わりがある。

しかし、本調査から以下の例（82）のように、発話者の感情を表出する際に、「おじいちゃん！？」および「え！？」というように、繰り返しも感動詞も両方用いられることが観察された。

例（82）（ひろしは旅館で会ったおじいさんのことについて、主人と話している。）

**ひろし**「こちらに来てからおじい様にお世話になってます。」

**主人**「〈びっくりした顔をしながら、大きな声で〉おじいちゃん！？ *おじいちゃんは2年前に亡くなりましたけど*・・・」

**ひろし**「〈驚いて、大きな声で〉　え！？」　　（クレヨンしんちゃん）

第 6 章 6.1.節で概説したように、感動詞を用いると、発話者が相手の発話のどの部分に対して感情を表すのかが曖昧になると思われる。それに対して、繰り返しを使用すると、発話者は相手の発話のどの部分が気になっているのかについて、明示的に示すことができる。このように、繰り返しは感情的機能を持つとはいうものの、実際の会話においては、発話者の感情を表す代表的な表現である「感動詞」の使用も見られた。しかし、なぜ感動詞の代わりに繰り返しが用いられるのか、および繰り返しと感動詞の共通点および相違点については、未だに論じられていない。また、第 4 章～第 7 章で得られた結果からわかるように、フィクション会話と自然会話で使用される繰り返しの機能および表現形式の使用傾向は異なることが明らかになった。また、両種類の会話においては、繰り返しのほか、あいづち詞やフィラーなどのような要素の使用傾向も異なることがわかった。このことから、両種類の会話における感動詞の使用傾向も異なるのではないかと予想される。

本章では、発話者の感情を中心に、繰り返しと感動詞の特徴や性質を分析し、両者の共通点と相違点について考察を行っていく。具体的には、8.1.で感動詞に関するこれまでの見解について概観する。その上で、8.2.で日本語とタイ語のフィクション会話、8.3.で日本語とタイ語の自然会話における感動詞について例文を挙げながら、各会話においての感動詞の使用率について分析する。そして、8.4.で両言語のそれぞれの会話における感動詞と繰り返しの使用傾向に関する相違点を見出していく。最後に、感動詞を持つ特徴を説明し、繰り返しとの共通点と相違点について明らかにしていく。

## 8.1. 感動詞に関する研究の概観と展望

本節では、感動詞に関する先行研究を取り上げ、感動詞の概念と談話的機能について示す。本研究で参考となる感動詞の主な先行研究は、石神（1981）、田窪・金水（1997）、森山（1997）である。石神（1981）は、感動詞を「感情を表すもの」、「呼びかけを表すもの」、「応答を表すもの」という 3 種類に分けており、それぞれの種類に以下の例を挙げている。例（147）は「感情を表すもの」、例（148）は「呼びかけを表すもの」、そして例（149）は「応答を表すもの」を示している。

例（147）まあ、雪が降っている。
おや、電気が消えた。
ああ、面白い本だ。
おっと、あぶない。（石神 1981）

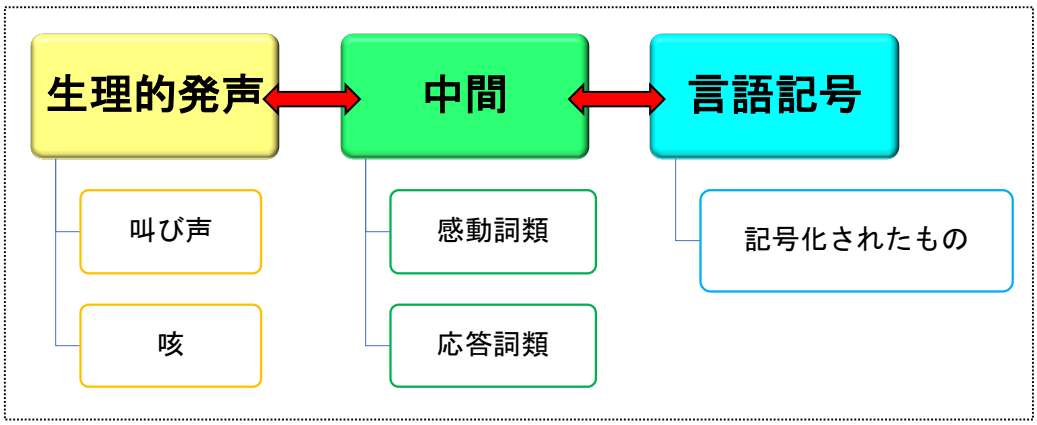
例（148）おい、外は大雪だぞ。
やあ、久しぶりだね。
もしもし、これ落としましたよ。
あの、ちょっとお聞きしたいのですが。（石神 1981）

例（149）**A**「あの人は先生ですか。」
**B**「はい、そうです。」

**A**「ごはん食べますか。」
**B**「いいえ、食べません。」（石神 1981）

石神によれば、例（147）のような「感情を表すもの」としての感動詞はため息、叫び声、泣き声、笑いなどの音声と価値的に等しいものであり、聞き手というものを捉えての表現ではなく、話し手の感情の直接的表現であり、話し手自身の心情を吐露する表現であると述べている。すなわち、例（147）は例（148）と例（149）のような種類と異なり、聞き手へ伝えるということを意図した表現というよりは、話し手自身のものとしての表現である。例（148）の「呼びかけを表すもの」は、聞き手を対象的に捉えることによる表現であり、話し手として聞き手に対峙し、言語活動を行おうとする意図を表現するものであると説明している。しかし、「呼びかけを表すもの」は「応答を表すもの」と異なり、相手に対して尋問したり行き先を答えたりするというものではなく、相互の気持ちを和やかにするという社交的なものである。最後に、「応答を表すもの」としての感動詞は上記の例（149）のようにABの会話において、Bは聞き手であり話し手であるという場面における立場の転換を能動的に把握することによって「はい」や「いいえ」などという応答の表現を行なっているとしている。石神によれば、「応答を表すもの」は「感情を表すもの」と「呼びかけを表すもの」と異なり、必ず問いの文というものが先行していなければならないと指摘している。

田窪・金水（1997）によれば、以下の図（7）のとおりに叫び声、うめき声、咳などという非随意的に発せられる非言語的音声は言語記号とは異なり、言語間の差異をほとんど持たない生理的な発声であるのに対し、感動詞類・応答詞類はいわゆる恣意性を持つ言語記号と生理的発声との中間に位置するものであると主張している。




**図（7）　田窪・金水（1997）による感動詞類・応答詞類の位置付け**　（出所：筆者作成）

田窪・金水（1997）は、感動詞類・応答詞類は本来意味を持たず、心的な情報処理の際に非意図的に生じるいわば音声的身振りのようなものとみることが可能であるが、それらをある程度意図的に発すること、自分の心的処理状態を相手に知らせることで意味が生じるということを説明している。要するに、感動詞類・応答詞類自体に意味があるのではなく、それが発せられた場面で臨時的に意味が形成されるのである。

さらに、森山（1997）によれば、感動詞が果たすそれぞれの意味や機能はイントネーションに関与しており、イントネーションの違いによって感動詞の意図が変わると述べている。また、森山はイントネーションに基づき、感動詞を「上昇イントネーションをもつ情動的感動詞」、「上昇で使わない情動表示」、「あいさつ・呼びかけの類」の 3 つの種類に分類している。「上昇イントネーションをもつ情動的感動詞」は、「あれ？」「おや？」「あ？」「え？」などのように比較的急で大きな上昇イントネーションで発せられるものであり、これらの感動詞の基本的な意味は、予想外の事態や情報と遭遇し、その事態や情報の内容を見極めようとする最初の活動の表示であるとしている。森山は、こういった感動詞の機能は「第一次の未知遭遇」と名付けている。また、「うわ」「ぎゃっ」「おっ」「ほう」「ふうん」などのような「上昇で使わない情動表示」は通常、上昇イントネーションで使われることはなく、表記としてもあとに「？」を付けることもない。意味的には、探索的な意味というより、例えば茶化すなど何らかの別の有標のニュアンスを表す感動詞の種類であると説明している。そして、森山によれば「あいさつ・呼びかけの類」には「上昇イントネーションになるもの」と「上昇イントネーションにならないもの」という 2 つのグループがあり、前者は「おはよう」「ありがとう」「よっ」などのあいさつに該当し、後者は「ねえ？」などの「呼びかけ」に該当すると述べている。

以上が感動詞についての先行研究であり、感動詞の種類や形式にはいろいろあり、文字化できるものとできないものが両方存在することがわかった。加えて、感動詞は「感情」を表すもの以外にも、「あいさつ」、「応答」、「呼びかけ」としての働きもあることが見られた。しかし、従来の研究からわかるように感動詞はどちらかと言えば、意識的な反応よりも反射的に出てくる音声に近いものであると考えられるため、文字化あるいは記号化するのが非常に困難である。たとえ記号化できるとしても、人それぞれ表記の仕方が同じわけではなく、辞典に載っている単語のように一般化することは難しい。また、感動詞自体には意味がないにもかかわらず、特定の文脈で発することで意味を生じる場合があることがわかった。つまり、感動詞とそれに続く発話や形式または内容と深い関係を持つのである。

本研究では、感動詞と繰り返しにおける「感情の表出」との共通点と相違点を明らかにするために、「あいさつ」、「応答」、「呼びかけ」を表す感動詞を対象外にし、主に「発話者の感情」を表す感動詞のみ分析の対象とする。

## 8.2. フィクション会話における感動詞の使用傾向

日本とタイのテレビドラマおよびテレビアニメで出現する感動詞を考察した結果、両言語のフィクション会話においては、「感動詞のみ」、「感動詞＋繰り返し」、「繰り返しのみ」の 3 種類が観察された。下記の例（150）と例（151）は「感動詞のみ」、例（152）と例（153）は「感動詞＋繰り返し」を示している。

例（150）（つくしは先日、家族のみんなに大学に進学すると告げたばかりにもかかわらず、突然就職することを決断した。）

**つくし**「*私、就職しようかな*。」

**一同**「〈驚いて、大きな声で〉 えっ！？」

**つくし**「英徳の大学行くのやめよっかな。」

**父**「*何言ってんだ、つくし*！？ *熱でもあるのか*?」（花より男子（リターンズ）第 1 話）

例（151）（オーンおばあさんは自分の甥っ子たちの会話を盗聴しており、お手伝いさんのチェオに自分が盗聴していることを内緒にするように言っている。）

**チェオ**「mây (否定) bɔ̀ɔk (教える) khà (女性丁寧語) tɛ̀ɛ... (しかし) lɛ́ɛw (それで) khun-thân (ご主人様／奥様) cà (非現実) pay (行く) nǎy (どこ) là (終助詞) khá (女性丁寧語)？」

（＝ はい、言わないです。でも...奥様はどこに行くんですか？）

**オーン**「*kɔ̂ɔ* (接続詞) *pay* (行く) *ɛɛp* (隠す) *faŋ* (聞く) *ìik* (ほか) *hɔ̂ŋ* (部屋) *nuŋ* (一つ) *ŋay* (終助詞) *lâa* (終助詞)！」

（＝ *隣の部屋に盗聴しに行くのよ*！）

**チェオ**「〈驚いて、大きな声で〉 **há** (感動詞)！？」

（＝〈驚いて、大きな声で〉 え！？）

**オーン**「à... (フィラー) ə̀ə... (フィラー) mây (否定) chây (はい／そう)！（チェオを抓る）」

（＝ あ...え...違う！（チェオを抓る））（Khun Chai Pawornruj 第 1 話）

例（150）は日本語会話、例（151）はタイ語会話で使用される「感動詞のみ」である。例（150）では、つくしは先日、大学に進学すると告げたものの、突然進学をやめて就職することを決めた。それを聞いた家族のみんなは、「えっ！？」という感動詞を使用し、つくしの発話に対して非常に驚いたことを示している。例（151）のタイ語も同様に、オーンおばあさんはお手伝いさんのチェオに、自分が盗聴していることを内緒にするように指示した。にもかかわらず、また隣の部屋に盗聴しに行くと言った。そのため、オーンの発言から不意打ちを受けたチェオは、「há！？（え！？）」という感動詞でオーンの発話に対する驚きを表している。つまり、両者とも、発話者は「私、就職しようかな」および「kɔ̂ɔ pay ɛ̀ɛp faŋ ìik hôŋ nɯɯ ŋay lâa！（隣の部屋に盗聴しに行くのよ！）」という相手の突然な発言から不意打ちを受けたため、一つの感動詞の表現のみ利用し、相手の発話に対して意外感を表明しているのである。

例（152）（野原家は台風が来ているため、避難の準備をしている。）

**美冴**「えーと、この地区の緊急避難先は双葉幼稚園ね。」

**しんちゃん**「〈嫌そうな顔をしながら〉 えー？ 幼稚園？ *おらいつも行ってるからつまんないなー。どうせなら双葉女子大とかに避難したいな。*」 （クレヨンしんちゃん）

例（153）（マプラーンは気絶から目を覚ました。）

**マプラーン**「lɛ́ɛw praaŋ maa yùu thîi-nîi dâay yaŋ-ŋay khá？ khray plìan sûa-phâa hây praaŋ khá？」
（それで プラーン（名前） 来る 存在する ここ 可能 どうやって 女性丁寧語 誰 変える 服 あげる プラーン（名前） 女性丁寧語）
（＝ 私はどうやってここに来たんですか？ 誰が着替えさせてくれたんですか？）

**ケットサラー**「phîi-chaay-yày nà khà.」
（（一番上の）兄 終助詞 女性丁寧語）
（＝ タラトーン兄さんですよ。）

**マプラーン**「〈驚いて、大きな声で〉 há！？ phîi-chaay-yày！？」
（感動詞 （一番上の）兄）
（＝〈驚いて、大きな声で〉 え！？ タラトーン兄さん！？）

**ケットサラー**「ə̀ə... phîi mǎay-thǔŋ phîi-chaay-yày nà pen khon ûm nɔ́ɔŋ máprapaŋ khâw maa khà. lɛ́ɛw phîi nîia pen khon plìan sûa-phâa hây.」
（フィラー 兄／姉 意味する （一番上の）兄 終助詞 である 人 抱える 弟／妹 マプラーン 入る 来る 女性丁寧語 それで 兄／姉 終助詞 である 人 変える 服 あげる）
（＝ えーと、私が言ったのはタラトーン兄様はマプラーンを抱いてここに運んでくれて、私が服を替えてあげたということよ。） （Khun Chai Tarathorn 第 4 話）

例（152）では、美冴はこの地区の緊急避難先はしんちゃんが通っている「双葉幼稚園」であると言っている。しかし、しんちゃんは毎日幼稚園に通っているため、もう行きたくないと思っている。つまり、美冴が言っている「双葉幼稚園」は、しんちゃんが期待していることと対立しているのである。そのため、しんちゃんは嫌な顔をして、「えー？ 幼稚園？」という感動詞と繰り返しを両方使用し、幼稚園に避難することに対する「嫌がり」などを表している。そしてその直後に、「幼稚園はいつも通っているからつまらない」や「双葉女子大のほうに避難したい」という幼稚園に避難することに対してネガティブな態度を表明している。また、例（153）のタイ語では、マプラーンという女性は気絶から目が覚め、誰が着替えさせてくれたのかについてケットサラーに尋ねている。そして、ケットサラーは「phîi-chaay-yày（タラトーン兄さん）」と回答した。男性が着替えさせてくれたことを知ったマプラーンは、大きな声で「há！？ phîi-chaay-yày！？（え！？ タラトーン兄さん！？）」という「感動詞＋繰り返し」の形でケットサラーの発話を繰り返し、非常に驚いたことを表明している。

このように、例（152）と例（153）は上の例（150）と例（151）とは異なり、感動詞の直後に繰り返しも用いられることが観察された。また、例（152）と例（153）においては、「幼稚園」および「phîi-chaay-yày（タラトーン兄さん）」という繰り返し発話によって、発話者は相手の発話のどの部分が気になるあるいは問題を感じるのかが明示的になっている。一方、「感動詞のみ」の場合である例（150）と例（151）は、発話者は相手の発話のどの部分に引っかかるのかが特定できない。このことから、繰り返しは感動詞よりも発話者の感情をより明示的に表出させる表現であることが明らかになった。加えて、日本語とタイ語のフィクション会話における感動詞の使用率については、下記の表（31）にまとめる。

**表（31） 日本語とタイ語のフィクション会話における感動詞の使用傾向**

| フィクション会話における感動詞の出現率 | | | |
|---|---|---|---|
| 日本語 | | タイ語 | |
| 使用表現 | 出現率 | 使用表現 | 出現率 |
| 「感動詞のみ」 | 4.02%（23 例） | 「感動詞のみ」 | 4%（17 例） |
| 「感動詞＋繰り返し」 | 8%（43 例） | 「感動詞＋繰り返し」 | 12.4%（55 例） |
| 「繰り返しのみ」 | 89%（506 例） | 「繰り返しのみ」 | 84%（372 例） |
| 合計 ＝ 100%（572 例） | | 合計 ＝ 100%（444 例） | |

（総例文の小数点第 3 位を四捨五入）（出所：筆者作成）

表（31）が示すとおり、日本語とタイ語のフィクション会話において、発話者の感情を表出するには、「繰り返しのみ」の使用率はそれぞれ89%（506例）と84%（372例）が観察され、全体の大多数を示していることがわかった。また、感動詞の使用率と比較すると、圧倒的に多く用いられることが確認された。それに対して、上の例（150）と例（151）のような「感動詞のみ」は、日本語では4.02%（23例）、タイ語では4%（17例）しか見られなく、極めて少ないことが明らかになった。そして、「感動詞＋繰り返し」という感動詞と繰り返しの複合形については、日本語では8%（43例）、タイ語では12.4%（55例）の使用率が観察された。「感動詞＋繰り返し」は「感動詞のみ」よりもやや多く使用されるとしても、「繰り返しのみ」と比べると、圧倒的に少ないことがわかった。

本調査の結果から、フィクション会話においては、発話者は感情を表明するには感動詞よりも、繰り返しを用いる傾向が非常に強いことが明らかになった。また、それは日タイ両言語に共通していることがわかった。この点に関しては、両言語におけるフィクション会話の特徴に関連していることが予想される。第4章と第5章で述べたように、テレビドラマやテレビアニメなどというフィクション会話は、発話者ないし登場人物が発することばおよび表出する感情や態度などについてあらかじめ脚本が仕上がっているものであり、発話者が視聴者のためにそのシナリオに沿って演じる。そのため、会話の流れがスムーズに進められるように、また視聴者に出演者の発話および感情や態度などを明確に伝えるために、曖昧さのある感動詞を避け、その代わりに発音や意味内容が明示的である繰り返しを使用するのではないかと推測される。

## 8.3. 自然会話における感動詞の使用傾向

日本とタイのインタビュー番組、トーク番組、バラエティ番組、ラジオ番組合計15時間の会話を考察した結果、両言語の自然会話ではフィクション会話と同様に、「感動詞のみ」、「感動詞＋繰り返し」、「繰り返しのみ」の3種類が観察された。以下の例（154）と例（155）は「感動詞のみ」、例（156）と例（157）は「感動詞＋繰り返し」を示している。

例（154）（ラグビーについて話している。）

**太郎**「でも、さっきさ、

**みゆ**「はい。」

**太郎**「中継というか、

**星住**「【うん】。」

**みゆ**「【うん】。」

太郎「えーと、なに.....速報、

みゆ「【はい】。」

太郎「【*見たら*】*さあ、16 対 10 で日本勝ってんの*。」

みゆ「〈ワクワクしながら〉【おおおお～！】」

星住「〈ワクワクしながら〉【へえええ～！】」

・・・(中略)・・・

太郎「そう。相手今たぶん世界らい...

みゆ「はい。」

太郎「*ランキング 2 位かな*。」

星住「〈ワクワクしながら〉【おおおお～！】」

みゆ「【ええ】。」

太郎「で、*日本は今 9 位ぐらいなんだけど*、

星住「〈ワクワクしながら〉【へえええ～！】」

みゆ「〈ワクワクしながら〉【ほおおお～！】」

太郎「そう...格上相手勝っちゃってんの激アツだよね！」

(SHIBUYA MUSIC POWER　2019 年 9 月 28 日)

例（155）（カラメーはサプライズとして、リディアとマシューの友人を番組のゲストとして呼んで来た。）

カラメー「*nǎy nǎy nǎy lɔ̀ɔŋ khuy kà kháw sí wâa khun-fáa dù-sì-taa*
(どれ どれ どれ 試す 話す と 彼／彼女 終助詞 COPU ファーさん ドゥシター（名前))
【*sǎaw... sǎaw-kɛ̂ɛw*】 *kháw pen yaŋ-ŋay*.」
(サーオ サーオキャオ 彼／彼女 である どのように)

（＝ さあ、ファー、ドゥシター・サーオ...サーオキャオさんは（この件について）どう思っているのか、彼女のご意見をお聞きしましょう。）

リディア「〈驚いて、大きな声で〉【(笑) hěey！？】（笑）」
(感動詞)

（＝〈驚いて、大きな声で〉(笑) えっ！？（笑））

マシュー「〈驚いて、大きな声で〉【hěey！？】（笑）」
(感動詞)

（＝〈驚いて、大きな声で〉 えっ！？（笑））

カラメー「khɔ̌ɔ chəən khâa～～～〈拍手〉」
(頂戴 どうぞ 女性丁寧語)

（＝ どうぞ～～～〈拍手〉）

リディア「〈ゲストが登場してきたのを見て、大きな声で〉 âaw（感動詞）～～～！？ hěey（感動詞）！！！
〈嬉しくて、友人のところまで走って行った〉」

（＝〈ゲストが登場してきたのを見て、大きな声で〉 へえええ～～～！？ えっ！！！〈嬉しくて、友人のところまで走って行った〉）

（3 Zaaap　2020 年 6 月 7 日）

例（154）では、「16 対 10 で日本勝ってんの」、「ランキング 2 位かな」、「日本は今 9 位ぐらい」という太郎の発話を考慮すると、みゆと星住は「おおおお～！」や「へえええ～！」などの感動詞を用いることによって、太郎の発話に対してワクワク感や興味を表明していると考えられる。また、例（155）のタイ語も同様に、カラメーはサプライズとして、リディアとマシューの友人を番組のゲストとして呼んで来た。しかし、リディアとマシューはそれについて全く知らなかったため、カラメーの発言から不意打ちを受けた。そのため、リディアとマシューは「hěey！？（えっ！？）」という感動詞を使用し、カラメーの発話に対して意外感を表出している。

例（156）（温泉について話している。）

柳田「僕はですね、この 1 ヵ月、えー、週に 1 回、多い時は 2 回は...

みゆ「【うん】。」

柳田「【温泉】に行くように。」

エミリー「〈ワクワクしながら、大きな声で〉 えっ！？ 【温泉！？】」

みゆ「〈大きな声で〉【おっ！へえ～】」

柳田「【はい】。そ...そうなんです。近所にですね、天然温泉があって。」

エミリー「〈ワクワクしながら〉 えっ？ 近所に？ うらやましい～」

（SHIBUYA MUSIC POWER　2018 年 12 月 8 日）

例（157）（ウッディーはポンの姪っ子であるパーイとピンにインタビューしている。）

ウッディー「〈パーイに向かって〉 náa（叔父／叔母） pɔ̂ɔŋ（ポン（名前）） mii（ある） fɛ̂ɛn（恋人） á（疑問文文末助詞） yaŋ（まだ） khá（女性丁寧語）？」

（＝〈パーイに向かって〉 ポンおじさんはもう彼女いるのかな？）

パーイ「yaŋ（まだ） khà.（女性丁寧語）」

（＝ まだです。）

ポン「（笑）」

（＝（笑））

感動詞　まだ
ウッディー「〈驚いて、大きな声で〉 **âaw**！？ **yaŋ**！？（笑）」
（＝〈驚いて、大きな声で〉 えっ！？ まだ！？（笑））

パーイ　上手　とても
ポン「〈パーイを抱っこする〉 paay kèŋ mâak！（笑）」
（＝〈パーイを抱っこする〉 パーイ、よく言った！（笑））

叔父／叔母　ポン（名前）　ある　恋人　疑問文文末助詞　まだ　女性丁寧語
ウッディー「〈ピンに向かって〉 náa pɔ̂ɔŋ mii fɛɛn á yaŋ khá？」
（＝〈ピンに向かって〉 ポンおじさんはもう彼女いるのかな？）

フィラー　ある　すでに
ピン「〈ニコニコしながら〉 ɯɯmmm・・・mii lɛ́ɛw.」
（＝〈ニコニコしながら〉 う～ん・・・いる。）

感動詞　ある　すでに　ある　すでに
ウッディー「〈大きな声で〉 **âaw**～～！（爆笑）**mii lɛ́ɛw**！ **mii lɛ́ɛw**！（爆笑）」
（＝〈大きな声で〉 へえ～～！（爆笑）もういるんだ！ もういるんだ！（爆笑））

感動詞　なぜ　言う　否定　合う　終助詞
ポン「**hěey**！（爆笑）mai phûut mây troŋ-kan wá.（爆笑）」
（＝ おい！（爆笑）なんで2人の答えが違うんだよ（爆笑）。）

（Woody World　2018年10月7日）

上の例（156）では、エミリーのワクワク行動、声色、繰り返し発話の前後の文脈を考えると、柳田のことばをそれぞれ「えっ！？ 温泉！？」と「えっ？ 近所に？」という「感動詞＋繰り返し」の形で繰り返したのは、柳田が言った「温泉」および「近所に」に対して「いいなあ」や「羨ましい」などの意味合いを込めながら、感情を表出しているためだと考えられる。例（157）のタイ語も同様に、ウッディーは、ポンおじさんは彼女がいるのかについてパーイとピンに質問している。パーイが「まだいない」と回答したとたん、ウッディーは大きな声で「âaw！？ yaŋ！？（えっ！？ まだ！？）」とパーイの発話を「感動詞＋繰り返し」の形で繰り返した。この場合のウッディーの驚いた表情や声色などから、ポンには彼女がいるはずだと想定していたことが予測される。つまり、ウッディーはパーイの発話を繰り返したのは、意外感を表明しているためだと考えられる。一方、ピンは「（彼女が）いる」と答えた直後に、ウッディーは笑いを込めながら、「âaw～～！mii lɛ́ɛw！ mii lɛ́ɛw！（へえ～～！もういるんだ！もういるんだ！）」とピンのことばを「感動詞＋繰り返し」の形で繰り返した。この場合の繰り返しは、ウッディーの激しく笑っている様子を考慮すると、「もういるんだって」という意味を含意し、ポンに冗談を言いながら、面白がりを表出しているのではないかと考えられる。

以上の会話用例から、例（156）と例（157）は上記の例（154）と例（155）とは異なり、感動詞の後には繰り返しが後続することが観察された。また、前節で述べたとおり、例（156）と例（157）のよう

な「感動詞＋繰り返し」の場合は、「温泉」、「近所に」、「yaŋ（まだ）」、「mii ɓɛɛw（もういる）」という繰り返しの部分によって、発話者は相手の発話のどの部分に興味を持つのか、あるいは問題を感じるのかについて明示的に示されている。それに対して、「感動詞のみ」の場合である例（154）と例（155）は、発話者は相手の発話のどの部分が気になるのかが明示的に特定されない。このことから、繰り返しは感動詞よりも発話者の感情をより明示的に表出させる表現であることが窺える。なお、日本語とタイ語の自然会話における感動詞の使用率については、下記の表（32）にまとめる。

**表（32）　日本語とタイ語の自然会話における感動詞の使用傾向**

| 自然会話における感動詞と出現率 | | | |
|---|---|---|---|
| 日本語 | | タイ語 | |
| 使用表現 | 出現率 | 使用表現 | 出現率 |
| 「感動詞のみ」 | 94.43%（3,017 例） | 「感動詞のみ」 | 93.17%（1,009 例） |
| 「感動詞＋繰り返し」 | 2%（63 例） | 「感動詞＋繰り返し」 | 2%（17 例） |
| 「繰り返しのみ」 | 4%（115 例） | 「繰り返しのみ」 | 5.3%（57 例） |
| 合計　＝　100%（3,195 例） | | 合計　＝　100%（1,083 例） | |

（総例文の小数点第 3 位を四捨五入）（出所：筆者作成）

上の表（32）が示すように、日本語とタイ語の自然会話において、発話者の感情を表出するには、「感動詞のみ」の使用はそれぞれ 94.43%（3,017 例）と 93.17%（1,009 例）が観察され、全体の 9 割以上を占めていることがわかった。一方、「感動詞＋繰り返し」という感動詞と繰り返しの複合形の使用率は、日本語では 2%（63 例）、タイ語では 2%（17 例）しか見られなく、非常に少ないことが明らかになった。また、「繰り返しのみ」については、日本語では 4%（115 例）、タイ語では 5.3%（57 例）の使用が観察された。「繰り返しのみ」は「感動詞＋繰り返し」よりも若干多く用いられるとは言え、「感動詞のみ」と比べると、圧倒的に少ないことがわかった。

以上の調査結果から、日本語とタイ語の自然会話においては、発話者は感情を表明するには繰り返しよりも、感動詞を使用する傾向が非常に強いことが明らかになった。この点については、両言語の自然会話の特徴に関連しているのではないかと予測される。第 4 章と第 5 章で述べたように、自然会話の主な目的は、会話の相手とお互いに何らかの情報を交換したり、他人との良好な人間関係を構築したりすることである。また、フィクション会話とは異なり、発話者が第三者または視聴者のために

情報を伝達のではないため、相手の発話のどの部分が気になるのかについて、いちいち明示的に示す必要がないと思われる。したがって、自然会話においては、発話者は相手の発話に対して感情を表す際に、わざわざ相手と同じことばを繰り返すというよりも、極端に短い音を持つ感動詞の方が用いられる傾向が強いのではないかと考えられる。

## 8.4. 繰り返しと感動詞の性質および両者の共通点と相違点

8.2.節と 8.3.節では、日本語とタイ語のフィクション会話と自然会話における感動詞の使用傾向について、実際の会話例を挙げながら分析を行った。本節では、両言語のフィクション会話と自然会話で使用される感動詞の全体的な共通点と相違点について簡潔にまとめる。その上で、感動詞と繰り返しの持つ性質および特徴の共通点と相違点について詳細に論じる。以上の感動詞の考察については、下記の表（33）のとおりにまとめることができる。

**表（33） 日本語とタイ語のフィクション会話と自然会話における感動詞の使用傾向のまとめ**

| 日本語とタイ語のフィクション会話と自然会話における感動詞の出現率 | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| フィクション会話 | | | | 自然会話 | | | |
| 日本語 | | タイ語 | | 日本語 | | タイ語 | |
| 使用表現 | 出現率 | 使用表現 | 出現率 | 使用表現 | 出現率 | 使用表現 | 出現率 |
| 「感動詞のみ」 | 4.02%（23 例） | 「感動詞のみ」 | 4%（17 例） | 「感動詞のみ」 | 94.43%（3,017 例） | 「感動詞のみ」 | 93.17%（1,009 例） |
| 「感動詞＋繰り返し」 | 8%（43 例） | 「感動詞＋繰り返し」 | 12.4%（55 例） | 「感動詞＋繰り返し」 | 2%（63 例） | 「感動詞＋繰り返し」 | 2%（17 例） |
| 「繰り返しのみ」 | 89%（506 例） | 「繰り返しのみ」 | 84%（372 例） | 「繰り返しのみ」 | 4%（115 例） | 「繰り返しのみ」 | 5.3%（57 例） |
| 合計 ＝ 100%（572 例） | | 合計 ＝ 100%（444 例） | | 合計 ＝ 100%（3,195 例） | | 合計 ＝ 100%（1,083 例） | |

（総例文の小数点第 3 位を四捨五入）（出所：筆者作成）

表（33）からわかるように、日本語とタイ語のフィクション会話においても自然会話においても、発話者の感情を表出するには、「感動詞のみ」、「感動詞＋繰り返し」、「繰り返しのみ」という 3 通りの表現が観察された。しかし、本調査の結果によれば、会話の種類の違いによって、感動詞の使用傾向が異なることがわかった。両言語のフィクション会話においては、感動詞より繰り返しの方が圧倒的に多く使用されることが確認された。それに対して、両言語の自然会話では繰り返しよりも、感動詞の方が用いられることが明らかになった。加えて、上の 8.2.と 8.3.で述べたように、「感動詞のみ」では

発話者は相手の発話のどの部分に興味を持つのか、または引っかかるのかについて明示的に特定できないのに対し、「繰り返しのみ」ではそれについて明示的に示すことができる。換言すれば、感動詞はどちらかと言えば、意味内容や音声が曖昧な表現であるのに対し、繰り返しは意味内容も音声も明示的な表現であると言えるだろう。この点に関しては、8.1.節で挙げた田窪行則・金水敏（1997）の研究によれば、感動詞類・応答詞類は心的な情報処理の過程が表情として声に現れたものであると指摘している。つまり、顔の表情や手振りと同様に、感動詞類・応答詞類には、全く記号化されていない生理反応的・自然発生的なものから、ある程度の記号化がなされたものまである。しかし、感動詞類・応答詞類が心的な情報処理の過程にあるものだとすれば、意識的な反応というよりも反射的に出てくる音声、すなわち自然発生的な反応に近いものではないかと考えられる。一方、相手の発話を繰り返すことができるということは、発話者がその事柄について認識の過程を経ているため、感動詞のように単に反射的に出てくる音声ではなく、むしろ完全に記号化されたものであることが推測される。

このことから、両言語のフィクション会話では、感動詞より繰り返しの方が非常に多く用いられる理由としては、フィクション会話は視聴者向けの会話であるため、出演者の感情を視聴者に明確に伝えるために、音声や意味内容などがより明示的である繰り返しを使用するからであると考えられる。それに対して、フィクション会話では繰り返しを一切使用せず、曖昧さのある感動詞のみを用いると、視聴者は登場人物が「どのような感情を持っているのか」または「何に対して感情を表出しているのか」などについて非常に把握しがたいだろうと思われる。その一方で、自然会話ではフィクション会話のように、台本に書かれているものをそのまま発話するもので、視聴者に向けて演じるのではない。よって、発話者が発言したいことは台本に束縛されず、自分自身の意見や感情などもその場で自由に表出することができる。そのために、自然会話ではフィクション会話よりも、反射的な反応や自然に出てくる音声などがより現れやすいのではないかと予想される。

さらに、表（33）からわかるように自然会話においては、両言語とも「感動詞のみ」の使用が非常に多く用いられることが確認された。なお、両言語とも同じ 15 時間の会話の中、日本語では 3,017 例（94.43%）、タイ語では 1,009 例（93.17%）の感動詞の使用が観察され、用例数としては日本語はタイ語より 3 倍ほど多く見られた。この点については、第 5 章 5.3.節で述べたように、自然会話においては、タイ語より日本語の方が繰り返しにおける「感情の表出」、「あいづち」、「応答」が多く用いられる。このことから、日本語の自然会話における繰り返しは、相手との一体感を作ったり、会話に積極的に参加したりする目的をより果たしていると推測される。加えて、日本語とタイ語のあいづち詞の使用に関しては、それぞれ 6,721 回と 4,152 回も観察され、タイ語より日本語の方が多用されることがわかった。感動詞も、相手の発話に対して感情を表出したりすることによって、相手との共感や一体

感を作ったり、会話に積極的に参加したりすることを表していると考えられる。すなわち、感動詞はあいづちと似たような働きを持つと言えるだろう。このことから、タイ語より日本語の方が感動詞が多用される理由としては、日本人はタイ人より会話に積極的に参加することを示す傾向が強いからではないかと予想される。

以上の感動詞の考察から、感動詞と繰り返しの共通点と相違点については、下記の表（34）にまとめることができる。感動詞と繰り返しの共通点としては、両者とも発話者の感情を表す機能を担っているものの、両者の性質が異なることがわかった。一方、両者の相違点としては、感動詞は反射的に出てくる音声または自然発生的な反応ということである。それに対して、繰り返しは発話者の認識過程を通して出てくる記号化されたものである。つまり、繰り返しの場合は発話者が意識的に発話するものであると言える。また、感動詞による音声および意味内容は曖昧であるが、繰り返しの場合は音声も意味内容も明示的である。加えて、感動詞のみでは、発話者は相手の発話のどの部分に興味を持つのか、あるいは問題を感じるのかについて明示的に特定できない。一方、繰り返しによって、発話者は相手の発話のどの部分を指すのかが明示的に特定できる。このように、両者の性質を考慮すると、音声や意味内容が不明瞭である感動詞よりも、音声や意味内容が明確である繰り返しの方が、視聴者が存在するフィクション会話に向いているのではないかと考えられる。それに対して、台本またはシナリオに束縛されず、その時点の考えや感情を自由に表出できる自然会話においては、反射的に出てくる音声あるいは自然発生的な反応である感動詞が多く出現するのは、当然であると言っても過言ではないだろう。

**表（34）　感動詞と繰り返しの共通点と相違点のまとめ**

| 感動詞 | 繰り返し |
|---|---|
| (1) 感情的機能を持つ | (1) 感情的機能を持つ |
| (2) 反射的に出てくる音声／自然発生的な反応 | (2) 発話者の認識過程を通して出てくる記号化されたもの |
| (3) 音声や意味内容が曖昧である | (3) 音声や意味内容が明示的である |
| (4) 相手の発話のどの部分を指すのかが特定できない | (4) 相手の発話のどの部分を指すのかが明示的に特定できる |
| (5) 自然会話向け表現 | (5) フィクション会話向け表現 |

（出所：筆者作成）

# 第 9 章　フィクション会話と自然会話の観点から見た独り言

本研究における繰り返しに関しての調査結果から、以下の例（34）と例（158）のように、発話者の周りには他の人または相手が存在せず、発話者が一人でしゃべる「独り言」の例文がしばしば出現することが観察された。

例（34）（真衣と翔が喧嘩しており、結局真衣がその場から走って逃げた。）

**真衣**「翔くん何にもわかってなかったんだね。見損なった。〈大きな声で〉あなたとは絶交よ！」

・・・（真衣は悲しそうに去って行った）・・・

**翔**「《絶交？・・・青いな。》」　（民王 第 4 話）

例（158）（サウィターはクラオマートの家に来ているが、勝手に 2 階に上がった。）

**クラオマート**「nîi khun-wí pay nǎy maa khá？」
（これ ウィさん 行く どこ 来る 女性丁寧語）
（＝ ウィさん、どこに行って来たんですか？）

**サウィター**「〈不審な行動をしながら〉 phɔɔ-dii wí cà khâw hôŋ-náam nà khà. dèk thîi-nîi bɔ̀ɔk wâa hôŋ-náam khâaŋ-lâaŋ man mây-khɔ̂y dii kɔ̂ɔ-ləəy hây wí khûn pay khâw khâaŋ-bon nà khà.」
（ちょうど ウィ（名前） 非現実 入る お手洗い 終助詞 女性丁寧語 子／お手伝いさん ここ 教える COPU お手洗い 下 それ あまり 良い だから あげる ウィ（名前） 上がる 行く 入る 上 終助詞 女性丁寧語）
（＝〈不審な行動をしながら〉 ちょうどお手洗いに行きたかったんですが、お手伝いさんに下の階のお手洗いの調子があまり良くないから、上の階のお手洗いを使うように言われました。 ）

**クラオマート**「〈戸惑った顔をしながら〉 dèk khon nǎy rɔ̌ɔ khá？」
（子／お手伝いさん 人 どの 疑問文文末助詞 女性丁寧語）
（＝〈戸惑った顔をしながら〉） お手伝いさんって、どの人ですか？）

**サウィター**「〈不審な行動をしながら〉 dèk-phûu-yǐŋ nà khà.」
（女の子 終助詞 女性丁寧語）
（＝〈不審な行動をしながら〉 女の子です。）

・・・（サウィターは急いで走って行った）・・・

**クラオマート**「〈疑わしい表情で〉《dèk-phûu-yǐŋ？・・・》」
（女の子）
（＝〈疑わしい表情で〉《女の子？》）　（Kam Lai Mas　第 16 話）

上の例（34）も例（158）も両方、発話者は相手がその場から離れる前に言ったことばを一人で繰り返す例である。例（34）では、真衣と翔が喧嘩しており、最終的に真衣は「あなたとは絶交よ！」と

発言した後、その場から走り去った。そして、翔は「絶交？」と真衣のことばを一人で繰り返した直後に、「青いな」という相手が言った「絶交」に対する軽視や非難を表している。また、例（158）のタイ語も同様に、サウィターは「女の子のお手伝いさんに上の階のお手洗いを使うように言われた」とクラオマートに嘘をついて、急いでその場から走って行った。しかし、クラオマートの家には女の子のお手伝いさんがいない。そのため、クラオマートは疑わしい表情で、サウィターがその場から離れる前に言った「dèk-phûu-yǐŋ（女の子）」を一人で繰り返し、不信感を抱くことを表明している。

このように、日本語においてもタイ語においても、しばしば独り言が用いられる。しかし、実際の日常会話あるいは自然会話では上記の例（34）と例（158）のような独り言が使用されるのだろうか。なお、言語学の分野においては、独り言についての言及はほとんどない。そのため、独り言の定義および使用条件についてはまだ大きな疑問点が残っていると言える。そこで、本研究ではフィクション会話と自然会話における繰り返しを通して、独り言についても言及しておきたい。具体的には、9.1.で独り言に関する先行研究について概観した上で、従来の研究の問題点を取り上げる。そして、9.2.でフィクション会話と自然会話の観点から、独り言がどのような性質や働きを持つのかについて詳細に論じる。

## 9.1. 独り言に関する研究の概観

言語学における独り言についての研究はほとんどなく、独り言と言えば大体「周囲に誰もいない状況で発話する」や「一人で呟いている」というような説明にとどまっている。また、『日本国語大辞典（第十一巻：413）』によれば、「独り言」とは「相手がいないのに、自分一人でものを言うこと。人に話しかけるのではなく、無意識にことばが口をついて出ること。」と定義付けている。しかし、実際の独り言は本当に誰もいない所で一人で発話しているのだろうか。本節では、独り言に関する先行研究を概観し、独り言の定義、使用条件、使用目的についてまとめ、従来の研究における問題点を取り上げる。

言語学の面では、独り言に関して詳しく論じている研究が極めて少なく、管見の限りでは長谷川（2017）および森山（1997b）しか見当たらない。森山（1997b）は、形式的観点から独り言として成立しない文について考察し、独り言とは「心内語（心の中で対話のシミュレーションをするような場合はもちろん除く）などの「伝達を目的としない」文のこと」と定義付けている。また、森山によれば独り言として成立しない文は、「する」「するつもりだ」「するのだ」「しようと思う」「しよう」という「確定的意志」の形式、「～と思う」「～と考える」という「内的思考活動」の形式、および「～そうだ」「～らしい」「～という」などという「伝聞形式」であると述べている。なお、独り言として

成立しない文について、森山が以下の例文を挙げている。

例（159）*私は帰る。（森山 1997b）

例（160）*私は帰るつもりだ。（森山 1997b）

例（161）*もうすぐ彼は着くと思う。（森山 1997b）

例（162）*景気は持ち直したと考える。（森山 1997b）

例（163）*彼が来たそうだ。（森山 1997b）

しかし、森山によれば、以下の例（159’）～例（163’）のような「真性モダリティをもたない文」[13]を典型として、文連続の中の特殊な在り方をする場合、すなわち、一つの文として独立していないような環境になった場合は、独り言で言えないわけではないと述べている。

例（159’）私は帰る。でも、彼はそのことを知っているかなあ。（森山 1997b）

例（160’）私は帰るつもりだ。でも、彼はそのことを知っているかなあ。（森山 1997b）

例（161’）もうすぐ彼は着くと思う。しかし、それは間違いだろうか。（森山 1997b）

例（162’）景気は持ち直したと考える。しかし、そう考える学者はいないだろうなあ。（森山 1997b）

例（163’）彼が来たそうだ。しかし、そう考える学者はいあにだろうなあ。（森山 1997b）

ところが、上記の例（159’）～例（163’）を考えてみると、まるで小説の中で現れる台詞またはドラマや歌劇の役者が言う台詞のようであり、一見独り言の発話のように見えるが、実際は発話者あるいは役者は第三者である「観客」および「視聴者」（小説の場合は「読み手」）に対してこれらの情報を伝達しているように思われる。つまり、自分の周りには誰もおらず一人で喋っているにもかかわらず、実際は誰かに向かって情報を伝えるのであるため、独り言とは言えないのではないかと考えられる。また、例（159’）～例（163’）は、実生活での独り言としてはあり得ないと言っても過言ではない。

[13] 野田（1989）によれば、モダリティを表すことができる形式が、「真性モダリティ」と「虚性モダリティ」の大きく 2 種類に分類できると指摘している。「真性モダリティ」とは、話し手の発話時の心的態度を直接的に表明するものであるのに対し、そうでない場合は「虚性モダリティ」に該当する。また、野田によれば「真性モダリティをもたない文」は、他の文に従属したり、文章・談話がもつモダリティの枠に依存することによって、存立していると述べている。

さらに、長谷川（2017）によれば独り言の定義および条件について、以下の 3 点を主張している。

1）発話の届く範囲内に他人（聞き手）がいない場合である。

2）話者がその発話は誰にも向けていないと意識すれば独り言になる。発話場面に他人がいようがいまいが関係ない、雑踏の中で独り言を呟くことも可能であるし、孤立した場所で思い描く人と（擬似）対話をすることも可能である。つまり、独り言か否かは、発話者のみが分別できることになる。

3）発話の形状に依存するものである。例えば、詠嘆の終助詞「な・や」、懐疑の終助詞「だろう（か）」や感嘆詞「あれ・へえ」などが含まれていれば、独り言であると言えるだろう。「疲れたなぁ」、「めんどくさいや」、「あれ、変なやつが覗いている。誰だろ。」などは、普通、独り言として捉えられるだろう。

以上が言語学における独り言に関する先行研究であり、独り言の定義や条件については多少の疑問点が見られる。森山（1997b）が挙げた例（159’）～例（163’）は、実際の生活で発話者がそれを一人で喋るとすれば、やはり長谷川（2017）が述べたとおりに発話者自身が思い描く人または擬似人物と対話をしている可能性が高い。つまり、「相手」の存在があると言えるため、この場合は独り言とは言い難いと考えられる。

加えて、独り言の研究については心理学の面から多少研究されてきており、本研究に参考となる先行研究は澤山・三宅（2018）と南（2014）である。澤山・三宅（2018）は、140 文字以内のつぶやきを投稿することができるメディアである「Twitter（ツイッター）」における大学生の投稿を対象として、独り言的ツイート（投稿）頻度と社会的発話傾向および私的発話傾向の関連から、大学生の独り言的ツイートがそのどちらの性質をより強く持つものであるのかについて検討した。結果として、大学生による独り言的ツイートは私的発話よりも社会的発話としての性質が強く、社会的発話傾向の高い者ほどその頻度が多いということである。澤山・三宅によれば、他者への伝達を目的としないのであれば、わざわざ Twitter のアカウントを取得したり端末を操作したりするコストをかけなくても、その場で発声したり、あるいは発声の難しい状況ではメモを利用したりすれば良いと指摘している。要するに、発話者あるいは投稿者は独り言のように文章を書いたり投稿したりしているが、実際は誰かに向かってその情報を伝達している、および自分が投稿したことを誰かに認識してほしいのである。

また、南（2014）はひとり言がどのような状況で発せられ、どのような性格や特徴の人が、どのような状況においてひとり言を発するのかについて調べ、ひとり言の心理的機能に関して考察を行った。

また、南は日常会話においてひとり言を発する状況をできるだけ具体的に記述し、以下の表（35）のとおりに56項目のひとり言尺度を作成した。加えて、それぞれに対して「1.まったくない」「2.ほとんど言わない」「3.ときどき言う」「4.よく言う」の4件法によって大学生に回答させた。そして、回答の得点に基づき、ひとり言尺度の因子を「混乱・当惑」、「単独状況」、「注視」、「負の感情」と「確認」という5つのカテゴリーに分類した。

**表（35）　南（2014）によるひとり言尺度**

| | | |
|---|---|---|
| 1. テレビを見たり本を読んだりゲームをしている時 | 20. あせっている時 | 39. 何かをやりとげた時 |
| 2. 思うようにいかなくてイライラする時 | 21. 寝る時 | 40. 夜に「ひとり言」を言う |
| 3. お風呂に入っている時 | 22. 起きた時 | 41. 日中に「ひとり言」を言う |
| 4. 疲れた時 | 23. 買い物をしている時 | 42. 鏡に向かって「ひとり言」を言う |
| 5. おどろいた時 | 24. 精神的につらい時 | 43. 誰もいない時に「ひとり言」を言う |
| 6. 計画をたてる時 | 25. 心配事や考え事がある時 | 44. トイレに入っている時 |
| 7. 失敗した時 | 26. お金の計算をする時 | 45. 勉強をしている時 |
| 8. 混乱した時 | 27. 料理をしている時 | 46. 夜遅くひとりで歩いている時 |
| 9. 自転車に乗ったり、車を運転している時 | 28. 歩いている時 | 47. テンションを上げる時 |
| 10. 気がつくと「ひとり言」を言っていた | 29. 今日のお天気について「ひとり言」を言う | 48. 約束を忘れていて急に思いだした時 |
| 11. 暇な時 | 30. 気分のよい時 | 49. かゆい時 |
| 12. さびしい時 | 31. こわい時 | 50. 楽しい時 |
| 13. 人前で、はずかしくなった時 | 32. 急に何かを思い出した時 | 51. 外に出て急に雨が降ってきた時 |
| 14. 気分を変えたい時 | 33. 知らない所にひとりで行った時 | 52. レポートを書いている時 |
| 15. 物事を確認する時 | 34. 理不尽な思いをして腹がたった時 | 53. インターネットで調べている時 |
| 16. 暗記をする時 | 35. 自分の部屋にいる時 | 54. 人に注意された時 |
| 17. 自分に言い聞かせる時 | 36. 次の行動に移る時 | 55. 財布など自分のものをなくしたことに気づいた時 |
| 18. ペットや動物に向かって「ひとり言」を言う | 37. ぬいぐるみに向かって「ひとり言」を言う | 56. 朝、寝過ごしに気づいた時 |
| 19. 字を書いている時 | 38. 危険を感じた時 | |

（出所：筆者作成）

南の分析結果によれば、ひとり言の機能は人が「混乱・当惑」した際や「負の感情」が生じた時に、ひとり言を言うことによって、自分の気持ちの立て直しを図っていることが示唆された。また、ひとりになった時に、ふとひとり言を発することもあるが、特に積極的な機能はないと説明している。さらに、南によれば「情緒不安定」あるいは「社会的不適応」な人、また「内省的でなく、衝動的」な人ほど、ひとり言を言うことが多いようで、予期せぬことが起こり、心が「混乱・当惑」した時や、「負の感情」が生じた時など心が不安定になった時に、ひとり言を発することによって自分の気持ちの立て直しを図っていることがうかがえると指摘している。

以上が独り言についての主な先行研究であり、独り言は発話者の周囲に誰もいない時または相手に向かって情報を伝達していない時に用いられることが一般的な見解であることがわかった。しかし、上述したように我々の実生活において例（159’）～例（163’）のような独り言をしているのかについては大きな疑問点が残る。もし、実際の言語生活の中で例（159’）～例（163’）のような発話を独り言として言う人がいるとしたら、南（2014）が述べたようにおそらくこれらの人は「情緒不安定」あるいは「社会的不適応」な人、また「内省的でなく、衝動的」な人ではないだろうか。

## 9.2. フィクション会話と自然会話の観点から見た独り言の働きと特徴

本研究で収集した日本とタイのテレビドラマおよびテレビアニメの会話例を考察した結果、フィクション会話においては、短い単位の「単語／フレーズレベル」および長文の「文章レベル」の独り言の2種類があることが確認された。以下の例（164）と例（165）は前者を、例（38）と例（166）は後者を示している。

例（164）（美冴は一人でインタビュー番組を見ている。）

・・・(テレビ番組のインタビュー)・・・

**取材者**「住宅ローンを早く完済する方法があれば、ぜひ教えてください！」

**インタビューされる人**「そりゃもちろん節約、節約ですよ！」

・・・(テレビを見ている美冴)・・・

**美冴**「《節約・・・ねー。》〈考えている表情〉」　（クレヨンしんちゃん）

例（165）（リウトーンは宮殿のお手伝いさんがディレーク様のことについて話しているのが聞いた。ディレーク様はリウトーンの憧れの男性である。）

サーイ　サーイ　ランパーお嬢様　おっしゃる　COPU　ディレーク様　進行中
**お手伝いさん**「naŋ-sǎay naŋ-sǎay. thân-yǐŋ-ramphaa thuun wâa thân-chaay-dìrèek kamlaŋ
非現実　お越しになる　来る　あげる　急ぐ　行く　手伝う　一緒に　片付ける　応接室
cà sa-dèt maa. hây rîip pay chûay kan kèp-kwàat hôŋ-ráp-khèɛk.
行く　一緒に　終助詞
pay kan thɔ̀. 〈二人のお手伝いさんが歩いていった〉」

（＝ サーイ、サーイ。ラムパーお嬢様がディレーク様がそろそろいらっしゃるから、応接間を掃除しといてっておっしゃっていたわ。行こう。〈二人のお手伝いさんが歩いていった〉）

ディレーク様　進行中　非現実　お越しになる　来る
**リウトーン**「〈嬉しそうに〉《**thân-chaay-dìrèek kamlaŋ cà sa-dèt maa**・・・》」

（＝〈嬉しそうに〉《ディレーク様がそろそろここにいらっしゃる・・・》）（Kam Lai Mas　第6話）

例（164）では、取材者がある人に住宅ローンの完済方法についてインタビューしている番組が放送されている。それを見ている美冴は、一人で「節約」というインタビューされた人のことばを繰り返している。また、例（165）のタイ語も同様に、リウトーンは、ディレーク様がここに向かっているところという宮殿のお手伝いさんの話が聞こえた。ディレーク様はリウトーンの憧れの男性であるため、それについて聞いたリウトーンは嬉しそうに「thân-chaay-dìrèek kamlaŋ cà sa-dèt maa（ディレーク様がそろそろここにいらっしゃる）」とお手伝いさんの発話を一人で繰り返している。また、例（164）と例（165）のような「単語／フレーズレベル」の独り言は、すべて繰り返しが用いられることがわかった。

例（38）（つくしは一人でニューヨークに来ており、人混みの真ん中で一人で喋っている。）

つくし「〈大きな声で〉《トム・クルーズ？・・・マドンナ？・・・ブラッド・ピット？・・・エミネム？・・・ビヨンセ？ パリス・ヒルトン？・・・なわけないか・・・つーか・・・みんなスターに見える。〈困っている顔をしている〉まいったなあ。もうどっち行ったらいいんだよ！》」　（花より男子（リターンズ）第 1 話）

例（166）（レーヤーの母はある家のお手伝いさんとして働いている。そこの外国人の女主人はレーヤーに将来の夢について尋ねている。）

女主人「Air Hostess（客室乗務員）？ Oh（感動詞）！ man（それ） khuu（COPU） khwaam-mûŋ-wǎŋ（願望） khɔ̌ɔŋ（所有） dèk-phûu-yǐŋ（女の子） thúk（すべて） khon（人） nay（中） prà-thêet（国） níi（この）.」

（客室乗務員？ ほー！それはこの国の女の子たちの夢だね。）

・・・（レーヤーが客室乗務員の会社に行って、仕事の応募をしようとしている）・・・

レーヤー「〈一人でエレベーターを待っており、大きな声で女主人の悪口を言っている〉《hù（感動詞）！ mây（否定） dây（可能） mii（ある） phǔa（夫） líaŋ（養う） mǔan（同じ） tua-eeŋ（自分） nì（終助詞）！〈携帯電話の鏡で自分の顔を見る〉sǔay（きれい） sǔay（きれい） yàaŋ（のように） chán（私） nǐa（終助詞） thâa（もし） mây（否定） dây（可能） pen（である） phrít-tǐi（キャンペーンガール） kɔ̂ɔ（接続詞） tɔ̂ŋ（なければならない） pen（である） ɛɛ（客室乗務員） nân-lɛ̀（その通り）！》」

（《ふっ！あのババア。私はあんたみたいに養ってくれるおやじがいるわけじゃないのよ！〈携帯電話の鏡で自分の顔を見る〉 私みたいな美人は、キャンペーンガールでなければ、客室乗務員になるのが当然よ！》）　（Dok Som See Thong 第 1 話）

一方、例（38）と例（166）は上の例（164）と例（165）とは異なり、発話者は長文で独り言をしている。例（39）では、つくしは一人でニューヨークに来ているが、道に迷ってしまった。そして、つくしは人混みの真ん中で、大きな声で一人で喋っている。例（166）のタイ語も同様に、レーヤーは外国人のご主人さんと自分の将来の夢について話した後、仕事の応募をするために客室乗務員の会社に来ている。そして、エレベーターを待っている間、大きな声で一人で女主人の悪口を言っている。例（38）と例（166）のような「文章レベル」の独り言は、繰り返しとは関連していないことがわかった。

加えて、フィクション会話における独り言の使用率については、次の表（36）にまとめる。表（36）からわかるように、日本語においてもタイ語においても、長文の「文章レベル」の独り言の使用数はそれぞれ 103 例（89%）と 278 例（97.2%）が観察され、全体の大部分を占めていることがわかった。特に、タイ語における「文章レベル」の独り言の使用は、日本語より倍以上多く用いられることが確認された。このことから 、タイ語のフィクション会話においては、上記の例（166）のような長文の独り言が使用される傾向が非常に強いことが明らかになった。

**表（36）　フィクション会話における独り言の使用傾向**

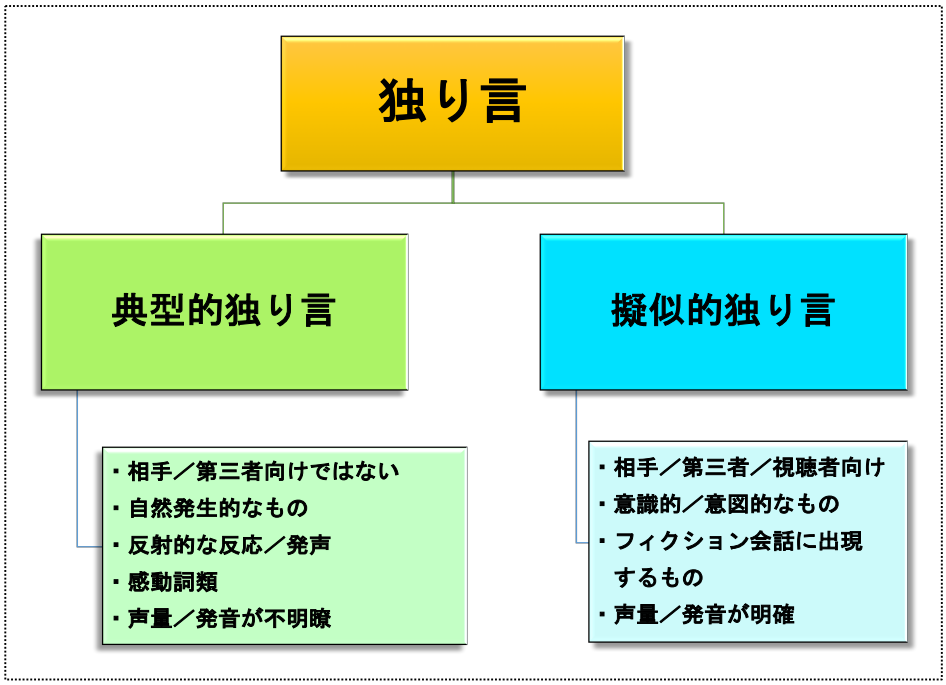
| フィクション会話における独り言の出現率 | | | |
|---|---|---|---|
| 日本語 | | タイ語 | |
| 独り言の種類 | 出現率 | 独り言の種類 | 出現率 |
| 単語／フレーズレベル | 11.21%（13 例） | 単語／フレーズレベル | 3%（8 例） |
| 文章レベル | 89%（103 例） | 文章レベル | 97.2%（278 例） |
| 合計　＝　100%（116 例） | | 合計　＝　100%（286 例） | |

（総例文の小数点第 3 位を四捨五入）（出所：筆者作成）

一方、短い単位の「単語／フレーズレベル」の独り言については、日本語では 13 例（11.21%）、タイ語では 8 例（3%）が観察され、両言語の間には大きな差は見られなかった。しかし、「文章レベル」と比べると、「単語／フレーズレベル」の独り言の使用は圧倒的に少ないことがわかった。また、「単語／フレーズレベル」の独り言はすべて繰り返しで用いられるのに対し、「文章レベル」の独り言は繰り返しとは関連していないことが明らかになった。

以上が日本語とタイ語のフィクション会話における独り言の考察である。両言語のフィクション会話においては、独り言が非常に用いられることが明らかになった。しかし、本調査の結果によると、

日本語の自然会話においてもタイ語の自然会話においても、フィクション会話のような独り言の使用は一切見当たらなかったことは、特筆に値する。このことから、上記の例（164）、例（165）、例（38）、例（166）の場合の独り言を考慮すると、現実の会話ではあり得ない言語現象と言っても過言ではないだろう。特に、例（39）のような独り言は、実際に人混みの真ん中で、大きな声で一人で喋るとすれば、必ず通行人あるいは周囲から好奇の視線を浴びるはずである。つまり、例（164）、例（165）、例（38）、例（166）の場合は、一見、独り言のように見えるが、実際は発話者は誰かに向かって（この場合は、「視聴者」あるいは「観客」である）それぞれの情報を伝達している、または自分の発話を誰かに認識してほしいのではないかと考えられる。また、例（164）のように、一人でテレビ番組のインタビューを見ている際に、つい番組の出演者の発話を独り言として繰り返した場合も観察された。この場合は、前節で概観した長谷川（2017）の研究と結び付いており、やはり発話者は孤立した場所で思い描いた人物または相手を作り出し、その思い描く人と（擬似）対話をしている可能性が高い。つまり、この場合では発話者が作り出した架空の相手は、テレビ番組の出演者なのではないかと推測される。要するに、「相手」の存在があると言えるため、例（164）の場合は独り言とは言い難い。このように、両言語のフィクション会話で出現した例（164）、例（165）、例（38）、例（166）は、そもそも実際の独り言とは言えないのではないだろうか。本調査の結果から、独り言の性質および特徴については、次の図（8）にまとめることができる。




**図（8）　典型的独り言と擬似的独り言についての特徴と相違点**　（出所：筆者作成）

図（8）が示すとおり、独り言は「典型的独り言」と「擬似的独り言」の大きく 2 種類に分類できると考えられる。「典型的独り言」はいわば、「真の独り言」とも言えるのに対し、「擬似的独り言」の場合は「偽の独り言」とも言えるだろう。「擬似的独り言」とは、テレビドラマ、アニメ、映画、歌劇などのようなフィクション会話に出現するものである。また、発話者が発話する際に、周辺には誰もいないまたは相手が存在しないが、誰かと会話しているかのような声量や態度でしゃべる。この点については、フィクション会話の目的と関連しているのではないかと予想される。フィクション会話は、発話者ないし登場人物が発することばおよび表出する感情や態度などについてあらかじめ脚本が仕上がっているものであり、発話者が視聴者のためにそのシナリオに沿って演じる。つまり、フィクション会話の目的は、発話者が視聴者または観客のために、ある情報を伝達する目的として作られるものである。このことによって、フィクション会話で用いられる独り言は実際、発話者は視聴者に向かって情報を伝達しているのではないかと考えられる。要は、フィクション会話に現れる独り言は、意図的ないし意識的に発せられるものであると言えよう。

一方、「典型的独り言」とは、我々の実生活あるいは自然会話に出現するものである。「典型的独り言」は「擬似的独り言」とは異なり、発話者が発話する際に周りには相手のみならず、第三者、視聴者、または発話者の思い描いた架空の人物も一切存在しない。つまり、「相手」の存在がないのである。また、「擬似的独り言」と異なり、「典型的独り言」は意図的または意識的に発せられるものではないことが予測される。例えば、「あっ！」のような驚いた時に思わず口から飛び出てくる声や、突然指を切った時に「痛っ！」と反射的に出てくる音声、またはいびき・くしゃみ・咳・うめき声などのような不随意的に発せられる音声の場合である。要するに、フィクション会話に出現する独り言とは異なり、発話者の声量が曖昧であり、発音が不明瞭である。換言すれば、「典型的独り言」はいわば、反射的な発声ないし自然発生的なものであり、相手あるいは誰かに自分の発話を認識してほしいというものではないと考えられる。すなわち、本研究における「典型的独り言」は、田窪・金水（1997）が言及している生理的な発声の感動詞類と同様なものではないかと予測される。このことから、「典型的独り言」の実際の例文を収集するのは、そもそもあり得ないと言っても過言ではない。仮に、「典型的独り言」の例文を収集しようとすれば、秘密録音や盗撮をしない限り、実際の独り言の使用例は得られないのではないかと思われる。

加えて、南（2014）によれば、情緒不安定な人やお年寄り、混乱ないし当惑を感じる人は、独り言を言う傾向が強いことを指摘している。また、独り言を発することによって自分の気持ちを立て直そうとすると述べている。つまり、我々の実生活においては、フィクション会話のように長文で独り言をしている人が、実際には存在している。特に、お年寄りや情緒不安定な人が一人で喋っているのを、

日常生活では時々見かけることはある。この場合の独り言は、前述したように、発話者はおそらく思い描いた人物または相手を作り出し、その架空の相手と会話をしているのではないかと推測される。また、発話者が作り出した擬似人物は、発話者自身であることもあり得る。言い換えれば、もう一人の自分と擬似対話しているのである。要するに、この場合の独り言は「擬似的独り言」に該当するものであると考えられる。

以上のように、フィクション会話と自然会話を区別して考察する観点から「独り言」という言語現象の基本的概念を見直し、独り言の特徴や性質について新たな発見を見出すことができた。従来の研究では、独り言は「誰もいない場所で一人でしゃべること」と定義されている。しかし、実際はフィクション会話と自然会話に出現する独り言は異なるものであると考えられる。フィクション会話で用いられる独り言は、いわゆる通常の会話と同様なものと言えよう。一方、自然会話に現れる独り言、つまり実際の独り言はいわば、自然発生的なものまたは反射的な反応に過ぎないものだと考えられる。

# 第 10 章　おわりに

## 10. 1.　本研究のまとめ

本研究では、既に現れた発話が再現されるという「繰り返し」を通して、繰り返しの機能、表現形式、普遍性にとどまらず、フィクション会話と自然会話の相違点、引用形式、感動詞、独り言に至るまで広く考察を行った。従来から、どちらかと言えば使用が避けられがちな繰り返しは、実に様々な言語表現と結び付いており、新たに重要な言語事実を見出すことができた。

従来の研究では、繰り返しは「説明要求」、「確認要求」、「あいづち」、「感情の表出」などの多種多様な機能を持つことが示されている。しかし、実際は会話の種類によって、繰り返しが果たす機能あるいは繰り返しの使用傾向が異なることや、最終的に繰り返しの特徴的な機能は何かという点は明らかではなかった。よって、それぞれの会話における繰り返しについても検討する必要があった。本調査の結果から、以下の表（37）が示すように、日本語とタイ語のフィクション会話においても自然会話においても、繰り返しは「時間稼ぎ」、「相手の発話の促進」、「説明要求／確認要求」、「感情の表出」という機能が観察され、両種類の会話で共通していることがわかった。

**表（37）　フィクション会話と自然会話における繰り返しの機能の共通点と相違点のまとめ**

| 繰り返しの機能の共通点と相違点 | |
|---|---|
| **フィクション会話** | **自然会話** |
| (1)「時間稼ぎ」、「相手の発話の促進」、「説明要求／確認要求」、「感情の表出」という機能を持つ | (1)「時間稼ぎ」、「相手の発話の促進」、「説明要求／確認要求」、「感情の表出」という機能を持つ |
| (2)「あいづち」、「応答」、「からかい」という機能が見当たらない | (2)「あいづち」、「応答」、「からかい」という機能も持つ |
| (3) 繰り返しにおける「感情の表出」は、もっぱら発話者の感情を明示的に表出するために用いられる | (3) 繰り返しにおける「感情の表出」は、発話当事者の間に一体感を作り、会話の場を盛り上げるために用いられる |

（出所：筆者作成）

一方、相違点としては、自然会話では繰り返しは「あいづち」、「応答」、「からかい」の機能も確認されたが、フィクション会話ではこれらの機能が見当たらないことがわかった。また、両種類の会話とも「感情の表出」の機能が最も際立って用いられることが明らかとなったが、実際は会話の種類によって「感情の表出」の使用目的は完全に異なる。フィクション会話における「感情の表出」としての繰り返しの目的は、もっぱら発話者の感情を明示的に表出するために使用されることがわかった。

それに対して、自然会話における「感情の表出」の目的は発話当事者の間に一体感や共感を作り、会話の場を盛り上げるために使われることが明らかになった。このように、会話の種類による繰り返しの機能と使用傾向の違いについては、フィクション会話と自然会話の特徴に結び付いているのではないかと考えられる。本研究における繰り返しに関する考察から、下記の表（38）が示すように、フィクション会話と自然会話の相違点について新たに見出すことができた。

**表（38）　フィクション会話と自然会話の相違点のまとめ**

| フィクション会話と自然会話の相違点 | |
|---|---|
| **フィクション会話** | **自然会話** |
| ⑴ 視聴者に向けて、発話者が演じるある人物の情報、感情、態度を視聴者へ伝達する目的である。 | ⑴ 会話の相手とお互いに何らかの情報を交換したり、他人との良好な人間関係を構築したりすることが目的である。 |
| ⑵ あいづち詞の使用は見当たらない | ⑵ あいづち詞の使用は非常に多い |
| ⑶ 感動詞およびフィラーの使用はほとんど見られない | ⑶ 感動詞およびフィラーの使用は非常に多い |
| ⑷ 言い間違い、言い直し、発話の重複（オーバーラップ）は見当たらない | ⑷ 言い間違い、言い直し、発話の重複（オーバーラップ）は頻繁に現れる |

（出所：筆者作成）

表（38）が示すとおり、フィクション会話と自然会話では、場面設定、状況、会話の目的、発話当事者の間の会話量、会話の進行の仕方という両種類の会話の性質が完全に異なることが明らかになった。フィクション会話は、視聴者または観客に向けて、発話者が演じるある人物の情報や感情などを視聴者へ伝達するのが目的である。それに対して、自然会話は会話の相手とお互いに何らかの情報を交換したり、相手との良好な人間関係を築いたりすることが目的である。このことによって、フィクション会話においては、会話がスムーズに進行されるように、また視聴者に出演者の発話および感情や態度などを明確に伝達するために、発音や意味内容に曖昧さのあるあいづち詞、感動詞、フィラー、言い間違い、言い直し、発話の重複（オーバーラップ）の使用を避けるのではないかと推測される。一方、自然会話の場合は、相手との円滑なコミュニケーションで良好な関係を築くために、会話に積極的に参加していることを示すというあいづち詞や感動詞が多用されるのではないかと考えられる。加えて、自然会話はフィクション会話とは異なり、発話者が喋ることはあらかじめ作られたものではなく、発話者はその時点で思っていることを即興で話す。そのため、言い間違い、言い直し、発話の重複は頻繁に現れるのは当然であると言える。

また、日本語とタイ語のフィクション会話と自然会話における「感情の表出」としての繰り返しは、発話者が相手の発話のある部分に対して「意外感」を感じたことを表明するものであると考えられる。すなわち、繰り返し発話に「相手がこのような発言をするとは思わなかった」という意味合いが含まれるのである。さらに、両言語のフィクション会話と自然会話で用いられる「感情の表出」は、ポジティブな態度、ネガティブな態度、中立的態度という大きく 3 種類の態度が分類できる。しかし、会話の種類によって、繰り返しにおける「感情の表出」の使用目的と使用傾向が異なっていくことが明らかになった。フィクション会話では、ネガティブ態度が用いられる傾向が強いのに対し、自然会話ではポジティブな態度が用いられる傾向が強いことが確認された。

また、繰り返しの表現形式は両言語ともに、相手の発話をそのまま繰り返すという「直接的繰り返し」、および繰り返し発話に他形式が付加される場合という「間接的繰り返し」の大きく 2 種類に分けられる。「間接的繰り返し」には多種多様な形式があることが確認されたが、会話の種類によって、使用される形式の種類および使用傾向が異なることが明らかになった。また、両言語の両種類の会話においては、「間接的繰り返し」が用いられるとは言え、「直接的繰り返し」と比較すると、圧倒的に少ないことがわかった。さらに、「直接的繰り返し」が、「感情の表出」の機能を果たす際に最も多く使用されることがわかった。このことから、繰り返しはどちらか言えば、感情表現を指向するものではないかと推測される。さらに、繰り返しは表現形式の面で引用表現と類似した性質を持つ。繰り返しは、引用形式が現れなくても、実質的には相手の発話の一部ないし全部をそのまま引用的に取り上げる。つまり、繰り返しも引用表現も両方、既に存在していることばや発話を再現する機能を持つという共通点がある。

また、発話者は感情を表出するには繰り返しのほか、感動詞も使用するが、実際は両者の働きや性質は異なることがわかった。感動詞と繰り返しの共通点としては、下記の表（34）が示すように、両者とも発話者の感情を表す役割を担っている。一方、両者の相違点としては、感動詞は反射的に出てくる音声または自然発生的な反応である。それに対して、繰り返しは発話者の認識過程を通して出てくる記号化されたものである。つまり、繰り返しの場合は発話者が意識的に発話するものであると言える。また、感動詞による音声および意味内容は曖昧であるが、繰り返しの場合は音声も意味内容も明示的である。加えて、感動詞では発話者は相手の発話のどの部分に興味を持つのか、あるいは問題を感じるのかについて明示的に特定できない。それに対して、繰り返しは、発話者は相手の発話のどの部分を指すのかが明示的に特定できる。このように、繰り返しは視聴者が存在するフィクション会話に向いているのではないかと考えられる。一方、台本またはシナリオに束縛されず、その時点の考えを自由に表出する自然会話においては、反射的に出てくる音声あるいは自然発生的な反応である感動

詞が多く出現するのは、当然の帰結となる。

**表（34）　感動詞と繰り返しの共通点と相違点のまとめ**

| 感動詞 | 繰り返し |
|---|---|
| (1) 感情的機能を持つ | (1) 感情的機能を持つ |
| (2) 反射的に出てくる音声／自然発生的な反応 | (2) 発話者の認識過程を通して出てくる記号化されたもの |
| (3) 音声や意味内容が曖昧である | (3) 音声や意味内容が明示的である |
| (4) 相手の発話のどの部分を指すのかが特定できない | (4) 相手の発話のどの部分を指すのかが明示的に特定できる |
| (5) 自然会話向け表現 | (5) フィクション会話向け表現 |

（出所：筆者作成）

他にも、本研究における繰り返しの調査結果から、独り言という言語現象についても新たな発見を見出すことができた。独り言は「典型的独り言」と「擬似的独り言」の大きく 2 種類に分類できると考えられる。「擬似的独り言」とは、テレビドラマ、アニメ、映画、歌劇などのようなフィクション会話に出現するものであり、発話時には、周辺に誰もいないまたは相手が存在しないが、実際は視聴者が存在しているというものである。つまり、この場合の独り言は、発話者は誰かのために情報を伝達しているのであり、通常の会話と同様なものと言えよう。一方、自然会話に現れる「典型的独り言」はいわば、自然発生的なものまたは反射的な反応に過ぎないと考えられる。

本研究における繰り返しについての調査結果から、日本語のみならず、タイ語においても繰り返しが多用されることが確認された。また、タイ語会話で使用される繰り返しは、日本語と同様な機能と使用傾向があることがわかった。このことから、繰り返しという言語表現は、普遍性を持つことがより一層解明することができた。繰り返しは、新しい要素やことばを作り上げる必要がなく、もともと存在する発話を反復するだけで、「時間稼ぎ」、「相手の発話の促進」、「説明要求／確認要求」、「感情の表出」、「あいづち」、「応答」、「からかい」という様々なコミュニケーション機能を果たすことができる。つまり、繰り返しはコミュニケーション上効果的な言語表現の一つであるという結論が導き出された。また、会話の種類によって、繰り返しの使用目的が異なることがわかった。フィクション会話では、繰り返しが持つ最も重要なコミュニケーション効果は、発話者の感情を明示的に表出させる役割であり、発話者の態度形成を促す感情効果であると考えられる。したがって、繰り返しは、脚本化

するのに欠かせない感情表現の一つであると言える。それに対して、自然会話では、繰り返しが持つ最も重要なコミュニケーション効果は、発話当事者同士の一体感や共有感を醸成させ、コミュニケーションを円滑に進めながら、良好な人間関係を築かせる効果であると考えられる。そのため、繰り返しはあいづち詞や感動詞に加え、日常会話において必要不可欠なものだと言えよう。

## 10.2. 今後の課題と展望

本研究で実施した調査と分析結果から、実際の会話における繰り返しのコミュニケーション機能および表現形式という繰り返しの基本的概念について、大部分が明らかになった。また、会話の種類の違いによる繰り返しの使用傾向についても、新たな発見があった。しかし、フィクション会話においては、テレビドラマ、アニメ、歌劇、映画など、それぞれの媒体による場面設定や状況、あるいは会話量や会話の進行の仕方は異なるのではないかと考えられる。自然会話においても、社会的交流場面、問題解決場面、依頼場面、謝罪場面などという多種多様な場面がある。このように、同じ会話の種類でも、その中には様々な場面設定ないし状況があり、それぞれの状況によって繰り返しの機能、使用傾向、使用頻度には違いがあるのではないかと予測される。この点については、今後さらに検討を行いつつ、繰り返しについてさらに明確にしていきたい。また、自然会話においては、繰り返しを使用するかどうかは人それぞれ異なることが予想される。同じことばまたは相手のことばを繰り返す癖がある人もいれば、そうでない人もいる。また、年齢層や性別によって、繰り返しの使用頻度に違いが生じるのではないかとも考えられる。今後より精緻な繰り返しの使用傾向および使用頻度の差を研究するには、発話者の年齢層や性別も考慮に入れた調査が必要になる。

また、本研究では繰り返しと共起する形式については、主に使用傾向と使用頻度に重点を置いた。しかし、繰り返しと共起するそれぞれの形式の定義や意味機能に関しては、十分な考察には至らなかった。繰り返しの表現形式をさらに詳しく分析すると、新たな現象が見出せるのではないかと思われる。よって、この課題については今後検討を進めていきたい。さらに、本研究では、繰り返しと引用形式を対照させることで、繰り返しは「既に存在していることばや発話を再現する」という引用表現と類似した性質を持つということが明らかになった。しかし、両者にはどのような相違点があるのかについては、結論にまで至らなかった。今後の検討にあたっては、引用表現に関する従来の研究をより詳細に検討した上で、繰り返しと比較対照をしていきたい。

最後に、本研究においては、今までほとんど言及されてこなかった独り言に関する基本的概念および性質について、再検討し詳細に分析を行った。今後、独り言という言語現象についてもより一層の解明に挑んでみたい。

# 参考文献


安達太郎（1989）「日本語の問い返し疑問について」『日本語学』8 号, pp.30-39, 明治書店.

井島正博（2010）「ノダ文の機能と構造」『日本語学論集』6 号, pp.75-117.

池谷知子（2018）「引用形式「って」における終助詞的機能」『神戸松蔭女子学院大学研究紀要言語科学研究所篇』21 巻 pp.41-69.

石神照雄（1981）「感動詞について」『信州大学教養部紀要』15 号, pp.1-11.

稲木昭子（1990）「極性一致の付加疑問文－談話の流れの中で－」『言語研究』97 号, pp.73-94.

稲木昭子（1993）「会話における繰り返し表現－その形式と機能－」『追手門学院大学文学部紀要』27 号, pp.179-191.

稲木昭子（1997）「エコー発話について」『追手門学院大学文学部紀要』32 号, pp.61-72.

岩男考哲（2003）「引用文の性質から見た発話「～ッテ。」について」『日本語文法』3 巻 2 号, pp.146-162.

岩男考哲（2006）「引用構文と「トハ文」」『日本語・日本文化』32 号, pp.63-72.

岩男考哲（2012）「「と言う」の条件形を用いた文の広がり」『日本語文法』12 巻 2 号, pp.179-195.

岩男考哲（2016a）「複合辞「というと」の接続表現的用法について」『日本語文法』16 巻 1 号, pp.71-79.

岩男考哲（2016b）「引用形式が名詞句をつなぐ表現について－「という」「といった」「とかいう」について－」『信州大学教育学部研究論集』9 号, pp.1-8.

岩男征樹・堀洋道（1998）「大人ではどのような人が独り言をよくいうのか？」『筑波大学心理学研究』20 号, pp.143-156.

梅木俊輔（2011）「エコー型聞き返しの発話機能と発話末イントネーションとの関係」『日本語/日本語教育研究』2 号, ココ出版.

岡田祥平（2008）「独話と対話の連続性について考える」『龍谷大学国際センター研究年報』17 号, pp.3-20.

岡部悦子（2003）「課題解決場面における「くり返し」」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』16 号, pp.97-116.

尾崎明人（1992）「「聞き返し」のストラテジーと日本語教育」『日本語研究と日本語教育』（カッケンブッシュ寛子他編）名古屋大学出版会, pp.251-263.

尾崎明人（1993）「接触場面の訂正ストラテジー－「聞き返し」の発話交換をめぐって－」『日本語教育』81 号, pp.19-30.

尾崎明人（2001）「接触場面における在日ブラジル人の「聞き返し」とその回避方略」『社会言語科学』4 巻, 1 号, pp.81-90.

加藤陽子（2010）『話し言葉における引用表現』くろしお出版.

鎌田修（1988）「日本語の伝達表現」『日本語学』7-9, pp.59-72, 明治書院.

鎌田修（2000）『日本語の引用』ひつじ書房.

神尾昭雄（1990）『情報のなわ張り理論』大修館書店.

カンジャマーポンクン　サティダー（2017）「会話における繰り返し表現－「驚きの表示」と「抵抗感」との関係を中心に－」『2017 年第 11 回 OPI 国際シンポジウム 台湾大会 予稿集』pp.387-394.

カンジャマーポンクン　サティダー（2019a）「繰り返し表現における発話者の態度－「意外感」による「否定的態度」を中心に－」『間谷論集』13 号, pp.195-211.

カンジャマーポンクン　サティダー（2019b）「感情の表出の観点から見た繰り返し表現の機能－発話者による「意外感」を中心に－」『タイ国日本研究国際シンポジウム 2018 論文集』pp.246-250.

許夏玲（1999）「文末の「って」の意味と談話機能」『日本語教育 101』pp.81-90.

金善眞（2003）「聞き手を情報源とする文末の引用形式について」『岡山大学大学院文化科学研究科紀要』16 号, pp.111-127.

金善眞（2004）「日本語の文末引用形式について」『岡山大学大学院文化科学研究科紀要』17 号, pp.81-97.

金善眞（2005）「「～ッテ」文の引用的性質と機能」『日本語文法』5 巻 1 号 pp.70-88.

久野暲（1978）『談話の文法』大修館書店.

黒川直子（2007）「日本語の談話における繰り返しについての考察」『ICU 日本語教育研究』3 号, pp.65-79.

河野武（2004）「エコー疑問文のメタ表示と関連性評価」『大妻女子大学紀要 文系』36 巻, pp.260-251.

近藤研至（2001）「「意外である」ということと「問い返し疑問文」について」『言語と文化』文教大学大学院言語文化研究科付属言語文化研究所 14 号, pp.16-27.

近藤研至（2013）「「ッテ文」について」『文教大学国文』文教大学国語研究室, 文教大学日本語日本文学科研究室, 文教大学国文学会 42 号, pp.23-36.

佐藤雄一（2011）「引用形式「って」における主題提示用法」『共立国際研究 : 共立女子大学国際学部紀要』28 巻, pp.1-20.

澤山郁夫・三宅幹子（2018）「大学生の独り言的ツイートは独り言なのか－発話傾向との関連から－」『パーソナリティ研究』日本パーソナリティ心理学会 27 巻 1 号, pp.31-41.

鈴木亮子（2007）「他人の発話を引用する形式」『言語』36-3, pp.36-43.

砂川有里子（1987）「引用文の構造と機能－引用文の 3 つの類型について－」『文藝言語研究言語篇』筑波大学文芸・言語学系 13 号, pp.73-91.

砂川有里子（1988a）「引用文の構造と機能（その 2）－引用句と名詞句をめぐって－」『文藝言語研究言語篇』筑波大学文芸・言語学系 14 号, pp.75-91.

砂川有里子（1988b）「引用表現における場の二重性について」『日本語学』7-9 明治書院, pp.14-29.

高橋雄太・片岡義雅・浅井洋樹・山本祐輔・秋岡明香・山名早人（2012）「繰り返し表現を含んだ感情的なツイートの抽出」『第 4 回データ工業と情報マネジメントに関するフォーラム論文集』（第 10 回日本データベース学会年次大会）.

田窪行則（2010）『日本語の構造－推論と知識管理－』くろしお出版.

田窪行則・金水敏（1997）「応答詞・感動詞の談話的機能」『文法と音声』くろしお出版.

田中妙子（1997）「会話における＜くりかえし＞－テレビ番組を資料として－」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』9 号, pp.47-67.

田野村忠温（1990）『現代日本語の文法 I』和泉書店.

陳姿菁（2002）「日本語におけるあいづち研究の概観及びその展望（第 4 章 会話研究と日本語教育）」『言語文化と日本語教育. 増刊特集号, 第二言語習得・教育の研究最前線』pp.222-235.

トムソン木下千尋（1994）「初級日本語教科書と「聞き返し」のストラテジー」『世界の日本語教育』4 号, pp.31-43.

中園篤典（2005）「引用の構文に関する覚書－発話行為的引用論のために－」『人間環境学研究』4 巻 1 号, pp.17-41.

中田智子（1992）「会話の方策としてのくり返し」『国立国語研究所報告 104 研究報告集 13』pp.267-302.

中林律子（2009）「問い返し疑問文に表れる「嫌」「驚き」の感情の知覚－ロシア語を母語とする学習者を対象として－」『言葉と文化』10 巻, pp.165-180.

仁田義雄（1991）『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房.

日本語大辞典第二版編集委員会 小学館国語辞典編集部（2001）『日本国語大辞典』第二版, 第二巻, 小学館.

日本語大辞典第二版編集委員会 小学館国語辞典編集部（2001）『日本国語大辞典』第二版, 第三巻, 小学館.

日本語大辞典第二版編集委員会 小学館国語辞典編集部（2001）『日本国語大辞典』第二版, 第四巻, 小学館.

日本語大辞典第二版編集委員会 小学館国語辞典編集部（2001）『日本国語大辞典』第二版, 第九巻, 小学館.

日本語大辞典第二版編集委員会 小学館国語辞典編集部（2001）『日本国語大辞典』第二版, 第十一巻, 小学館.

丹羽哲也（1994）「主題提示の「って」と引用」『人文研究』46（2）, 大阪市立大学文学部紀要, pp.79-109.

野田春美（1997）『「の（だ）」の機能』くろしお出版.

野田尚史（1989）「真性モダリティをもたない文」『日本語のモダリティ』pp.131-157, くろしお出版.

長谷川葉子（2017）「三層モデルによる独り言の分析」『三層モデルでみえてくる言語の機能としくみ』, pp.26-4, 開拓社.

林里香（2007）「接触場面における「聞き返し」調整計画についての一考察」『人文社会科学研究』14 号, 千葉大学大学院人文社会科学研究科, pp.98-111.

林里香（2009）「聞き返しのストラテジーと課題解決－日本語非母語話者による調整計画段階の機能と表現形式の選択－」『千葉大学人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書』, 第 218 集, pp.1-17.

東森勲・吉村あき子（2003）『関連性理論の新展開－認知とコミュニケーション－』研究社.

福富奈美（2010）「日本語会話における「くり返し」発話について」『言語文化学研究（言語情報編）』5 号, pp.105-125.

福富奈美（2012）「接触場面の日本語会話における「聞き返し」－どのような「聞き返し」が効果的なストラテジーと言えるか－」『四天王寺大学紀要』53 号, pp.275-290.

藤田保幸（1987）「「～トイウト」「～トイエバ」と「～トイッテ」「～トイッテモ」－複合辞に関する覚書－」『（愛知教育大学国語国文学研究室）国語国文学報』44 号, pp.141-152.

藤田保幸（1988）「「引用」論の視界」『日本語学』7-9, pp.30-45, 明治書院.

藤田保幸（2000）『国語引用構文の研究』和泉書院.

藤村香予（2012）「英語会話と日本語会話における繰り返し現象の考察－若者の友人との会話に焦点を当てて－」『安田女子大学紀要』40 号, pp.27-44.

堀内奈美（2011）「接触場面における「聞き返し」のストラテジー－日本語非母語話者の学習レベルの相違による特徴－」『四天王寺大学紀要』51 号, pp.307-322.

堀口純子（1988）「コミュニケーションにおける聞き手の言語行動」『日本語教育』64 号, pp.13-26.

堀口純子（1997）『日本語教育と会話分析』くろしお出版.

牧野成一（1980）『くりかえしの文法－日・英語比較対照－』大修館書店.

益岡隆志（1991）『モダリティの文法』くろしお出版.

松岡洸司（1997）「感動詞における研究史と位置づけ」『上智大学国文学科紀要』14 号, pp.31-50.

南憲治（2008）「小学生のひとり言についての心理学的研究－ひとり言が発せられる状況による分析－」『神戸親和女子大学研究論叢』41 号, pp.121-126.

南憲治（2014）「ひとり言の心理的機能－ひとり言が発せられる状況と YG 性格検査との関連を通して－」『帝塚山大学現代生活学部紀要』10 号, pp.85-93.

南憲治・遠藤真耶・川澤摩利子（2000）「「ひとり言」が発せられる状況」『第 42 回総会発表論文集』日本教育心理学会, pp.610.

南不二男（1974）『現代日本語の構造』大修館書店.

南不二男（1985）「質問文の構造」『朝倉日本語新講座 4 文法と意味 II』朝倉書店.

宮本マラシー（2003）『タイ語表現法』大阪外国語大学.

メイナード・K・泉子（1993）『会話分析』くろしお出版.

メイナード・K・泉子（1997）『談話分析の可能性－理論・方法・日本語の表現性－』くろしお出版.

守時なぎさ（1994）「話し言葉における文末表現「ッテ」について」『筑波応用言語学研究』1 筑波大学, pp.87-99.

森山卓郎（1989a）「応答と談話管理システム」『阪大日本語研究』1 号, pp.63-68.

森山卓郎（1989b）「内容判断の一貫性の原則」『日本語のモダリティ』仁田義雄・益岡隆志（編）, pp.75-94, くろしお出版.

森山卓郎（1989c）「コミュニケーションにおける聞き手情報－聞き手情報配慮非配慮の理論－」『日本語のモダリティ』仁田義雄・益岡隆志（編）, pp.95-120, くろしお出版.

森山卓郎（1997a）「一語文とそのイントネーション」『文法と音声』pp.75-96, くろしお出版.

森山卓郎（1997b）「「独り言」をめぐって－思考の言語と伝達の言語－」『日本語文法 体系と方法』川端善明・仁田義雄（編）, pp.173-188, ひつじ書房.

森山卓郎（2009）「談話におけるエコー表現－相手の発話を受ける「ね」「ねえ」「か」を中心に－」『「単位」としての文と発話』pp.27-44, 大修館書店.

矢野安剛（1989）「語用論的に見た疑問文」『日本語学』8 号, pp.22-29, 明治書店.

山口治彦（2003）「対話の話法、語りの話法：英語話法再考（2）」『神戸外大論叢』54 巻 4 号, pp.15-34.

山口治彦（2009）『明晰な引用, しなやかな引用－話法の日英対照研究－』くろしお出版.

山崎誠（1996）「引用・伝聞の「って」の用法」『国立国語研究所研究報告集』17 巻, 1-22.

Cappuzzo, Barbara（2015）“Allo-repetition in Academic Settings. Cooperation, Understanding Co-construction and Knowledge Negotiation in the Medical Section of the ELFA Corpus”, *Edipuglia*, 12, 33-54.

Dumitrescu, Domnita（2008）“Interrogative Allo-repetition in Mexican Spanish：Discourse Functions and (Im)politeness strategies”, *Pragmatics*, 18:4, 659-680.

Hsieh, Fuhui（2009）“Repetition in Social Interaction：A Case Study on Mandarin Conversations”, *International Journal on Asian Language Processing*, 19(4), 153-168.

Iwata, Seizi.（2003）“Echo Questions are Interrogatives? Another Version of a Metarepresentational Analysis”, *Linguistics and Philosophy*, 26, 185-254.

Jakobson, Roman（1960）“Linguistics and Poetics”, *Language in Literature*, 62-94.

Johnstone, Barbara（1991）*Repetition in Arabic Discourse：Paradigms, syntagms, and the ecology of language*：John Benjamins Publishing Company, Amsterdam／Philadelphia.

Kobayashi, Hiroe & Hirose, Keiko（1995）“Japanese Learner’s Repetition in Conversation in Relation to English Proficiency Level”, *JALT Journal*, Vol.17, No.1, 53-73.

Kumagai, Tomoko（2004）“The Role of Repetition in Complaint Conversations”, *Hidden and Open Conflict in Japanese Conversational Interaction*, edited by Polly Szatrowski, 199-220, Kurosio Publishers.

Lammi, Riikka-Liisa（2010）“Backchannels and Repetition in ELF in a Hairdressing Setting”, *Helsinki English Studies*, Vol.6, 118-131.

Machi, Saeko（2012）“How Repetition works in Japanese and English Conversation : Introducing Different Cultural Orientations towards Conversation”, *The English Linguistic Society of Japan JELS*, Vol.29, 260-266.

NOH, Eun-Ju.（1995）“A Pragmatic Approach to Echo Questions”, *UCL Working Papers in Linguistics 7*, 107-140.

Sperber, D. & Wilson, D.（1995）*Relevance：Communication and Cognition, Special Edition.* Oxford, Basil Blackwell. 内田聖二, 中達俊明, 宋南先, 田中圭子（訳）（2000）『関連性理論ー伝達と認知ー』研究社出版.

Sudo, Yasutada（2007）“Metalinguistic Semantics for Echo Questions”, In M.Aloni, P.Dekker & F.Roelofsen（eds.）：*Proceedings of the Sixteenth Amsterdam Colloquium*, 205-211, Amsterdam：ILLC／Department of Philosophy University of Amsterdam.

Takahashi, Mari（1990）“The Acquisition of Echo Questions”, *Osaka Literary Review*, 29, 103-116.

Tannen, Deborah（2007）*Talking Voices：Repetition, Dialogue, and Imagery in Conversational Discourse*, *2nd edition*：Cambridge University Press.

Wilson, D. & Sperber, D.（1992）"On Verbal Irony", *Lingua*, 87, 53-76.

Wong, Jean（2000）"Repetition in Conversation：A Look at "First and Second Sayings" ", *Research on Language and Social Interaction*, Vol.33, No.4, 407-424.

Wutthichamnong, Weena（2015）"Other-Repetition in Thai Conversation", Chulalongkorn University, Master Thesis.

## 参考テキスト

スリーエーネットワーク（1998）『みんなの日本語 初級 II』スリーエーネットワーク.

筑波ランゲージグループ（1999）『Situational Functional Japanese Volume 1』第 2 版, 凡人社.

筑波ランゲージグループ（1999）『Situational Functional Japanese Volume 2』第 2 版, 凡人社.

筑波ランゲージグループ（1999）『Situational Functional Japanese Volume 3』第 2 版, 凡人社.

## 用例出典

渋谷クロス FM 88.5 MHz ラジオ局『SHIBUYA MUSIC POWER』2015 年 4 月～現在放送

テレビ朝日『クレヨンしんちゃん』1992 年 4 月～現在放送

テレビ朝日『民王』 2015 年 7 月～9 月放送

日本テレビ『しゃべくり 007』2008 年 12 月～現在放送

日本テレビ『世界一難しい恋』 2016 年 4 月～6 月放送

フジテレビ『初詣！爆笑ヒットパレード』2014 年 1 月 1 日 放送

フジテレビ『リーガル・ハイ 第 1 期』 2012 年 4 月～6 月放送

フジテレビ『リーガル・ハイ 第 2 期』 2013 年 10 月～12 月放送

Channel 3 Thailand『Khun Chai Tarathorn』2013 年 3 月～4 月放送

Channel 3 Thailand『Khun Chai Pawornruj』2013 年 3 月～4 月放送

Channel 3 Thailand『Kam Lai Mas』2016 年 1 月～3 月放送

Channel 3 Thailand『Dok Som See Thong』2011 年 3 月～5 月放送

Channel 3 Thailand『Yah Leum Chan』2014 年 4 月～5 月放送

Channel 3 Thailand『3 Zaaap』2013 年 1 月～現在放送

Pitch FM 83.8 MHz ラジオ局『うたれんのインディーズチャンネル』2018 年～2019 年 放送

TBS テレビ『ダメな私に恋してください』 2016 年 1 月〜3 月放送

TBS テレビ『花より男子 2（リターンズ)』 2007 月 1 月〜3 月放送

TBS テレビ『半沢直樹』 2013 年 7 月〜9 月放送

Woody World Company Limited『Woody World』2018 年 1 月〜現在放送

Woody World Company Limited『Woody FM』2018 年 1 月〜現在放送

# 謝辞

ここに、筆者の本論文作成を支えてくださった皆様に心よりお礼を深く申し上げます。

まず、指導教員の荘司育子先生に、研究生の頃からいつも温かいご指導とご支援を頂き、研究以外に日本の生活など様々な相談に乗ってくださり、心よりお礼を深く申し上げます。また、副指導教員の中田一志先生、言語文化研究科タイ語専攻の宮本マラシー先生、並びに日本語・日本文化専攻の先生方から、懇切丁寧なご指導を頂きました。他に、小学生の頃から日本語を教えてくださった大友芳行先生からも、温かいご指導とご支援を頂きました。先生方のおかげで、この博士論文を無事に完成することができました。心より感謝申し上げます。

そして、チューターの中谷直樹氏、大仁田萌氏にはひとかたならぬお世話になり、心より感謝いたします。また、スワンナクート・パッチャラーパン氏、ターインタ・プーワット氏、ラッタナポンピンヨ・プラッチャヤポーン氏をはじめ、大学院の先輩後輩達と同級生の皆さんはいつも応援してくださり、誠にありがとうございます。

最後に、いつも遠くから支え励ましてくれる家族に心より感謝申し上げます。